

ダイヤモンドを駆け抜けて

かりんと。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『猪狩世代』と呼ばれた甲子園を湧かせ、プロ野球界にとっても大豊作となった高校生たちがプロ入りしたその年——また新たな波が来ていた。

僕こと天道湊叶は、双子の兄である天道翔馬といつも比較されてきた。

「同じ天道でも兄の方が優秀だな。」

何度も聞いたこの言葉。周りの視線に耐えられなくなった僕は中学の野球部を辞め、親友である友沢亮のいる御園シニアに入団した。

亮の勧めで僕は投手から遊撃手にコンバート。シニア最後の年では運良く全国ベスト4に入ることが出来た。

中学を卒業し、僕と亮は「親切高校」に。翔馬はこの地区で最も有力とされる「星英高校」に進学した。

変わった外見の親切高校は内部も変わっていた！共学の筈なのに何故か男女は分離、周りは壁に囲まれるで刑務所、高校内ではペラと呼ばれる擬似金券を使用する：etc…

野球バカだが身体能力が高く、左腕アンダースローの『乾勝利』

関西弁で話す怪力打者『佳月信弥』や強肩の中堅手『神谷宗太』に安定感のある捕手『本庄翔』

彼らと切磋琢磨し、甲子園を目指す激動の物語！

喜怒哀楽が溢れるもう1人の天道、『湊叶』の物語が今始まる！

*2017. 5月2日に本編の編集を行いました。

*2018. 1月1日より、長らく投稿していなかった為、リバビ
リを兼ねて外伝としてパワポケダッシュを元にした話を書き始めま
した。

目次

1学年編

第1話	親切高校	1
第2話	新入生入部	9
第3話	出会いと再開	17
第4話	葛藤	29
第5話	ライバル出現	34
第6話	提案	43
第7話	2人の距離	50
第8話	新チーム発足	59
第9話	ヒモとメイドとダメ人間	68

2学年編

第10話	ウキウキ春らんまん	82
第11話	副会長になってみよう	92
第12話	V S 聖タチバナ学園	109
日常・1話		123
日常・2話		128
第13話	崩れたモノ	134
第14話	息抜きと外出	144
第15話	決意	153
第16話	一步	163
第17話	夏のはじまり	175
「週刊パワースポーツ」	——スカウトとは何か	188
第18話	紡いだモノ	198
第19話	緒戦——パワフル高校	206

第20話 全国の強豪

外伝 — 球八高校編 —

夢の始まり① 創めの一步

夢の始まり② 出逢い

夢の始まり③ 始動

夢の始まり④ 物語は突然に

夢の始まり⑤ 因縁

夢の始まり⑥ 成長

227

238

245

252

261

269

279

1 学年編

第1話 親切高校

ブロロロロロッ

「うっ、うう…気持ち悪い…まだ着かないのか。」

「大丈夫…じゃなさそうだな湊叶^{みなと}。随分走ったからもう直ぐだと思っ
んだが。」

チラッと左腕にはめた時計を見ると駅を出発してから有に3時間
は経っている。 うう…早く着かないと結構やばい。

「全く酔いやすいのは昔から変わらないな。」

ふっ、と隣座席に座る友沢亮は笑った。

「君たちは御菌シニアの友沢君と天道君でやんすか？」

車窓の外に広がる木々を眺めていると、瓶底メガネをかけた坊主頭
の少年が声を掛けてくる。

「ああ。俺は友沢亮だ。隣の酔って死にかけているやつが天道湊叶
だ。」

「う…よろしく。」

押し寄せる吐き気と戦いながら何とかメガネ君に返事を返す。

「おお！ やっぱりでやんす。オイラは荷田^{にだ} 幸浩^{ゆきひろ}って言うでやん
す。ポジションはキャッチャーでやんす！」

「よろしくな荷田。」

「3年間よろしくでやんす！」

ああっと、短く返し頬杖を付きながら車窓外を見るとあれだけ繁っ
ていた森が開けた。

「あれが学校か。中々凄いとこに建っているな。」

さらっと亮がいい、それにつられ、僕も学校を見る。

え、待てよ。 何か凄いとこに建ってるな！

アレ、ガツコウジャーイ！ ケイムショー！

「何だあの学校…」

「ん？ 湊叶どうしたんだ？ 酔い、治ったのか？」

「ああ、治ったよ。驚いて酔いが覚めたよ。」

「?何に驚いたのか知らないがもうすぐ着くから準備しろよ。昔から忘れやすいんだからさ。」

「もう高1だよ? 幾ら僕でも流石に…」

亮はピツと座席についているネットを指さす。

「ペットボトル忘れてるぞ。」

「あ、はい、すみません。」

何であんなに冷静何だ。あの学校を見て驚かない亮に驚いたわ。なるほど、白石先生が見たら驚くぞって言っていたのはこの事か。案の定、荷田君も口が塞がってないしね。

パンフレットには校舎内しか写ってなかったぞ。

荷物が纏め終わるとちようどプシューつとエア音が鳴った。

どうやら到着したようだ。

順番にバスから降りていく。

僕らが乗っていた他にもバスは有り、ぞろぞろと降りてくる。

親切高校内に向かう為歩いていると、

ドンツ! という衝撃が身体に走る。

「つてー!」

思わず大勢を崩し、尻餅をついてしまう。

「済まない。怪我はないか?」

「あ、うん。大丈夫だよ。」

パンパンつと制服に付いた土を落しながら答える。

「そうか。それなら良かった。なにぶん、荷物が重くてな。」

払い終え、声の主の方を見ると、赤毛寄りの茶髪でポニーテールの少女が居た。

「むっ、何だ人の顔をジロジロ見て。私の顔に何か付いているのか?」

「い、いや、何も付いてないよ!ごめん。」

「そうか。おっと、名前をまだ言ってなかったな。私の名前は神条紫杏。今後共宜しくしてくれ。」

「僕の名前は天道湊叶。天道でも、湊叶でいいよ。まあ、呼びやすい

方で。良かったらその重そうな荷物持とうか？」

「済まない。お言葉に甘えよう。」

出身中はどこだとか、他愛のない話をしながら体育館に向かった。

「済まないな。随分と重かっただろ。」

「うん。殆どの物は先に送ってあったのに何でこんなに重いんだよ。」

「ふふっ、秘密だ。」

「秘密かい。」

ははは、と笑いあつた後神条に「じゃあ、また。」と告げ、体育館に入った。

並び順はクラス順になっており、事前に配布されていた用紙を見ながら席に向かう。

「おそかったな。どこで油を売っていたんだ？」

「ああ、ちよつとそこでね。」

亮の隣の席に腰掛ける。因みに亮の隣は鼻息の荒い荷田君だ。

何でも女子を見て喜んでるようだ。

さつきまで女子と一緒にだったと伝えたらどんなことをされるんだろう。

黙っておくのが得策だな。

司会が入学式の進行を開始し出した。

在校生代表の挨拶のあと、新入生代表の挨拶になる。

『新入生代表、神条紫杏。』

「はい。」

神条が壇上にあがり、読み始める。

(へえ、あいつすごいやつだったなあ。)

挨拶が終わり、神条が席に戻る。

一人感心していると、すうすう、と寝息が聞こえてきた。右を見ると亮が眠っていた。

まったく、亮ってやつは。ところ構わず眠るからな。

バスの中でも乗ってすぐに「ホーミング娘。」を聞きながら寝てくし。

荷田君に支えて置くように頼むと、ちょうど元田夢二校長の話が始まった。

「あー！諸君！この学校は『親切』をモットーにしています。」なるほど、だから親切高校なのか。

「この学校で、社会の一員として、周りのみんなの面倒をよく見る、『親切』な人になりましょう。」

ふむ、中々立派な思想だ。

「そして、この学校には、諸君らが社会の一員として生きていくために必要な物が、全て揃っています。よって、外に出ていく必要は有りません！」

へ？

頭に？マークを作っていると

【ガコンー！】

と凄まじい音が響いた。

その音で隣で眠っていた亮も起きたようだ。

ふう、と息を吐きながら身体をほぐしている。

「…今のは扉の閉まる音？」

「…そうみたいでやんすね。あー、休日も外に出られないってまるで監獄でやんす！」

「荷田君、それは言い過ぎだよ。」

まあ、でも、あながち荷田君の言っている事にズレはない。

僕らは野球をするつもりだけど、他の緩い部活に入り、休日を楽しもうと考える人たちも居るはず。その人たちにとっては、辛くなるだろうなあ。

校長の話が終わり、入学式が終了する。

女子から退場していき、僕らのクラスの番に成る。

再び寝かけていた亮を起こし、担任と思われる先生の後を追っていく。

教室への移動中、野球部のグラウンドが見えた。

「なあ、亮。グラウンドどう思う？」

「実際に見てみないと分からないが、かなり良いと思う。詳しく

は野球部に入ってからになるとおもうが。」

そうだな。と相槌を打ち、教室へ向かう足を早めた。

『1年3組』

これから僕らが1年間過ごすことになるクラスだ。

担任の教諭の名は大河内将門。

空手と柔道の有段者らしい。

まあ、見た目からしてガチガチの体育会系だしね。

と、ここまでは普通の学校なんだが実は…

「先生！質問でやんす！」

お、荷田君が行ったな。

「お、荷田か。熱心な生徒は先生好きだぞ。」

「このクラスには女子が居ないでやんす。入学式の時にいた女子はどこに行ったでやんすか？」

「ふむ、それはな。まあ、大雑把に片付けると青春の滾りは思う存分部活に、勉強にぶつけろ！って事だな。色々と誘惑が多くなってしまふと不振に陥ってしまうしな。」

「なるほど、それでやんすか。」

荷田君が先生に礼を言つて席に座る。

しっかしびっくりしたなあ。あれだけいた女子も蓋を開けてみれば教室に居ないってどんなドッキリだよ。パンフレットに書いてけよ。

でもあの人数だ。絶対どこかには居るんだろうけど。

まあ、僕には関係ないや。

簡単なホームルームが終わり、僕たちは3年間過ごすことになる寮に向かった。

寮は各部活によって分けられている。

入試のあと、高校での希望部活を記入する用紙が配られ、合格発表の時に学校に提出する。

僕たちの場合は野球特待生と入部しているので、野球部区域の寮室になる。

103号室が僕たちが1年間過ごす部屋だと、知らされそこに向かう。

「そうか。ルームメイトが出来るのか。」

「ああ。それにしても寮の部屋まで湊叶と一緒にとはな。」

「僕もびつくりだ。」

部屋に着くと、既に先客が居た。

「君達が1年間一緒に過ごす後輩か。親切高校野球部へようこそ。」

俺は2年の寺河てらかわ 梓真あずまだ。よろしくな。」

「僕は天道湊叶です。これからお願いします。」

亮も寺河さんに挨拶し、寺河さんはニコツとする。

「あと1人来るんだけど遅いなあ。あ、この学校のこと色々教えてやるよ。」

グラウンドの奥に見える森にはドールベルマンが離れてあったり、『ペラ』と呼ばれる擬似紙幣があることも教えてくれた。

「あ、二人はさポジションどこだったの？良かったら聞かせて欲しいんだけど。」

「俺はピッチャーをやりました。球種は幾つか有りますが、自信があるのはスライダーです！」

「へえ、スライダーねえ。俺と決め球一緒にじゃん。」

亮と同じスタイルの投手。

2年生ながらエースを張っている寺河さんを抜かなくては亮はマウンドに立てない。

「絶対抜いて見せます。」

「うん。待ってるよ。」

短く言い切ると、寺河さんは僕の方に振り向く。

「天道君はどこだった？」

「はい。えっと、僕はショートでした。守備には自信があります。」

「部屋は違うが俺と同じ学年に基宗ってのが居るからそいつを抜かなきゃな。」

「はい！頑張ります！」

うん。と満足そうに頷いた寺河さんは人懐っこそうな笑みを浮か

べながら

「さっきも言ったけど、よろしくな。」

といい、僕は照れながら「はい!」と返した。

そこを使うといいよ。と支持を受け、僕は4つある机の2つを借りた。

「そう言えば、あと1人の方はどんな人何ですか?」

僕が制服をハンガーにかけ、ロッカーに閉まっていると、寺河さんに質問する。

「ああ、坂内^{さかうち}大也^{だいや}って言ってな中学の時からバッテリーを組んでるやつなんだ。ちよつと無愛想なだけどめちやめちや肩の強いヤツでな、セカンド送球とか150km/hくらい出てるぜ。あ、冗談抜きでな。」

「す、凄いですね。それでキャッチャーですか。」

スピードボール。僕が投げたくても投げられなかった、欲しくて欲しくてたまらなかったもの。

「何でもキャッチャーしかしたくないんだと。俺の球を受けている時が楽しいって言ってくれて嬉しいんだけど、俺が投げるより上に行ける気がするんだよな。」

「やかまし。エースのお前がそんなことを言っていてどうする?」

パツと、声のした方を見ると、薄い空色で、さっぱりした髪型の所謂イケてるメンズが立っていた。

「おっ!来たきた。遅かったな大也。」

「データを纏めていたら遅くなってしまうてな。天道湊叶と友沢亮だな。俺は坂内大也だ。これからよろしくな。」

荷物を置くと、坂内さんはバットを持って部屋から去って行った。

「どこに行っただんですか坂内さんは?」

亮が器用に教材等を纏めながら、寺河さんに問う。

「まあ、見ての通り素振りだな。入学当初から欠かさずやってるんだわ。まあ、俺も一応してるんだけどあいつの素振りの量には敵わないな。」

「そうなんですか。」

「湊叶、用意が終わったら素振りしに行くか。」

「うん。僕の課題はバツティングだからね。」

「あ、それ俺も行くわ。一緒していいか？」

「ええ、勿論。さあ、行きましょう。」

こうして、僕の親切高校での3年間が始まった。

第2話 新入生入部

朝6時に目を覚まし、少し伸びをしてから二段ベットの从上から降りる。寝ている先輩を起こさないように慎重に、慎重に。ベットの下段を覗き込むと、そこに寝ているであろう男の姿は無かった。

(あれ、亮のやつ、どこに行っただ?)

よく見るとバットが無い。素振りに出かけたのかと呟いてから洗面台に向かい、顔を洗う。キュツと蛇口を捻り水を出す。まだ4月に成ったばかりの冷たい水が流れだす。

(あまり音を立てないように。なるべく少量に。)

出来るだけ水の流れだす量を減らす。昨日夜遅く、門限を破ってまで自主練していた先輩たちを起こさないように。

掌に水が溜まったので、それを顔にかける。

ピリツとしたものが顔を突き抜ける。僕はこの瞬間が好きだ。何故って聞かれても何となくとしか答えられないけど、強いて言うなら生きてる実感がするからかな。年寄り臭い何て言わないで欲しい…

タオルで顔を拭いていると、ドアが開き人が戻って来る。

「お、湊叶起きてたか。今から起こそうと思ってたんだ。」

「おはよ、亮。もう素振り終えたのか?」

首にかけているタオルで汗を拭う亮。何時から振っていたんだろう。

「いや、折角だから一緒に練習しようと思って。キャッチボールとかき。湊叶は朝に強いから直ぐに起きるだろと思って。」

「なるほど。詰まり寂しかったと。」

「だ、誰もそんな事言っていないだろ!ただ1人だと虚しい気がして。」

「あはは、冗談だよ。まだ早いからキャッチボールはやめといった方がいいんじゃないか?結構音響くし。」

「それもそうか。なら、素振りだな。」

「おっけ、準備するね。一応タオル持ってこつと。」

カバンからタオルを、バットケースからお気に入りのミゾツトスポーツの水色のバットを取り出す。

「飲み物は、まあ、そんなにかからないだろうし朝食までもうすぐだしね。要らないかな。」

「じゃあ、行くぞ。」

寮を出て、すぐ近くの空き地に向かう。

「今日から、授業始まるのか?」

素振りしながら今日の予定を聞いてくる。

「いや、多分まだオリエンテーションだと思うよ。化学室とか特殊教室の紹介とかするんじゃないかな?あとは自己紹介とかさ。」

「そうか。そういうえば実力テストとかも有るのか?」

「あー、昨日配られた冊子に書いてあったね。明後日とかかな?」

「ふむう、テストか。」

会話をしながらも手を休めない僕ら。

「良いじゃん。テスト楽しいよ。」

「そうか?別に楽しいとは思わないが。」

「努力の結果が現れるからね。悪ければもつと努力しろってことだし、良ければ頑張ったかいがあったなって思えるだろ?」

「それはそうだな。」

「てか亮、頭いいだろ。別に心配することないじゃん。」

「ふっ、湊叶程じゃ無い。」

「あはは、それに今回のテストで『監督生』が選出されるらしいね。」

「監督生?何だそれ。」

「簡単に言うとな成績上位者たちだよ。自治会に務めることになり、2年からは自治会役員にも選出されるみたいだ。」

「ふーん、何だか面倒くさそうだな。」

「でも、悪い事ばかりじゃない。購買で物を買う時に要る、えっとペラだっけ?その消費が半分になる。監督生は50%OFF何だっ
て。」

「ほお、それなら悪くないかもな。」

「でしょ。」

「ふう、そろそろ上がるか。だいぶ明るくなって来たな。」

「そうだね。そろそろ先輩たちも起きるころかな？」

談笑しながら、部屋に戻ると案の定先輩は起きていた。寺河さんはぬいぐるみを抱いてまだ寝てるけど。

「おはよう。随分と早くから起きていたみたいだな。」

ちらつと寺河先輩を見てから坂内さんが何かをこちらにほって渡した。

「制汗剤だ。お前たちにやるよ。まだ寝ている馬鹿よりよっぽどやる気が有るみたいだからな。」

「あ、ありがとうございます。」

「匂いはシトラスしか無いけど我慢してくれ。」

「いえ、僕シトラス好きなんで嬉しいです。一応持ってきてたんですけど。」

「天道もシトラス好きか。俺と同じだな。安心しろ、切れたら俺のをやる。数は有るからな。」

「あ、ありがとうございます！」

「坂内さん、その資料って何ですか？」

洗面台から戻った亮が坂内さんの机の上にある資料を尋ねる。

「これはこの間偵察に行ってきた高校のデータだ。正直俺たちを苦しめるような相手では無かったが、とっておくに越したことはない。」

「同感です。データ抽出はやって、損は有りませんからね。」

坂内さんはふっ、と笑うと再び資料ちならめっこを開始した。

昨日貰った冊子をパラパラと見てから、グローブの手入れをした。

（中学の頃とは打球の速さが違うんだらうな。ゆっくりでいいからちよつとずつ慣れていこう。）

そう思いながら、丹念にグローブを磨いた。

「湊叶、そろそろ朝飯食いに行かないか？」

「あ、もうそんな時間か。通りでお腹が空くわけだ。じゃあ、行こうか。」

食堂につき、おばちゃんにメニューを注文する。

白米、白味噌の味噌汁、鮭の塩焼きと小松菜の胡麻和えといったメニューを食べる。

因みに亮も同じメニューだ。

「湊叶、鮭の骨気をつけろよ。」

「分かってるよ。こんな取りやすい骨を喉に引つ掛ける訳無いだろ。」

にやつとした目付きで見ってくる亮に、呆れたような顔つきで言葉を返す。

食事を終え、部屋に戻り登校の準備をする。

寺河さんの寝ていたベットにはペンギンのぬいぐるみが転がっていた。

これって持ち込みOKなのかな？ まあ、多分良いんだろう。

「なあ、これってボタン全部締めなきやダメなのか？」

「一番上は開けといていいんじゃないかな？ 流石に窮屈だし。」

「そうだな。そろそろ行くか。」

筆記用具をカバンに入れ、僕は寮を後にした。

*

『1年3組』の担任大河内先生により、オリエンテーションが進んでいき、最後は僕たちの自己紹介に成った。

「それでは自己紹介を初めて貰おう。出席番号の若い順から。よし、じゃあ、乾から。」

はい！と返事し、坊主頭が起立する。見るからに、まあ、いいや、話を聞こう。

「I 中学出身乾いぬい 勝利まさひとです。野球部です。1年間よろしく願います！」

パチパチと拍手が起こる。おい、お前のそのユニフォームは何なんだ。

誰か突っ込めよ。

「おお！元氣だな！」

「はい！元氣が俺の取り柄です！」

「それはいい事だが、そのユニフォームは何だ？」

「はい！これは制服を着るのが面倒で、ユニフォームがかっこいいからです！」

その答えに教室がシーンとなる。

「まあ、人それぞれ好みは違うな。よし、座っていいぞ。」

「はい！」

「じゃあ、次は越後。」

「E中学出身越後竜太郎だぜ。クラブは野球部だぜ。よろしくだぜ。」

うん、だぜだぜうるさい。何か俺のバットは火を吹くぜとか言っ
てきそうな気がするの僕だけか？

「よし、次。」

「K中学出身佳月 信弥や。好きな食べ物カルボナーラ、
というかパスタは基本的に好きやな！野球部や、よろしゅう。」

「同じくK中学出身神谷 宗太です。宗教の宗に太郎の太とかいて
宗太です。見ての通り野球部です。よろしくお願いします。」

2人とも確かりトルチームのお元氣ボンバーズというチームの中
心選手だった筈だ。後で話してみよう。

「よし、じゃあ、次は天道。」

僕の番になった。

「T中学出身天道湊叶です。星英高校に双子の兄が居ます。趣味は
身体を動かすことです。よろしくお願いします。」

あはは、ちよつと緊張したや。まあ、こんな物でいいかな。

「T中学出身友沢亮です。野球部です。よろしく。」

あれ、素っ気ないな。と思つて後ろを見るとすうすうと亮は眠つ
ていた。

(なるほど、眠かつたのな。)

「N中学出身荷田幸浩でやんす！好きなのはガンダーロボでやん
す！最近のマイブームはOVAで公開されているダイナミックガン
ダーロボでやんす！今欲しいものはウダマニユラでやんす！何と
いってもあの特徴的なフォルムが――」

「に、荷田もう良いぞ。き、次に行こう。」

「ほんじょう かける本庄 翔。H中学出身です。小中と野球をやってきました。1年間よろしくお願いします。」

荷田君が引つ張ったが、その他は何事もなく、スムーズに進んでいった。

「では今日はここまで。みんな明日はテストだからな。じゃあな。」大河内先生が退出したので、荷物をまとめ、亮を起こす。

「えっと、天道だよな?」

カバンに筆記用具をしまっていると、乾君たちに声をかけてきた。

「さっき自己紹介したけど、俺は乾、乾勝利だ。乾でも、勝利でも呼びやすいほうでいいぜ。」

「僕は天道湊叶。よろしく乾君。」

「俺は神谷宗太。覚えてるか? リトルのころ試合したと思うんだけど。」

「お元気ボンバーズだよ。覚えてるよ。よろしく。」

「わいは佳月信弥。わいも宗太と同じチームやったんやけど、覚えてるか?」

「うん。覚えてるよ。4番サードだったよね。」

「僕は本庄翔。ポジションはキャッチャーだったんだ。よろしく。」

「うん。よろしく。」

(お、俺が空気…)

「で、湊叶の後ろに居るのがあの友沢亮か。超中学級プレイヤーと一緒に運が良いのか悪いのか。」

(お、やつと話題に。)

これは野球選手の本能だろう。強い敵と戦いたいという純粋な気持ち。

「亮のプレイをみた後で同じことが言えるかな宗太。」

僕は今まで亮を間近で見てきたからわかる。亮は敵に回しちやいけないって。

「まあ、それぐらいじゃなきや超中学級とは呼ばれないさ。」

「やろな。友沢のプレイを生で見るのは初めてやさかい、わくわく

するな。」

「ふっ、大したことは無い。」

「僕から見たら有るんだけど…」

「そろそろ部活行こうぜ。今日から始まるんだしさ。」

そういうと乾君は荷田君と一緒に駆けて行った。随分速いスタートで。

「じゃあ、僕らも行こっか。」

* 『親切高校 野球部』

グラウンドに着くと、既に結構な数の部員が集まっていた。

「新入生の諸君、親切高校野球部によろこそ。俺は主将の飯占だ。これから野球部の顧問である車坂教諭から有難いお言葉をいただく。全員気をつけ。」

キャプテンと名乗った飯占さんの指示に従いピシツと気を付けをする。

飯占さんが「お願いします。」というと、後ろからやや老け顔の男性が出てきた。

「今紹介に与った車坂だ。これからのお前たちの為に幾つか言っておく。この新入生の中に“気楽で楽しい高校生活”を期待している馬鹿はいるか？念のため最初に言っておく。甘ったれるな！今の社会は、のんびり気楽に渡っていけるほど甘くはないぞ。お前たちが卒業して、社会に出た時最初に直面するのはな…世界には勝者と敗者という冷酷な差がある現実だ！だから、俺の野球部は教育としてまず試合に勝つことを教える。勝つための苦しみと勝つことの喜びを、この3年間の部活動でみっちりとお前らの身体に教えこんでやる！」

ゾクツとしたものが背筋を走った気がする。

いいね、僕が求めていたのは恐らくこれだ。このハングリー精神が求められるこの環境だ。

「もちろん、夏休みなんてものは無しだ。これが俺のお前たちへの【親切】だ。オイ…返事はどうしたっ！」

「「はい！ありがとうございます!!!」」

「まるで軍隊みたいな学校だな。強豪野球部ってこういうものなの

か？」

「いいや、違うでやんす。この学校が特別なんでやんすよ！」

あーあ、そんな声で喋っていると、

「オイ、そのの2人！」

「はっ、はい！」

「…私語の罰としてグラウンド10周。今すぐ始めろ！」

「ハイッ！」タタタタツツ…

言わんこつちや無い…。

「では2・3年はフリーバッティングだ！打って打って打ちまくれ！
！新生はまずは声出し！1時間声を出してからキャッチボールに入り、基礎力を見ていく。身体があっただまったら、とまあ、暫くは球拾いとランニングと練習見学、球磨きがいいところだろう。先輩たちのプレーを見て、高校のレベルを勉強しろ！以上だ、解散！」

「「はいー」」

「やっぱ最初は球拾いか。」

「そういうな宗太。どこの高校でも最初はこうだろう。焦らずにじっくりやっていくぞ。」

おお、流石亮。大人な発言だ。

「くそお！何で10周も！」

「ひいい、疲れるでやんす！」

あの2人は気の毒だけど自業自得だ。

さてと、暇だし球磨きでもするか。

第3話 出会いと再開

カリカリ ケシケシ カリカリ ケシケシ
シャーペンの記入音と消しゴムの消去音が鳴り響く。

そう、今は実力テスト真っ只中である。

昼休みが終わってから30分後、僕たちは5教科目となる社会のテストを受けている。

このテストで監督生が選出されるので少々気合いを入れて頑張っている。と言つても後ろのやつは気迫には適わないが…

僕の後ろの席の友沢亮という男は超負けず嫌いだ。中学の頃からテストで競い合い勝っては負けを繰り返して来た。最終的な結果では僕の方が僅かにリードしているのだが。

しかし今回のはやばいかも知れない。

亮は理数系が得意だ。そしてある程度文系も行ける、特に英語。

それに比べて僕は数学が壊滅的に出来ない。幾ら教えて貰つても空間図形何て辺りは解けない、解ける気がしない。まだマシな因数分解や、二次関数で取れているかが鍵となつて来る。

今社会の時間なのに何でそんなに余裕かつて？それは社会が満点の自信があるからさ。

口調がいのかりさんみたいに成ってるけど気にしないで頂きたい。あはは、ちよつと調子に乗ってたけど僕のキャラじゃないね。幾

ら自信があるとつてもケアレミスミスがあるかも知れないからしっかり見直しておこう。

入念に見直しをしているとスピーカーからチャイムが鳴り響いた。勝利と越後が終わった瞬間溶けたのが目に入った。

あの2人受ける前自信満々だったけど、何となく想像付くや。越後のやつもユニフォームに変わってるし…

僕の2人の呼び方が変わっているのは「君付けだと仲良く無いみたいだ(ろ・ぜ)」と言われた為である。

テストの回収が終わり、今日の予定が全て終わった。

はあ、とみんなが一斉に息を漏らす。但し3人を除く。

勝利と越後のやつはテスト中が絶賛睡眠時間だったから分かるけど、信弥のやつまで。あ、越後が因みに名前呼びじゃないのは「竜太郎」って長くて呼ぶのが面倒くさいからだ。

っとそれより、

「亮、テストの出来はどうだ？」

「ふっ、聞くまでもない。完璧だ。」

こ、こいつ、澄ました顔で言いよって。金髪のイケメンに言われてるから余計腹が立つ。

「結果は1週間後には出てるだろ。約束通り負けた方がパワビタを奢るんだぞ。」

「わかってるよ。楽しみにしとくよ。」

シシシと笑うと亮もふっ、とつられて笑う。

「何だかんだ言ってやっぱ実力テストだな。」

「ああ、余裕だったぜ。」

何だか勝利を勝ち誇った顔で勝利と越後が話してる。あ、あいつの名前勝利だ。

「オイラは中々解けなかったでやんす。マークシートだったのに、厳しいでやんす。」

「荷田君もまだまだだな。」

「ああ、やれやれだぜ。」

何かあの2人息ピツタリだな、何か嫌だな…

「この分だと監督生は余裕だな。」

「ああ、貰ったも同然だ。」

そんなに自信があるのか、なら訊いて――

「付かぬことを聞くでやんすが、どれくらいできたでやんすか？」

あ、荷田君が訊いてくれた。なら、任せよう。

「ふっ、良くぞ聞いてくれた。何と5つも埋めたぜ！」

「何！俺は4つしか埋めれなかったぜ！」

「ふっ、越後もまだまだだな。この差はな、ズバリ！頭の差だ！」

「くそ！次は負けないぜ！」

「ああ！しかし中々ハイレベルな戦いだった。次は危ないかもな。し

かし勝者は敗者の挑戦を何時でも受けるぜ！」

「待つてろー！そのうちまた挑戦するかな！」

「おう！待つてるぜ友よ！」

非常に清々しい光景が広がっているけど、開いた口が塞がらないや。

亮も固まつてるし、荷田君は白くなってる、おい、戻ってこーい！

とうるか、マークシートなんだから感で選んで埋めておけば何個かは当たるだろうに、因みに僕も数学は感で埋めた。

「ち、因みにそれはどの教科でそれなんでやんすか？」

「勿論、全部でさー！いやあ、今回は良かったね。」

「こんな問題を解くとかやれやれだぜ。」

また荷田君が固まつてる。 まあ、気持ちは分かるけど。

でも、勝利らが言っていることが本当ならやばいね…

「ああ、結果が楽しみだ。」

「俺が監督生になるのもそう遠く無いぜ。」

1年目は留年は無いって言うけど、どうするんだろ、別の意味で結果が楽しみだ。

ああ、頭が痛くなってきた。 亮も同じ様に頭を抑えている。

あ、そういや信弥も余り疲れてないけど、宗太に聞いてみるか。

「なあ、宗太。信弥って中学の時勉強どうだった？」

こういうのは心が痛むけど、好奇心が勝ってしまった？

「ああ、あいつは、超数学特化型何だよ。数学はすば抜けてる良いけど、他の教科は穴だらけだな。」

数学特化型かあ、僕と真反対だな。

「四六時中RSA暗号とか解いてるんだぜ？ほんと変わってるよな。」

あはは、と宗太は笑う。「RSA暗号」って一体なんなんだ？

「RSA暗号：初耳だな。」

「だよね。宗太、説明できる？」

「あのバカに何回も聞かされたからな。流石に覚えた。いいか、RSA暗号とは、桁数が大きい合成数の素因数分解問題が困難であるこ

とを安全性の根拠とした公開鍵暗号の一つだそうだ。」

「ごめん、全然理解出来ない…」

「…俺も分からないな。」

「だと思った。流石に無理だよな。」

何でも中学の時、数学オリンピックの代表に選ばれていたらしい。何か凄い。

「あ、言っとくけどあいつに数学の話は禁句な。『数学の美しさ』を語ってくるからさ。」

宗太が若干遠い目をしている。あのガタイのいい信弥が目を輝かせて数学に付いて語る…ちよつと笑えるね。

「とにかく、部活に行かないか？どうせ今日もサーキットと球拾いだろうけど。」

「そう言えば翔はどうだったんだろ？」

「後で訊けばいいんじゃないか？」

「それもそっか、じゃ、行こうか。」

*

監督の言う通り暫くは下半身強化と雑用が続くみたいだ。

新入部員を半分に分け、半分はサーキット、もう半分は外野で球拾い。最初はサーキットか。

サーキットの野手メニューは

〈スクワット〉

〈腕立て伏せ〉

〈腹筋〉

〈背筋〉

〈バービージャンプ〉

〈つま先立ち〉

〈うさぎ跳び〉

〈タイヤ引きダッシュ〉

となっている。

僕の課題は筋力の不足。投手もやっていたから靱やかさは有るけど打者としてやって行くだけの筋力は無い。ゆっくりとゆっくり

と付けていく。無闇に付けても意味がないとの坂内さんの教えだ。

ゆつくりと負荷を与えながら、徐々にやっけて行く。翔は下半身の強化に重点を置いていた。亮はチューブトレーニング。同じく投手の勝利はタイヤを引っ張っている。信弥は筋力に重点を置き、宗太は脚力メニユーを頑張っている。

1組の官取はバービージャンプで伸びているし、2組の岩田はダウンして、「腹減った…」しか言わない。正直不気味だ。

荷田君は外野で田島や越後たちと球拾いをしている。

身体を痛めつけた後、寮に戻る。流石に今日は自主練する気にならない。これは疲れた。でも、ここで休んでると差は付けられない。やっけて行く。

寮の裏庭に出、フォームを確かめながらバットを振る。

「頑張ってるね天道君。これ差し入れ、でも、余り遅くまでしてちゃった身体に毒だよ？」

「あ、はい、ありがとうございます。」

寮長の梅木さんにパワビタを貰い、喉を潤してからまたバットを振る。

暫く振っていると、ザツザツと足音がした。

「あれ、勝利、どうしたんだ？」

「走ってたんだけどさ、やっぱり投げ込みたくて。でもこんな時間には無理だからシャドーをしに来たんだよ。」

そう言うと言勝利は身体を沈めシャドーを始まる。

「あ、アンダースロー。勝利アンダースローだったのか？」

「あれ？言ってなかったっけ？俺はアンダースローだけ。」

大きく足を上げ、思い切り踏み込み、テイクバックを大きく取って身体の近くから腕が飛び出てくる。

「綺麗なフォームだ…」

「そうか、ありがとな。」

そう言うときまた「シュツ」を風を切る音を立てる。

打席に立ってみないと分からないが、これはかなり打ちにくいなと思った。まず第一にアンダースローがとても珍しい。それも左と

なれば尚更だ。パ・リーグの「千葉ロッテマリーンズ」の早川あおいが代表的な投手として上がってくるけど、勝利のフォームは似ても似つかない。アンダースローは下半身に來るって亮が言ってたけど、それならケアが心配だな。

「分かってるよ。無理はしないさ。」

どうやら表情から読み取られたようだ。

「ふふ、無駄な心配だったね。」

「だな。」

濃密な毎日、カレンダーはどんどん捲られて行った。

*

気付けば既に5月の中頃になっていた。

練習は余り変わらないが変わったといえば、僕のこの白い制服だろう。

500満点中、僕の点数は438点。

亮は426点と僕がギリギリ勝利を収めた。

クラストップの僕は大河内先生に監督生を引き受けてくれと頼まれたので快く受けた。勿論、半額目当てと言うのも有るけど（黒笑）それと亮にも監督生の推薦が行ったんだけど断つたらしい。

何でも僕に「負けたままなるのは自分の信念を曲げることになる。」とか言つて断つたらしいんだ。

あと野球部のメンバーの点数がわかったから表記しておく。

勝利国	8	数	4	英	6	理	10	社	10
越後国	6	数	2	英	6	理	4	社	8
信弥国	2	数	100	英	34	理	24	社	20
宗太国	7	数	82	英	90	理	68	社	58
僕国	9	数	78	英	82	理	84	社	100
亮国	8	数	96	英	80	理	76	社	86
荷田君	6	数	58	英	62	理	74	社	72
翔国	7	数	86	英	66	理	76	社	76

こんな感じかな。で、面白かったのが…

「乾君ら何点だったでやんすか？」

「聞いてくれ荷田君！何と！全部で、38点もあつたぜ！」

「俺は26点だつたぜ、くそつ、悔しいぜ。」

「…それ、1教科の点数でやんすか？」

「いや！合計だ！」

辺りがシーンと静まり返る。大河内先生を見ると、頭を抱えこんでいる。亮もパワビタを飲んだまま固まっている。まあ、そうなるだろうね。僕も聞いた瞬間パワビタを吐き出したもの。

何故か勝ち誇っている2人を直視できなかつた。

放課後になり、僕らはグラウンドの周りを走っていた。

3週目に差し掛かる頃に、カキーン！と快音が響いた。

打球の主はあの飯占キャプテン。結構飛んでいる。いつもはミート中心だけど、今日は豪快だな。

ライトフェンス付近に差し掛かった頃、ボールがフェンスを越えて、森の方に転がって行った。

「すまないでやんす。湊叶君良かったら拾ってきてくれないでやんすか？」

「あ、いいよ。とつてくるね。」

「俺も見に行くわ。何か有ると危ねえし。」

「ありがと、宗太。ごめん、亮。ちよつと離れるよ。」

「ああ、後は任せろ。」

一応僕が先頭を走っていたから亮に代わりにその位置に入つてもらう。

「さてと、拾いに行くか。」

「その辺りにあると思うよ。」

2人で森に近づいて行く。

その時まで僕らは忘れていた。

森にはドーベルマンが居ることに。

「あ、あつた。こんなところに。」

森の手前の茂みの近くにあつたボールを拾おうと近づくと、茂みがガサガサと揺れた。

「ん？何か揺れたか？」

「多分、何かいる。」
ぱつと、宗太が足元の石を拾う。それにつられ、僕も同じように拾っておく。

野球部の変え声以外聞こえなくなった瞬間、茂みから犬の鼻先が現れ、あつという間にボールを咥え、森に入ってしまった。

「な、何だあれ。」

宗太が手に持っていた石を落とす。

「あ、あれはドーベルマンだ。」

「はあ？何でそんなのがあるんだよ。てか、早く追わないと、見つけられなくなる。！行こう！」

ぱつと、宗太が森に向かって駆け出す。

「僕は向こうに行くから宗太は反対側を。」

「おっけ、念の為に何か持っておいたほうがいいな。まあ、石が手軽かな。じゃ、早くみつけよう。1球でも無駄にするのは惜しいからな。」

「そうだね。行こうか。」

歩き初めて数分後、視界の端にドーベルマンを捉えた。

僕は反射的に木の陰に隠れる。そうだ、何匹か放し飼いされているんだ。危ないよこの学校。何て生き物を話してるんだ。

ドーベルマンが左に動いた瞬間僕も身体を右に寄せる。常に反対側に居ないと。そのことに気を取られすぎている僕は背後からの敵ではなく、足元の木の枝に気づかなかった。

パキツ と乾いた音を立ててしまった。

ドーベルマンがこちらを向き、ウウと唸る。しまった、やってしまった。ジリジリと後ろに下がり、一気に駆け出した。

ガウガウ！と唸りながらドーベルマンは追いかけて来る。

待って！速すぎ！ 化け物だ！

ならばと、左に折れ、土の上をランニングシューズで走っていく。

「はあはあ、しつこいな。」

右に折れ、巻こうとするが、茂みを突っ切ってくるドーベルマンに

差を縮められる。

すると前方に建物が見えてきた。

(こうなったらやむを得ない。ごめん、許してくれ。)

ぱつと、後ろを振り向き、右ポケットに入っていた小石を手に握り、スリークオーターから鼻を目掛けて投げつける。

バチツと音がし、ドーベルマンが怯む。

よし、これで逃げられる。鼻を頼りにしているから鼻が麻痺すれば楽になる。

今の内にあの建物の近くに。

全力で駆け込み、壁にぴたつとひつつく。　どうやら巻けたようだ。

「ふむ…男子生徒か。」

「っ!？」

しまった、先生か。

いや、でもこの声には聞き覚えが。

ぱつと、後ろを振り向くとそこには1ヶ月前に出会った赤毛寄りの茶髪で、ポニーテールの少女の姿があった。

「し、神条、さん。」

「む、誰かと思えば天道じゃないか。まさか君が『女子寮』に来るなんてな。」

え、今なんて言った。ここが女子寮だって？

「え、ここ女子寮なの？」

「とぼけるな。それ目的で来たのだろう?」

「違う違う!僕はただ、硬球を啜えて森に姿を消したドーベルマンを追ってただけだって!」

「まあ、そんなところだと思った。監督生になった君がそんなことはしない筈だしな。」

「あれ、僕が監督生って知ってるの?」

「ああ、と言うより君も今年の監督生の名簿を貰っただろ?」

「ごめん、まだ見てないや。」

「そうか。まあ、その汗からして大方ドーベルマンに追われて来た

のだろ。違うか？」

「凄いな、流石だ。その通りだよ。」

「他の奴らならそう言っても信じないが君だからな。あの時は本当に助かった。礼を言う。」

「礼何て要らないよ。それにもし僕が困っていても君なら同じ行動を取るだろ？」

「だろうな。ふふ、君も中々やるじゃないか。」

「神条に褒めて貰える何て光栄だね。あ、そろそろ行かないと。」

「あー、こほん。私としてもこの間の礼も有るし見逃したところなのだがな、生憎規則だ天道。浜野！」

「はいーここに。」

「済まないが反省室に連れていくのを手伝ってくれ。」

「え、反省室？」

「うむ。ドーベルマンは気の毒だが、生憎規則で決まっているからな。私も心が痛むが仕方が無いんだ。」

「はあ、しょうがない。まあ、破ってしまったのは僕だからな。じゃあ、行こうか。」

「うむ。(済まない天道、これも私の計画の為なんだ。親切高校の真の校風”を作り上げるための。)」

(あー、反省室かあ。監督生になっていくつて多分初めてだろうな。辞めさせられるのかな?)

校舎の端にある反省室で、渋いお茶を飲みながら、大河内先生と面談に、なった。

大河内先生は僕の行動を逆に評価してくれた。まあ、悪いことはしていないしね。

で、お咎め無しとなり僕はだいぶ時間を食ったが、練習に戻るため走るのであった。

*

「あいつどこ行っただ。みつからないなあ。」

ふと茂みを眺めると、そこからドーベルマンが現れた。

口に啞えていたボールを落とし、ウウと唸る。

(狙いは鼻と、目だな。)

ジャリつと、手に石を忍ばせる。

ぐるるるる と唸っている。 面倒くさいな。

そう思った時、たたたたとドールベルマンは茂みを越え、駆けて行った。

「あれ、逃げてったぞ?」

眩きと同時にパシパシと何かを叩く音が聞こえた。

(何かで枝を叩く音だな。 気になるし、見てこよう。)

唾液塗れの硬球を振ってから、ハンカチで包み、音の下方へ向かう。

(この辺りだったはず。)

がサツという音が響き、反射的に「誰だっ!」と怒鳴っていた。

「ひえっ!」

(この制服は…この女子生徒。 …と言うより高いなあ、 185

は有るな。 ちよつと猫背だけど。)

「えつと…あのすみません、何方ですか?」

「……あ、あたし? あ、そういやウチしか居らんね。 大江…大江和那です。 1年8組の生徒やっています。」

(——その背で1年生か。 まだまだ伸びるな。)

「えつと、ここで何してたんですか?」

「……名前。」

「へ?」

「うーんと、だから…ほら、あ、アンタの名前。 まだ聞いとらんか。」

「ああ、忘れてた。 俺の名前は神谷宗太。 1年3組。 ジャージだけで野球部だ。」

「ほほう。」

「で、ここで何してたんだ?」

「運動や。 毎日身体動かさな、なまってしまうからな。 それに落ちて着かへん。 あ、神谷君こそ何してるん?」

「俺はこのボールを探して森に入ったんだ。」

そう言つて、ジャージのポケットからハンカチを取り出す。

「なるほど。納得や。」

「じゃ、そろそろ帰るわ。幾らまだ練習に参加していないとは言え、野球部には変わりないからさ。」

そう言つて、去ろうとすると――

「ちよ、ちよつとまつてー!」

と引き止められた。

「ん?どうしたんだ?」

「う、うん。あの、その、さっきびっくりした。けど、怖くは無かつたよ。」

「ごめんな、大きい声出して。」

「ううん、気にせんといて。」

「ありがとな。それじゃあ。」

「うん。ほなな。気をつけて。」

ああ、と答えて俺はグラウンドに向かって駆け出した。

あ、湊叶のやつ、どうしてるんだろな?まさか他の奴らに見つかつて追いかけられてるとか。とりあえず帰るか。

第4話 葛藤

ガラガラガラと音を立てて、石灰で、ラインを引く。

ライトまで引けたので、次はレフトに向かう。

「湊叶、お前ライン引きの天才だな。」

「ああ、わいも思った。」

勝利と信弥はほおぐといった感じでラインを見つめている。

「ボールに集中して向かっていけば自然と真つ直ぐに引けるよ。」

「湊叶、代わってくれ。俺がレフトまで引く。」

相変わらず亮は負けず嫌いな。だから成長するんだろうけど、

こんな事で意地を張らなくても…

まあ、向上心が高いってことにしておこう。

グラウンド整備を終え、新球を用意する。

「今日は星英高校と練習試合だ。」

「ま、オイラたち1年はどうせ見てるだけでやんすけど。」

「先輩たちのプレイを見れば色々勉強になるんとかやうか？」

「しかも相手はこの地区の強豪星英だからな。」

亮がチラつとこちらを見てくる。わかってるよ、大丈夫。

星英の投手がブルペンに入り、投球を開始する。

ビュ、バシッ！

「相手の投手…身体は余り大きく無いけど凄く速い球を投げるな。それに…何だか湊叶に似てるような？」

「お、おい、あれは『天道』だよ！天道翔馬！」

「あいつ、この地区だったよかよ?!おいおいあれとやるのか？」

「オイラも中学の野球部で聞いたことがあったでやんす。いや、天道って湊叶君と同じ苗字でやんすね。」

「…僕の双子の兄だよ。」

「え?..」

一同揃ってシーンとなる。亮はフェンスにもたれかかり、翔馬の投球を見ている。

「え、双子って、あの天道翔馬と?」

「さつきも言っただろ官取。僕の双子の兄だよ、翔馬は…」
ギョツと右拳に力が入るのが分かる。

「僕はシニア。翔馬は中学。別々でやってたから、知らなくても不思議じゃないと思うよ。それに何といても御園シニアの主役は亮だったからね。僕は基本に忠実な守備だから地味だしね。」

「なるほど…通りで顔が似てるはずだ。」

帽子をとり、汗を拭う翔馬を見て宗太が言う。

ビュ、バシツ！

「おいおい、150km/hは出てるんじゃないか？」

「オイラたちとは出来が違うでやんすね。」

“ 出来が違う。 ”

この言葉を聞いた瞬間、僕の中の “何か” が壊れた。

「けるな。」

「え？」

「ふざけんな！僕たちがあいつに劣ってるだど？いいか、同じ学年と
言うことはこれから3年間戦う相手何だ！そいつにそんな弱気でど
うするんだ！勝てるのも勝てなくなるぞ！」

「な、何でやんすか！お、オイラばかり責めなくても——」

「荷田君だけに言ってるんじゃない！官取や田島にもだ。まだ始まつ
たばかりだろ！今からうじうじ考えてたら伸びるものも伸びねえぞ
！」

僕の感情に身を任せた言葉に一同は少し固まる。

「同じ天道でも、あいつはレギュラー！お前はまだ練習すら入れてな
い。これを出来の違いと言わずになんて言うんだよ！」

「田島!!」

ピリツとした声で亮が田島の名を呼ぶ。

「湊叶のことを何も知らないくせに、知ってる風な口をきくな！」
「亮…」

「湊叶はな、誰よりも頑張ってるやつなんだよ！俺も頑張ってるつも
りだが、その上を行くやつなんだ。勿論、地肩などは天性の物だ。け
ど湊叶とあいつ、翔馬に無いものを持っているんだ！じゃなかったら

シニアの最後の大会終了まで無失策を続けられるか！」

亮の迫力にみんな押し黙ったままだ。

「そ、そうは言ってもよ。来る日も来る日も雑用と基礎練習じゃ面白くないし、湊叶の地力もわかんねえよ。悔しいがあいつは投げてるのに、俺らは練習すらさせてもらえないんだぜ？」

「それはそうだが、同じ天道だからって、あいつへの嫉妬を湊叶にぶつけるな！今のところ監督生としても頑張ってるし、夜も寮長に許可貰って自主練してるんだ。」

「亮…もういいよ、ありがとな。田島、僕の出来が悪いのなら悪いって言ってくれればいい。…僕はその評価を覆すだけだからな。」

僕はそれだけ言って、試合を見るのに集中した。

彼らがまだ何か言い合っているけど、どうでもいい。

僕は内なる闘志を燃やし、躍動する翔馬を見続けた。

*

試合は結局完封負けを喫してしまった。4番の飯占さんが打てなかつたら正直な所勝利は難しいと思う。強打を誇る親切打線も結局の核は4番だ。その彼が今日みたいに掌で転がされたら無理だろうね。

目の前で刺激的なピッチングをされ、刺激を受けない選手は居ないだろう。

翔馬はこちらをチラツと見てから、学校を去って行った。

ここから星英までどのくらいかかるんだろ、市営球場に行くのに結構かかったからね、ほんと辺境の地だよね。

「湊叶、ほら。」

ピトツと右頬に冷やかな物を感じる。

「ありがと亮。」

パワビタの蓋をあけ、一気に飲み干す。

「礼なら本庄に言っておけ。あいつが持ってきてくれた物だからな。」

後ろを振り向くと、素振りをしており視線に気づいた翔がニコツとする。

「うん。今度お礼しないとね。」

「ふっ、そうだな。」

互いに笑みを浮かべていると、監督から集合がかかる。

「1年生全員集合ー！」

スポーツバグの近くに空になったパウビタを置き、急いで集合隊形に合流する。

「突然だが今からテストを行う！今まで基礎練を積んできたその成果を見せてもらいたい。投手は2・3年相手に投げてもらい、打者も2・3年相手にどれだけやれるかやってもらおう。結果を残したやつはこれからの練習に参加させる。アップ等を今から始めるとして、そうだな、30分後に開始だ！」

「「はい!!」」

「…これ中々無茶なテストだな。」

「ああ、幾ら基礎練を積んだとしてもそう簡単に上級生の球が打てるようになるかよ。」

僕らがキャッチボールをしているとそういう声が聞こえてくる。

「何言うてんねん。打席に立つ前からそないなこと言ったら打てるもんも打てんくなるわ。」

宗太に強肩を活かした返球をする信弥が答える。

「馬鹿かお前は。幾ら何でも相手は上級生何だぜ？」

「馬鹿なのは君だよ。信弥君の言う通り、やる前から諦めてたらそれは負けたも同然何だ。幸いストレートだけなんだ。浅く持って、内野を越すイメージで振ればいいと思うよ。ね、湊叶君？」

「…うん。そうだね。」

久しぶりに翔の声を聞いた気がする。それよりやっぱり考えることは同じか。変化球があるなら厳しいけど、無しって決まってるし、多分行けるはず。

「よおし！まずはピッチャーから行くぞ！最初は乾！お前からだ！」

「はいー！」

勝利が駆けていき、マウンドに立つ。

2・3年相手にどんなピッチングをするのか、見ものだね。

*

「…以上が合格メンバーだ！明日から練習に参加しろ。呼ばれなかった者はまたテストを行うのでそれまで腕を磨くように。では今日はここまで！」

合格メンバーは勝利、亮、田島、翔、荷田君、山際、信弥、官取、僕、岩田、越後、宗太 といった、まあ、お馴染みのメンバーが合格出来た。テスト前から気持ちが悪くてた部員は全員落ちた。翔の言ってることが正しいと証明されたね、杉下君や海山君は惜しかったけど。

勝利のアンダースローに先輩たちはかなり戸惑ってたし、亮は相変わらずのスライダーのキレ。それとびつくりしたのが田島のピッチング。坂内さんがリードしたとは言え、140km/hに迫る速球。意外すぎる… 翔は僕と同じくミート型の堅守なタイプみたいだし、山際も空振りは合ったが修整出来ていた。というか全体的にまだ身体が出来てない分球威に押され気味だった。合格はしたものの、インコースの速球には対応が遅れていたし課題が明確になって良かったかな。信弥は1人だけかつ飛ばしてたけど。まあ、空振りも目立ったね…

正直今の実力じゃベンチ入りなんて僕が人参とアボカドを食べ切るくらい有り得ない。何度も試みたけど、あれだけは絶対に無理だ。

僕は明日の食事に人参とアボカドが使われないこと、明日からの練習を想像しながら黙々とバットを振り続けるのだった。

第5話 ライバル出現

練習に混ざれる様になり、本格的な練習が始まった。

車坂監督の野球スタイルは

『打って、打って、打ちまくる！』

みたいだ。マシンの速度を135km/hから140km/hにセツトし打撃を行う。

入部してからかなり経過したが130km/h超の球を打つなんてまだまだ厳しい。

テストの時も厳しかったけど、バットに伝わる衝撃が中学の時の非じゃ無い。

目は慣れてきてもそれを引つ張る力はまだ無い。

偶にヒットが生まれるけど、大半が内野ゴロやフライだ。このま

まじや『凡打製造機』みたいな感じで呼ばれてしまう。

痺れる手を振りながら先輩と交代する。

「余り気にするなよ天道。」

ヘルメットを脱ごうとすると坂内さんに声を掛けられる。

「最初は打てないのが普通だ。幾らシニアなどで鳴らしていても最初は壁にぶつかる。『身体の成長』というな。同じ高校3年生でも身体の成長が止まっているか、まだ出来ていないかで差が大きくでる。キャプテンは身長は止まっているだろうが体重はまだ増えるな。だから焦るな。これから作っていけばいい。」

「で、でも翔馬は！」

「目の前で『兄』であるあいつにあんな活躍をされ、刺激を受けたのはわかる。1年生であるあの投球が出来るのは歴代でも稀だろうな。今年プロ入りした猪狩守以来の本格派サウスポーと言ったところか。あの地肩の強さは確かに抜けている。しかしそんなあいつにも弱点は有るんだ。まず第一にスタミナが無い。よって長いイニングスを投げきれない。この前も継投で逃げられただろ？ 2つ目に、ほぼ完成してしまっている。1年にしてあの能力だが、逆に言ってみれば伸

びしろが少ないんだ。」

僕はそれを黙って聞いている。

「今から悲観することは無い。自主練だってしっかりやっているし、学業面も問題無い。焦らずに、じっくりと、身体を作っていけば必ず通用するさ。」

「あ、ありがとうございます！とりあえず筋トレしてきます！」

「余り無理はするなよ。」

（まだ筋力が足りず飛距離こそ出ていないがああのと力。ほぼ確実に芯の近くで捉えていた。上つ面に当たったり下面に当たっていたのもあったが。俺もコンパクトな振りを意識して見るか。）

簡素な作りの室内練習場に入り、筋トレを始める。

チューブトレをしてからダンベルをゆつくりと上げる。その時に先ほどの会話を回想する。

不思議と胸のつかえが取れた気がする。

言われて見れば確かに色々と焦っていた気もする。ゆつくりと登っていけば良いんだ。その歩みを止めなければ、いつかは追いつく。

そして追い越す。それに「あいつ」にも負けない！

ゆつくりと負荷を掛けながら次のトレーニングであるバーベル上げを行ってからケアをし、切り上げることにした。

*

「ちゅ、中間テストー！」

夜の親切寮外で勝利の声が響く。

「うん。あと1週間後だよ。今回のテストは範囲も狭いしアドバンテージが取れる。だから明日から1週間は自主練時間を削ってでも勉強しないと。」

練習に合流したと思えば直ぐに中間テストが控えていた。

「げえ、部活が出来ねえじゃん。それは困るな。」

「あつ、赤点とったら補習だから頑張らないと。」

「ほ、補習！練習が出来ねえじゃないか！」

「同じようなこと2回言わないでよ…勝利、授業中ちゃんとノートと

かどつてる?。」

「いや、とつてない。絶賛睡眠時間だ。」

ヤヴァイ。分かっていただけどヤヴァイ。

これは間違いない赤点コース。暫く勝利と越後、岩田の顔は見れそうに無いな。

「だあー!何でこれがこうなんだよ!因数分解って何だよ!自然のままにしておけよ!」

「全くやれやれだぜ。」

部活も停止し、みんなが集まり放課後の教室で勉強をしている。

今は勝利と越後に亮が数学を教えているところだ。

「ふつ、この問題を作った人は馬鹿だな。馬鹿に違いない。」

「何当たり前なことを言ってるんだ乾。俺たちが解けない問題を作るなんてやれやれだぜ。」

あ、やばい、亮がキレる。

ゴゴゴゴつと、何やらオーラが出てるよ。

「いいかア、お前らア!基本問題もろくに解けていないじゃあねえか!いいから、黙って解いてろオ!」

「は、はい!!」

…速報、亮の口調が壊れる。

このままだと僕に飛び火しかねないし集中しないと。

僕も数と式は曖昧だからな。しっかり復習しておこう。

「いいか、湊叶。数学ちゆうのは何も頭の中だけで考えるんやない。図に表したりするのも大事や。例えばこの集合の問題なんかはド・モルガンの法則を使ってやな」

だ、ダメだ。基礎問題すら厳しい。

やばい、頭がショートしそう。

と、とりあえずテスト範囲のワークを解きまくろう…

キーン コーン カーン コーン

「つ、疲れたでやんす。」

テストが終わると荷田君がこちらにやって来た。

「やはり、1日に5教科テストがあるのはキツいな。」

亮が伸びをしながら言った。

「同感や。わいも数学は自信あるけど、他の教科があかんわ。」

「つて、ことは6教科死亡じゃん（笑）」

あ、宗太のやつエグいな、傷を抉った…

翔は普段と変わらない様子だし、平均より少し上くらいと見た。

「てか、明日もまだ3教科有るんだよな…」

肩を落として宗太が言う。

「全部で8教科か。中学の時より大変だな。」

あ、亮の口調が戻った。

「これが期末だと12だけ？それくらいになるんだよな…辛いわ。」

ずーんと言う効果音が似合いそうな今の宗太は萎えている。

その気持ち、わからなくも無いけど…

「責めて2教科ずつ、4日に分けるとか、初日3教科、残り2教科的な感じに分けて欲しかったね。」

最後の僕の言葉にクラスのみんなが おお！ と反応を見せる。

「次の自治会会議で一応言ってみるよ。」

「頼むわ。こんなんばつかやとテストの度に疲労するからな。」

「さて、そこで伸びている乾と越後を起こそう。あと15分くらい休んだら勉強するか。」

「だね。」

明日は数学が2つある。数1はまだ解けるけど、問題は数Aだ。しつかり集合を叩き込まないと。

というか、それより何で普段6限なのに今日は5限だったんだ？それなら僕がさつき言ったようにすれば良かったのに。

*理事長室

親切高校理事長の山県剛司郎は不機嫌だった。

窓を開け、今どき珍しいパイプをふかしている。

右足を子気味に揺らし床をノックする。

山県がイラついているのは先ほどの教育委員会との会話が原因

だった。

数分前

「さてさて、本日見学していただいてどうですか、この学校は。」
「いやあ、誠に素晴らしい。この国で失われつつある規律、そして集団への奉仕精神！この学校こそが教育の防波堤であると本日、私は確信致しました。」

「校長先生、校長先生。文部科学省の方も、このように、このように仰ってくれておるぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「ただ：少し気になることが。」

「む、何かね？」

「この国は男女共学校でありますよね？しかし、今日拝見した限りでは少々実態に問題があるのでは、と。」

申し訳なさそうに進言してくる文部科学省の方の表情に思わず眉間にシワがよる。

「我が校のオリジナル制度、気に：気に入らんかね？」

「私個人の意見ではともかく、上の方に報告するとなるとその：問題になるかと。」

心配そうな表情を見、嘘はついていないとわかる。

しかし：

「そもそもこの学校が手本、手本にしたのは、戦前の英国パブリックスクールなのだよ。ワシがそこに在籍していた頃はそもそも男子のみの学校だね。そもそも学問というのは男の：」

「ああ、わかります、わかります。そういう時代でしたからね。ですが、ほら。今は男女同権の時代です。」

「そ、その考え自体が間違っておる！若い男女が席を同じくするなど。」

いつの時代も男が上でなくてはならない。

キャプテン・シーを發揮し、女性を引っ張らなければならない。

そして『親切の心』を持つことが大事だと山県は考えている。

「まあまあ理事長。それで、教育委員会としては現状の改善を要求す

るのですかな？」

「まあ、そういうわけでした。」

顔をしかめて山県は答える。

「わしは、わしは些か不愉快だ。校長！後は任せる！」

ボタンと扉をしめ、校長室を後にし理事長室に向かう山県。

「…まあ、理事長は強固な教育理念をお持ちの方ですからな。」

「その、ぶれない姿勢はまことに結構だとは思いますが。…それで、大丈夫ですか？」

「こういう日が来るのは予想しておりましたから。まあ、お任せ下さい。」

「すみません、ではお願いします。」

「ええ。遠いところまでお越しいただき有難う御座いました。今教員に遅らせるので少しの間お待ち下さい。」

「御丁寧に有難うございます。それでは失礼します。」

そして、今に至る。

「理事長。」

「…不本意だが会議を行う。文部科学省の方とも連絡を取り合って、より良いパブリックスクールを目指す。」

「分かりました。ではあと10分後に会議室で会議を。他の教員たちも直ぐに集まるでしょう。」

ニコツと微笑む元田校長。

まるでこうなる事がわかっていたかの様に。

「では行こうか。」

パイプを片付け、窓を締める。

上着だけ替え、元田校長の後をついていく。

議論は何回かにわけて行う方が良さそうだと、少し笑みを浮かべてから山県剛司郎は会議室に入って行った。

* in パワフル高校

「ナイスボール！いい調子だな！『鈴木』！」

「まだまだですよ。次行きますよ！」

ワインドアップから右腕を振るってボールを投じる。
半速球のボールは捕手の手前で不規則に変化する。

「くっ！」

「だ、大丈夫ですか！」

「ああ気にするな。それにしても相変わらず取りづらいつたらありやしないな。それだけ打ちにくいって事だ。」

「僕の中学3年間の集大成ですからね。」

「ああ。それにしてもお前をこれ程本気にさせた天道湊叶ってやつは凄いな。」

「はい。今まで見た中で最も優れた1番バッターでした。結果的に打たれたのは4番でエースの友沢亮ですけど。」

「あ、そいつは聞いたことがあるな。」

「去年のベスト4ですよ。投打のセンスが半端無かったです。優勝した上野シニアのエース藤内も凄かったですけど。」

「確か『帝王実業高校』に行ったやつだったな。」

「そうです。セカンドの蛇島も一緒に。」

「で、大輔、お前と組んでたやつは『聖タチバナ学園』だったか？」

「はい。キャッチングセンスが抜群でーっと、つい話してこんでしまいましたね。次行きます！」

ストレートを投げ込み、汗を拭う。

(聖…そっちはどうなんだ?)

今年のシニアリーグのベスト8チーム佐八シニア。

その主力であった『鈴木大輔』と今打撃練習をしている『
おおりのき 颯呂』。

類まれなるパンチ力を持っている天性のアーチストである大力。名前通りパワフルなバッティングが売りだ。因みにあだ名は『パワプロ』といい、大力からパワフル、颯呂のふろをとってそうなららしい。

本人も最初は嫌がってたらしいが、周りに浸透してしまったので諦めたそうだ。

何はともあれ彼らが全国に知れ渡るのは早いだろう。

* i n 聖タチバナ学園

たたたたた、と学園の廊下を水色のサイドポニーを揺らしながら1人の少女が走る。

「やっほー聖ー!」ポーン

左肩を叩かれた紫色のハーフアップの少女がビクツと身体を揺らす。

「な、何だみずきか。脅かさないでくれ。」

「あれ? 何でそんなにテンション低いの?」

「別に低くない。みずきが高いだけだ。」

「何か引つかかる言い方ね。」

「それより早く練習に行こう。今日も投げ込みとランニングだ。」

「今日も『ダーリン』達は守備練習?」

「多分そうだと思うぞ。初心者もいる訳だし、守備だけはそこそのレベルにしないとかないって神木がぼやいてたからな。」

紫色のハーフアップの少女が続ける。

「正面の当たりをエラーされた大変だし、みずきへの負担を減らす為だそうだ。」

「さっすが『ダーリン』! ようし、聖! 早く行って投げ込みましょう!」

「ああ!」

グラウンド

「あ、みずきちゃんに聖ちゃん。」

2人の少女がグラウンドに着くと同時に、部室から『Tb』の文字が入った帽子を浅くかぶった灰色の髪少年が出てきた。

「遅かったね。生徒会?」

スパイクの紐を結びながら少年が問う。

「そうよ。私は昼休みの残りを、聖は先生に頼まれて少し用事をしてたんだって。」

「ふむふむ。」

紐を結び終えた少年は立ち上がり、バッテリーンググローブを手にはめ始めた。

「じゃあ、俺はみんなにノックをしてるから、2人は軽くアップをしてきて。今日は実践練習するからみずきちゃん頼むよ。」

「まっかせて！その代わり手加減しないからね！ダーリン！」

「そう来なくっちゃ！」

橘みずき・六道聖・そして「ダーリン」と呼ばれた神木翼。こ

の3人が聖タチバナ学園の名を全国に轟かす！

*in 帝王実業高校

カアン！カアン！と打球音が鳴り響く。

「何やってるんだ！今のは回り込めば取れただろ！逆シングル何て格好つけるな！」

鋭い打球が内野陣に降り注ぐ。

「よおーし！蛇島ナイスキャッチだ！上がっていいぞ！」

帽子をとりニコツと笑みを浮かべ守木監督に礼をしてからベンチに戻る。

蛇島桐人

昨年のシニアリーグの覇者である上野シニアの4番セカンドを務めていた選手。

青色のオールバックで、瞳は細く紅い。

ブルペンで投げ込んで居るのは蛇島と同じく上野シニアの主力の藤内直哉。

左投げのスリークォーターで、左投手には珍しい「あの球」を中心としたインコース攻めの強気なピッチングスタイルの投手。

燃えるような赤髪に、水色の瞳のイケメン。

3年生のエース志摩と共に甲子園を狙う！

第6話 提案

5月が終わり、歴は移って6月に入る。

この季節になると、選手の仕上げの時期になってくる。

来月に控えた県大会を勝ち抜くために、そして甲子園大会で勝つために。

一発勝負の高校野球だが、気を抜かない限りベスト4は固いと見ている。

2年生エース寺河さんも安定しているし、控えの3年生長谷部さんもいい投手だと思うし。

星英との練習試合は敗れたけれど、バス停前高校、赤とんぼ高校、そよ風高校と3校と対戦に勝利を上げている。

極悪久やんきーズで活躍している『阿畑やすし』投手の従兄弟『阿畑よし』さん率いるそよ風高校にも5―1と勝利を上げた。

でもやっぱり、問題はやっぱり翔馬のいる星英高校。

3年生で主将の大軒さん、内野の要の桐乃さん、扇の要の新谷さんを中心とし纏まっているチーム。

そして、翔馬の存在。

翔馬は恐らくリリーフ、先発が予想される長岡さんも好投手。

こうしてみると隙のない布陣に見える。

でもこちらには情報分析に優れた坂内さんがいる。坂内さんのことだ、何かしら見つけてる気がする。

てかあの人学業成績もずば抜けていいからね、文武両道を体現している人だよ。

因みに中間の結果は言わずもがな、勝利、越後、岩田の3人が仲良く補習コース。

信弥も数学以外はやばいと言っていたが一応30点はあったのでセーフ。

宗太、僕、亮、翔は安定の成績。

驚いたのが今回も翔の各教科の点数の下が6と言うことだ。単なる偶然だろうけど。

という訳でお馬鹿トリオは絶賛補習中だ。

これに懲りて、少しは勉強してくれると助かるんだけど。

「亮。」

素振りを終え、パワビタを飲んで休憩している亮に呼びかける。

「ちよつと僕は練習から離れるよ。」

スパイクを脱ぎ、ランニングシューズに履き替える。

「ああ、あれか？」

「そう、あれだよ。下手したらボロボロになるけどね。」

「無理だけはするなよ。監督に訊かれたらそれとなく誤魔化しておく。」

「うん、ありがとう。」

*

「はあ、中々着かないな。どっちだったっけなあ？」

僕は今、森の中を歩いている。

ただ気晴らしに歩いている訳じゃない。

一応理由があつて歩いてるんだけど、

「…迷った。」

はい、絶賛迷子です。

「こんな遅くなるつもりは無かつただけだな…亮のやつ、怒ってるだろな…」

森に入って1時間とちよつとが既に経過している。

「前行った時は直ぐに着いたのにな。」

そう、僕の目的は女子寮に行くことである。女子に会いたいっていう考えじゃ無くて相談したい案件が有るからね。

まあ、こじつけと取られたらそれまで何だけど。

それにしても幸いな事にあのドーベルマンたちは姿を表していない。

出来れば今の内にもう帰りたいんだけど、

「ここまで来たしな…」

うーん、と伸びをし、ふと目線を左にずらすと建物が見えた。

あれ、僕どれだけ視野が狭いんだろ…
まあ、いいや。とりあえず向かおう。
いや、待てよ。そもそも居るのか。

前は偶々だったかもしれない。
今になって、冷や汗が出てきたぞ。

やばい、ヤヴァイぞ、神条が居ないなら話が進まない！ それに他の女子生徒に遭遇したら面倒くさいことこの上無し！

「突発的過ぎたかな…」

はあ、と溜息を漏らす。

落ち込んでいても仕方が無い、とりあえず向かうことにしよう。
女子寮に向かって歩みを進めて居ると

「ぎやああああー！」

との叫び声が聞こえた。

(今のは女子生徒の声、さてはドーベルマンか！)

足元の石を拾って、僕は声のした方に駆け出した。

「くっ、一体私が何をしようのさ。」

駆けつけて見ると、女子寮隣の広場に2匹のドーベルマンと、赤毛よりの茶髪ポニーテールの少女の姿があった。

「神条！動かないでよ！」

キッ！とこちらを睨んだ向かって左側のドーベルマンに向かつて石を思い切り投げつける。

動物虐待に取られてしまうかもしれないけど、この場合は仕方が無い。

前回同様、鼻に目掛けて放った石は見事に当たり、きやいんきやいと泣きながらもう1匹と共に去っていった。

(僕のコントロールも捨てたもんじゃやないな。)

ふう、と一息付くと、大事なことを思い出す。

「つと、神条！大丈夫、怪我は?!」

木にもたれ掛かり、呼吸を荒らげている神条の元に駆けつける。

「天道か。すまない、一応怪我は無い。」

一息吐き、神条が立ち上がる。

「そっか、それなら良かった。でもびっくりしたな、声の主が君だなんて。」

「むっ、それはどういう意味だ。」

「別に悪い意味じゃないよ。ただ」

「ただ何だ？」

しまった、口調が変わってるけどそういうのは普通なんだ何て言えば殺される。

「いや、ごめん、何もです。ただほんとに悪い意味じゃないから。」

ま、可愛いと思ったのは本当のことだから嘘は言っていない。

「ふむ。」

それだけ言うと神条は顎に手を添え黙り込んでしまった。

少しして、

「そういえば何故君はこんな所に居るんだ？わざわざ校則違反を犯してまで。君のことだから何か有るんだろ？」

そういえば用件をまだ伝えてなかったんだ。

「あ、そうそう、君に伝えて起きたかったんだ。僕はこのドーベルマンの配置の停止を自治会会議で提案しようと思うんだ。何と言ったって、今回の様な事件が多発するようになったら困るからね。男子はいいかもしれない、懲りて森に入らなくなるかもしれないからね。でも女子はそうはいかない。神条、君は身をもって体感しただろう？これは普通の女子高生には危険過ぎる。最悪の場合生死に関わるーって、ちよつと大げさかな。でも君もそう感じているだろう？」

「正直なところな。全く君にはつくづく関心させられるよ。わかった、私も次の自治会会議でこの案件を提出しよう。男女から声が上がれば流石に通る筈だ。」

「ありがとう。助かるよ。」

「礼は要らない。寧ろ当然のことだからな。」

ニコツと神条が微笑む。

僕もそれにつられふっ、と笑う。

「しあーん！どこやー！自治会行かへんのかー！」

「あの声はカズか。すまない天道。私は今から自治会の仕事があるの

でな、これで失礼する。」

「うん。怪我がなくてよかったよ。」

「あ、そうだ、これを受け取って欲しい。」

そういうと神条は制服のボタン、それも2段目に手をかけた。

手際よく、指先を動かしボタンをとる。

「制服の・・・第2ボタン？」

「うむ。責めてもの礼だ。本当は以前からの礼もあるのできちんと返したいのだが。」

「ああ、いいよ。別に見返りが欲しくてやってる訳じゃないし。ほら、友達も呼んでるみたいだし、僕はこれで。」

「ああ、今日も助かった。ありがとう、天道。」

うん、と頷いてから僕は森を駆け抜けて行くのであった。

「何や紫杏、こんなところにおったんかいな。朱里が怒ってるで。」

「ああ、すまない。今行く。」

「なあ紫杏。さっき誰と話しとったんや？」

「ああ、男子生徒だ。」

「え？それって・・・」

「ドーベルマンに襲われてな、そこを助けてもらったんだ。」

「へえ、あ、その男子生徒の名前は？」

「ああ、天道湊叶と言う。私と同じ監督生だ。」

「ほえ、てことは成績優秀者かいな。」

（ほっ、神谷君や無いんか。いやいや、何をウチは考えてんねん！）」

「いきなり頭を振るとはおかしな行動をとるなあ、それは置いておきそういうことになるな。」

「ごめんごめん、それにしても何で監督生さんがこんな所に？興味本位で見に来たとか？」

「ドーベルマンが放し飼いされているだろう。その廃止案を提案しに来てくれたんだ。」

「ドーベルマン何てウチに掛ければイチコロなんやけど。」

「普通の女子高生にとっては脅威だとさ。」

「：何かそやったらウチが普通じゃ無いみたいに関こえる。」

「気にするな。人によって、捉え方はそれぞれ違うのだから。」

「でもそれをわざわざ紫杏に提案しに来るなんて、」

「知らない仲じゃ無いからな。」

「そうなんや。あ、そろそろ行こか。これ以上朱里を怒らす何て堪忍やからな。」

「ああ、行こうか。」

チラツと湊叶が去っていった方を見、紫杏は自治会室に向かった。

「そういえば紫杏、第2ボタンどないしたん？」

「ん？ああ、礼として天道に渡したが。」

「…さいでつか。」

*

部活に戻ると、幸いな事に車坂監督に練習を抜け出したことはバレていなかったようだ。

ありがとな亮、後でパワビタ渡すよ。

帰還してから数分後してノックが始まった。

僕はショートに入りノックを受ける。

車坂監督のノックは今ままで経験したことのない初めてのノックだった。

何球か捕球してからは、その選手一人一人の守備範囲ギリギリに打ってくる神業とも言えるこのノック。

厳しく、疲れるが同時にわくわくもした。

やっぱり僕が最初に感じた気持ちの間違っていないなかった、そう思えたから。

「よおーしー！今日はここまで！」

あれから1時間半ぶつ通しでノックを続け、今ようやく終わった。「っ、疲れた。」

ドサッと崩れる様に座り込む宗太。

外野ノックもわざと頭を越すような当たりばかり打っていたから、当然かもしれない。

「や、やれやれだぜ…」

あれ、いつの間にか越後が居る。

よく見たら岩田も三墨に居て、腹減ったって言ってるし、勝利は生き生きとブルペンで翔相手に投げてるし、補習終わったのかな？
軽いクールダウンをし、練習が終わった。

「勝利。」

伸びをしている勝利に声をかける。

「補習は終わったの？」

「ああ、終わったよ。これでこれから練習に参加できる。」

「そっか、それはよかった。」

「湊叶君、違うでやんす。」

え？つと後ろを向くと荷台君が遠い目をしていた。

「普通、補習が一日で終わると思うでやんすか？あれは乾君たちがあまりにも飲み込みが悪いため、善先生を初めとする教員が倒れたでやんす。」

「……………」

驚きの余り、つい言葉に詰まってしまった。

「マジですか…」

「大マジでやんす。」

これは進級が危ないなと溜息をつく僕であった。

第7話 2人の距離

梅雨も明け気候が安定してくる頃、親切高校の選手は順調な仕上がりを見せている。

相変わらず僕は非力だけどね。

若干守備が弱いところもあるけど、それを補うだけの爆発力のある打線。

それとベンチメンバーが発表されたんだけど、

「18番 友沢」

先輩方を差しのき、1年生で唯一ベンチ入りを果たした亮。

まあ打力も半端ないし妥当なところだよな。

エース寺河さんと、背番号10をつけた長谷部さん、それに亮。

この3投手の試合での出来で勝負が左右されることになりそうだ。

それより、1年目の夏でベンチ入りする亮って何者…今に始まったことじゃないから僕はまだ納得行くけど、先輩とか妬んでないかな？

例えば…そう、北乃先輩とか。

「くそっ！何で基宗のやつが選ばれて俺が選ばれないんだ！」

「き、北乃先輩落ち着いて。」

「それに1年の友沢ってやつも！1年目からベンチ入りとか絶対監督の——」

…案の定、暴れたそうだな。

目の下にくまを作った勝利がぼやいてたよ。

「ありや、相当ひねくれてる」 って。

ベンチ入りメンバーを主とした練習が始まり、練習も熱気を帯びていく。

——そして、高校球児の夢と希望、そして誇りが火花を散らす試合が幕を開ける——

カキーン！

『入ったあ！4番飯占君の一振り！これで5—1！8回に追加点を入れ稲尾総合高校を突き放します！』

「ストライーク！バッターアウトツ！」

『空振り三振！最後は1年生友沢君が閉めて親切高校、準々決勝進出を決めました！』

「礼ッー！」

「ありがとうございますございましたっ！」

湊叶

「お疲れ亮。」

友沢

「ああ、ありがとう。」

球場から出てきた亮にパウビタを手渡す。

ストッパーとして活躍してるとは言え、仮にもまだ1年生だ。プレッシャーをもちろに浴びてるはずだ。だからこそ、親友である僕がサポートしてあげないと——勿論、皆と協力してね。

僕らが球場を後にし、バスで親切高校に帰る途中、星英高校が準々決勝進出を決めていた。

*

寺河

「おー、今日もいい天気だな。絶好の試合日和になりそうだ。」

寮室のカーテンを寺河さんが勢いよく開ける。

良い感じに気合いが入ってるみたいだ。

朝の自主練から戻った亮と話しながら朝食を取りまとめてあった荷物を持って、僕達親切高校野球部は球場に向かった。

—— 先行 星英 —— 後攻 親切で試合が開始された ——

寺河

「ッらっー！」

寺河さんから放たれたボールはチェックゾーンに入る辺りでフツと下降する。

Vスライダー

所謂「縦のスライダー」のスライダーでジャイロ回転の成分を含んでおり、初速と終速の差が小さい……らしい。

因みに球種がわかるのはスタンド最前列に居るからだ。

ギイン つと、金属バットの根本に当たったボールは寺河さんの元

へ転がる。

試合は5回。

中盤に入ったものの、この様に打たせて取る投球（ピッチング）で着々と凡打の山を築いている。

一方親切も、星英のエース長岡さんを打ちあぐねている。

のらりくらりと言った投球ピッチングスタイルでランナーを出しても要所をキチツと締められている。

本庄

「…上手いことやられてるね。ウイニングショット絶対的決め球が無い分狙いを絞りきれ
ていない。」

隣に座っている翔が思わず漏らす。

湊叶

「そうだね。いつでも打てそうな感じの球を続けて要所では少し球威を上げて打ち取る。正直厄介な投手だね。」

「いや」と飲んでいたパワビタを置いた信弥が言う。

佳月

「確かに湊叶の言う通り厄介な投手や。あんまり痛打されやんし、精度の高い投球を続けてるしな。」

一口パワビタを飲んで信弥が続ける。

佳月

「わいやったら狙うんはランナーが居ない時に来るあの抜いたストリートや。なんぼ守備が硬くても関係ない。頭を越していく当たりは誰も取れんやろ?」

神谷

「なるほどな。ホームランなら行けるってか。」

佳月

「そや。点も入るし、上手いこと行けばあの投手の調子も崩れるかもしれやん。」

ふふん、と得意げに、所謂ドヤ顔を信弥はする。

が…

本庄

「でもそのとんでも野球理論は、余程のバッターじゃないと無理じゃない？ミートとパワーに長けた選手。親切うちで言うならそれこそ飯占キヤプテンくらい、と俺は思うけど。」

あつさりと論破されてしまう。

湊叶

「僕もそう思う。信弥が言ってることも間違ってると思うけど、狙ってホームランが打てる選手は限られてくるからね。やっぱりコツコツしつこく行くのがいいと思うよ。これはあくまで僕の意見だけだね。」

佳月

「ふむう。確かに狙って打てるならみんな10割打者か。案外良い作戦やと思っただんやけどな。」

神谷

「その作戦はもつと重量級の打線じゃないと厳しいな。親切も結構強打のチームだけど、その作戦をするには物足りなさを感じるからな。」

湊叶

「あれ、そう言えば勝利が話に入ってこないな。何時もなら食いついて来そうなのに。」

グラウンドに向けていた身体を左に捻り勝利の姿を探す。

湊叶

（確か越後らと居るはず。）

あの坊主頭三人衆は実に見つけやすかった。

何故か空を見上げて言い合っている。

勝利

「だからあれはグローブで、あれがバットだって！」

越後

「いや違うね。あれはミゾツトスポーツのバットだ。全くやれやれだぜ。」

岩田

「…クリームパン。」

荷田

「あれはウダマニユラでやんすよ！で、その隣がガンダーロボでやんす！」

…荷田君まで参加してるし。

…全く何をやってるんだか。

曇って人に寄ってそんなに見え方違うっけ？

それに無駄に越後は細かい。雲をみただけでそのバットのメーカーを、常人は見分けられないぞ。

カキーン!!

快音が鳴り響き、白球は大空を舞う。

大きく弧を描いた打球はそのまま作を越え、芝生の上で跳ねた。

佳月

「わいの作戦的中やな。」

こちらに信弥がサムズアップを向けてくる。

本庄

「…その唯一の人が仕留めたね。」

湊叶

「まあ、信弥の作戦は僕らが勝手に言っただけだから当たったとか無いけど、あー、くそお、捉える瞬間を見逃した。」

神谷

「インコース低めのストレートだったな。明らかに抜いた球だった。4番相手に気を抜きすぎだあの投手は。」

ちよつと宗太の上から視線が気になるけど、言ってることはごもつともだ。

長岡さんは先程ボールが入っていったレフトスタンドをまだ眺めている。

失投を捉えられたというか、自分の傲りが招いた結果だ。この緊迫した投手戦なら如何に先程の失投が大きな物か野球をしているものなら大抵わかる。

完投を目指しているならどこかで抜くのは大事だけど、流石に4番で抜くのは、ね。

5番の坂内さんが打ち取られて6回が終了する。

『親切高校 選手の交代をお知らせします。ピッチャー 寺河君に代わりまして 長谷部君 背番号 10』

7回に入り、親切は継投に入る。

マウンドに上がったのは3年生の長谷部さん。

左のスリークオーターで、スクリーンボールを得意としている投手だ。

マウンドをガツガツと慣らす。

僕も中学の初めの頃は投手をしてたからわかるけど、自分の堀を作るのは本当に大切だ。

ちよつとでもズレると失投に繋がるしね。

…実際僕も経験あるし。

星英はこの回は下位打線から始まる。

ここで調子を整えて次の回、上位打線に備えたいところだ。

長谷部さんの第1球。

星英の7番打者はバントの構えを見せる。

長谷部

「!?」

不意を疲れた長谷部さんはマウンドから全力でダツシユする。

が――

バシイつとミットが音を鳴らす。

バントの直前でバットを引いてきた。

坂内

(…今のがボールだったからしなかったのか。完全に無警戒だったな。サードに指示をいれておくか。)

サツと坂内さんがブロックサインを出す。

若干三塁手が前に詰める。先程のバントの警戒だ。

2球目、アウトローにスクリーンを投げ込む。

星英の打者はまたもやバットを引く。

3球目、またもやバットを引く。

これは…

神谷

「…スタミナを削りに来たな。」

宗太の言葉に僕達は頷く。

本庄

「代わったばかりの長谷部さんを一気に攻略するつもりだね。」

相手が強豪と言うことで少なからず緊張している筈だ。そこに

このバント戦術と来たら溜まったもんじゃない。

4球目、勢いを殺されたバントは長谷部さんの左方向へ。

捕球して一回転して送球する。

アウトっ！と一塁塁審がゼスチャーをする。

とりあえず1アウトとなったが、

佳月

「もう息があがりかけてるんとかやうか。」

返球を受け取った長谷部さんが汗を拭う。

続く打者にも同じ手で粘られてしまう。

坂内

(くそ、しつこいな。バント耐久を逆手に取って甘い球を投げさせた
らヒットイングしてきた。…まずいな、絞らせてもらえない。)

5球目、またも先程と同じ所に転がされる。

長谷部さんは一瞬フラけたものの、しっかり処理をする。

これで2アウトだ。

次の打者は投手の長岡さん。

恐らく同じ手で攻めてくると思うけど――

『星英高校 選手の交代をお知らせします。 9番 長岡君に代わり

まして ピンチヒッター 天道君 背番号11』

神谷

「バツティングセンスもある天道をここで起用して来たか。」

ゆっくりと僕の双子の兄である翔馬は左打席に入った。

翔馬に対して初球――

バシィ！つとミットが音を鳴らす。

翔馬

「スト●●●じ●●●な●●●め●●●げて●●●。」

よく聞き取れなかったけど、翔馬が何かを坂内さんに言ったのがわかった。

バットを長谷部さんに向け、何やら挑発しているようにも見える。

2球目、長谷部さんはロージンバツクを乱暴に投げ捨てると投球フォームに入った。

しかしそのモーションはいつものものとは異なり、何処かぎこちない、力んだフォームだった。

坂内

(なっ、変化しな—)

*

刹那、快音が鳴り響く。

それは先程、飯占キャプテンのバットから奏でられたものと同じだった。

坂内

「まずは落ち着きましょう。肩に力が入り過ぎです。」

長谷部

「…ああ。」

一言呟くと長谷部は左肩を回した。

坂内

「とりあえず落ち着きましょう。まだ同点です。切り替えて攻めましょう。」

この時坂内は気づかなかった。

いや、気づかなくてはならなかった。

長谷部の気持ちに。

見え見えのバント戦術に良いように攻められ、拳句の果てには1年生、それも軟式上がりの投手に撃たれた心境を察しなくては行けなかった。

観察眼の鋭い坂内が長谷部の動揺を気付けなかった訳。

——それは、長谷部の3年間の意地プライドだった。

まだ2年生にして、扇の要を務めている坂内に気を遣わせたくないという想いもあった。

だからこそ、長谷部は孤独の道に挑んだ。
まだ先程のホームランの整理は付いていない。
それでも長谷部は左腕を振るう。
ファール2本で追い込んで、1球外に外す。
最後は決めている。
自身の決め球であるスクリューと。

——が

先程の疲労は確実に身体に溜まっており、左腕の振りは鈍くなつた。

結果——

『ワアアアアア!!』

無情にも打球はライトスタンドへと消えて行った。

*

『両校、礼っ!!』

「ありがとうございます!!」

試合は3—1と親切の敗北となった。

星英の核弾頭であり、主将の大軒さんに長谷部はスクリューを捉えられ、そこで交代。

代わった亮も2番は抑えるが、3番の桐乃さんに安打を許し、4番の新谷さんに、左中間フェンス直撃のタイムリースリーベースを打たれてしまう。

一方攻撃はというと、リリーフしてきた翔馬に手も足も出さず6者連続三振という快刀乱麻な投球に切り取られてしまった。

仲間^{チーム}が敗れる瞬間を僕はスタンドという近いようで遠い場所から傍観することしか出来なかった。

これが今の僕と翔馬の差。

努力しなければ埋まることのないこの距離。

この悔しさを胸に、僕は向上することを誓うのであった。

第8話 新チーム発足

星英戦の後日、飯占キャプテン達3年生は野球部を引退した。

飯占

「本日で俺達3年生は野球部を引退する。それで次のキャプテン何だが、坂内！お前に任せたいと思う。それと副キャプテンとして基宗！それと寺河を推薦したいと思う。坂内は主軸と投手陣の纏め、それとチームを引っ張って貰うことになるからな。掛かる負担も大きいだろう。基宗達を中心に、しっかりとフォローしてやってくれ。」

はいっ！と僕は返事をする。

飯占

「引退と言っても、大学のセレクションや社会人野球、一応俺はプロを目指してるからな、身体を鈍らせないように顔は出すからな。」

坂内先輩が新キャプテンとしての抱負を述べ、坂内さんをキャプテンとした新チームが始動した。

長谷部

「寺河ちよつといいか。」

寺河

「あ、はい。大丈夫です。」

長谷部

「この前の試合はほんと濟まなかった。一人で乱れて挙句の果てにチームを敗北させたからな。…寺河。これからもお前はエースを張るだろうけど、要らないエゴは捨てろよ。間違ったプライドは滑稽なだけだからな…まあ、俺が言えることじゃないけどな。呼び止めて濟まなかったな。哀れな先輩の戯言だと思って聞き流しといてくれ。」

寺河

「いえ、ほんとそう思いますよ。だから俺は捕手のサインには首を振らないんです。一人じゃ勝てないから。」

長谷部

(…やっぱごいつには適わないな。)

長谷部もまた今日で親切のユニフォームを脱ぐ。

エゴを捨て

た彼はまだ成長するだろう。

*side乾

俺は今、モツプを片手に持ち、廊下にぶちまけられたワックスの掃除をしている。

何故こうなつたかと言うと、話せば長くなるのだが話そうと思う。

話は少し遡る。

「だあ、面倒くさいな。無駄に飛ばしやがって、と言うか早くネットの穴を修繕しろよ。」

俺は不平を漏らしながら先輩、飯占キャプテンが飛ばした打球を拾いに森に向かっている。

外野ネットは高く普段は森に行くようなことは無いのだがたまにこういう事があるのだ。今回の場合はネットに空いていた穴が原因だ。

勢いよく転がり、穴を通過したボールはめでたく森に消えていきましたとき、はあ、ほんと面倒くさい。

ボールを探して森に入ると視界の中にボールが飛び込んできた。「とりあえずあつて良かった。さて拾って帰るか。」

ボールを拾い、グラウンドの方角を振り向いた瞬間

「あわわわわっ、助けてです！」
「え？」

俺が不意を突かれ上げた素っ頓狂な声は頭上からの襲撃により無かったことになった。

咄嗟に、俗に言うお姫様抱っこの姿勢に入り受け止める体制を作る。

―が、体制が悪かった点、想定外の衝撃により耐え切れず地面に倒れ込む。

「あいたたた、うっかり足を滑らしてしまいました。」

薄目を開けると同時に鈍痛が身体を襲う。受身が取れなかった為、強かに打ち付けた様だ。

「怪我はないか？」

俺の声に反応し、緑髪の少女がこちらを振り向く。

「あ、はい、傷一つありませんーあー！すみません！助けて頂きありがとうございます！」

緑髪の少女は俺の身体の上からサツと飛びのき、頭を下げる。

「いや、それなら良かった。」

ゆっくり身体を起こし、両手でユニフォームについた土を落とす。

「あ、これ。」

緑髪の少女は傍に転がっていた硬球を拾い上げ俺に手渡してくれた。

「ありがとな。つとまだ自己紹介をして無かったな。俺は乾。乾勝利だ。勝利とかいて、勝利まさな。見ての通り野球部さ。」

「私は高科奈桜をと言います。ナオつと気楽に呼んで下さいね。」

「ああ、よろしくな。俺のことも好きな呼び方でいいぞ。」

「はい、わかりました。勝つくん。」

「え、今なんて言った？」

「え、ですから勝しょうくんと言ったのです。」

俺は暫し呆然とした。

「え、えつと何で勝くん？」

「乾君の下の名前は勝利ですよ。その勝を音読みして勝くんです。」
なるほど、と思わず頷いてしまう。

「まあ、ナオが呼び易いのならそれでいいぞ。」

俺はポリポリと頭を掻きながらいう。

呼び名なんて、そんなに深いものじゃないしな。

「ん？そっういえば何でナオは木の上何かに居たんだ？」

その質問をした瞬間、明らかにナオが動揺した。

「え、えつとですね。そう！鳥を観察していたんです！」

「鳥を観察していた？」

「はい！所謂バードウォッチングです！」

「へえ、なるほど。鳥を観察ね。そう言えば先週の昼休みも森に居なかつたか？」

「え、何故ですか？」

「いや、屋上で因数分解について、一人で不平を零していたら緑髪が見

えたからさ。」

何かしてたのか？と付け足す。

「い、いや、別に何もしてないですよ。今日と同じバードウォッチングです！」

「へえー、ナオは鳥を観察するのが好きなのか。」

「ええ。まあ、そんな感じですよ。」

(隠密術の練習をしたなんて、口が裂けても言えないですね。)

「え、何か言ったか？」

「い、いえ何も言ってます！」

「そ、そうか、それなら良いんだけど。」

「あ、勝くん。そろそろ練習に戻らないと不味いのでは？」

あつ、と思わず声を出す。

「そうだな。そろそろ戻るわ。じゃあ、またなナオ。」

「ええ、本当に有難うございました。」

俺はナオに手を振って、その場を後にした。

帰ったら飯占キャプテンに遅いと怒られてしまった。 解せぬ。

「あ、そう言えば何であいつはあんな所に居たんだ？鳥くらいならこんな場所まで来なくとも居るだろうに。」

ナオと別れた今では真偽を知る術はない。

高科奈桜か、面白いやつだ。 さてと、練習に――

∴湿布貼ってからにしよう。

ナオと会うのには日はそんなに経たなかった。

あれから1週間後、暇つぶしに森を散策していると古い校舎を見つけた。 恐らく旧校舎と言ったところだ。

地面が抜かるんで居たので少し慎重に成りながら校舎の周りを歩く。

「あれ、ここだけ真新しい。」

裏側に回ると、明らかに不自然。 壁の一部だけが綺麗に塗装されていた。

「ドアもあるし、もしかして外に出られるのか？」

ドアノブを手にとろうとしたその時、

「ふう、疲れたですよ。流石にこれだけの量を運ぶのはナオっち一人では骨が折れますね。」

と聞き覚えがある声でした。

ガチャツと音を立てて、ドアが扉が開く。

「ただいまですよ。」

「おかえり。」

「え？」

「え、な、何故勝くんがこんな場所ところに！」

「それは俺もお前に言いたいよ。まずその荷物は何だ。」

……と沈黙が流れる。

「こ、これはですね…お菓子です。」

お、あつさり口を割ったな。

「ふうん、まあ、俺は監督生じゃないし、取り締まるつもりは無いが、幾つか質問させてくれ。」

「まず何で外出出来るんだ！この扉は何なんだ！一体どうなっている！」

「あー、えつとですね。不思議ですが扉は新しいままそこにかけてありました。だからナオっちが設置したんです。因みに鍵は自分で作りました。工作が上手だなナオと褒めてもいいんですよ。自慢ですけど、技術は5でした。」

「あ、そうか。うん、凄いな。」

「あれ？思ってたより反応が薄いですね。」

「え、ああ、まあな。じゃあ2つ目だ。何でお前はこんな所に居る。と言うか金はどうしてるんだよ。帰省のバス代とかは金庫に保存されてるはずなのに。」

「ふふん、ナオっちを舐めないでくださいよ。いいですかー」

そこから15分弱ナオは話し続けた。大まかに言うとうやうやらナオは友好関係をより良くする為に頑張っているらしい。その一貫で「新聞部」もやっているみたいだ。この学校は文化部が無いの

で、自称って点が有るけど。それと俺はどうやら面倒くさい奴に關わってしまつたらしい。

「さ、勝くん撮りますよー。」

カシャッとカメラのシャッター音が鳴り、ナオがニコツと微笑む。いや、キュピーン！と目を光らせていた。

その笑みに気づいたのはナオと別れてから、つまり今日だった。

廊下を歩いていると、ふと目に緑髪が目に入った。ナオだった。

「あ、勝くんこんにちはです。」

「あ、おう。」

何かおかしい。物凄く違和感を感じる…

あ…

「おいナオ！何でお前ここにいるんだよ！」

そう。違和感の正体はそれだった。

本来なら男女が完全に分離されているこの学校。

一般的に男子校舎と呼ばれるこの棟にナオが居るのはおかしいのだ。

そしてその理由も下らないことだった。

「つたく、お前は…」

その時だった。

「むっ。その女子生徒！すぐさまこちらにこい！」

大河内先生に見つかったのは。

「あ。ヤバイですね。逃げましょう！勝くん！」

「え？」

声を出すや否や、俺は制服の襟を捕まれ無理矢理引つ張られていく。

「ちよ、ナオ、首が締まる！」

一体どこにこんな力が有るのやら。

「おい、そこのお前！早く止まれ！」

「あはは、止まれと言われて止まる乾じゃないですよ！」

「ちよ、何で名前出すの?!」

ふとナオが足を止めた。急に止めたもんだからこっちは加速が付いている。ぐえつ、と思いい切り首が締まった。

「あー、ありましたよ。これで対応しましょう！」

そう言つてナオは白い液体を撒き散らし始めた。

伝家の宝刀——ワックスである。

「さ、逃げますよ！」

「え、俺も?」

「当たり前です。それとも—あの時の写真をばらまかれますか?」キュピーン

「やめてください！」

後ろを振り向くや否や、全力でダツシユする。
が、

「あ……」

何故か後方にもばらまかれていたワックスを踏んだ俺は——盛
大に廊下にスライディングした。

「あ、ごめんなさいでーすー！」

謝っている素振りを見せるものの、ナオの足は止まらない。すば
しっこいやつだ。

「さて、乾。後片付けをして貰おうか。」

後ろを振り向くと、大河内先生の姿があった。

あ、所々濡れている。 ……先生も転けたのか。

そんな訳で今に至る。

とりあえず廊下に撒かれたワックスは勿体無いので、そのままワッ
クス掛けをしている。 丁度掃除も終わった後だしな。

でもそれより……このワックス塗れの制服をどうにかしたいな。

*side本庄

何時もの様に森林浴をしていた。

少し言い方に語弊があるな。 これは森林浴なんて大それた物

じゃない。ただ気の向くままに森を歩いているだけなのだから。

それにも…

「不味いな、迷ったぞ。」

不覚。いつもと違うルートにしたらまさか迷ってしまったなんて…ドーベルマンを避け、人目を避けていたら完全に日が暮れてしまった。

顎に手を当て思考を巡らせる。

とりあえず来た道に戻ろうか。いや、暗すぎてよくわからないな。まあ、いい。とりあえず一步を——踏み出した瞬間、俺は何かにつつかった。

「うっ…」

ん、人の声だ。それも女子の——

「す、すみません。あのお怪我は、」

衝撃で振らけている女性を受け止める。

「あ、ああ。大丈夫だ。済まない私の不注意だった。」

「いや、俺も見えてなかったからおあいこ様だよ。」

雲の切れ目から灯された月明かりが俺達を照らす。

(すっごく綺麗な子だ…)

月明かりに映された彼女は神々しさを感ずるほどに美しかった。

「あの、名前を伺っても良いかな。」

「ん、ああ、別に構わない。天月五十鈴。1年だ。」

「俺は本庄翔。君と同じ1年だ。部活は野球部に入ってる。…天月さんは何部？」

「私は陸上部だ。一応推薦で入って来たからな。」

「へえ、短距離？」

「うん、よく分かったな。」

「はは、たまたまだよ。」

俺が言い終わると同時に誰かがやって来た。

天月さんは俺を茂みの奥に押すと凜とした表情を作った。

「誰がそこにいますの？」

「私です、天月です。」

現れたのは女の先生。一目見ただけで分かる。ガミガミと説教するタイプの人間だと。俺の予想は当たり、話は30分にも及んだ。怒り疲れたのか、女先生は帰って行った。

「もう出てきても大丈夫。」

その言葉に俺は茂みを越えて、先程まで先生が居た場所に向かう。

「ごめん。俺だけ隠れて。」

「気にしなくていい。いつものことだから。それより君が出てきた方が余計にややこしくなる。」

「あー、違うじゃないね。あの先生なら…」

「それと気になっていたのだが、本庄、お前はと言う目的でこの森を歩いていったんだ？」

「ただ気が向くままに歩いていただけだよ。森を歩くのは好きなんだ。」

「なるほど。しかし余り深入りするのは得策とは言えないな。先程の様子なことにもなるし、ドーベルマンに見つかりかねないからな。」

「それもそうだね。あ、そろそろ戻らないと。それじゃ。」

「ああ。こんな学校だからもう会うことは無いと思うが。」

天月さんに手を振りながら、俺は寮へと急いだ。

因みに着いたら8時半だった。危ない危ない。

天月五十鈴さんか、それにしても可愛い子だったな。

第9話 ヒモとメイドとダメ人間

「明日から2週間冬休みに入る。実家に帰る組は早めに準備しておけよ。申請が遅れると面倒くさいからな。あと宿題だけはしっかりやってくるように。分かってるな、乾、越後。」

ジト目で大河内先生は勝利と越後を見る。

しかし当の本人たちは意識はここにはない。

絶賛夢の中だ。

「…はあ、まあいい。他のみんなも忘れるなよ。提出物は評定に意外と響くからな。それでは今日はここまで。各自有意義な長期休暇を過ごしてくれ。」

言い終わると大河内先生は退出して行った。

ふむ、明日から冬休みか。

流石に野球部も正月は部活が無いみたいだな。

「湊叶、今年の正月はどうするんだ？」

頬杖をついていると、後ろから亮に話しかけられる。

「ん、ああ。あそこに顔を出そうと思っているよ。久しぶりに瀬納さんの入れたコーヒーが飲みたいし。」

「いや、お前コーヒー飲めないだろ。」

う、ちよつとかっこつけたけどだいぶ恥ずかしい。 ビシツと亮に返されてしまった。

「と、とりあえずハムサンド食べに行ってくるよ。亮は？」

「俺か？父さんが帰ってくるだろうし、久しぶりに家族と会えるからな。翔太と朋恵を遊んでやらないと。」

やばい、漢前すぎるぞ亮君よ。

高校に入って、早くも9ヶ月が過ぎようとしている。

今年が初めてとなる「過酷な夏休み」、秋季大会予選が過ぎ、と季節は冬に移っていた。

秋季大会は準決勝で星英高校にまたしても敗北してしまい、苦渋を味わった。

試合的には3―2と接戦だが最終回に逆転負けを喫する等と課題はまだ多い。

一応背番号14としてベンチ入りはしたものの、打撃結果は4の0。守備固めとしての起用とはいえちよつとこれでは来年のレギュラー争いには食い込めないかも知れない。

坂内さんと一緒に独自の練習メニューを考えている基宗さんも、「何気」に打つし…

と、何気は失礼だね。

でも、重しを着けた状態で自治会が管理しているドーベルマンから逃走しろとか言ってくるし、テニスボールの捕球と打撃を瞬時に見分けて行えとか言ってくるし、練習中に呼ばれてヘッドホンを被せて「俺は野球が上手い」とか流してくるし…

うん、これくらいなら神様も許してくれるだろう。ささやかな報復として、見逃してくれるはずだ——と思う。

寮に戻ると先輩達が丁度退出していくところだった。

一言言葉を交わし、先輩達を見送る。

少し広くなった部屋を少し見てから、僕らは各自の荷物を纏めた。

「さてと、そろそろ行くか。」

「うん。」

既に先輩達2人が退出している部屋を1度だけ振り返り、共に言葉を発する。

この冬休み、僕らは一皮剥けて、またここに戻ってくるんだ。

目指す場所は——遠前町。

*

『次は遠前町。お降りの方は忘れ物にご注意下さい。』

車掌さんの声のお陰で意識が身体戻ってくる。

実家に帰って、翔馬と少し話し、両親に自分の今を伝え、ここにやって来た。

バス代を払って下車する。

行き先は決まっている、久しぶりのここの風景を見ながら向かう。

歩き初めて15分。

目的地に到着した。

どうしよう、久しぶりに来てみたら緊張してドアノブが握れない。

ああ、9回裏の守備の時より緊張するぞ。

(大丈夫、大丈夫だ。だから落ち着け。)

扉の前で深呼吸を繰り返していると——カランコロン——と吊り下げベルが音を立て、扉が開いた。

「あつ…」

「いらつしやいませ。ご主人様♡…つと、これはこれは珍しいお客様ですね。」

ふう、と一息付き

「お久しぶりです、准さん。」

頬を掻きながらそう言った。

「うん、ほんとに久しぶり。湊叶君が高校に入る前だから半年以上経ってるね。」

「はい、時間が経つのは早いですよ。」

「特に君たち高校球児は早いだろうね。立ち話も何だし、入って入って。」

准さんに通され、久しぶりに喫茶店に入る。

中に入ると珈琲の何とも言えない、不思議な気持ちになれる香りがあった。

「だいぶ緊張が取れたみたいだね。」

「この珈琲の香りのお陰ですよ。」

准さんが、久しぶりに会った准さんが柔らかく接してくれたからなんて言えない、口が裂けても絶対言わない。言ったらどうなるか目に見えてるからね。

「そっかそっか、いやあ、珈琲も飲めない子供が大人なことを言うようになったね。」

「…あの、それほんと恥ずかしいんで、それに声大きいです。」

このようなことで、この始末なのだ。耐性が無い僕じゃ太刀打ちが出来ないのは目に見えてる。

「やあやあ湊叶君、久しぶりだね。」

「あ、世納さんお久しぶりです。」

准さんと話していると、こここのマスターである世能さんが厨房から出てきたので挨拶をする。

「どうだい、高校生活は？」

「そうですね、楽しいですよ。充実しています。高校野球にはロマンが溢れてますから！」

「…ロマンか、いい言葉だ。君の生活が充実しているならそれでいいんだ。でも軌道に乗ったからといって、あの時みたいに無茶を重ねたら…どうなるかわかってるよね？」

瀬能さんは、先程迄の穏やかな表情から一転して厳しい顔つきになった。

「はい、わかってますよ。もう…無理はしないです。」

そう言って、僕は自身の右肩を抑える。

中学1年の時、速球投手に成りたかった僕は速球を追い求めてどんどん崩れて行っていた。

下へ、下へとフォームの崩れが更に球速落とし、僕の精神を壊していったんだ。

「うん。それならいいんだ。君はもう自分独りでは無いんだ。他の人達が見えなくても、私達は君の、湊叶君の味方だからね。」

ニコツと人の良い笑顔を瀬能さんは浮かべる。

やっぱりこの人は僕の「第2の父親」だ。感謝してもしきれな

いな。

「あつ。」

「?どしたの湊叶君。」

「そう言えば維織さんが居ないと思って。」

「ああ、維織さんなら自宅に居ると思うから今から行ってみると良いんじゃないかな。」

「えっと、今からですか?」

「そうだよ。ねっ、マスター?」

「え、ああ、うん。私もその方がいいと思うよ。」

「そうですか、それじゃ、失礼しますね。」

2人に礼をしてから、僕は維織の家に向かった。

「ところで准君。」

「何でしょうマスター?」

「湊叶君にあのことを教えていないけど、良かったのかな?」

「ふふ、間違いなく湊叶君はパニックになるでしょうね。」

「全く君という人は。」

「でも、そういうマスターもニヤついていますよ?」

「あはは、これは1本取られてしまったね。」

*

喫茶店から20分くらい歩くと、見慣れた小さな家が目に入ってくる。

(全く、仮にも社長令嬢が住むような家じゃないよね。変な言い方だけど。)

その家の家主は野崎維織。

ある会社の社長令嬢だ。

ピンポーン とチャイム音がし、扉が開く。

「どちら様ですか?」

中から出てきたのはテンガロンハットをかぶり、無精髭を生やし、茶色いコートを来た男性だった。

(そうそう、こういう人の方がどちらかと言うと合ってる気がするのに…それも少し違うか、どちらかと言うと河原のテント生活の方が

…)

そこまで考えて僕は1度思考を止めた。

「何で維織さんの家に不信感丸出しの男性が…イオリサンガ、イナアーイ!!」

「え、ちよ、お、落ち着いて。」

僕が落ち着いたところで、リビングに案内され男性が自己紹介を始める。

「えっと、まずは名前から話そうか。俺の名前は朴木ほおのき 仁じん。風来坊さ。」

「見ればわかりますよ。」

「…えっと、何か聞きたいことある?」

「維織さんとういう関係ですか?その服装は何ですか?まず身嗜みが整ってないって時点でおかしいんですよ!仮にも成人してるんですよ、しっかりしないと!」

「は、はい。」

あれ、目の前の風来坊さん、もとい朴木さんが目を白黒させている。

「あ、すみません、勝手に盛り上がっちゃって。続けて下さい。」

「ん。そうだな維織さんとの関係は…」

「主従関係ですか?」

「え、いや!それは違うよ!えっと、まず俺がこの家に住まわせて貰うことになった経緯を話すとするよ。」

それから朴木さんは細かく説明をしてくれた。

自分が各地を旅している旅ガラスで、その旅の途中でここに立ち寄ったこと。

商店街の野球チーム “ブギウギビクトリーズ” に助っ人として入っていること。

空腹で街を彷徨っていた時、喫茶店の前を通り黒板に書かれていた “店長新作コーヒー” を目当てに入ったらメイドコスの准さんに絞られたこと。

准さんの威圧に耐えれずハムサンドを注文してしまい、無銭飲食をしそうな所を維織さんに助けて貰ったこと。

次の日にまた訪れ、新作コーヒーを飲んでいたところ、また維織さんに奢ってもらったこと。

それを聞いた時思わず、「ヒモだな」と零してしまったけど仕方ないことだ。 朴木さんはショックを受けてたけど。

その次の日もまた新作コーヒー目当てで喫茶店に行ったところ、准さんから維織さんの行為を伝えて貰ったこと。

確かにそんな感じがしたよ。全てにめんどくさそうで、全てから目を背けている気がしたよ。」

准さんの「維織さんに大してどういう印象を持った？」という質問に朴木さんはこう答えたらしい。

「無銭飲食をしでかすヒモでも観察眼は鋭いのか…」

「え？何か言った？」

「いえ！何も！」

危ない危ない。 何故か朴木さんの前だと心で思ったことが口から漏れるんだよね、何でだろう…。

それから数日後に維織さんと会って、喫茶店で話をするようになったらしい。

7月中旬に行われた「コアラーズ」というチームと対戦し、見事勝利を収めた。

「試合が終わって河川敷に向かった。のんびり歩いていると、ふと河川敷から煙が上がっていたんだ。急いで駆けたよ。それはもう全力で。試合の疲れなんか感じなかった。ただ、早く確認したかったから。」

朴木さんの言葉に熱が籠っている。 それだけ朴木さんにとって、重要なことみたいだ。 だいたい予想はついてるけど。

「それが確認出来るところまで行って、俺は目を疑ったよ。信じたく無かった、俺の「友」がこんなところで終わるわけがないと踏んでいたから。」

『び、ピンポイント落雷？人の家キャンプファイヤー？温暖化現象かああああ！』

「く、友よ、お前のことは忘れないからな。」

大方分かってたけど、びつくりだな。ピンポイント落雷って流行りそう。

「俺が心の叫びを上げていると後ろから『違う、人のテントキャンプファイヤー。』って冷静に突っ込まれたよ、維織さんにね。」

「え、もしかして火をつけたのって…」

「うん、維織さんだよ。『…ごめん、完全には消し去ることが出来なかった。』って言われたし。」

『何でいつも通り冷静なの!?たまにはそのポーカーフェイスを崩そうよ!』

「あの時はほんとに信じられ無かったな。あの維織さんがあんなことをするなんて思ってもみなかったから。」

僕は反応出来ずにいた。あの維織さんがそんな大胆な行動に出るなんて。

だいたい理由は解るけど。

「維織さんに理由を尋ねたらこの家の鍵を渡されたよ。私の側に居て、支えて欲しいってね。」

やっぱりか。話的内容的にそう思える点は幾つもあった。准さんに嫉妬してるって点でピーンって来てたけど。

今日の僕冴えてる。

そう言えば准さんは朴木さんのことを知っていた。なのに何で教えてくれなかったんだ？

「決まってるじゃない。面白いからよ。」

「え、あ、准さん、と、維織さんも。」

「うん。久しぶり。」

「ああ、帰ってきたのか。おかえり維織さん。」

「うん。ただいま。」

維織さんと准さんが持っていた袋を朴木さんが受け取り奥のキツチンへと向かう。なるほど、お昼の準備か。

「どうだった湊叶君。」

「どうだって、朴木さんですか?」

相変わらずのメイド服で、営業スマイルで准さんが聞いてくる。

「それはもうびつくりしましたね。4月にここに来たとのことですからまるで僕と入れ替わりみたいですね。」

「あ、ほんとだね。あの人ほんと凄惨な生活してたんだよ。お金持っていないからマスターの無料コーヒー飲みに来て帰ろうとするくらい。」

「あ、さつき言っていましたね。」

「お、偉い偉いちゃんと言ってるんだね。じゃあカブトム——」

「おい准！それは言わなくて良いだろう！」

「はいはい。あんまり怒ると午後の練習に差し支えるよ。」

「そこまでやわな身体じゃない！」

「…朴木君、落ち着いて。」

*

朴木さんが作ってくれたのはカレー。2人と話していたので特に待つことも無く、直ぐに料理が出てきた。

カレーを食べ終えこれからどうしようかなと思っていると

「湊叶君。」

朴木さんに呼ばれた。

「あ、はい。どうしました？」

「これからビクトリーズで練習が有るんだけど湊叶君も来ないか？」

「え、僕も良いんですか？」

「うん。大丈夫だと思うよ。みんな顔見知りだろうし。」

——練習場——

「…えっと、これホントにブギウギビクトリーズですか？」

「うん、そうだよ。…何人かおかしいけど。」

おかしい。その言葉通り変わった人たちがそこでは野球をしていた。

ピエロ、根暗、水着男、コック、カニ、目つき悪い人、寒いのに扇子をパタパタしてる人、鎧…

「こうして見ると、朴木さんが霞みますね。」

「待って、俺はここまで酷く無いよ？」

「ん…」

「…おい。」

「ん？お前もしかして湊叶か？」

声を掛けられ、振り向くとそこには顔なじみの人々が居た。

「権田さんに木川さん！並木さんに青島さんも！」

「久しぶりだな。どうだ高校野球は？」

「はい、それなりに充実してます。」

そうか。と権田さんは笑みを浮かべる。

「朴木、始めようか。」

「ああ。」

朴木さんはコートを脱ぎ、ストレッチを始め、ランニングに行ってしまった。

権田さんに聞くと近々『負けられない試合』が有るらしい。

その対策を今からするとの事だ。

「終わったよ。さ、始めようか。」

帽子を被り直し、右肩を回しながら朴木さんはマウンドに向かった。

朴木さんは右利き^{オールドソックス}。ノーwindアップモーションからボールが放たれた。

非の打ち所がない綺麗なフォームから糸を引くような直球が投げられる。

力強さと靱やかさを併せもつ朴木さん。

変化球も幾つかあり、球速は僕よりも数段上だが、先程の投球を見る限りタイプは似ている。

球威がある分ゴリ押し所の所も有るけどコーナーを丁寧につき、緩急で凡打の山を築いていく。

これだ。僕の理想の投手像はこの人が体現している。

「ふう、疲れた。冬場でも汗かくな。」

パワビタ——恐らく維織さんが購入した物——を飲み干し、朴木さんが伸びをする。

ビクトリーズのスタメン全員に1人三打席で投げ、浴びたヒットは僅かに3本。

「我が女神と仲良くするなんて：許せん朴木イ！キイイイイ

ボオオオオドオオオオ！」

カキーン！

自身も電子炎斬と名乗る人から三打席連続で安打し、その内の1本はスタンドインさせた。

「電子よ。あれは女神じゃない。魔女だ。」

「何か言った朴木さん？♡」

「ナニモイッテマセン。」

凄いい、この人は次元が違う。それこそプロ野球のトップクラスに入るくらいあさぬまの浅沼こうた 幸太選手、折笠おりかき 功選手、最近台頭してきた藤堂とうどう 大和選手や宮郷みやさと 恭選手と同じ様なレベルだ。

浅沼選手は日の出島出身の選手でプロ10年目の今年、打率・392とプロ野球最高打率を更新した。4年連続で200本安打も達成している好打者だ。折笠選手は大神モグラーズ時代にドラフト下位指名で入団し、努力で1軍を勝ち取った苦労人である努力家だ。

先発投手、中継ぎ投手、抑え投手と全適性を持つ投手だ。

藤堂さんと宮郷さんの2人も大神ホッパーズで、3年目の選手である同期だが、既に球界トップクラスの投手と打者として脚光を浴びている。

今年の日本シリーズでMAX160km/hの直球と150km/h前半で落ちるスプリットを武器に2勝を上げ、1ホームランと大活躍し優勝に貢献した藤堂さん。

24打数16安打と打ちまくり、5ホームランの活躍を見せた宮郷さん。

今年“覚醒”を見せた2人がいる大神ホッパーズは来年も恐らく強いだろう。頼れるエースと主砲が居るといことはそういうことだ。

遅咲きの天才として、何時でもプロ入りすることが出来るであろう朴木さん。

あくまで練習を見ただけだけど、この人は凄いと断言出来る。

ヒモで、情けない1面を持っていた朴木さんだけど、マウンドに居る時は違う人のように見えた。

髭も沿ってあるし、凛々しく見えた。これがあの「冴えない人が活躍すると見る目が変わる」みたいなやつだね。

「朴木さん。」

「ん？どうした湊叶君。」

——この人に、野球を教えてもらいたい。

「急な事ですみません。僕に、野球を教えてくれませんか？」

*

曇りの無い、真剣な眼差しでこちらを見てくる。

「教えるって、あまり教えられることは無いよ？申し訳ないけど。」

「いえ、あの教えるというか、その、朴木さんのスタイルに成りたいんです。あくまでも現時点での僕のイメージが貴方ですから。」

目の前の少年、天道湊叶は自らの過去、そして現在いまを教えてくれた。

「なるほど、速球投手か。」

話を聞き、マウンドから投げさせてみたところ球速はだいたい120後半という所だろうか。

「うん。悪くない。でも、速球投手としてはこの球じゃ無理だ。」

少年は厳しい顔つきになり、顔を落として足場を慣らす。

確かに150km/hを超える速球は投げることが出来ないかもしれない。

でも、「錯覚」させることは出来る。

「回転数を上げるんだ。」

ピュツとボールを回転させながら回転について話す。

「回転があれば有るほどボールは伸びてくるように感じる。さつき受けた感じだと湊叶君の制球力は悪くない。いや、寧ろ針の穴を通すといったレベルと言ってもいい。回転数を上げるのには指先の感覚を鍛えるなど幾つか方法が有るけど俺はその中でも「スナツプ」を鍛えることを勧める。今はショートをやっているんだろ。体勢が厳しい時にスナツプスローで刺せる時がある。そういう点も踏まえ、スナツプ強化には利点があるんだ。」

ゼスチャーを交えながら説明していく。

「後は「緩急」で抑えるって感じかな。ノビのあるストレートの次に

チエンジアップが来たら頭がない場合はまず打てない。考えていても当てるのが精一杯だ。これはさつき俺が証明して見せただろ？」
コクつと、少年は頷く。　そうか、ちゃんどここまでは考えていたのか。

でも、何を言われるか分からない恐怖で行動出来ずに居たんだ。
野球センスの塊で有るが、身体が出来て無い為不本意な結果になつてしまい、結果シヨートという位置に着いた。

でも、野球センスが抜群だから直ぐに慣れて定着してしまった。
心の中で投手としてもう一度マウンドに立ちたいという思いも合つたはずだ。　それをこの少年——湊叶君は必死に耐え、必死に努力し、筋力も付け直して結果最後の大会までシニア時代無失策を達成したんだろう。

投手用の筋肉と、打者用の筋肉は全然違う。

それを1から付け直し、湊叶君は頑張っているんだ。
それを知ってしまったら、その想いに応えないとな。

「湊叶君。俺はもう直ぐこの街をでると思う。だから、それまでの間君が大丈夫なら俺は自分の技術を君に伝えるよ。」

「はい、ありがとうございますー」

試合まであと1週間。　これが最後の戦いだ。

俺も覚悟を決めなければいけない。　維織さん、君はどっちを選ぶんだ？

——1週間後

俺達は無事〃命運をかけた最後の試合〃に勝ち、商店街は大いに賑わった。

そして——俺も旅立ちの時だ。

湊叶には伝えることは伝えた。　後は自分自身の問題だ。　投手と遊撃手という二刀流は難しいが、湊叶あいつなら大丈夫だ。　必ず壁を乗り越えて、羽ばたいてくれる筈だ。

「じゃあ行こうか、維織さん。」

「うん……どこまでも。」

バスに乗り、最寄りの駅に向かう。

適当に切符を買い、電車に乗り込む。

右手に見える車窓の景色が目まぐるしく変わっていく。

だけど左手に見える景色だけは変わらない。

2人を縛る見えない鎖。

断ち切ることも離すことも出来ない。

だけど俺はそれをどこまでも運んでいく。

維織に世界を見せるため。

維織、君が本当に笑える日が来るまで俺がお前を守ってやる。

いつまでも、ずっとずっとだ。

湊叶、俺は維織と一緒に君を見守るよ。 忘れるな、君は独りじゃないんだ。

*

朴木さんと維織さんは行ってしまった。

次に2人と会う時に、今のままではいけない。

必ず成長した姿をあの2人に、いや、遠前町のお世話になった方々に見せるんだ。

『少し前の話になるんだけどね、何年か前にある高校に行ったことが有るんだ。その高校は絶対的な力を持つものと、実力はまだまだだが、不屈の魂を持つものが居たんだ。初めはボコボコにされていた。力の差が歴然もしていたからね。でも彼らは諦めなかった。個人個人が自分を見つめ直して、1人を中心とし、着実に成長していった。そして、遂にその成長は絶対的な力を捉えたんだ。結果は彼らの勝利。『諦めてはいけない』ということをも身をもって知らされたよ。』

諦めてはいけない。

この冬休み、僕が確実に成長出来たと思う為にも、今は練習有るのみだ。

2学年編

第10話 ウキウキ春らんまん

年が明けてから数ヶ月。

僕達にとつて2度目の春が訪れた。

寮の部屋替えも有り、クラス替えの為に教室に向かっている。

因みに今回も亮と同室だ。あと一人は1年生の予定何だけどもだどんな子かわからないんだよね。生意気じゃなかったらいいんだけど。

教室に着くと丁度大河内先生が入ってきた。

大河内

「皆おはよう。君たちがここにきてから1年が経つがここで重大な発表がある」

湊叶

「発表か、一体何だろう」

亮

「ふっ、購買の商品半額化とかだと良いんだがな」

湊叶

「それは無いと思うけど…」

大河内

「コホン…今年からこの学校は晴れて共学になる。詰まり、男女が同じクラスになるんだ」

何だと！つとといった声がクラスから上がる。

僕はあるまり関心が無いけど他の男子にとつては大きいのかな、荷田君なんかはガッツポーズを繰り返してるし。

大河内

「2年生のクラスは外に掲示してある。各自確認して向かってくれ。では解散。」

ふわあと欠伸をしている勝利達も動き始めた為僕らも移動をする。

クラス表を見た結果…

湊叶

「あれ、また大河内先生だ」

亮

「俺も同じだ。と言うかクラスを半分に分けたような感じじゃないか」

「そうだねっと言ってからクラスを見渡す。確かにクラスの左半分を埋めている男子を見ると全員知った顔だ。」

荷田

「ここに女子が来るでやんす！一度は諦めた春がここにやってくるでやんす！」

翔

「…五月蠅い荷田」

大河内先生が教卓に立ち、声をかける。

大河内

「さあ、今から女子が入るからな」

荷田

「ワクワクでやんす〜！」

湊叶

「荷田君五月蠅い…」

まず最初に入ってきたのはとても大きな女子生徒だった。

勝利

「うわ、デカイでやんす！オイラより頭一個分は大きいでやんすよ！」

荷田

「オイラの口調を真似るなでやんす！」

亮

「…確かに大きいな」

「あ…ど、どうも。えっと、大江です」

目測で大体190近くありそうな空色の髪をした女子生徒の名前は大江と言っらしい。

荷田

「何でやんすか、あの電柱女は？」

宗太

(…電柱女何て、失礼なやつだな)

信弥

「…190近くあるな。まあ、目測やけど。」

女子が入り始め、クラスがざわつき始める。

僕も何となく周りと話していると、聞き覚えのある声が出た。

声の方向を見ると、そこには

——神条紫杏の姿があった。

紫杏

「神条紫杏だ。男子諸君宜しくな。」

赤毛よりのポニーテールの少女。

男勝りな強気な目に加えて、特徴的な白の制服。

僕の目は神条を捉え続けていた。

神条が席に向かう途中で目が合った。

僕が見続けていたから自然とあったのかもしれない。

こちらを見、神条は軽く微笑んだ。

その笑顔を見、僕は顔を逸らしてしまった。

顔が一瞬熱くなった気がしたけどあれは何だったんだろう。

僕はもやもやとしているが、自己紹介は進んでいく。

「あたしの名前は高科奈桜です！何か面白い話やネタがあったら教えてください！お願いしますよ！」

荷田

「何だか新聞部っぽい人でやんす。」

またまた個性的な人だな。あ、悪い意味じゃないよ、黄緑色の髪だって、綺麗だと思うし。

信弥

「お決まりとして、あいつに秘密がバレたら次の日には広まるパターンやなあ」

勝利（ん？奈桜も同じクラスなのか…これは1年間騒がしくなりそうだな）

「浜野朱理です。あたしは男が嫌いなので絶対に近寄らないでね」

あ、この間森で会った人だ。　　そうか、この人も同じクラスか。

荷田

「性格の悪そうな女でやんす。　：何だかオイラには永遠に春は来ない気がするでやんす」

浜野

「…」ギロリ

荷田

「

翔

(…ビビるくらいなら口に出さなかつたらいいのに)

五十鈴 「…天月五十鈴」

荷田「おおお！この娘はレベル高いでやんすよ！イイでやんす。共学最高でやんすよ！」

(　バシバシバシ　)

それにしてもこの学校はやたら校則があるのに頭髪は自由なのか。神条は赤毛よりの茶髪ポニーテール、さっきの大江さんは空色、高科さんは黄緑、浜野さんは茶髪、天月さんは紫色、亮のやつは金髪まるでどこかの超サ○ヤ人。勝利と越後らは坊主だけど、翔だって、さっぱりとしたエメラルドグリーン、宗太は赤髪で襟足が黒、信弥は蒼色だ。因みに僕は黒髪。こうして見ると皆日本人なのか疑いたくなる。と言っても、僕の目の色は水色なのでそこは触れてはいけなさんだろう。

その後男子の自己紹介も終わり、その日は解散となった。

女子にアピールする男子、逆にアピールしてくる女子、足早に教室を立ち去る者達。

因みに僕は立ち去る者に当てはまる。女子と話すのはあまり得意ではない。　必要な時とかは話すけど、その他ではあんまり話したくないってのが本音だ。

単純に女性慣れしてないだけなんだけどね。

僕がこんな性格だから折角話しかけてもらっても相手に申し訳な

い思いをさせてしまっている。

…直した方がいいのかな。

亮

「ほら、ぼさつとしてないでさつさと部活に行くぞ」

さてと、切り替えて部活に行きますか。

*

車坂

「いいかこの中に…」

勝利

「新入生が来て、監督の話か」

荷田

「今年もいっぱい来たでやんすね。いやあ、後輩が沢山出来たでやんす」

車坂

「返事はどうしたア！」

(ありがとうございます！)

「……………」

「……………」

あれ、返事をしない人が2人居るぞ。

因みに僕達は2年生に進級したので、監督の後ろに並んでいます。

車坂

「…おい、そのこの2人。どうして黙っている。」

「俺、長い話聞くの苦手なんすよね。だから途中から寝てました」

「ふわあ、ほぼ右に同じです」

うわあ、随分と肝の据わったこと…

車坂

「…足田光司と神無月かなづき十彩といろか。中学時代に乱闘を起こし、星英への推薦を取り消された者と、あの上野シニアの右の大砲か」

監督の言葉を聞き、辺りがざわざわとする。

疋田

「あれば俺は悪くありません。相手が先にやったんです」

車坂

「ふん、どうだかな。その反抗的な態度に見合う实力を見せてもらおうぞ。それと―」

神無月

「……………」すうすう

車坂

「おい神無月!」

神無月

「ふえ?」

車坂

「…無類の練習好きで、退屈になると直ぐに寝るか」

監督の言葉に神無月は鼻を触りながら

神無月

「ふっ、だって練習するの楽しいじゃないっすか!すればするほど自分の力が増えて行って、試合でも活躍することが増える!こんなに楽しいことないっすよ!!」

――満面の笑みで答えた。

車坂

「ふん、言い切ったな。なら、お前もその口に合うだけの實力を示してみろ」

神無月

「望むところっす!!」

話は終わり、2人のテストへと場は移る。

投げるのは田島。捕球するのは翔だ。

最初は疋田が打席に入る。

へえ、左打ちかあ。

2人に与えられたのは3打席。さあ勝負が始まった。

―結果は2人とも3打数1安打。

信弥

「へえ、うまいこと当てるなあ」

荷田

「きつと去年から硬式の練習をしていたんでやんすよ。それに神無月君はシニアあがりでやんすし」

疋田

「どうです、監督」

車坂

「ああ…正直がっかりした。特に神無月にはな」

2人がえつと、吃驚の声を上げる。

車坂

「確かにお前達はなかなかの物だと思う。しかしな、残念ながら俺は星英の天道翔馬を見た。あれに比べればお前たちの素質は霞んで見える」

疋田

「天道？ああ、中学の時にいつペン対戦しましたね。確かに騒がれてましたけど、その時の印象なら俺の方が上です。」

神無月

「星英の天道…ん？ああ、湊叶さんの双子の兄か」

神無月が僕の方を見る。そっか、一昨年全国で対戦した時に代打で途中出場している子だ。

今思い出したや。

車坂

「そうか、まあいい。俺は試合に勝つための兵士が要るんだ。それにさえなってくればそれでいい。勝った者が強いんだからな」

疋田

「まあ、見ていて下さいよ」

神無月

「必ず追いついて見せます!!」

車坂

「ふん。さてと、お前たちは俺の有難い話も聞かずに寝ていた訳だな。他の奴らにも示しがつかんし、去年似たようなことで走った奴らがそこにいるからな」

監督がジト目で勝利と荷田君を見つめる。

あははと、勝利が冷や汗をかいている。
珍しい物が見れたね。

車坂

「という理由でグラウンド5周だ。早く行ってくるんだな。他の者はアップを始めろ。以上」

神無月

「うおおおし！行くぜええ!!」

疋田

「はあ」

何か、とても面倒くさいのが入ってきた気がします。
因みに神無月君は同室です。

はあ、空回りし過ぎないと良いけどなあ。

神無月

「先輩方1年間よろしくお願ひします!!」

湊叶

「うん。よろしくね」

亮

「ああ。しかし、1年間と言うことは俺達が進級した時にはよろしく
しなくていいんだな?」

神無月

「あ、いえ、これはその言葉の綾と言いますか、そう！言葉の綾っす!!」
亮

「ふっ、冗談だ。だから焦らなくていい。よろしくな」

はあ、あまり面白くないジョークは冗談じゃないって言ってるの
に。

あれ、そう言えば

湊叶

「あ、神無月君」

神無月

「十彩でいいっすよ!」

湊叶

「ん、わかった。えっと、十彩に聞きたいことが有るんだけど」

神無月

「はい！何でも聞いてくださいっす！」

湊叶

「十彩は上野シニア出身だけど帝王に行かなくて良かったの？去年の夏の覇者だし藤内君とか、蛇島君とかが居るだろ？」

あー、と坊主頭をかきながら十彩が答える。

神無月

「湊叶さんたちと野球がしたかったっす」

湊叶・亮

「え？」

神無月

「2年前に試合したじゃないっすか。そんな時に思ったのが何か、楽しそうだなって。試合は俺らが勝ちましたけどみんなが終始のびのびと野球をしていて、勝ちに囚われていないように見えて」

亮

「特に意識はしたことがなかったな。でもこの学校は——」

神無月

「はい、勝ちに飢えてるっすよね……」

はあ、と十彩が溜息を漏らす。

湊叶

「まあまあ、野球をやる以上僕らが目指すのはどちらにしろ勝利だ。監督が厳しくても僕らは僕らなりに野球をすればいいんじゃないかな？それこそ楽しんで野球したりする感じで」

亮

「お、いい事を言うじゃないか」

湊叶

「あはは、誰かとは違うからね」

亮

「むっ、それは誰のことだ？」

湊叶

「気にしない気にしない」

神無月

「な、なるほど！」

湊叶

「ん？」

神無月

「そ、そうですね。俺らには野球を楽しんでプレーする権利がある。だから監督の思想に縛られることはないんすね!!」

湊叶

「まあ、のびのびとしたらいいよ。自分たちの実力が発揮できたら勝利はついてくるしね」

神無月

「ですよね！うおお!!頑張るぞ!!」

湊叶

「うん。一緒に甲子園を目指して頑張ろう！」

亮

「だな」

神無月

「よっし！そうと決まればランニングつすよ!!」

湊叶

「え、こんな時間に行くの？」

神無月

「何言ってるんすか！甲子園を懸けた戦いはもう始まっているんすよ！それに努力さえしておけば試合中に信じる事が出来ますからね!!」

湊叶

「うん、そうだね。よし、行こうか」

もう僕らも高校生になって、2年目。

去年はしっかり自分の出来ることをした。

だから今年は——レギュラーを狙おう。

第11話 副会長になってみよう

「へ、僕が自治会副会長？」

「そうだ。是非とも君に頼みたいんだ」

2年に進級し数日が経過した頃、僕たち監督生は会議室に招集された。

何でも1年間監督生として過ごしてきたメンバー内で話し合い自治会役員を選出するようだ。

「んー、僕じゃ力不足だと思うけど」

僕は今神条に副会長という役職をやってくれと頼み込まれている。

「そ、それに他の人の意見も聞いてみないと…」

モブA

「俺は賛成だな」

モブB

「ああ。俺もそう思う」

……

紫杏

「という訳だ。これで君に拒否権はなくなった訳だが」

—どうやら僕に逃げ道はないらしい

湊叶

「…みんながそこまで言ってくれるなら僕はやるよ」

何故こんなに抜擢されたのかと言うと以前僕が提案したドーベルマンの廃止の件が大きいらしい。

疑問に思ったから提案しただけなんだけどなあ。

紫杏

「ああ、感謝するぞ天道。」

湊叶

「出来る限りのことはするよ」

紫杏

「うむ。さてとこの事を発表し、早速ルール作りに入るぞ」

「『おおー!』」

(〜教室〜)

『今年の自治会会長に選出された神条だ。誠心誠意、自治会役員たちと、この学校の為に励むので全校生徒諸君も協力を宜しく頼む。以上だ』

信弥

「…あれ、もう終わりかいな。えらい短い挨拶やなあ」

宗太

「今のはうちのクラスの神条か?」

荷田

「そうでやんすね。」

勝利

「自治会長って何だ荷田くん?」

荷田

「青葉さんに聞いた話でやんすと、他の学校の生徒会長的なポジションに当たるようでやんす」

勝利

「ふむふむ」

翔

「普通は立会演説会か何かをしたりするみたいだけど、この学校は監督生から選ぶらしいよ」

信弥

「自治会かあ、あんまりどんな活動しとるか知らんなあ」

亮

「うちの学校は、学校の力が強くて行事や部活動の予算に自治会の権限が無いからな」

宗太

「へえ、詳しいな友沢」

亮

「ふっ、全部湊叶の受け売りさ」

信弥

「ん？つてことは自治会は何をしとるんや」

亮

「ああ、大まかに言うると監督生のリーダーだな。風紀の監視、ペラの没収、校内パトロールに設備の改修とかもしてるらしい」

勝利

「へえ、働き者なんだな」

翔

「て、俺らは思うけど部活に入っていない生徒にとってはウザいらしいよ」

信弥

「…野球やってて良かったわあ」

(～自治会室～)

紫杏

「本校は男女が同じ空間で過ごすことになり、既に風紀の乱れが報告される状況になっています。ではお手元に配布した資料をご覧ください」

紫杏

「効果的ですが過激なプランAから無為無策とも言えるプランGまで7段階の対策を用意…」

大河内

「おい神条！」

紫杏

「何でしようか大河内先生」

大河内

「このプランAは要するに、容疑をでっち上げて生徒を何名か退学させる」と読み取れるが？」

紫杏

「それに付いて、ここからは彼がご説明します。おい、天道」

湊叶

「はい、ご説明します。」

僕が椅子から立ち上がると全員の視線が僕を捉えた。

えっと、ちょっと怖いんですけど、特に車坂監督が…

湊叶

「コホン…結果的に言う大河内先生の言う通りです」

大河内

「バカモン、やり過ぎだ！」

湊叶

「心配しないでください。それは他のプランの危険度を明確にするための比較対象として挙げたに過ぎません。では、続いてプランBをご覧下さい」

陸奥

「監督生の権限の強化…あら、さほど問題があるように思いませんけど？」

湊叶

「残念ながら現時点でも、安易に監督生の権限を用いる者が居るらしいんです」

大河内

「うむ、その話は俺も聞いたことがあるな」

先生、話に乗ってくれるのはありがたいですけど、そのジト目はやめてください…

湊叶

「現状の混乱を乗り越えるため、なまじ監督生の権限を拡大すると将来に禍根を残すことになりかねないでしょう。これは先のプランAに次ぐ危険な方法と言わざるを…」

車坂

（あく、早く終わらねえかな）

湊叶

「以上で終わります」

僕は頭を下げ、椅子にどっと、座り込む。

あー、緊張した…2人（大河内・陸奥）の威圧が凄かった。

ほんと、よく神条はあんなに物怖じせず話せるな。

その神条が話を纏めて一回目の自治会会議は終了した。

今日決まった新しい校則を載せたチラシを作り、自治会役員で分担して掲示板に掲示しに行く。

何て言うか、荷田君が知ったら怒りそうな校則だけど…まあ、何れ分かるか。

和那

「ふわあ、疲れた。しあーん、帰ろーで」

紫杏

「ああ、そうだな。それではな天道、助かったぞ」

湊叶

「こちらこそ。やっぱり君は凄いよ」

紫杏

「ふふ、ここは素直に受け取っておくことにしよう」

湊叶

（素直ってつけるところが素直じゃないよ）

— そう思ったのは僕だけの秘密だ。

（～翌日～）

勝利

「あれ、何か張り出してあるぞどれどれ…恋愛禁止令？」

翔

「…素直に読みなよ、普通は令のことを【うながし】とは読まないよ」

荷田

「変なことは知ってるんでやんすね」

宗太

「恋愛禁止令。自治会が新しいルールを作ったのか」

信弥

「なになに…男女生徒がみだらな行為を連想される行動をとったら、ペラ没収または無償奉仕活動☒とな」

荷田

「むきー！オイラの青春バラ色ライフが…それにしてもみだらな行為でやんすか、何か興奮するでやんすね」

亮

「五月蠅い荷田」

信弥

「具体的に書いてあるで。☒学校内で理由もなく手を繋いでいるとか、教室に2人きりでいる☒のはアカンらしいな。これごつつ厳しないか？」

荷田

「うおお！オイラの想像もいけないことになりそうでやんす！」

宗太

「荷田落ち着け。それにしても…窮屈になりそうだな」

翔

「多少のことは多めに見て欲しいなって感じだね」

勝利

「まあ、野球が出来たらそれでいい」（野球バカ）

荷田

「あ、そう言えば『特別反省室』の噂は知ってるでやんすか？」

信弥

「何やそれ。聞いたことないな」

亮

「むっ、それなら昨日湊叶に聞いたな。確か―」

（～教員室～）

大河内

「校則に度々違反した者は『特別反省室』に送られそこで洗脳され、従順な生徒に改造される。…なんだこれは」

紫杏

「たわいも無い噂です。監督生を使い、意図的に流しています」

大河内

「全くバカなことを。いたずらに校内を混乱させるだけだな」

紫杏

「…少々思慮が足りませんでした。天道」

湊叶

「…噂の撤回だね」

紫杏

「話が早くて助かる。頼んだ」

湊叶

「ん、わかった」

大河内

「俺からも生徒に伝えよう」

(〜教室〜)

大河内

「特別反省室の噂は根も葉も無い噂だ。絶対」に信じないように」

信弥

(否定するちゆうことは)

宗太

(寧ろ怪しいな)

紫杏・湊叶

(ふう、これで良し)

亮

(あれ…)

*

気付けば季節は5月に入っていた。

それももう終わりが近い。

通りで中間テストやらが合ったはずだ。

毎日が充実しているとこんなにも時が過ぎるのは早いのか。

2年に上がったということでも色々な変化が起こった。自治会と

部活の両立は難しいけどその分楽しいし、時間を無駄に出来ないし練習については如何にして成長するか効率を考えるようになった。

笑顔でノックを受けていたらみんなにドン引きされた、お前Mかよって…あ、十彩は「こつち側に湊叶さんも来てくれたんすね!」とか言ってたけど、ちょっと意味がわからないや。まあ、僕のことを否定してくれてないって言うのはわかるけど。それにしてもMは酷い…

坂内さんと基宗さんの独自のメニューを熟して行き、しなやかさと

力強さを兼ね備え、尚且重しにならない筋力をつけることを目標とし
頑張っている。

シヨートは身体が重いと不利だ。左右の強い当たりには反応が遅
れるからね。だから小回りの効く筋肉が欲しい。大きいのがポ
ンポン打てるわけじゃないけど欲しい物を得るには犠牲が必要と
なってくると僕は思っている。

それに今の僕のモットーは『機動力』だ。

その為にも重い鎧は要らない。羽のような軽い物がある。

それに…今は投手の練習もしているしね。

車坂

「集合ー」

監督から集合がかかる。

車坂

「今からオーダーを発表する。呼ばれた物は返事をしろ。大きな声で
だ。」

そう、今から練習試合が行われる。

対戦相手は聖タチバナ学園。

試合のオーダーは次のようになっている。

- 1番 中 神谷 (左)
 - 2番 二 天道 (両)
 - 3番 捕 坂内 (右)
 - 4番 三 佳月 (右)
 - 5番 一 友沢 (両)
 - 6番 遊 基宗 (右)
 - 7番 右 越後 (左)
 - 8番 左 田代 (右)
 - 9番 投 寺河 (右)
- 信弥

「スタメン4番やあ!!」

亮

「…なんだ俺は先発じゃないのか」

勝利

「くそお、投げさせて貰えねえ…」

翔

「…まあまあ、次があるって」

原作キヤラ

(出番寄こせよ)

スタメンに選んで貰えたけど、セカンドか。

守備には自信があったんだけどなあ、まあとにかく今は試合に集中だ。

*タチバナside

翼

「さあ試合だ！練習試合と思わずに本戦同様の緊張感を保ちながら戦おう！」

みずき

「ふふん、親切打線をキリキリ舞いさせてやるんだから！」

聖

「意気込んでるところ悪いが、みずきはリリーフだぞ」

みずき

「わかってるわよ！もお！岬くん！しっかり抑えないと承知しないからね！」

わかってるよ、と耳を抑えながら若草色の髪をした少年が答えた。

あましろ みずき
天城 岬

タチバナの先発だ。

「何か僕緊張してきたわ」

みずき

「何緊張してるのよ原くん！しっかりしなさい！」

原

「ひえ、堪忍してな」

翼

「試合開始だ！みんな行くぞッ！」

「「「おおー!!!」」」

聖タチバナ学園オーダー

1番 右 仙波 (左)

2番 二 原 (右)

3番 捕 六道 (右)

4番 三 神木 (左)

5番 投 天城 (左)

6番 遊 榎崎 (両)

7番 中 八雲 (左)

8番 一 大京 (右)

9番 左 水野 (左)

先攻 聖タチバナ学園

後攻 親切高校

*

「ストライークツ！バッターアウトツ！」

エンジン全開。 初回を3者連続三振。それも9球で。

神無月

「ナイスピーです、寺河さん！」

寺河

「いえい！どんなもんよ」

パーンとハイタッチをしている、あれ、いつの間に意気投合したんだ？

つと、タチバナの先発を見ておかないと。

——天城 岬 君か。

サイドスロー投手で球速はスピードガンを見たところ130km/h前半。変化球はまだ見てないけど宗太が粘ってくれるからそれで判断、最悪僕もヒットを捨てて、後続に繋がるように情報を引き出そう。

キーン！ パシィ！

8球粘った末、結果はピッチャーライナー。

僕はネクストサークルから立ち上がり左打席に向かう。

宗太

「変化球はスライダーとカーブくらいだな。そんなに変化量も大きくない。それに…」ボソ

宗太から情報を受取り、礼を言ってから左打席に入る。

初球はアウトコースにストレート、ボール。

2球目、真ん中低めにストレイク。

あれ、ほんとだ

3球目

キーン！ と外に来たストレートを流し打つ。

シヨートの榊崎君が飛び込むけど届かずに打球はレフト前に抜けて行く。

1塁ベース上でふうと息を吐き出し、天城君を見る。

『変化球はスライダーとカーブくらいだな。そんなに変化量も大きくない。それに「ボールの出処が見易い」』

宗太の言った通りだ。普通の投手に比べて出処が見易い。まだ初回で身体が温まりきってないって言うのもあるかも知れないけど、普通の投手と比べると打ちやすいイメージがある。サイドスローに左打者が優位って説は案外馬鹿にできないのかもしれない。

大京

「スチールッ！」

坂内さんへの初球、僕はいきなり盗塁を仕掛ける。

牽制も無かったし楽々2塁に到達出来た。

さあ、スコアリングポジションにランナーを背負わせたぞ。

あとは坂内さんに返してもらっただけだね。

キーン！

——鋭い打球はセカンド原の頭上を越え、右中間へ抜けていく。

僕は迷わず3塁を蹴り、ホームへと向かう。

坂内さんの2塁打であっさり先制。

尚もチャンスでバッターは——

信弥

「わいのばんやあー！」

車坂

「喧しい！さっさと打席に行け」

カキイイーン！

打球は快音を響かせ、センターへ伸びていく。

これで2点目か、取れるうちにとつとかないと——え？

神無月

「坂内さんバックだ！」

聖タチバナのセンターが打球に追いつこうとしていた。

聖

「八雲慌てるなよ！充分間に合うぞ！」

——六道の言葉通り、この大飛球に八雲が追い付いた。

不味い、これじゃダブルプレーに…

梅崎

「ボールセカント！」

——八雲から返球されダブルプレーとなる。

なつちやうよね、あれは仕方ないか。

信弥

「あ、あれに追いつくんかいな」

ベンチに戻ってきた信弥が悔しそうに漏らした。

翔

「…あの走力はびつくりしたね。それにあの肩も」

車坂

（まだ決定できる訳じゃないが、タチバナは守りのチームか）

2回表、タチバナの攻撃は4番神木くんから。左打者だし、引つ

張ったら僕の方に来る可能性もある、強い打球も頭に入れておこう。

——外を上手く使い、カウント1―2と追い込む。

翼

（っ、厳しいコースに投げってくるな。それだけ警戒されてるのか？）

ギーン！

「ファールツ！」

——くそ、甘い球が来ないぞ。

一度靴紐を結び直し、神木は打席に戻る。

5球目、寺河の右手から放たれた白球は――

翼

「なっ！」

――シンカー気味にストンと利き手側に変化し、空を斬らせた。

翼

「な、何だ今のボールは」

神木くんの理解しこが追いつかない。それもそうだ、僕だって初見で

あの球を見た時は驚いた。

：

「な、何ですかこの球」

寺河

「ふっ、フオツシュ」ってボールさ」

「フオツシュ：初めて聞きますね」

坂内

「まあ、そうだろうな。あまり見られない珍しい球種だ。高速フォークと言うのが正しい呼び方らしいぞ」

「へえ、ありがとうございます坂内さん」

坂内

「ああ。このバカが投げたって聞かないものだからな。少し調べてみたんだ」

寺河

「誰がバカだ、それに高速フォークより俺はフオツシュのが格好いと思うぞ」

坂内

「誰のことだろうな。まあ好きに呼べば言いさ、お前のは少し変化が違うらしいからな」

「それってつまりオリジナル変化球ってことですか？」

坂内

「まあ、そういう事だ。ライジングショットという変化球があるくら

いだ、好きに呼んだって構いはしないさ」

寺河

「ふむ。決めた。フォツシユって単語は外せないから俺のこの球は…」

寺河

「ッスライドフォツシユ」こう呼ぶわ」

坂内

「粹真らしいじゃないか。ちゃんと特徴を理解していたのか」
「特徴…ですか？」

坂内

「ああ、粹真のフォツシユ、スライドフォツシユはな…」

スパアantz!

「ストラーツクバッターアウトツ！」

滑るように、落ちるか。ほんとに、伝家の宝刀だ。

坂内さんがインコースに構え、そこに寺河さんが投げ込む。

ククツと打者の手元で変化した球に打球は詰まり、僕の元に転がってくる。

「アウトツ！」

これでスリーアウト。タチバナの攻撃が終了となる。

2回裏、先頭打者は亮から。

湊叶

「亮」

亮

「ああ、じっくり見てくる」

そう言って亮は左打席に入る。こういう時両打ち（スイツチヒツター）の人って良いよね、相手に併せて打席に入れるから。まあ、僕も両打ちだけど…

カキイイイン!

——初球を完璧に捉えた打球はライナー性を保ちながらそのままライトフェンスを越えていった。

湊叶

「…ナイスバッティング。よく見ていくんじやなかったの？」

亮

「打てそうだったからな。振ってみたら当たった。それがたまたまホームランになったただけだ」

湊叶

「嘘つけ、狙ってたくせに…」

亮

「…ふつ、だが打てそうと思ったのは本当だ。あのフォームは左打者に対して余りにも無力、マイナス面しかない」

湊叶

「…随分と辛口なこと。」

続く基宗さんと越後が凡退するも田代がライト前にテキサスヒットを放ち、2アウトながら出塁する。

寺河

「よっし、俺も続くか」

——アウトコース、外に逃げていくスライダーで三振に倒れる。

寺河

「あら…」

*

翼

「打者が1巡したね——次の回から？」

岬

「うん。変えようと思う。もう一巡試してもいいけど、左打者に対して何も出来てないからね」

——ビシッと天城の頭に手刀が入る。

岬

「つつ、って、みずきちゃん！痛いよ！」

みずき

「うるさーい！何2点取られてるのよ！次の回から私が行くわよ！」

翼

「まあまあ、みずきちゃん落ち着いて。岬もちゃんと考えてるから」

みずき

「むう…」

岬

(…こりやほんとに次の回からは本気で投げないと酷い目に合いそうだ)

みずき

「うう、しっかり抑えてきてよね！」

岬

「うん、任せといて」

坂内

「サード！」

信弥

「ほいきたっ！つと！そいや！」

「アウト！」

9番水野もサードゴロに打ち取り、タチバナの3回の攻撃が終わる。

さてと、この回はトップに戻って、宗太からだ。

宗太

「…つく！」

「バッターアウトツ！」

変わった。

宗太

「見てたから解ると思うが…」

宗太が悔しきで顔を歪めながら言う。

これは引き締めて行かないと簡単に喰われそうだ。

打席に入り天城君を見る。

すう、つとスムーズにグローブを振りかぶりグイッと身体を捻る、背中の背番号が見えるくらいに。グローブにギュツと力を入れ、カベ〆を作る。踏み出される左足に遅れ、カベとなったグローブがゆつくりと始動する。踏み出しと同時にテイクバックに入り身体に隠れていた右腕が突然出現する。

くつ、それに加えてプレートを目一杯左端三塁側から対角線に投げ
てくる。これだけ厳しいと…

「ストライークツー！」

内の奥行を狙ってくる球に手が出ない。

カウント0―2、追い込まれている、厳しい球でも打ちに行き、甘
い球は必打だ。

——ガバアと身体を捻るサイドトルネード投法から「半速球」が
投げ込まれる。

来たっ！引き付けて反対側に…

チェックゾーンで下降した球は僕のスイング音を置き去りにし、六
道さんのミットに収まった。

この変化は…

亮

「シンカーか」

湊叶

「うん。恐らくね」

翔

「…ここから見てもはつきり分かるくらいキレてたな」

——ギインと詰まった音がし、打球は天城のグローブに収まっ
た。

坂内

（キレが初回とは比べ物に成らない。同じ130km/hのストレー
トでもこの回は「生きた」ストレートだ）

——防具を付け終え、タチバナサイドに居る天城を見つめながら坂
内は思う。

坂内

（こりゃ厄介なことになりそうだ）

第12話 VS 聖夕チバナ学園

*

4 回表夕チバナの攻撃に移る。

1 巡したことだし向こうも動きを見せてくることが考えられる。

翼

「さあここから作ってこう！」

仙波

「おう！」

監督代行の神木くんから激が飛び、先頭打者の仙波君がそれに答える。

「ボールツ！」

寺河

「つと。」

坂内

(…揺さぶりをかけてきたか。)

バントの構えをすることにより、寺河さんのリズムとスタミナを削ろうという作戦——と見るのが妥当だろう。

その後10球を投げカウントは2—3となる。

際どいコースはカットで逃げるなどバットコントロールを持った選手だということがわかる。

寺河

「ふーっ。」

こういう選手は本当に相手に回すと面倒だと改めて思う。

寺河

(はーったく、純粋にこういうやつは相手にすると鬱陶しい。つくづく思うぜ。)

大きく振りかぶり投げられたボールは——外角低めに構える坂内さんのミットに収まる。

「ボールツフォア！」

反動で落ちた帽子を拾い、マウンドの堀を手直す。　　こうやっ

て自分の時間を作るのも落ち着くのに効果的だと言われている——
らしい By 朴木。

みずき

「仙波くんナイス！原くんわかってるわね！」

原と呼ばれた2番打者が細い目を更に細めながら頷く。

寺河さんは1塁ランナーを見ながら投球モーションに入る。

瞬間、1塁ランナーである仙波君がスチールを仕掛けてきた。

寺河

(初球から！舐めるなよ！)

寺河さんから放たれたスピードボールを確認しながらセカンド返球のカバーに入るために2塁ベース後ろに走り込む。

捕球からワンテンポ遅れて糸を引くような豪速球が2塁に到達する。

これなら——「セーフツ！」が、惜しくも刺せない。大きなスイングが坂内さんの送球を少し遅らせたのだ。

みずき

「仙波くん、原くんナイスッ！完璧よ！」

タチバナベンチで水色の髪の毛の少女——橘みずきが笑顔を見せる。

寺河

「くっそ」

コンツと勢いを上手く殺しはバントは投手前に転がり寺河さんが捕球するが3塁は間に合わない。反転し1塁に送球しアウトカウントを1つ増やす。

みずき

「ナイスバント！」

原

「おおきにみずきちゃん！」

1アウト、ランナー3塁。ピンチの場面が訪れる。

原くんか。さっきのバントもそうだったけど、坂内さんの送球を遅れさせたのは驚いた。守備妨害を取られないギリギリの範囲で

の妨害、あれはほんとにいやらしい技術だ。

翼

「聖ちゃん頼んだよー!」

小さく頷いて右打席に立つのは六道聖さん。シニア時代に何回か目にしたことがあるけど非常にミート能力に長けている。ミートが上手いということは即ち彼女も眼がいい。

つまり——僕と同タイプの人種だ。それも、僕より確実に上の眼を持つている。

ここはどう動くのか、学べることは学ばせてもらおう。

坂内

(3番の六道に恐らく初球スクイズは無い。六道自体は鈍足と言ってもいい。それよりミートで拾われる方がヒットになりやすい。ここは内野 positioning で、セカンドは前進気味で行こう。)

——坂内の読みは正しかった。六道は初球を見逃す。初球ストライクをとった寺河はテンポよく投げ込み簡単に追い込んだ。

4球目内角低めに投じられた球は更にそこから内へと変化をする。ギイイイン!

金属バット特有の音が鳴り響き、やや詰まったような当たりになるがボールはショート基宗さんの頭上を超えていく——タイムリーヒットだ。

金属バットの特徴とも言える “打ち取ったのに” ヒットという正しくそういう打球だった。

翼

「聖ちゃん! ナイスバッチ!」

神木くんの声に1塁ベース上で六道さんが答える。不味いな、攻撃のリズムが繋がりは始めている。

それにしても、今のは寺河さんの決め球であるフォッシュボール。それを初見で外野まで運ぶなんて……とても眼とバットコントロールが優れている。ギリギリまで呼び込み、足を開いて腕をムチのようにしならせて打ち返した。あれには強靱なリストが必要になってくると思うけど、それが女性でも出来るのか。いや——女性だ

からと言って決めつけるのは良くないね。早川あおいさん、小山^{おやま}雅^{みやび}さん等の女性プロ野球選手も存在することだし。

みずき

「神木くん！ここで打たないとどうなるかわかってるわね！」

翼

「何で打席に入る前にそんなにプレッシャーかけるかな!? 上ずるじゃないか！」

のほほん、とした空気を感じさせる神木くんの顔付きが打席に入った瞬間変わった。表現するなら春の野原からまるで南極に移動したかのような冷ややかな刺すような圧を感じる。

初球だった。

坂内さんの要求したのは内角低めへのフォッシユ。恐らく狙いは鈍足の六道さんを考慮してのダブルプレー。その為に内に投げ込むという物だと僕は考えた。フォッシユとはその名の通り、簡単に言えばシュート回転をしたフォークボールだ。滑りながら落ちるボールなんてちよつとやさつとじゃ対抗は出来ない代物の筈。その考えを神木くんは容易く上回った。

キーン！ と芯で捉えた甲高い音が鳴り鋭い打球がライトフェンスに突き刺さる。

…反応出来なかった

瞬きの間に僕の近くを通り越したのかという打球の速さ。全く洒落にならない集中力を持っていると感じる。同じ2年とは思えない。もしない。

が、落ち込むのは一瞬だけだ。右翼手^{ライト}田代さんからの返球を受け取りそれを3塁に送球する。

「アウトツ！」

信弥

「ナイスボールや！」

翼

「聖ちやくん…」

打球の強さが幸いしたのか六道さんの進塁を防ぐことは出来た。

それにしても

「足取りが重かったような」

翼

「言わないであげて！試合前にきんつばを食べすぎたみたいで聖ちやんの足が遅いとかそういう訳じゃないんだ！」

2塁ベース上に居る神木くんが慌てて言葉を入れてくる。やばし、声が漏れてた。

あはは、と2人して乾いたぎこちない恥じらいを含んだ笑を作る。面白い人だなあとクラブで顔を隠しながら少し微笑んでしまった。続く打者は5番を打つ天城君。

彼の持つ雰囲気も第1打席とは比べ物にならないものになっている。

初球真ん中低めに糸を引くようなストレートが投げ込まれる。

バックネットに設置されたスピードガンが計測した球速は145 km/h。

春の県大会で記録した球速を上回っている。これは最後の夏にかける思いは自分に返ってくるということを解らせてくれる。

2球目は内角低めに制球される。内角は甘く入れば長打の危険もあるが力みを誘って打ち取ることも可能なコースだ。

今回は後者だ。

坂内

「セカンド！」

キン！と小気味よい音が鳴り鋭い打球が僕を襲う。でも——正面だ。

「アウト！」

丁寧に捕球し、一塁に送球する。これでこの回は終了、何とか最少失点で切り抜けた。

寺河

「ナイスセカン！」

グローブ同士を合わせ軽くハイタッチをする。会心の当たりで

も打球が野手の正面に行くのは良くあることであり、それは一般的に投手が勝った時になると言われている。ポジションとはそれを元に構成されたらしい。

4 回裏 僕たち親切高校の攻撃に移る。

打順はクリーンアップ、3番坂内さんから始まる。

坂内

(先の回の投球、あれを見ると初回等は力を抜いていたという事か。理由は解らないが、手を抜かれたと言うならそれは――)

「心外だな！」

キーン！と芯で捉えた打球は鋭く、天城君の横を抜けていく。

原

「こなくそ！」

センター前に抜けると思ったその矢先、聖タチバナのセカンド原君が好守を見せる。

車坂

(なるほど…やはり相当鍛え上げられているな。今回の試合を今後に上手く活かすことができれば良いのだがな。)

続く4番信弥はボールを選んでいくも、インローにくい込むシンカーの前に三振。亮は積極的に振っていくも内野ゴロに倒れてしまった。

*

5 回表、流れが向こうに行きかけている中、寺河さんはタチバナの攻撃をしつかり3人で切り取った。これで波を手繰り寄せようと、意気込む僕たち親切だったがタチバナも簡単には手綱を緩めてはくれない。同様にこちらの攻撃も三者凡退で終わってしまう。

車坂

「よし、メンバーの交代を行う。元より寺河1人に投げさせるつもりでは無かったからな。おい乾！マウンドに上がれ！」

勝利

「ほー！」

車坂

「坂内、お前も交代だ。本庄、用意しろ」

6回表が始まろうと言う時、メンバーの交代が行われる。時間の関係上、1試合しか今日には行えない。その為練習で調子の良かった選手達を後半から突入するというのは元からの作戦であったらしい。

投手は寺河さんから勝利へ。

捕手は坂内さんから翔へ。

遊撃手は基宗さんの代わりに僕が入り、空いたセカンドに官取君が入るといふ結果になった。

勝利

「さてと！気合を入れていきますか」

翔

「今日の課題はコーナーを付いたピッチングだ。丁寧に低めを意識しよう」

勝利

「おう、任せとけ！」

翔

「…変に空回りしないでよ」

翼

「へえ、投手交代か。見たところ左腕だね」

聖

「うむ。どのようなタイプかが肝になってくるな」

丁寧に足場を慣らした勝利が投球練習を始める。

勝利は投手としては珍しい下手投げだ。アンダースローしかも左腕で。これは本当に希少で、恐らく全国を探しても数人くらいしか見当たらないだろうと思う。それ位左の下手投げは珍しいと言われている。

大きく腕を伸ばして振りかぶり、胸に描かれている親切の文字辺りまで右足を引きつける。踏み込みは大きく身体を沈めることにより、テイクバックが充分に取れ尚且つリリースポイントを低くすることが出来る。これによって打者からはボールが下から伸びてくるような錯覚に陥ることがある。

このフォームの利点はまだ有り、身体全体を上手く機能させること

により身体にかかる負担を散らすことが出来ているらしい。
勝利の投球を見た瞬間タチバナの雰囲気はまた変わった。

翼

「…サブマリン投法か。みずきちゃんより、更に低い位置から…」

岬

「かなり本格的な投法だ。居るんだな、高校生にも」

聖

「それはそうだろう。全国は広いんだからな」

翼

「それにしても、これは手こずりそうだな」

振りかぶり鋭く左腕を振り切り、地面スレスレで放たれたボールは
翔の構えるミットに綺麗に収まる。

今日の勝利は調子が良いみたいだ。これは左打者の多いタチバ
ナからしたら痛手だろうなと思う。

「バッターアウトッ！」

2番打者原君をスクリーンで空振り三振で三者凡退に打ち取る。
うん、良いリズムだ。

両チーム共に投手が安定し、続々とアウトカウントを増やして行
く。

そして試合は中盤、7回に差し掛かった。

この回からタチバナは投手を交代。左サイドスローの橘みずき
さんがマウンドに上がる。

確か、少年野球チームの『おてんばピンキーズ』のエース。社長令
嬢とも話を聞いたこともある。

みずき

「いいこと聖！一点もやらないわ！特に！友沢には絶対打たせないん
だから!!」

聖

「熱意は認めるが力を抜けみずき。余計な力が入ると球が走らなくな
るからな。いつも通り投げれたら大丈夫だ」

みずき

「任せなさいい！」

それにしても。

「何であんなに敵視されてるの？」

亮

「…理由は解らないが、強いて言うならあいつは負けず嫌いってことだな」

シニアの時から会場で顔を合わす度に絡まれてたもんね…大変だなあつて思います。

因みに前打席はピッチャーフライでした。

亮

「さて、あいつがシニアの時からどれくらい成長しているか見物だな」

その言葉にうん、と短く返しマウンドに立つ少女に目を向ける。

左サイドハンドから対角線上に角度を付けて速球が投げ込まれる。

打者の翔はその球に思わず仰け反ってしまった。

「あの角度から入ってくると左打者はちよつときついね」

亮

「ああ、だが対策が無いわけではない。ポイントを前にしてヘッドを巻き込んで打てばボールは前に飛ぶだろうからな」

「そんな難しいことさらつとやりそうなの亮くらいだよ…」

3球目、インコースに投げられたストレートに詰まり翔はサードゴロに倒れる。

かなり振り遅れていた。球速自体は120km/h後半とそれ程速くは無いけど、球のキレが打ちにくさを出している。

こういう投手が居るから野球は楽しいんだ、と思う。

続く4番信弥は右打席に入る。

一般的に左に対して右は有利と言われている。球の出所が見やすいのがその所以とあるけど、このフォームは少し特殊だから当てには出来ない。初回天城君から点を取ることが出来たのは旧式フォームの時だ。あれは出所が見やすかった為、比較的球を捉えやすかった。

そんなことを考えていたら信弥もセカンドゴロに打ち取られてし

まう。

亮

「さて、おてんば娘の討伐と行くか」

ヘルメットを被り、亮がネクストバッターサークルから左打席に入る。

あいつ、意地でも相性が悪いと言われる左で打つつもりだな。全く、どっちもどっちな負けず嫌いだよ。

みずき

「出たわね友沢！アンタには絶対打たせないんだからね！」

亮

「うるさい、とつとと投げろ。ライトスタンドにその威勢事叩き込んでやる」

うわー、火花散りまくってます。

みずき

「言ったわね！あんまり舐めないで欲しいものだわ！」

初球は、インハイにストレート。これに亮はピクリとも反応を見せない。

みずき

「あれ？どうしたのかしら？もしかして怖気付いちやって手も出ないの？」

亮

「うるさい。俺のストライクゾーンでは無かったただけだ。さっさと投げろ」

みずき

「言われなくても！」

カキーン！と快音が響くが僅かに打球はライトポールの右に逸れる。

亮

「…仕留め損ねたか。次は内に入れる」

みずき

「聖ー！ちよつと来て」

先程言っていた理論を体現してきよったぞあの男…ほんと同年代には思えないな。

聖

「何だみずき？」

みずき

「…投げていいかしら」

聖

「…アレはまだ未完成だ。もし失投すれば相手はあの友沢だ。捉えられかねない」

みずき

「それは承知の上よ。大丈夫、絶対打たせないわ」

聖

「はあ、仕方ないな。楽に行こう、これは練習試合だ。思い切って行くとするか」

みずき

「そう来なくっちゃ！」

バッテリーによる会議が終わり、中断されていた試合が再開される。橘さんの性格からすると、多分次は真っ直ぐだと思うけど…相手は橘さんだけじゃなくて六道さんもいることを忘れてはいけない。

亮

「長い会話だったな」

聖

「そうか？なら、3球勝負にするぞ。時間の遅れを取り戻したいからな」

亮

「言ってくれるな」

聖

「コースはどこにするのがいいか迷ったが真ん中にしたぞ。単純に力の勝負だ」

亮

「ふん、そうは思わんがな」

しっかりと手にロージンをつけ、橘さんがモーションに入る。インステップから身体に隠れた左腕が飛び出してくる形になる。放たれた白球はアウトコースに外れていくように見えるそう、見えただけ。

「ストライーク！バッターアウトツ！」

結果は見逃しの三振。コースは外角低め、完璧に制球された変化球だった。

恐らくあれは——スクリユーボール。

勝利も武器の1つとして使う左投手限定の変化球。右投手のシンカーをそのまま逆変化させたようなボールのことだ。

亮

「くっ…六道の囁きに惑わされた。情けない」

「舐めてかかるからそうなるんだよばーか」

亮

「うるさい、バカと言った方がバカだぞ。それに、さっきの球はスクリユーはスクリユーでも少し違ったような気がする」

「違う？個人差の問題じゃなくて？」

亮

「それもあるだろうが、あれはスクリユーの強化版に思える。変化も鋭くなっていた。ただ日々を過ごしてきたわけじゃないってことか」

「それは僕らも同じだろ。切り替えて守っていこう」

亮

「次は打つ、絶対にだ」

「ダメだこりや。」

*

みずき

「へへーんだ！どんなもんよ私のスクリユー！」

聖

「ああ、余り褒めたくはないが良いボールだったぞ。バツクドアも成功だな」

みずき

「そうね！ほんとはアレが投げたかったのに仕方が無いから聖の言う事聞いてあげたんだから感謝しなさい」

聖

「なー！アレはまだ未完成だから実践は早いと踏んだんだ！」

みずき

「でも友沢の頭の中はストレートで1杯だった。そこにアレを投げたらちよろいと思わない？」

聖

「だが万が一の失投もある。ここは重ねてきた日々が作った武器でぶつかるべきだと私が判断したんだ。でも忘れないで欲しい。このリードが出来たのは2球目をしっかり制球出来たからということを」

みずき

「結局は私が良かったってことでしょ!?!流石私だわ！」

聖

「平たく言えばそうだが、天狗になると痛い目にあうぞ」

みずき

「大丈夫大丈夫！ノープロよ！」

笑顔の橘と対象的なのはやや表情の暗い六道聖だ。

次の回も橘は危なげなく抑え試合は最終回を迎えている。点差は僅かに1点。しかし、負けていることは確かなのだ。点差

「聖ちゃん大丈夫？」

「むっ、翼か。大丈夫だ。ただちよつと友沢について考えていてな」

「あー、さっきの打席か」

その言葉にこくつと聖は頷く。

「正直賭けだった。煽りを掛けてからの3球勝負。シナリオ通りを辿ったが結果は紙一重だ。バックドアが成功していなければ普通に拾われていただろうに」

「珍しいね、聖ちゃんがそこまで言うなんて」

一口水分を補給し、聖が続ける。

「友沢はそれくらい警戒するに値する打者だ。翼、お前と同等にな。みずきの新しい変化球——スライダーは完成には程遠い。失投した

「即スタンドだ」

「確かに友沢君ならやりそうだね。つと、僕が彼と同等？まさか、買い被り過ぎだよ」

「そんなことは無い。先程も出塁しただろ？」

「あれは感が当たっただけだよ」

自身が空振り三振に倒れた投手の球を打ってマグレだと目の前の男は言い切る。頭に浮かぶのは先の回の神木の打席だ。

カウントは2―2と並行カウントとなり、ボール1個分内に入ったのを神木は見逃さずレフト前に弾き返した。

——ほら、買い被りでは無い。

僅かに口角が上がっていることに六道は気付きながらも今はその事には触れないようにする。

「どうしたの聖ちゃん？」

「どうもしないぞ。少し話が過ぎたな、ネクストに行ってくる」

「そうだね。原君！コンパクトに振っていこう！諦めなければ何か起こる！」

試合は接戦——制したのは親切だった。

日常・1話

ペットボトルと環境問題

*

タチバナ戦から日は流れ、季節は梅雨の時期へと移る。この時期になると何が辛いかって言うのと、降りつづける雨によってグラウンドが使えないということ。そうなってくると出来ることは限られ、大体が筋トレがメインとなってくる。

「ほら、動きが鈍ってきたぞ。乳酸が溜まってからが勝負だ」

「簡単に言うけど…これ相当きついぞ」

「何を甘いことを。この前神木に打たれたのは誰だったっけ？その時の約束、覚えてないとは言わせない」

「うぐ…サーキット2倍…頑張ります」

「素直でよろしい」

「でもお前はボールに座ってるだけじゃないか!？」

「バランスボールは体幹を鍛えるのにいいんだよ。最終的にはこれに座りながらトスバツティングを行うことを目標にしている。まずはそれに向けて慣れるってことだな」

室内練習場の端の方に勝利と翔の姿が見られる。勝利は今身体に重りを付けた状態でその場でスクワットを繰り返す。翔はバランスボールに座りながらメデイシンボールを持ちながら腰の回転を意識している。あそこの凶はいつ見ても翔が勝利をいじめているようにしか見えないから面白い。

「ほら、ペースが落ちてきてるよ。これは追加かな？」

「くそ、悔やみ切れぬ一瞬の抜かり」

翔ってドSなのかな…

寺河さんと坂内さんはブルペンに入って変化球の調整中。信弥と亮と十彩は絶賛ベンチプレス中。因みに左から100kg、110kg、90kgと言った様子である。プロテインが似合う男達だなんて思います。

さて、僕も負けていられない。早く筋力を付けて打力を上げないと。

握力強化も兼ねて、懸垂チニングを行う。これを10回くらい行ってから次は腕の裏の筋力を鍛えるワンアーム・フレンチプレスというものを行う。これは冬休みに朴木さんに教えてもらったトレーニング方法だ。まだダンベル自体の重さがそれほど無いためかはつきりと分かるような球速アツプ等は無い。でも確実に送球の時、力が伝わるような感覚を覚えるようになってきた。諦めずに頑張ろうと思える。

次にハンマーカール、サイドクランチを行う。

ハンマーカールを行うことにより、上腕二頭筋等が刺激され、腕の振りが早くなると言われている。サイドクランチは以前行っていたメデイシンボールを壁にぶつけるものと効果はさほど変わらない。

目的は腹斜筋を鍛え、腰周りの筋肉を付けるためである。前にも言ったように遊撃手ショートのような、素早い動きが必要とされる所に身体を重くする筋肉は不要だと僕は考えている。身体を重くするより、足を鍛え、体幹を整える。そうすれば自然と強い送球が出来るんじゃないかなって思うんだ。自分は大きい当たりをぼんぼん打つようなタイプではなく、繋ぐ為のバッティングをすべきだと思っている。全員が全員大きい当たりを打てるに越したことはないと思う。でも、それでもやっぱり打撃の繋げ役は必要だと思うんだ。

『チームの為なら自分はアウトになっても構わない。寧ろ、誇らしい』以前TVに映されたプロ野球選手が口にした言葉だ。正直いつにこの言葉と出会ったかははつきりとは覚えていない。でもはつきりはこの言葉に惹かれたのは覚えている。いつかあの選手と会えたらいいなって淡い期待をふとして見る。

「天道、少しいいか?」

「ぶーっ!」

「…汚いな」

思考に潜っていると後ろから不意に声をかけられる。その事に二重の意味で驚いてしまい、つい飲みかけていたパワビタを吹き出し

てしまう。

「何で、君が、ここに？」

「少し用件が出来てな。何を豆鉄砲を食らったような顔をしているんだ？」

「いやいや、君は自治会長で忙しいだろうし、何よりこんな所には来ないと思っただけだから」

「ああ、その事か。確かに私も本来なら来る気は無かったよ。先程述べた通りだ。用件が出来たと」

「そう言えば。で、その用件は何なの？」

「はあ、頭に栄養が回ってないようだな。今日は——定例会議の日だ。

「あー！しまった、忘れてた！そう言えば今日だったな……ここほん、1回目だと言うのに副会長が居ないのはケジメがつかないではないか。だから呼びに来たんだ」

「それは申し訳ない……直ぐに監督に話をしてくるよ」

「ああ、私は外で待っている」

「うん、じゃあちよつと待ってて」

「うむ。あ、それとな」

「ん？何？」

「さつき吹き出した液体、ちゃんと掃除しておけよ」

「……もつともな意見で」

*

吹き出してしまったパワビタを拭き取った後、服装を少し着替えることにした。汗を含んだシャツを着ているとクーラーにやられるからね、風邪を引くのはごめんだ。

「ごめん、準備出来たよ」

「ああ、では行くこうか。道中は私を待たせた罰として会話に付き合ってもらおうかな」

「君の話は難しいんだけど……」

「そんな風に斜に構えなくても良いだろう。誰だったかな、定例会議を投げ出そうとした副会長は——なあ天道」

「はい！仰せの通りに」

何か目に見えないけど激しいオーラみたいなのを感じた。ここは逆らっちゃダメだと本能が訴えかけてきている！

「では話を——の前に、ゴミのポイ捨てか。今度この問題についても話す必要があるな。これは、またまた変わった形をしているな」

じーっと見つめながら神条が示したペットボトルは、茶飲料などに使われる無菌充填用のものだった。耐熱性や耐圧性に比べれば、形状はバラバラだしこれらに比べればマイナーなタイプになってくる。とは言うものの、そこまで考えるような問題に僕は思えなかった。

「形は違っても、元の原料は同じじゃない？ だったら一緒に回収されても問題はないと思うけど」

？「それも一理ある。だがそれはごみの分別をしない人間の考えだ」「ペットボトル1つでそんな判断しないでよ！」

そんなふうに使われては堪ったものではない。僕はすぐさま反論し、こう付け足した。

「僕だって分別ぐらいはちゃんとするよ。神条は少し考えすぎなんじゃない？」

？「…そうなのか？」

キョトンとした表情を浮かべる神条。えっと、そんな反応されるとこっちも困るんだけど…。

「ペットボトル1つでそこまで考える人は珍しいと思うよ。環境への配慮でも考えてたの？」

？「『環境への配慮』？これはお笑いだ。あははははは」

そう訊ねると、神条は突然面白おかしく笑い出した。僕の先ほどの言葉のどこに笑う要素があるのか割と不思議なんだけど。

「何がおかしいの？」

？「まあ聞け。人類が地球の環境を破壊しまくって、あらゆる生命を道づれに滅んだところで地球も宇宙も少しも気になど留めやしないさ。生命が必要なら、ほんの10億年ほどで今の人類などなかったことにして最初からやり直すだけの話だ」

「何か…スケールが大きくなってない？ 分別の話をしていたと思うんだけど」

「環境問題というのは、結局人類がいつまで生き延びられるかという、人間自身の問題なことだ。それを『環境に配慮している』などはあまりに傲慢すぎて滑稽極まりない。自己中心的な話だと、天道も思わないか？」

えっ？ここで答えを求めろの!？」

つと、少しばかりフリーズをしてしまうが大方の考えに僕も賛成だから否定する気にはなれない。

「確かに、エコや省エネとか言っても、それが出来ていないのが現状だよ。紛争から人種差別、領土問題、戦争…。環境問題は大体それらが原因だものね」

？「そう、人類は過去の教訓からなにも学べていない。上に立つ人間など所詮、口だけだと思わないか？」

？「ちよつと発言が過激だけど、そうだね。君は理不尽な事だとしても、言ったことは何でも有言実行している。少なくとも、僕は神条のこと好きだよ」

？「な、何を言ってるんだ!?!お前は!!」

「えつと、何か勘違いしてない??僕は君みたいな指導者なら使役されるのもありかなって思ったんだよ」

？「なつ、なんだ…。そういう事か」

ものすごい動揺だったね…神条でもあんな顔するんだ。まだ耳の先まで真っ赤になってるよ…

「そう言えば君は先ほど私のことが理不尽だと言ったな？」

「え、いや、それは言葉の綾で…!」

「良い機会だ、徹底的に教えてもらおうか」

何故だろう、何故こんなにも満面の笑みの奥に般若が潜んでいるように思えるのは…。

会議の方は何事も無く終えることが出来た。

訂正：めちやくちや使役されました。

日常・2話

低糖とノンカロリー

*

授業が終わり、時間は放課へと移る。毎月偶数日は自治会の手伝いをすることを、この間の事件（日常・1話参照）の罰^{ペナルティ}として神条に制約させられてしまった。以前から仕事には取り組んでいたのだが如何せん、時期は6月。夏の大会を控えているのだ。その時期に練習量が減ってしまうというのは大きな痛手になるなと思いつつも、放っておくといつまでもパソコンに向かっていそうなのでやれやれと言った感じである。

「何か食べ物を買ってこようか？」

時刻は3時を過ぎたあたり。少し小腹が空いてきた。親切高校は私立の為か第1週と第3週に土曜授業というものが入る。祝日や学校創立記念日等が被る場合は休みになったり日が変更される時などがある。今回は通常通りに授業が行われた。

「ああ、お願いしよう——いや、ちょっと待ってくれ」

珍しく笑顔で返事を返してくれたと思ったら、途端に顔つきを変え待ったを掛けられる。

「えっと、どうしたの？」

「低糖とか、ノンカロリー等が付いた商品は避けてくれ」

一体何故？と頭に？マークを浮かべながらも、これかなと思う言葉を落としてみる。

「そういう商品はよく、人工甘味料とかを使用しているから？」

あれは健康に悪いものがあると言われている。少しなら問題は無いが、摂取のし過ぎに注意と言ったところかな。

「いや、そうではなく——そういう考え方が大嫌いなんだ」

「…えっ？」

思ってもみなかった返答に言葉が詰まってしまう。神条は、いいかと言葉を続けた。

「——カロリーを半分にしたところでそれを2倍食べれば結果は同じ

だ。それをカロリーが低いものを食べれば安心等という発想が気に食わない。カロリーが気になるなら寧ろ、取り込む量を控えるべきというのが筋だろう。いや、寧ろ食べるな！」

「ま、まあ…その落ち着いて？」

きよとん、と目を丸くする神条。 やや時間が空いてから口を開いた。

「あ、ああ、済まない。どうも興奮すると我を忘れてしまつてな」

「確かに、その感覚は分かるけどね。野球してる時も、気づいたら大きな声で指示を飛ばしていることとか珍しくないし」

「いや、それとこれは少し違うのでは無いか？」

「あれ、そうなの？」

「…わからん」

この問について考えていた僕は、つつい低糖と書かれている飲み物と食べ物を買ってしまった。 しかも、大きく示されていたにも関わらず。

「なるほど。先の件といい、やはり君は私に喧嘩を売りたいらしいな？」

笑顔の裏に隠れた修羅を見るのはこれで何度目になるだろうか…と数分前の自分を咎めたい。 ——山積みの書類と睨めっこすることになったのは言わずもがな。

…

尊敬する人

*

「ねえ、神条の尊敬する人ってどんな人？」

ふと疑問に思ったことを尋ねてみた。

「父だ——という解答は一般性を持たないな。では、歴史上の人物で行こう」

「君は博識だから、僕にも分かる人にして欲しいな…出来ればだけど」

「そう、あれだ。世の中に“理系人間”と言う者がいるならばそれは

村田蔵六先生ぞうろくを置いて他にまいるまい」

「その人って、大村益次郎ますじろうさんと同一人物？」

「ああ、その通りだ。有名だろ？」

「残念ながら詳しくは知らないんだ」

「ふむ、そうなのか。彼は明治維新の時の人物でな。一生を理論で過ごした人だ」

「へえ、数学の先生か何かなの？ 医者だって聞いた覚えがあつたよう
な」

「そう、自称町医者だ。そして——最後は暗殺をされた」

町医者をしている人物がどうして暗殺されるんだ？ と頭にモヤが
浮かぶ。

「どうしてそんな訳の分からない人物を尊敬しているの？」

「彼の父親も医者でな。どんな病人が来ても薬を渡して安心させてい
た。ところが村田蔵六先生——大村益次郎先生は軽い風邪程度なら
『暖かくして寝ている』と追い返したらしい」

益々頭に？ が浮かぶ。

「ええと、それって凄いの？」

「お陰で治療費を貰えず、ずっと貧乏だったとか」

どうしてだろう、聞けば聞くほど謎が深まるばかりだ。

「だがな、長州征伐と戊辰戦争で長州藩兵を指揮し、勝利の立役者とな
った。太政官政において軍務を統括した兵部省における初代の大
輔（次官）を務め、事実上の日本陸軍の創始者、あるいは陸軍建設の
祖と見なされることも多いとされているんだ」

「と、とにかく凄い人だってことは分かったような気がするよ」

「そうか。彼はな、色々な方と面識を持つようになってな——」

地雷を踏んだな…と少しばかり後悔することにした。

...

赤水と水質調査

*

「会長大変です！」

その発言で事件は舞い込んできた。

「どうした!?!」

「第2グラウンドの水飲み場の脇で赤水が出ました！」

「何？手の空いている者は全員集合！」

「赤水って何のことだ？」

大江さんにより手伝いに参加させられていた宗太が尋ねる。

「えつとなあ——確か錆の浮いた水のことやったと思うで！」

「へえ、水道管の中が錆び付いてるって感じか」

「そういうことやね。ほな、はよ行こか」

「え、ちよ、俺は行かないってば！」

「乗りがかった船や！最後まで乗ってき！」

宗太の首根っこを掴みながら爆走を開始する大江さん。改めて
凄い身体能力だな、と思う。握力110kgは伊達じゃない…。

現場に行ってみると確かにその蛇口から流れる水には錆が混ざっていた。ここはバスケット部が練習の合間や後に使用することがある。このままにしておくのは色々と危険がある。

「よし。とりあえず部屋に戻るぞ。天道、校内の水質調査、及び周辺地域の水道状況の確認を頼む」

「また難しそうなことを…仕方ないな」

「10分で頼むぞ」

「無理を言わないでよ！」

「浜野、カズ。水道管工事について調べてくれ」

「了解」

「神谷君も働くんやで！」

「解放してくれ…」

「…僕の存在スルーですか」

自治会室に戻り、パソコンの画面と睨めあつてから数十分後、デスクが纏め上がる。

「はい、神条。出来たよ」

「ウチらも出来たで〜」

「助かる。では、校長室に赴こう」

移動中、神条は先程完成させた資料に凄まじい速度で目を通していき、それでいて人にぶつかるようなことや、邪魔になることも無い。広い視野を持っているなあと思う。

「失礼します」

ノックを3回ほどすると入室許可の声が降りる。

部屋に入るとそこには元田校長、大河内先生の姿があった。

「連絡は受けています…赤水ですか。我が校舎も建築から20年が経って居ますから老朽化が原因でしょうね」

「水道管の中が錆び付いているということですね。このまま放置すれば水漏れの原因にもなりかねないし、気が付かず飲んでしまったたりする生徒も出そうで心配だ」

額に汗を浮かべる元田校長と、冷静に分析する大河内先生。ふむ、と2人が顎に手を添えてから少し時間が経過したところで神条が口を開く。

「ところで、差し出がましいのですが自治会で校内の水質調査を行いました。それと、この地域の水道管補修業者の資料も纏めておきました。近年、老朽化した水道管の補修は、水道管そのものを交換するよりも、内部に樹脂を塗るライニング工法が費用と工期の点で優れているようです」

「なるほど。詳しくありがとうございます。早速業者にお願いすることにします」

「はい。では私達はこれにて」

後日、神条が自治会員を部屋に招集した。

「校長先生より、お褒めの言葉と5000ペラを頂いたぞ」

この言葉に、おおく等の歓声や拍手が起きる。

「この件に関わった自治会員には100ペラずつ、それ以外の自治会員と自治会員以外の協力者には50ペラを分配する…残りは機密費に編入する」

「ちよつと待った。機密費って何のことだ？」

神条の後半の発言に対し、宗太が疑問をぶつける。

「ふむ。少し考えれば分かることだが——浜野、説明を頼む」

「…簡単に言えば使い方を公表出来ない裏金みたいなものよ。殆どの場合が密告者に使われているわ」

「密告!?!」

「私たちが普段どの様にして規則違反を見つけているかと思っ
ていたの？そこにいる天道^{バカ}みたいに見つけてその場で注意出来るなんてこと
は、ほぼほぼ無いわ」

何か、凄くバカ呼ばわりされたような気がする…。

「パトロールはあくまで生徒を威圧する為に行っているの。それが本来
の目的。事件を未然に防ぐ為につてね」

「…そうだったのか。大江はこの事知っていたのか？」

「ううん、ウチも知らなかったよ。やから今へえって感心した」

「感心することなのか怪しいような…」

自治会員ではない宗太からしたら密告は——裏切り行為に映るの
かもしれない。誰だって告げられることは嫌な筈だ。

でも、注意するのは規則を明らかに違反しているものだけにしてい
る。結局のところ、自分がしつかりしていれば注意されることも無
くなるのだ。

話も一段落したようだし、宗太と自主練に向かうことにしようと思
う。

ようやくとバットが持てる、グローブに手を通せる、ボールに触れ
られると妙な安堵感がそこにはあった。

第13話 崩れたモノ

もっと早く——僕が気付けていれば。
もっとしつかり——注意していれば。
もっともつと——力が付いていれば。

「たれば」が頭の中を駆け巡る——自責の念は拭えない。

*

6月も後半に入り、チームは仕上げの時期へと移る。

今日行われる練習試合が夏の大会前の最後の調整試合となる。

ここで実践の空気に慣れておかなくてはならない。

対戦相手は——裁判高校。

変わった名前だけど甲子園出場有りと侮れないチーム。仕上げに丁度いいだろうと、監督も乗り気だ。

「いいかーやるからにはぶっ潰してこい！あの音楽家被れをギタギタにしてやるんだ！」

裁判高校のサードを守る聖君の事だろうか、確かに彼の髪型は独特だ。まるでモーツァルトのように。それに口調が少し傲慢という感じも見受けられる。監督は特にその辺が嫌なんだと思う。

先攻 親切 —— 後攻 裁判 で試合が始まった。

親切の先発は亮。筋力が増し、打力が伸びてきている。それは即ち球速が上がっていてもおかしくはないということ。最近亮が投げ込んでいる姿を見ていないから断言は出来ないが、球速アツプを見込むのは間違いではないと思う。

布陣はこの前と少し変わり

1番 二 天道

2番 中 神谷

3番 捕 坂内

4番 三 佳月

5番 投 友沢

6番 一 岩田

7番 遊 基宗

8番 左 神無月

9番 右 足田

となつてゐる。

相手の先発——幸徳君は右の上手投げ。オーバースロー

オードソックスな右腕だ。

球速は大体130km/h後半が良いところ。

あれから僕達も変わったんだ。今日は気持ちよく勝たせてもらおうか。

いつもと違い打順は1番。シニアの時代を思い出しながら粘り、相手の情報を引き出しして行く。

8球程投げさせ、引き出せた情報は3つ。

予想通り、中堅の速度である。

変化球は2つ——横に流れるスライダーと落差の小さいフォークボールがあると言うこと。

もうそろそろいいかなと、9球目の甘く入ったストレートを思いっきりぶつ叩く。

金属バット特有の音を響かせた打球は大きく伸びて行き、ライトフェンスを越えていった。つまり——ホームランである。

相手も先頭にいきなり打たれ多少なりとも動揺は生まれたはずだが、驚いたのは味方の状況だ。

「あいつがホームランを打つ日がくるなんて。これは悪い夢に決まつてる」

「今なら空が飛べそうだ」

「あの雲、クリームパンみたいだなあ」

上から順に寺河さん、勝利、岩田である。

他のメンバーはと言うと——

「ちよ、寺河さん、言い過ぎですつてば、はっはっは、わ、笑いが止まらない」

「湊叶が打てるんならわいは片手で運べるっちゅうこつちやな」

「彼が打てるなら俺たち全員10割ですね」

十彩に信弥に足田——うわあ：酷い言われようだね。 何故ホー

ムランを打って罵倒されなくてはいけないのだ、と僕の心は酷く傷ついていた。

だがそんな僕の気持ちも梅雨知らず、宗太がセンター前ヒットを放つ。

打線が回り始めた。

宗太の盗塁の後、3番坂内さんも丁寧に弾き返し右方向へのシングルフット。

ランナー1塁、3塁。4番信弥のセンターオーバーで1点を追加し、2-0。5番の亮も単打を打ちこれが3点目。6番岩田はフォークを引っ掛けてしまい6-4-3のダブルプレーに倒れてしまうがその間に信弥がホームに返ってきて4点目。7番基宗さんは三遊間に打球を弾き返すもこれは聖君の守備範囲、惜しくもアウトとなってしまう。

4-0といきなり点差を広げることに成功した。後は守って行くだけで。

亮の投球は落ち着いていた。

初回は三者凡退に抑え無難な立ち上がりを迎える。2回は先頭の聖君に変化球が甘く入ったところを打たれるが後続を断ち切り無失点。

思っていた通り、ストレートの球速がアップしていたというのが大きいのか空振りが以前より取れている気がする。でも少し気になるのは——変化球の制球の甘さだ。

追い込んでからの決め球——スライダーが余り機能していない。しっかりと抜けきれていないように思う。

試合が動いたのは6回。信弥が手首に死球デッドボールを受けてしまい、大事をとって交代してからだ。代わりに入ったのは北乃さん。

この人が——引き金を引いた。まず、バントの処理を誤る。

これは相手のバントが上手かったって言うのもあると思うけど、仮にもOKと声を出した身だ。スタートが遅れたなら素直に亮に譲るべきだった。

——結果は一塁へ悪送球。 岩田が良い反応を見せ、二塁に進むことは防げた。

裁判高校は右打者が多い高校だ。 幾ら球速が上がったとはいえ疲れも出てくる終盤に加え、相手は甲子園に出場経験がある古豪だ。 当然、目は慣れてくる。

打球がサードに飛んでいるのは若い回から傾向が見られていた。 信弥は基宗さんとコンタクトを取り合い、ギリギリまで守備範囲を広げようとしていた。 しかし、北乃さんはそういう行為を全くしなかった。 以前から北乃さんは基宗さんと仲が悪いという節が見られた。 今回はそれが顕著になって出てきた感じだ。

結果として足を引っ張っている。

何が言いたいかと言うと、端的に北乃さんに適正は無いということである。

監督が何故他の選手がいる中であの人を起用したのかはわからない。 3年生だから、と言うのはあるかもしれない。 あの人の両親が学校に器材を贈ってくれることはほんとに感謝しているし、監督が上手いこと言って北乃さんを乗せていたのを僕は偶然見ってしまったことがある。 だからと言って監督は、鼻屑はしないような人間だ。

こんなに複雑に考えることなく、ただ——打力がそこそこあり肩もある、という点で採用したと認識した方がいいとタイムを取った際に坂内さんに諭された。 確かに、打力はあると思う。 当たれば飛ぶというのは相手からしたら脅威に感じるだろう。 肩が強いというのもいい。 同じところで捕球しても肩の強弱でアウトかセーフが決まることだってある。

僕が多分こんなにもあの人に対し嫌気が指しているのは、僕に無いものを持っているからなんだろう。

「はは…僕も人のこと言えないか…醜いな」

無いより有るに越したことは無いと思うし、無いものを願っても仕方が無いとは思っている。 それでもやっぱりそれが欲しいと思ってしまうのは人間の性のように感じる。

僕より凄い人は幾らでもいる。なのに、何でこんな身近な人に対

してこういう感情を持つてしまうのだろう。

——落ち着け。思考を集中するんだ。今は試合中、守備に意識を向けることだけ考えればいい。

バントの構えだが、勢いを殺し切れず詰まった打球音が鳴り、打球は三塁手へのフライとなる。だがこれに北乃さんは気付いていない。

「くそ…何で俺がこんな目に合わなきゃいけない」

何かブツブツと零しているのは分かったが、内容ははつきりと聞き取れなかった。

「サードツ！」

坂内さんが声を上げる。そこでようやく打球に気付いたが打球は小フライ。何とも微妙なスタートになってしまう。

「俺が行く！」

北乃さんのスタートが遅れたと見ると、亮が全力で駆け出し飛び込んだ。

「邪魔だ！退け！」

エラーに対しての怒りからか口調が強くなる亮。しかし、北乃さんは止まらない。恐らく、聞こえていない。集中していなかったせいで周りが見えていないのだろう。

——鈍い音が辺りに響いた。

2人が倒れ込み砂埃が舞い上がった。

不味い…今確実に右腕から落ちた。

「亮！」

気付けば身体が動いていた。坂内さん達も苦い表情をしながら走ってくる。

僕たちが駆け寄ると2人は起き上がる。ユニフォームは砂まみれになっていた。転げたのだから当然だろう。

「ちゃんと、捕っている。大丈夫だ」

相変わらずぶつきらぼうにそう告げる亮。

「北乃、大丈夫か？」

「…ああ」

このプレーに寄ってスリーアウトになった。とにかくベンチに戻ってアイシング等をしなくては。

「友沢、北乃、怪我は無いか？」

「大丈夫ですよこれくらい」

「……………はい」

亮は肘を抑えながら、北乃さんは擦りむいた手首を触りながら言葉を落とす。

「大事をとって交代だ。田島、マウンドに上がれ。岩田がサード。1塁に神無月、左翼手に越後だ。次の回からこれで行くぞ」

その後、試合は何事も無く終了した。

勝つには勝ったけど、後味の悪いものとなってしまったような気がする。

この胸に残る違和感の正体は何なのだろう…。

「今日は接触事故^{アクセシデント}があったから敢えて負けてやったのだ。次戦る時は手加減しないからな！」

試合後に聖君が挨拶に来た。彼なりに気を使ってくれているのかもしれない。

「返り討ちにしたるから待つときや！」

「楽しみにしておこう」

信弥の言葉にそう返すと聖君は去っていった。案外良い人なのかもしれない。

—— それにしても

「あの髪型ってどうなってるんだろう」

「これはカツラだ！」

「…そうなんだ」

何でこの距離で聞こえるんだろう、そんなに大きな声で言っただつてもりは無いのに…それにカツラ何だ…。

*

「では——夏の大会ベンチ入りメンバーを発表する」

遂に、この日がやって来た。

野球部全員グラウンドに成立し、車坂監督の言葉を待つ。

「背番号1——寺河梓真」

これはまあ予想通りだ。冬の走り込みが効いたのか安定感が段違いに伸びた寺河さんは非常に頼もしくなった。

「背番号2——坂内大也」

主将と扇の要、打線の主軸と担うものは多い。でも坂内さんならやってくれそうな気がするんだ。

「背番号3——岩田重機」

岩田が3番か。と言うことは信弥が5番かな。岩田のパンチ力を眠らせておくのは勿体無い。まだ足りないものが多いとの監督の言葉だが伸び代はあると思う。

「背番号4——天道湊叶」

「っ…はい」

思わず言葉が詰まってしまった。4番、つまりセカンドとして僕は出場することがこれにより九分九厘決まったようなものだ。勝てなかったなあと心の中で悔しさを零す。

その後順当に発表されていく。

5番信弥、6番基宗さん、7番越後、8番宗太、9番田代さん、10番亮、11番翔、12番勝利——18番田島、19番神無月、20番足田という結果になった。

「今日からベンチ入りメンバー中心の試合に切り替える。連絡は以上だ。さあ、かかれ！」

遊撃手として、出ることが無くなった訳じゃない。沢山いる選手の中から僕を選んでくれたんだ。文句なんか言っていられない。自分の出来ることを、一所懸命するだけだ。

「おめでとうでやんす。オイラの分まで頑張って欲しいでやんす」
「ありがとう荷田くん！」

練習後、勝利と荷田君が言葉を交わす。あの2人何気に仲いいなあってふとした時に思う。

「…おい友沢」

「何ですか北乃さん」

「これ、片付けといってくれや」

そう言つて亮が手渡されたのは大量の洗濯物だった。

「何故同室でも無い俺がしなくちゃいけないんですか？」

亮はこのあからさまな嫌がらせに食つてかかる。正直僕も力チンと来ている。

「おいおいレギュラーさんはこんなこともしてくれないのか？心が小さいねえ」

「それとこれは別だと思つて——そこまで言うならやつてやろう」

「終わつたら部屋に持つてきてくれや。ジュースでも奢るからよ」

亮の言葉に、にやつと笑を浮かべた北乃さんはその場を去つていく。

「…本当にするの？手分けしてした方がいいんじゃない？」

「いや、今すぐ取り掛かれれば就寝前には終わる。俺が1人でするさ」

「僕も手伝うよ」

「お前は自治会の資料まとめが残っているだろ。気持ちには嬉しいが大丈夫だ」

「そつか…」

そう言つて亮は洗濯物を片付けるべく洗濯機が置いてある棟の方へと歩を進めていく。

胸の違和感に僕が気付くのはこれから数時間後の事だった。

・・・

「それにしても凄い量だなこれ」

友沢は自身の手中にある洗濯物を見てそう零す。一体何日分溜めたらこうなるのだと顔をしかめながら思う。

断つてしまったものは仕方が無いと、苦笑いを浮かべながら歩みは止めない。

もうすぐ洗濯機が設置されている棟という所で友沢は辺りに違和感を感じる。

「こんな所に山積みの荷物…一体何が」

山積みになつていたダンボールに気を取られ手を触れた瞬間

——それらは雪崩のように友沢の身体に襲いかかった。

箱の中身は古くなつた器材の数々。ダンベル等の数が足りない

と思っていた友沢はこれで合点がいったと薄れる意識の中思った。

「…格好付けずに手伝ってもらえば良かったかもしれない」

霞んだ視線の先に映るのは自身の利き腕となる右腕だ。転倒の
さい、強かに打ち付けてしまった。

肘から下の感覚が無い。

——友沢の意識は深く沈んだ。

...

おかしい。 幾ら何でも遅すぎる。

時計を見ると時刻は午後11時を過ぎている。 練習が終わった
のが午後7時、僕はシャワーを浴びてから自治会室に向かいそこで夕
食を取った。 部屋に戻ったのは午後10時過ぎで、十彩に聞いたと
ころまだ戻っていないとのこと。

亮はとてもストイックだ。 自主練の量は並大抵ではない。 そ
れでもやっぱ人間らしくお腹が空けば帰ってくるし、肉体的疲労や
門限の関係で10時までには戻るようにしていた。 北乃さんが終
わったら来いと言っていたので部屋に確認をとったが来ていないの
一言。

おかしい。 何かが引つ掛かる。

幾ら量が多いからといって、ここまで時間がかかるのも不自然だ。
グローブを磨く手を止め、僕は走り出した。

—— 一つの嫌な予感が頭を過ぎったから。

「…っ、亮ー」

その予感は的中してしまった。

以前までは無かったダンボールが山積みになつているとの報告を
受け、先週見回りに行ったことを思い出した。 その時は箱の中身を
確認しなかったし、まさかこうなるとも思わなかった。

あの時しつかり中身を確認して置くべきだった。
器材の下敷きになっている亮に呼びかけながら、自責の念に駆られ
ている。

「もう門限は過ぎていいるよ——つと、そこにいるのは天道くんかい？」
消灯の為、見回りを行っていた梅木さんがタイミング良く現れてく

れた。

「何して——待ってて、直ぐに連絡してくる」

一目見て状況を把握してくれたようだ。間もなくして大河内先生と松山先生が到着した。

「ひとまず移動しましょう。夏とは言え夜風に晒されるのは身体に良くない」

松垣先生の言葉に頷き、大河内先生と2人で亮を担架に乗せ造設された病棟に向かうことになった。

第14話 息抜きと外出

*

ここ1週間元気の無い者がいる——天道湊叶だ。話によると部活動にも顔を出していないらしい。自治会室に着ても意識は上の空といった様子でまるで集中出来ていない。

こんな奴だが普段は自治会の為に尽力を注いでくれている。ここは一つ私が動こうと思う。

「天道少しいいか？」

パソコンの前に座り水分補給を行っていた天道に声をかける。

頬は若干痩けており、元気が無いように見える。

原因は恐らくアレにある。

「…どうしたの？」

「いやなに。最近の君は元気が無いように見えてだな。ここは一つ気分転換に外出でもして見ないか？」

私の言葉に天道は豆鉄砲を受けた鳩の様な顔をする。それにしても君はその表情好きだな、そんなに私との会話は驚くことが多いのか？

「…そんな風に見えていたんだ」

「ああ、その様にしか見えんよ」

その言葉に、そっかと言葉を落とす。

「ありがとう。その誘い受けさせてもらうよ」

「では早速向かおう。カズ！私と天道は少し用が出来た為席を外させてもらう。後は頼んだぞ」

「はいはい、気をつけてな」

カズの返答を聞き、私達は校舎の外に出る為歩を始める。

手続きの間も、バスに乗っている間も、天道は一言も発さなかった。

私が問いかけても、ああ、うん、等と空返事を繰り返す。これは相当参っているみたいだな。

「ようやつと街に着いたか。お昼には少し早いが、どうだ？」

「そうだね…早めに済ませちゃおっか」

私の言葉に弱々しく返事を返す。

全く、これではどちらが男性なのかわかったもんじやない。バス停から少し歩いた所に私好みの喫茶店を見つけたのでそこに入ることにした。

店の感じはモノトーン系で統一されており、音楽と合わさって居心地の良い雰囲気醸し出していた。

店員に2名と言うことを伝え、奥の席へと案内してもらおう。

移動の際天道は辺りを見渡して少し笑を浮かべた。もしかするとこの様な雰囲気が好きなのかもしれないと、1人で密かに笑を零した。

「天道、何にする?」

「君と同じもので」

「はあ：少しは自分の意思を見せたらどうだ?」

「これも僕の意思だよ」

ああ言えばこう言う。減らず口だが、会話が出来る分まだマシだなどと思う。

数分後注文したサンドイッチとアイスコーヒーが到着する。

2人揃ってアイスコーヒーに口に入れた瞬間——天道がとても渋い顔をした。

「：コーヒー無理ってこと忘れてた」

目の前にいる男はどうやら頭のネジが外れきっているらしい。

骨が折れそうだと思うと自然と溜息が落ちてしまう。しかしそんな事は言っていられない。天道はこれからも自治会に必要だし、野球部にも復帰してもらわなければ困る。私の腕の見せ所だな。

軽い昼食を取り終え一息ついた所で本題に入ろうと行動を起こす。

こういう時にまどろっこしい変化球等は必要無い。真っ直ぐで行こうと思う。

「君は、最近悩みに囚われている時が増えたな」

私の言葉に天道はえ?と言葉を落とす。

「惚けても無駄だ。それ位猿でも分かる——友沢の事だろうか?」

「ははは：そっかあ。参ったな」

私の言葉に天道は相変わらず弱々しく返事を返す。

「私は、冷酷に聞こえるかもしれないがあくまでも部外者だ。それでも今回の件は、お前が気にする事は無いのでは無いかと思う」

勿論、友沢の身に起きたことは残念だが…と付け足す。天道が重い口を開いた。

「亮の調子が悪いことは気付いていた。変化球の曲がりが甘くなっていたし、肘を気にする仕事も取っていた。でもそれはその日の調子が悪かっただけだって心の何処かで決めつけていたんだと思う」

新たに注文した烏龍茶を口に含み、天道は続ける。

「思えば亮は中学の頃からスライダーを酷使してきた。僕が投手を辞めてからは亮にかかる負担も増えていた筈だった。高校に入ってからそれは変わらない。何人投手が居ようとも、その球種を使うことは間違いなくあるのだから」

表情に更に影が差す。

「あの時だって。間違いなく試合中の接触で痛めていたんだ。その後のケアを僕は無理にでも進めるべきだった。だから…蓄積されたものがあの事件で爆発したんだ」

天道のいうあの事件とは、記憶に新しい倒壊事件の事だと安易に察しがつく。

「もう亮の腕は投手をすることが出来ない。あの時！もし僕が着いて行っていれば結果は変わったかもしれないのに…！そう思うと夜も眠れないんだ」

天道と友沢は以前から仲が良かったという話を聞いている。だからその分、あの時自分が無理にでも行動を起こしていたら…という自責の念に囚われているんだ。それに友沢はどうやら天道が壁にぶつかった時に力になってくれた存在らしい。それだけに——今回の事が余計に辛くなる。

「酷い話だよね。自分だけノコノコ助けてもらってさ…何も返せていないや」

自嘲気味に笑う天道はもう直ぐにでも壊れそうに私の目には映った。みすみす壊させるものか、そうはさせられない。

「天道、お前は深く考えすぎだ」

「…え？」

「大方、友沢の敵を取ろうと模索しているな。違うか？」

その言葉に天道は顔を顰める。ここ数日間の天道の動きは探偵の行うそれに近かった。

「…それもバレてたか。適わないな君には」

「それに関しては一つだけ言っておく。証拠が無いのに動くのは得策では無い。下手に動く君もやられる可能性がある」

「そんな事言つてられないよ！」

「馬鹿が、頭を少し冷やせ。感情に突っ走るのは本来のお前では無いだろう。確かに、友沢の事件はどう考えても他人の罠にしか思えない。しかし、今君が問題を起せばそれは間違いなく野球部にも火の粉として振り返る。同じことを繰り返せばいいと言うものでは無い。因果応報という言葉があるな。悪いことをしたものにはそれ相応の罰が必ず下るというものだ——私の言いたいことがわかるな？」

「うん…分かるよ」

天道の拳にギュツと力が入ったのが分かった。悔しいだろうが、今回の件はそれが最善だろう。

「頭は冷えたみたいだな。犯人には必ず天罰が下る時がくる。だから、もうその事は頭から切り離せ。前を見るんだ。」

「っ…そうだね。今は亮の状態が一番だ。前に僕がしてもらった事を今度は返す番だ。」

目に薄らと涙を浮かべながら天道は言い切った。らしくない復讐心に囚われたせいで前が見えなくなっていた。暗闇の中で独りあいつは戦っていたんだ。答えが見えた今、あいつの進むべき道は射された。

「ありがとう神条。君のお陰で楽になったよ」

「いや、私はただ言葉を落とすただけだ。しかし、どうやら吹っ切れた様だな」

「うん。何だかスッキリしたよ」

「そうか。それにしても珍しいものが見られたな。天道の泣き顔か。」

高科辺りに広めてもらおうとするかな。面白いことになるのが目につかぶ」

「え、ちょよ！泣いてないから！」

「ははは、そんな顔で言われても説得力がまるで無いぞ？」

「僕は生まれつきこういう顔なんだよ！そうだ、コーヒーを飲んだせいで！」

「煽った私も私だが、君はまるで子供だな……」

「ああ、もううるさいな！」

「ははは、君は実にいじりがあるな」

会計の時に天道が間違えてペラを出した時はそれはもう久しぶりに声を出して笑った。

「くつくつく、高科待った無しだな」

「だから辞めてってば！ああもう……」

ようやく元に戻れた様だ。 一件落着だ。

*

「さて、時間は有るし次はどこに行こうか？」

「んー、無難に百貨店とかはどうかな」

「それで決まりだな」

ぶらぶらと歩を進めながら百貨店を目指す。

折角街に出たのだから土産を買いたいとの事だ。 私もその意見には賛成なので同室の子にでもあげようと思う。

「困ったわねえ。これじゃ怖くて使えない」

もうすぐ目的の百貨店という所である光景が目に入った。 それは、百貨店の休憩スペースを不良たちが占領しているものだった。

人数は、3人と行ったところか。

「わははははははっ」

「いやあ、ここは自販機も椅子もあつて快適つすねえ！」

どう考えても迷惑極まりない行為だ。 周りのお客さんたちの視線が気にならないのかあいつらは。

「何だあいつら」

これには普段温厚でキレることを知らなさそうな天道もご立腹の

ようだ。しかしアイツには試合が控えている。ここで問題を起こさせる訳にはいかないな。

「天道、腕時計をつけているか？」

「うん。だけど、どうして？」

「では正確に5分後、警備員を連れてきてくれ」

「え？」

「それと君は絶対に手を出すな」

「そう言い切ると私は不良たちの元に進んだ。」

チラリと後ろを見ると天道は警備員を呼びに行ったようである。

よし、それでいい。

「他の人の迷惑だぞお前たち」

私の言葉に反応した手前の不良が声を荒らげる。

「ああん？何だアお前は」

「ここは大勢の人々が利用する場所だ。お前たちに利用するなどは言わないが、スペースというものを考えてもらいたい。あそこにあるベンチ一つで充分座れるだろう」

「うつるせえなあ。興ぎめなんだよ！」

「おつとお前、よく見りやあ可愛いじゃねえか！」

「あんまりつまんねえこと言ってる、とんでもない目にあつても知らねえぜ」

その言葉に私は敢えて食ってかかる。時間を稼ぐ為だ。

「ほう。例えば？」

「例えばだなあ…」

不良が述べようとした瞬間、視界の端に警備員を連れた天道が入った。よし、この辺が頃合だな。

「きやああああ！助けてっ！」

「君たち！何をしているんだ!?!」

思った通り。警備員が動いてくれた。これで件は落着——
とはいかなかった。

「おい、やべえ…」

「…ちっ、おい、お前こっち来い！」

ヤケクソになったりリーゼント頭の不良が私の腕を掴み引つ張られる。不味い、これは予想していなかった。

「おい、それ以上近寄るな！この女がどうなっても知らねえぜ？」

くそ、3対1とは分が悪い。策士策に溺れるに溺れるとはこの事か。

「そうだ、そのまま動くなよ……よし、このままとんずらだ！」

「きゃっ！」

腕を無理やり引つ張られ、そのままバイクに乗せられそうになる。

このまま連れていかれるのか——そう思った時、事態は変化を迎えた。

「男が3人揃いも揃って無抵抗の女性に手を出すのはおかしいんじゃないかなあ?！」

「デメエ……何様のつもりだっ……ってえ」

不良の内の1人が言葉を言い切る前に天道は思いっきり手に持った缶を投げつけた。どうやらスチール缶らしい、あれは痛い……。

「さっさと彼女を離すんだ。もう一発喰らいたくは無いだろう?！」

「っ畜生。今回は見逃しといてやる！次会ったら覚えとけよ！ほら、とつとと行きやがれ！」

リーダー格の男にバイクから振り落とされ、私はあわや地面に倒れ込みそうになる。

「全く、無茶しいだな。度胸があると言うのか、怖いもの知らずというのか」

が、すんでのところで天道に支えられる。

「うん、目立った外傷は無いね。ほんとに嫌な汗をかいたよ」

目の前の男はあっけらかんにそう言い切った。

「ごめんね、遅れちゃって。警察に突き出すために、カバンの回収とかをしていたもんでさ。と、とにかく、無事で良かったよ」

「済まなかった……礼を言う」

「反省は後。とりあえず今はこの場から動こう。視線が小っ恥ずかしくてさ……」

「ふふつ、何とも天道らしい理由だな」

不良から少女を救ったヒーローとして天道は辺りから惜しみない賞賛の声を浴びていた。それに照れて逃げたくなるとは、神経が太いのかどうか解らないな。

*

あれから移動し、今はバス停でバスを待っているところだ。

「はい、どうぞ」

天道はそう言うのと茶飲料を手渡してくれた。それに礼を言つて直ぐに口を切り、乾いた喉を潤すために流し込む。

「うえ…:にがあ」

スチール缶を手に入れる為とは言え、購入したコーヒーを無駄にできないと飲もうとする天道だが、一向に中身が減る兆候は見られない。

「天道、改めて礼を言わせてくれ。君が助けてくれなかったら私は今頃どうなっていたか解らない」

「いいよお礼なんて。僕もほら、君に話を聞いてもらったし。ほんとに君が無事で良かったよ」

「ふふ、なら対等と言う訳だ」

「そうなるのかな?」

「ああ。ゴミを排除するのは市民の義務だ。私に力があれば猿芝居も要らなかつたのだが…:本当に天道が居なかつたらどうなる事か?今になって震えが来たよ」

「ほんと、見ていて冷や冷やしたよ。でも神条が、紫杏が行動を起こしたお陰で僕も動くことが出来た。だから、結局は君の行動が正しかったからだよ」

ちよつと危険だったけどね、と天道は付け加える。

「そうだな…:天道」

一泊おいて言葉を紡ぐ。

「―――今後は私のことは紫杏と呼んでくれ。友人にはそう呼んで貰いたいんだ…:嫌なら別にいいが」

「誰も嫌なんて言つてないだろう…:実は神条って呼び方堅苦しい気が

して苦手だったんだ。ほら、僕基本名字で呼ばないじゃん？」

「ふむ、そう言えばそうだ。女子と話している時はさんを付けている男子と話す時は名前で呼んでいるな」

「うん。名字で呼ぶと何か距離があるみたいじゃん？だから、僕自身も名字で呼ばれるのは苦手なんだ。だから、紫杏さえ良ければ名前で呼んでもらいたいな」

「ああ…分かったよ湊叶。それはそうと、湊叶——君はさつき私の事を呼び捨てにしていたな？」

「あ、いや、あれは君を落ち着かせようとして！」

「ははは、冗談だ。何も気には止めていないさ」

「あ、ああ、ならいいんだけど」

「やはり、君は面白いな」

「それって褒められてるの？」

「さあ、どっちだろう」

「え、教えてくれないじゃない！」

「さ、バスが着たぞ。早く乗らないと置いていかれるぞ？」

「乗るよ！」

色々あった1日だが、収穫はあったな。

また明日からも頑張ろう——自然とそう思った。

…しまった。土産を買い忘れてる。

第15話 決意

*

「全治3週間です。大会は諦めなくてははいけませんね。それと、右肘の事なんです。関節部分の炎症なのでしあわせ草による治療を持っても治りませんでした。投手復帰は絶望かと…」

「そうなん…ですか」

目が覚めるといきなり、衝撃の事実を伝えられた。　どうやら俺は——もう投手が出来ないらしい。

「友沢。今回のことは残念だが、怪我が完治するまでお前にはベンチから外れてもらうことになった」

ベンチから外れる？　何を言っているんだ。そんなバカな話があつてたまるか。

「待ってください監督！何故外れなくちゃダメなんですか！3週間が長いつて言うなら俺は2週間、いえ、それより早く治して見せます！」

「…ダメだ。お前はまだ先がある。ここで無理をさせる程俺の目は節穴じゃない」

「っ…でも！」

「そんなに——チームの皆が信じられないのか？」

「そ、それは…」

皆のことは信じている。　信じているけど、それとこれとは話は別だ。　やっぱり野球をする以上、プレーをしたいというのは当然の欲だ。

「友沢。お前の実力は俺が認めているんだ。だから、安心しろ。甲子園に出場する時、俺は再びお前をメンバーに選出する。今はしっかりと治せ」

「…はい」

「幸いにも肘の炎症は変化球が投げにくくなったというものです。初めのうちは普通に投げるのも苦労するでしょうが直ぐに慣れるでしょう。貴方のポテンシャルならそれくらいは想像がつかます」

「——野手転向だ。元よりお前はセンスがずば抜けて有るからな。繰

り返すが焦らずじっくり治すんだ」

「監督がそう言うなら、俺は従います」

「ええ、それが賢明ですね。全身打撲が酷いので今は絶対安静です。暇になるでしょうが1週間はじっとしていて下さい。面会の許可を出したいのですが、如何せん貴方は行動力もあり知力も高い。大人しくここに居ることですね」

「俺が特別に差し入れをしてやろう。明日、乾と荷田を偵察に行かせるつもりだ。その時に何か買いに寄らせよう。明日の朝取りに来るからメモに書いておいてくれ」

「わかりました。助かります」

そう言い残し監督は退出して行った。

「では私もこれで。ああそうだ。トイレはそこを左です。余り無理のしないように。今夜は痛みますよ」

「気をつけます。ありがとうございます」

独り残され思うことは一つ。

暇だ。さつきまで気絶していたせいで目が冴えまくっているし、身体中が痛い。

今年造設されたこの保健室はかなり設備が整っており、街に出て行かなくても治療が捗るようになった。でも今はそれが監獄のように思える。TVも無い、ラジオも無い、音楽も無い、何より野球が出来ない。その事実が俺を更に苦しめていた。

「はあ…」

自然と溜息が出てしまう。

幾ら寝ようと首を動かしてみても全く睡魔は訪れない。こんな時ホームिंग娘。のCDがあればな、と思うが叶わぬ思いは儂く散った。

「荷田は確かアイドルに詳しかった筈だ。：頼んでみるか」

ボタンを押し、ベッドを少し起こして感覚の鈍い右腕を動かしメモを取る。

今思えばあの監督も中々の鬼畜具合である。利き腕を怪我しているやつに普通にメモを書かせるか?という話だ。まあ要望を聞

いてもらえるだけマシだとは思いますが。

メモを書き終えた所でゆっくりと息を吐く。

時間が余りにも進まないのが今日のことを振り返ることにする。

まず、全体を通して変化球のキレが悪かった。自分でも最近肘の調子が悪いのは分かっていたし、それなりにケアもしてきた。それでもやはり、限界は来るのだなと身を以て学ぶことになった。

「アイツ…投げられるようになったのか。いや、アイツの事だ。まだ無理だろうな」

独りそんな言葉を落としてみる。アイツ——橘みずきとは思えば腐れ縁だ。リトルリーグ時代に顔を合わせ、そこから向こうが突っかかってくるようになった。

この間の試合の時に、あんまりしつこいのでスライダーのコツを覚えてやったがその自分がこのザマとはな。

そう言えば——スライダーと言えばアイツも居たな。まだ俺のことを憎んでいるんだろう、もう後の祭りだが。

試しにと、腕を振るうが激痛が走る。何やってんだアホと、嘆くが時既に遅し。

——湊叶のやつ、心配しているだろうな。

あいつはしつかりしている様に見えて意外と脆い。何も起きてないと良いが。

色々考えているうちに自然と眠りについていた。

*

目が覚めると時計の時刻は5時30分を指していた。身についた習慣は恐ろしいなと軽く笑を零す。段々と日が昇って行く様子を見るのは一体いつぶりだろうか。生き急いでいた訳では無いが、時にはゆっくり止まる時もある必要らしい。

何も出来ない身に早起きは辛かった。ただただ暇だった。苦痛の2時間が過ぎた所でようやく楢垣先生が現れた。

「おや、おはようございます。よく眠れ…無かったんですか？」

「身体を動かさずじまっていたよ」

「普段運動している人が良くなるものです。貴方は私が思っている

より早く回復しそうなので軽い睡眠薬を今日の夜渡しますね。翌日からは軽くなら運動してもいいですよ」

「このペースなら試合に間に合いますか？」

「それはダメです。出来ません」

何だ、治るのが早いと期待させるだけさせて落とすのか。

「とりあえず1週間はここに居てもらいます。それが終わったら寮に戻ってもらっても結構です。今は身体を休めましょう」

それから少しして軽い朝食を食堂のおばさんが届けてくれた。

「昨日見かけないと思っただらまさかこんなことになってるとはねえ。直ぐに元気になれるよう私が腕によりをかけて作ってやるから待ってなー!」

「感謝します」

「アンタの事だからこれだけじゃ足りないだろうと思っただけも持ってきたんだ。お腹が空いたら食べるといいよ」

そう言っただけで売っている数量限定のパンも手渡してくれる。その事にもお礼を伝えると、おばさんは笑顔で去っていった。

「失礼します」

おばさんとほぼ入れ違いで部屋に来たのは湊叶だった。

「おや、天道君。早いですね」

「監督に亮が目を覚ましたって聞いたんで」

「時間は大丈夫なのか？」

「ん、大丈夫。半までに教室に付けばいいからさ」

偶には朝練休んでも罰は当たらないでしょ、とわざとらしく肩を竦める。

「で——結果はどうだったの？」

さつきまでとは一転、急に真剣な表情を作る。

「ああ、そうだな。端的に言うとな俺はもう投手が出来ない」

「…え、嘘だろ？」

「それがどうにもほんとはいい。全身打撲もしてない、全治3週間との事だ。医療経験豊富な桧垣先生が言うんだ——ほぼ間違いはない」

「な、何で…先生！亮は…もう投手が出来ないんですか!？」

湊叶の言葉に松垣先生は苦虫を噛み潰したかのような顔になり、ゆつくりと首を縦に振る。

「ここまで取り乱している湊叶を見るのはいつ以来になるだろうか。

「湊叶、少し落ち着け」

「…落ち着ける筈が無いじゃん。亮は何も思わないの?」

「それは俺だって感情が無いわけじゃないから悔しいさ。でも、もう野球が出来ないって訳じゃあないんだ」

「…つ、僕には亮の強さがよく分からない…早く治して。…また来るよ」

足早に湊叶が去って行くと松垣先生が言葉を落とす。

「珍しいですね、彼が荒れるなんて」

「あいつは、自分より他人を心配できる優しい人間ですから。俺が思った以上に平気な顔してるからそれが理解出来なかったんじゃないかなって思います」

「なるほど。確かに貴方は自分の現状に左程驚いていないように見えます」

「驚くというか、充分凹みましたし、確かにもう投手が出来ないのは悲しいです。でも——まだ野球が出来る。それが分かっているなら前に進むだけですから」

「実に合理的な考えですね。——腕の回復には力を入れます。頑張りましょう」

「はい、お願いします」

*

「今日で約束の1週間が経過しました。それにしても君には驚かされてばかりです」

「牛乳とイワシが効きましたね」

「…それで骨が治るなら医者は苦労しませんよ」

松垣先生はやや呆れ顔で言葉を返した。 実際問題、あながち間違っただけは無いですか?」

「さて、もう寮に戻ってもらって構いませんが——変な事は考えて無

いでしようね?」

「変な事と言いますと?」

「:質問に質問で返すのはマナー違反ですよ。まあいいです。くれぐれも無理をしないように。もし無理をして悪化するようなら私はもう治療をしませんからね」

「そんな職務放棄しないでくださいよ」

「冗談です。私の実験に付き合ってもらいましようかね。ええ、人体実験です」

キラーンと、松垣先生の眼鏡が輝いた気がする。この人なら本当にやりかねないから恐ろしい。

「本当にありがとうございます」

深々と礼をしてゆっくりと部屋から歩みを進める。

「:はぐらかされてしまいましたか。頭もかなり回る様ですが、彼が北乃君に報復する様子は無さそうですね」

保健室から移動の際に身体の状態を確認したところ少し筋力は落ちていたようだった。腕は落ちやすいという話を聞いたことがあるが、どうやらその様だ。

「購買で何か買っていくか」

手持ちのペラを使い、購買でカロリーバーを購入する。こうやって既にカロリーを補給していく所が一流への道と俺は思っている。まあ取りすぎてもダメなのだが。

流石に暫くは大人しくしていようと考えながら歩いていると寮に着く。今日は練習日だ。従って現在寮には俺独り。

そう思っていたんだが

「おかえり亮」

「湊叶——お前、練習は」

「君が帰ってくるって言うのに独りにさせちゃ可哀想だと思つてさ」

湊叶は椅子を反転させ、両手を上げてやれやれと大袈裟な仕草をとる。

「グローブを磨いていたのか。久しぶりに見たな」

「監督が『あいつは一旦野球から切り離して心身共にリラックスさせる』って言うからさ。そりゃあ見るのも久しぶりになるよ」
「なるほど。今合点がいった」

メモに、野球道具を書いたが回つてこなかったのはそういう意味があつてだったのか。確かにグローブ等があれば、俺の頭の中は野球一色になっていたに違いない。まあ普段もその様なもののだが。

「…湊叶」

「ん？どうしたの？」

しまった、と言葉を落とした後で後悔した。ここで下手な事を言えばこの間の様にまた荒れるかもしれないと言うのに。

湊叶が練習に参加していないという話は聞いていた。だから今日残っているのもそれが原因だと考えていたというのに。

思わず唇を噛み締める。時間が戻ることがあるなら戻れと切実に願うだろう。

「言っておくけど、謝つたりしたら怒るからね」

「…は？」

「は？じゃないよ。確かにこの間は突然のこと過ぎて取り乱しちゃったけどさ——もう腹は括ったよ」

予想していた事とは大きく異なることが今日の前で起きていた。

そう、俺はまだ湊叶の心が荒れていると思っていた。俺の目の前にいるこいつは本当に優しい心の持ち主だ。だから心は強く、そして脆い。特に今回の事件は、突然過ぎて余りに現実味を帯びていない。当事者の俺が言うのもおかしな話だが…。

「亮は前に進むって決めたんでしょ？だったら僕も前に進まなきゃ。そりゃあ今でもあの事件の事は腸が煮えくり返るくらいムカつくけど、時間は戻らないからね」

「ああ…そうだな」

そう言葉を落として俺は右肘に触れる。正直不安はある。言葉で強がってみても、心の底ではもう投げられないんじゃないか、と

いう考えはあった。

「——君は才能の塊みたいなものだからね。絶対に投げられるようになるよ」

湊叶はその考えを読み取ったかのように語りかけてくる。

参ったな、落ち込んでいるのを励ますくらいの気持ちでいたんだが、どうやら逆になりそうだ。

「頑張ろう亮」

「ああ、そうだな」

お互い笑いあつた後でふと自分の机の上の変化に気付く。

「なあ、このグローブは何だ？」

俺の言葉に湊叶はにやつと口角を上げる。若干悪い笑にも見えるが。何かこう、小馬鹿にしに来てるような感じだ。

「やつと気付いた？亮は野手としても試合に出てたけどそれは一塁手ファーストだったでしょ？だから内野用は持ってなかったなあって思ってさ。だから、それ、新しいのを用意したんだ」

「確かに持つてはいなかったが、グローブつてそんなに変わらないだろう？それに、こんな高価な物使えん」

「はい？馬鹿なの!?君は今まで何をして生きてきたの!グローブがそんなに変わらない?何言ってるのさ、大有だよ!めっちゃ変わるからね!」

カチツと何かスイッチ音の様なものが聞こえた気がしたが気のせいだろう、そう思いたい、そうであってくれ。

「いい?内野用のグローブは基本的にポケットが浅く出来てる。それは捕球の後素早くボールを掴む為の工夫だ。一塁手だつて使っているミットは変わった形状をしているだろ?あれはグラウンダー性の送球を捕球しやすい様にとか考えられているんだ。わかりやすいのキャッチャーミット——」

∴地雷を踏んだ。 そうだ、こいつは博識だった。 ∴今回は俺が無頓着だったのを認めざるを得ないが。

「まあとにかく!無頓着な君にグローブの有難味を知ってもらおうという良い機会が出来た、ということぞ!」

一通り説明を終えた後、はい、と湊叶はグローブを手渡ししてくる。

手に取ってまじまじと見つめてから言葉を落とす。

「…軽くないか？」

「特別仕様その1。素材は極力軽量化を測っています！なのに皮は強靱ときた。もう最高のグローブだよね！」

満面の笑みを浮かべてトリップに入った湊叶は置いておいて、ゆっくりと左手にはめる。大きさもピッタリだ。

全体は黄色で統一されており、ネットの部分は編み込みになっており、黒とオレンジと色が映えている。左手を抜いて気付いたが、そこには黒地の上に赤字で「氣持ち」と刺繍がしてある。先ほど述べた通り、サイズはピッタリでオマケに軽い。型もある程度仕上がっており直ぐにでも試合で使えそうなくらいであった。

「それにも、これは一体どうして？」

「ちよつとしたツテがあつてね。負けるなつてさ」

「…こんないいもの、本当に使つていいのか？」

「うん。『エラーしたら承知しないんだから』つて伝言も頼まれてたから伝えとくね」

「はは…益々頑張る理由が出来たな」

「大変だねえ」

「こいつ、人事だと思つてるな。おい、俺はお前が萎えていたことは知つているんだぞ。誰に慰めて貰つた？神条か？神条だろう、そうだよな!？」

「げ…何で紫杏との事を知つているの！まさか…高科さんに情報が回つたのか!？」

「ふつ、引つかかつたなバカめ」

「しまった…カマをかけられた…!」

「おまけに神条に対しての呼び方が神条から『紫杏』に変わつていてきた。何かあったことは間違いないようだな」

「くつ…一思いに殺せ！」

「アホかお前は…」

目の前のテンパっているアホを見ていると思わずため息が出る。すつかり毒気を抜かれてしまった。

「湊叶」

「ああ、もう最悪だあ…」

「おい、湊叶」

「え、あ、何…」

「済まない。お前には感謝ばかりだ」

「何をいきなり言い始めるのかと思えば気持ち悪い。そんなこと気にすることないのに」

やや照れているのか、髪先を弄りながら答える。お前がそう言っても、これは俺の本心なんだ。心の底からそう思っている、有難うと。

「えっと、どうしたの？」

「いや何、さつき高科に情報が回ったとかどうとか言っていたのを思い出してな」

「まさか…」

「ああ、そのまさかだ。神条に詳しく話を聞いて伝えることにしよう」
「それだけはダメだって!!!」

夏はもうすぐ始まる。でもこのチームなら大丈夫だろうと思う。俺は、今俺が出来ることをやろうと思う。時間はかかるかもしれないがゆっくりと進めたらいいと思うんだ。

第16話 一步

*

もう直ぐ夏の大会予選が始まるという頃、亮は段々とだが確実に回復に向かっていた。

この分なら打撃面だけでも期待できるんじゃないか、と淡い期待を寄せてみるもそれは亮の代わりにベンチ入りした荷田君の扱いが酷いものになってしまふ為、やはりその辺りの調整も兼ねて予選は出場しないというのが決まっていた。頼れる打者が居ない中で、翔馬の居る星英を倒さなくてはいけない。これは気合を入れる必要があるな、と思うがここに来て最近調子を崩している者がいる。

——佳月信弥だ。

「い、胃がキリキリする」

「あー…また彼女か」

「彼女て言うな！」

今話題に出ている少女が現れるようになったのは一体何時からだろう、と3塁側ベンチの奥の通路からこちらを見つめる某カバ系妖精の少女とロングヘアアの茶髪の少女の姿を見て言葉を落とす。

彼女らの名前は左から春田蘭^{はるたらん}、三橋妙子^{みはしたえこ}と言う。春田さんの名前は聞いたことが無かったが、三橋さんの方は何回か名前を耳にしたことがある。頭脳明晰で、自治会入りを何回か断っている方だ。あの紫杏が諦めざるをえないということは、相当意思の強い方なんだろうと思う。

さて彼女らのどちらが信弥を悩ませているのかと言うとそれは先に紹介した春田さんである。彼女は話によるとまあその所…謂惚れやすいという性格らしい。

「あかん！集中できん！湊叶！走ってくるさかいゲージ使うてええよ」

「うん、ありがとう。…無理はしたらダメだよ？」

「なはは…それが出来たらええんやけどなあ」

普段の様子からは想像出来ないような暗い表情を作りながらラン

ニングへと切り替えていった。

春田さんが信弥の事をこうも連日の様に見に来るといふのは、どうやら信弥がやらかしたらしいという話だ。

『何と言つてもこのナオつちが手に入れた情報ですからね！信びよう性はバツチリですよ！』

と、とある緑髪の自称新聞記者からの情報なので確かな筋らしい。

信弥は普段あっけらかんとしている様な多らかな性格の持ち主である——が、自分のペースを崩されるのをとても嫌う傾向があった。

良く言つてマイペース、悪く言うると自己中心的……とはまでいかないがまあそんな所である。

スイツチが入るとあの大河内先生ですら言葉を返せなくなる、と言えは話は早いだろうか。

そう、彼女——春田蘭さんは、信弥のペースを崩してしまったのである。

居残り練習をしており、最後まで残っていたということでグラウンドの整備をしていたところあの子が話しかけたらしい。

それくらいの事で、と思うかもしれないが僕たちにとってグラウンドは聖地と言つても過言では無い場所だ。そんな所にいきなり関係の無い女性が入ってきて、折角整備した所を荒らされたら人はどう

思うか——そう、芽生える感情は怒りだ。僕はまあ、軽いもので終わるかもしれない。が、信弥は信弥で僕では無い。

恐らく育ってきた環境の関係もあるのだろう。宗太もグラウンドに対する思いは強い。

その注意をする辺りで、どうやら信弥は春田さんの逆鱗に触れてしまったらしい。

仮にも勇気を出して言葉を紡いだと言うのに信弥と来たら、付き添いである三橋さんとの会話を始めたのである。確かに三橋さんの

ルックスは整っているとは思うけど、仮にも想いを伝えに来た人の前でね……あ、先に信弥を怒らせたのはあちらなので一概に何も言えなくなつてしまった。

とまあ、この様な事情で春田さんは恨みを込めた視線を信弥に送り

続けているというところだ。

：何だかそれを見ている僕まで胃がキリキリと痛くなってきた気がする。

既に何人か同じ症状を訴えかけている人もいるので気のせいでは無いのだろうか：

大会が近い中、これが収まり信弥の調子も復調するといいんだけど。

*

どうやら僕の心配は杞憂に終わったらしい。

大会が始まると信弥は見事復調して見せた。

1回戦の相手は近年初戦敗退が続いている平面高校。所謂格下だ。絶対に取りこぼせない。

この試合で信弥は4打数3安打2打点と猛打賞を記録し存在感を示した。

因みに僕は3打数3安打1四球という結果である、出塁率10割どんなもんだい。

因みにスタメン出場者は全員安打を記録している。

投手陣の方はと言うと、寺河さん5回、勝利4回という系統で繋ぎスコアは14-0と圧勝することが出来た。

監督から言わせてみればまだまだ足りないらしいが…。

とは言え1勝を飾ることが出来たのは大きいと思うし、このまま波に乗ればチームにも勢いが付く。躓かず、1戦を大事に戦っていきたいと思う。

その後の試合も順調に駒を進めていき、試合は準決勝を迎えた。

対戦相手は——鉄砂高校。

今年頭角を表してきた高校だ。

何でも1年生ながらもエースを担うのは、元プロ野球選手、佐藤勇太さんの息子 佐藤翔太君らしい。

坂内さんによると注意しなければいけないのはタイミングを崩しに来る超スローボール。

この山鳴りの球が打ちにくい、と言ったらありやしない。

山鳴りの球と言うのは、従来の軌道とは違い線で捉えることが極めて難しくなる。つまり、点で捉える打撃は非常に厳しいものだというのが容易に想像ができる。

真つ直ぐ水平に来るものならそれに対して平行になるなる様にバットを振れば大抵は捉えることが出来る。が、山鳴りとなると話は違ってくる。

普段のスイングが身に付いている僕らからするとこの山鳴りの球は苦手らしい。

緩いボールというものは僕たち打者の打ち気を誘う。大きいのを打つというイメージを少なからずしてしまう為、振りがいつもより大きいものとなってしまふ。その為山鳴りと相まってボールの上をバットが捉えてしまふ。

結果は見事なゴロの山だった。

7回まで何と無安打ノーヒットに抑え込まれてしまふ。これにはもう車坂監督はカンカンである。守備の方では勝利が珍しく四球を出してしまい、なんやかんやでそれが三塁に進み、次打者の弱い内野ゴロで失点を許してしまつた。

打撃面が悪いので守備のリズムに悪影響を及ぼしているのだ。

ここで車坂監督は動きに出る。

1塁を守る岩田に代えて、十彩を起用してきた。

そして、これが型にハマつた。

キーン！と快音が響き、打球は中堅手正面へと弾き返される。

この打撃を見て僕たちは漸く、大振りという呪縛から解き放たれた。

超スローボールに加え、スローカーブ、パームボールと遅い変化球を持つ佐藤君だったが、伊達に「打の親切」として名は通っていない。修正は可能だった。

肘をしつかり身体に引き付け、ヘッドを固定し、腰で回転することにより、コマのように遠心力を保ちながらそれをボールにぶつける。そうするとスイングはシャープかつ、打球は鋭いものにへと変貌する。

この回に一挙8得点を挙げ、試合は勝負が付いた。目の前の欲に囚われて大事な事を忘れていた。僕たちはスタンドに居るみんなの分も戦っているということに。

後続の投手からも坂内さんが甘く入った直球を左翼中段に弾き返し、追い討ちをかける。

結果は9―1と、序盤の接戦が嘘のような差のついた試合になった。因みに勝利の完投勝利である。

超スローボールは間違いなく僕らを苦しめ、階段を1段進ませてくれた。ちよつとずつだけ成長していることを噛み締めながら皆、来週に控えた決勝戦VS星英に対して闘志を燃やす。

余談だが、高校に戻ってから鬼のような千本ノックが僕たちを襲ったのは当然の結果である。

*

「俺たちは今、何の為にここに居る——佳月」

「答えは1つ——星英を倒す為や」

「そうだ。俺たちは去年、途中まで主導権を握っていて逆転されたんだ。1度掴んだ勝ちを奪われたんだ、これ以上の屈辱は無い！また同じ気持ち味わいたいのか神谷」

「無論、やり返すのみ！」

「さあ、秋大の再戦リベンジの時だ。今日まで培ってきた力を全て出し切ろう。そうすれば結果は自ずと転がってくる。皆で甲子園に行くぞ！」

坂内さんの熱い言葉に「おう!!」っと皆で答える。気合いは充分、これ以上無いモチベーション夢の舞台で試合に挑める。

あと一步で甲子園へと手が届く。

ふう、と高鳴る胸の鼓動を抑えるために深呼吸を行う。中学の頃もそれなりに大舞台に立ったことはあるけど、それとこれとは緊張感がまるで違う。

星英ベンチを見つめるとバチツと火花が散るような感覚に陥る。敵も感情を剥き出した。

「この試合、勝って笑おう。さあ行くぞ！」

坂内さんの号令と共に駆け出す。試合が始まるこの挨拶から勝

負は始まっていると言つてもいいだろう。

— AM 12:30 —

『夏の全国高校選手権大会三重県予選も遂に大詰めを迎えます。天気予報では曇り後雨というものでしたが、無事快晴となりました。2年生エース天道翔馬を中心とし、甲子園連続出場を狙う星英と対するのは近年実力を伸ばしてきている親切。「自分達は挑戦者です。ただひたすらに全力でぶつかるだけ」と親切主将坂内は答えます』

開始時刻となり、遂に試合が始まった。

『春夏連続出場を成し遂げている星英の中心は何と言つても2年生ながらにしてエースを任せられた天道翔馬投手でしょう。彼を中心に今年も羽生監督はチームをまとめ上げました』

段々と球場の熱気ホルテッジが上がっていくのが肌で感じられる。良い緊張感だ。

『対する親切の注目は1年秋からエースを担っている寺河君。今大会は準決勝で敢えて登板させないという完全にこの決勝に向けて的を絞つて来ています。昨年夏・秋と星英に対しては良い投球を見せています。今年度は2年生を主体にチームが仕上がっています。「打の親切」と呼ばれる力、それを打線が遺憾無く発揮すれば充分勝利の可能性は存在します!』

『守ります親切高校守備の紹介です。打席順に読み上げていきます。

中堅手 神谷君 二塁手天道君 捕手 坂内君 三塁手 佳月君—

『——ウグイス嬢に寄るスターティングメンバーの発表も終わり、いよいよ決勝戦——前回覇者星英高校 対 悲願の優勝を目指す親切高校の試合が幕を開けました。実況は私堀江良信でお送りします』

「1回表 星英高校の攻撃は 1番 二塁手 小鉢君 背番号 2」

「締まっていくぞぞお!」

さあ、火蓋は切つて落とされた。

*

『試合は予想通り、緊迫した投手戦となっています。天道・寺河両投手による好投はこの伊勢倉田山球場を湧かせます。「スミィ」を守り続

ける寺河投手に親切高校応援団は拍手を送ります」

試合は終盤7回に差し掛かり、電光掲示板には見事な0の羅列が並ぶ。

「へへ、球場ってこんな風になってるんだ。さてと、無事勝つてるとい
いんだけど、あれ？まだ点が入ってないんだねえ」

「いや准良く見てみる——左下だ」

先程球場に訪れた3人の内、テンガロンハットを被った1人の男が
指でその先を示す。

「あそこに“1”の文字があるじゃないか」

「わ、ホントだ！維織さん！湊叶君達勝ってますよ！」

「そう……それは、本当に良かった」

「ははは、維織さんはここに来てもいつもの維織さんだな。准、お前も
この落ち着き見習えよ」

「余計なお世話よ！貴方こそ、ヒモを卒業してまともな職に付くべき
だとは思わないの!？」

「な……痛いところを」

「ふっふっふっ、カブトムシ……臭い……」

「う、忘れもしない黒歴史……!」

「2人共……茶番は良いから早く座る。他の人の迷惑」

「う……すみません」

「それにしてもどうやって点を取ったんだ。パツと見て分かるくらい
湊叶君の兄・翔馬君は抜けた才能を持っている良い投手だ」

「——僅かなチャンスを物にしたんですよ」

手を顎に添えている男——朴木 仁 が思考に潜っていると不意
に左側から声を掛けられる。

「あれえ？美女が2人もいるって言うのにナンパなんてしてるの？こ
のヒモめ」

「何て事を言うんだ！っと、教えてくれてありがとう」

「いえ、この位造作もない事です」

「へえ、今時珍しい凄い礼儀正しい子だね」

「そう……准ちゃんよりも数倍」

「…維織さん酷い」

「幾ら准でも維織さんには適わないな」

小さな笑を浮かべてから朴木は女性に向き直る。

「あの良かったら詳しくその得点の場면을説明して欲しいんだけど」

「解りました。まず親切の先頭打者である神谷が動きを仕掛け——」

『さて、この試合の貴重な得点場면을振り返りましょう。親切は初回に揺さぶりを掛け、天道君に僅かな動揺が生まれたところに上手くつけ込みました。1番神谷君、2番天道湊叶君。この2人の働きが非常に大きいと見られます。密かに話題が上がっていた「双子対決」——同じ名字の時点で気付いてられている方も見られるかと思いますが、親切・天道湊叶君は星英・天道翔馬君の双子の弟との情報が入っています』

「2番天道——湊叶が粘りに粘った。普段のアイツからは考えられないような気迫でした」

『弟・湊叶の粘りが身を結び、兄・翔馬は四球を与えます。先頭の神谷君もバントジエスチャー揺さぶり見せるなどそれも貢献したかと』

「出塁し、牽制を2回程貰ってから単独盗塁を仕掛けました。これが成功しまして、3番主将坂内さんのライト前に落ちるヒットで得点です。本塁に突入する際、アイツは泥臭く突っ込みました。タイミングは際どいものだったのですが、湊叶の気迫が得点を呼び込んだのでしよう」

「流石湊叶君。こう言うのを聞くと成長しているんだねって思うよ！」

「本当にその通りだ。丁寧にありがとう、えっと」

「失礼、遅れました。私は——神条紫杏。湊叶とは高校の同級生なんです」

「なるほど。俺は朴木仁。俺の左にるのが夏目准で、右に座っているのが野崎維織さん」

「野崎…違っていたならば御容赦下さい。もしかして、NOZAKIグループのご令嬢」

「うん。良く知っていたね…貴女からは何か特別な力を感じる…大事に使ってね」

「その様に言って頂き光栄です。では、そろそろ。暑いので熱中症に注意してください」

「うん、大丈夫…長々とありがとう」

「神条紫杏ちゃんか。湊叶君と同級生ってことは2年生かあ、凄く大人びてる様に感じたね」

「ああ。博識で、准お前よりも礼儀正しい子だな」

「二度とその口が利けないようにするよ?」

「じよ、冗談だ…だからその威圧感を閉まってくれ…それより維織さん。あの子から特別な力を感じるって言ってたけどそれって一体?」
「詳しくは私もわからない…ただ、1つ言えるのは彼女には素質があるということ」

「ふむ…これが天才と凡人の違いか…感性がまるで違う」

「それは一旦置いておいて、今は湊叶君のチームを応援しよ。折角来たんだしさ〜」

「それもそうだな。このままの流れなら恐らくは——」

*

『8回表、星英今試合最大のチャンスです!守備のもたつきもあり、1死満塁の状況を作り出しました!今まで完封ペースの寺河大ピンチを迎えています。ここで打者は4番天道翔馬!この場面に球場の熱気は跳ね上がります!——親切高校ここで守備のタイムを使います。両チーム共に大事に行きたいところですよ』

「ここに来てあの集中力は恐れ入るな」

打席を外し、念入りにスイングの確認を行う翔馬を見て坂内が話す。

「1死満塁——ここは勝負に出るしかない」

「そうだな。満塁とは言え、我々にとっても守りやすいものがある。寺河気持ちで負けるなよ」

いつも寡黙な男、基宗が燃えていると親切ナインたちは思う。

「当たり前前だ!ここで引いたら絶対後悔するっていうのがあるからな

——皆、頼むぞ！」

「んー、どの角度で見てもこれってピンチだよね？」

「ああ…間違いないな。ヒット1本で流れが変わる。同点は勿論、2点目が入る可能性もある。それにヒットが出ないとしても、ワイルドピッチによるパスボール、守備の乱れ、加えて相手は4番と来た。厳しい戦いになるのは確実だろうな」

「やっぱりそうなんだ」

「ああ。三塁に走者がいる^{ランナー}って言うのが肝なんだ。さつきも言ったように捕手が後ろに逸らせば試合はそれで振り出しになる。それを避けようとするには——」

「落ちる球が使えない。逸らす危険があるから」

「流石だな維織さん。その通り、落ちる球はリスクが高い。そうなつてくると、かなりの絞られてくるんだ」

「なるほど、野球は奥が深いねえ」

「だから野球は楽しいんじゃないか」

「そんなの聞いていると野球したくなつてきちやつた」

「なら今度ビクトリーズの練習に」

「あ、ダメダメ！ピエロがいるわ！」

「あー…そうだったな」

『タイムが解けマウンドに集まった選手たちが守備位置^{ポジション}に戻ります。外野はやや深めに守り長打に警戒、勝負に臨むようです』

坂内から送られるサインに寺河は首を横に振ることなく力強く頷く。投手と捕手が信頼しあつて生まれる絆だ。

大きく振りかぶって投球フォームに入る。

走者は居るが関係無い。

満塁の為、盗塁の心配がない為だ。

寺河の初球——スライドフォツシユは今日一番のキレで坂内のミットに飛び込んだ。

「朴木さん、落ちる球は投げないって言ってたじゃん」

夏目准は自身の横に座る男に不平を漏らす。

「——なるほど、そう動いたのか」

「何がそうなの？」

「いいか、さつき寺河君が投げたものは確かに下変化の物だった。でもそれはな、ストライクからストライク」という後逸の危険が少ないものなんだよ」

その言葉に夏目ははつとした表情を作る。

「これは勇気あるリードだ。初球にあの球を見せつけることによって翔馬君は落ちる球もあるという思考に縛られる」

「絞った選択肢がまた増えちゃうんだ」

「ああ。さあ、どうなることやら」

「——ボール！僅かに外れました！これでカウントはフルカウントにもつれ込みます。大変な試合になってきました！フルカウントにしてワンアウト満塁！次が勝負の一球となるのか——」

またもサイン交換を一度で済ませ、寺河が投球に移る。

選ばれた球種は——ストレート。

胸元低めに向かう厳しいコース。

カーーン！と音が鳴り響いた。

「——セカンドツ！」

驚きながらも振り抜かれた打球は低く、投手寺河の左を抜けていった。

その打球の行方に両チームは異なる反応を見せた。

『打球は上がらずとも鋭さを保って寺河の左を抜けていく！これはセンター前に——あつと二塁手天道湊叶が良い所を守っていた！身体を落として逆シングルで追い付き、そのまま流れるように二塁へ送球！遊撃手基宗が受け取りベースを蹴って一塁へ！判定は——アウト！塁審に右腕が上がっています！4—6—3のダブルプレー！これは非常に大きなプレーが飛び出しました！大きく落胆する星英応援団と対し、親切応援団は割れんばかりの大歓声です！』

「つしやあああ！ナイス湊叶！」

『寺河君が大きく吠え、好守を見せた湊叶君を笑顔で迎えます！一方、打った兄・翔馬君は一塁ライン状で足を止め天を仰ぎます。打球の当

たりは悪くありませんでした、しかし、それを上回る弟・湊叶君の守備。双子対決はどうやら弟に軍杯が上がったようです』

「初球に落ちる球を使うことによつて坂内君は翔馬君に、フオーク系統もあるぞ」という餌を播いた」

「それは、餌は餌でも疑似餌」

「うん、だからさつき准が言ったように球種の選択肢が広がったんだ。一度起こったことは二度あるつて言うだろ？」

「二度あることは三度ある　しか聞いたことがないけど、維織さんあるの？」

「うん、ちゃんと存在する」

「へえ、朴木さん意外と博識なんだね」

「ふつ、見直したか」

「全然、だつてヒモだし」

「こほん…とにかく俺が言いたいのには脳裏を落ちる球がチラつくつてことさ。下変化の球は捉えにくいから脅威だしね」

「難しいけど、レベルの高い駆け引きをしてるつてことはわかったよ」
「あのストレートなら見送り、良くて弱いゴロだと思つたんだが、流石は天才と称されることはある」

———これからが楽しみだ。

『———追い込んだ！マウンド上の寺河非常に落ち着いています。ゆっくり辺りを見渡して呼吸を整えます。サインに頷き投球に移ります。ゆっくりと振りかぶつて第3球目を投げました———決まつたあ！空振り三振！試合終了！寺河完封勝利！最後は三球三振で仕留めて見せました！親切高校悲願の甲子園出場です！———』

第17話 夏のはじまり

*

『——甲子園行きを決めたのは、親切高校!!見事接戦をモノにししました!星英、連覇ならず!!』

「よっしゃあ!勝ったぞお!」

主審の判定に寺河さんはマウンドで声を上げる。

「やったな、皆」

マウンドに駆け寄った仲間に基宗先輩が語りかける。　こういう時も冷静なんだなって思ったけど良く顔を見てみると笑みを堪えているのがわかった。　その様子に思わず小さく笑いを零す、坂内さんも気付いたようだ。

「——俺たちの夏は続いている。このまま上り詰めよう」

勝って兜の緒を締めよ、との言葉通り坂内さんは既に先を見据えている。　対戦相手への礼儀も欠かさない。

「2―0で親切の勝ち!礼!」

ありがとうございます、と礼を終えてから漸く実感が湧き上がってくる。

——星英に勝ったんだと。

「湊叶」

電光掲示板を眺め、感慨に浸っていると背後から声をかけられる。

——この声を聞くのはいつ以来だろうか。

「翔馬…」

振り向いた先に居たのは自身の双子の兄——天道翔馬だった。

「1つだけ言っておく。今回だけだ。俺たちが負けるのはな。——次は星英が勝つ」

「違うよ翔馬。次も親切が勝つ」

「ふん、言うだけなら誰にでも出来る。∴最後に、もう1つだけ。——

甲子園、頑張ってこいよ」

「——当たり前だろ。翔馬たちの分までやりきってくるさ」

僕の言葉に翔馬は笑みを浮かべてベンチにへと歩いて行く。　左

手に力が入っているのが遠目でもわかる——それでも涙を見せないのはエースとしての意地なんだろうなって思った。

翔馬がベンチに入って行くのを見届けてから僕も向きを変え、ベンチへと引き返す。

「湊叶」

また不意に声をかけられる——亮だ。

「やったな甲子園」

「うん。やっぱり先輩は凄いなって思ったよ。坂内さんは翔馬の動揺を逃さずに2打点だし、寺河さんは完封だし、基宗さんもずっと落ち着いていた。何か、凄い人たちと野球をしてるんだなって強く思ったよ」

「そんな事言われると、今すぐにでも戻りたくなるな。——もうすぐ俺もそっちに向かう」

「うん、待ってるよ」

スタンドとグラウンドという近い様で遠い距離。

去年の夏は僕がスタンド席からマウンドに立つ亮を見ていた。

今年は2人で立つつもりだったけど、形は去年と逆のものになってしまった。

その事がこの僅かな距離に重みを感じさせる。 気持ちを負おう
ということとは誇らしさと同時に責任を強く負う。 その事がただ身に染みた。

——絶対足は引つ張らない。

そう強く決心して僕は球場を後にした。

星英高校 対 親切高校 —— 親切高校 勝利

星英 0 0 0 0 0 0 0 0 0 4 1

親切 1 0 0 0 0 0 0 1? 2 6 1

坂内大也 4 打数3 安打2 打点1 本塁打

*

熱戦の余韻が冷めきらない翌日、紫杏に労いの言葉と共に新聞を手渡された。

——内容はこうだ。

『星英高校、まさかの予選敗退。2年生エース天道翔馬2失点。8回2失点と粘りの投球を見せるも打線は親切・寺河梓真の前に沈黙。親切は6対4で星英優位という下馬評を覆し、この投手戦を制した——』

『双子対決!!』——制したのは弟・湊叶の親切高校!星英主将・小鉢涙無し「完敗です」——』

『熱戦制す!鉄腕・寺河9回4安打13K!3年目にして遂に才能が開花!女房役・主将坂内も2打点!試合を2人で決めた!——』

と、数種類の新聞があるがどれも書き方は違うものだった。

「大変な試合だったな。見ていてハラハラしたぞ」

「そうだね。僕もずっと緊張してたや」

「初回の立ち振る舞いから見てそうは思わなかったがな」

肩を疎める動作をして紫杏は少しおどけてみせる。

「あー、粘ったやつか。あの時は集中してたからなあ」

「朴木さんたちも褒めていたぞ」

「朴木?」

はて、とここで僕は首を傾げる。

朴木なんて名字は早々いないし、心当たりがある人物が一人いる。

「その人って、風来坊みたいな人?」

「何をもって風来坊と定義しているのかわからんが、特徴と言えばテ

ンガロンハットを被っていたな」

「…会ったのってその人だけ?」

「夏目准さん、野崎維織さんといった方々と知り合ったよ」

「あー: そうなんだ」

「どうかしたのか?」

「ちよつとね。——嬉しいなあ何て思ったりしてさ」

「そういう事か。自身の知人が応援に駆けつけてくれるのは頼もしい。それに、力になるものな」

紫杏の言葉にうん、とだけ返して晴れ渡る空を見上げる。

——そっか、観に来てくれてたんだ。

維織さんはほんとにマイペースで、基本移動は家と書店と世納さん

の経営する喫茶店にしか足を運ばない。それはまるで遠前町から出るのを拒んでいるかの様だった。

だからこそ昨日の試合を観に来て貰えたというのは素直に嬉しいものだ。

朴木さんが徐々にだけど、維織さんを籠の中から連れ出そうとしてくれているんだな、という事実に胸が熱くなるのが分かる。

まだ始まったばかりだ。ここで満足してられない。

甲子園ではもっと頑張らないと。

准さんも観てくれているみたいだし、気は抜けない。

ほんと、やらかしてしまった時が怖いんだ…。

*

「はー、全く凄い勢いだな」

誰も居ない静かな屋上でふーっと、大きく息を吐き出す。

その主は乾勝利だ。

予選準決勝では完投をする等と甲子園出場の大きな原動力となった。

決勝戦では中盤以降、ブルペンに入り「いつでも登板できる」という圧力を星英に与えていた。

当然新聞にもその事は記載されており、2年生ながら中心メンバーとして活躍した勝利らは教室で歓喜の渦に揉みくちゃにされた。

現在勝利らのクラスに居る野球部員はと言うと——乾、越後、佳月、

神谷、天道、友沢、荷田、本庄といった面々である。

騒がれるのも無理はないだろうという話だ。

その中でも特にナオが凄まじいものだった。

自分の事のように喜んでくれるのは嬉しいが、ちよつと行きすぎだというのが勝利の心境である。

人の声援や期待を浴びることに慣れていない勝利はただただこういう時は、はにかむことくらいしか耐え忍ぶ術を知らない。

中学時代にもっと耐性を付けておくべきだったと自嘲してみる。

今更どう思おうと過去は変わらないのである。

とりあえず少し休もうと、足早にベンチにへと進み始めたところで声をかけられる。

「お久しぶりです乾君。随分と疲れているようですね？」

声の主に向かって成るべく笑顔を作りながら返答する。

「ああ。参ったよ、あんな経験は初めてだ…」

「クスクスクス、何だかこんな風に疲れている乾君は面白いですね」

「ははは…まあさらが笑ってくれるなら俺はそれでいいよ」

「ふふ、あ、遅れてしまいました。——甲子園出場おめでとうござい
ます」

「ありがとうさら。小学校からの夢がもう叶ったもんだから、何だか不思議な気分だよ」

「それだけ乾君たちの力が上がったという事ですよ。私は向こうに駆けつけることは出来ませんがここから応援してますね」

「うん、ありがとうさら。今は気合を入れればどこまでも入る気がするし、凄く気持ちが滾っているんだ。この調子で臨みたいって思うよ」

「お勉強の方もそれくらい熱心に取り組んで貰えると助かるのです
が」

「ぐ…それは手厳しいな」

「クスクスクス、冗談ですよ」

それから2人はたわいもない話に花を咲かせていた。

——ほんと、前と比べて笑顔が増えたな。

以前のさらは名前を呼ばれるだけでそれはもう顔をリンゴのように赤くして走り去って行ったものであった。それと比べると随分と慣れたように思う。

話し始めてから何分が過ぎただろうか、いずれにしよ屋上に到着してから幾分かの時が流れた。

嵐前の静けさとは、この事を指すのかもしれない。

その緑色の少女は勢い良く扉を開け、屋上にと姿を表した。

(…何か音がするなあって思っていたらやっぱりナオか。これは大人しく出ていくべきだな。)

さらに小さな声で「またな」と伝え、奥からナオの前へと姿を見せる。建物の構造上、勝利とさらに居た場所はナオの位置から丁度死角になっていた。

「あー見つけましたよ勝くん！随分とナオっちから逃げ回ってくれましたね〜」

「違う違う、俺は人混みが苦手だから少し風に当たりに来ただけだよ」
「むく、それなら仕方ないですね」

ちよつとテンションについていけなかったと言うのはグツと堪える。

「とにかく、教室に戻りましょう。皆待ってますよ？」

「あ、ああ、わかったから袖を引っ張るな！服が伸びる！おい、ナオ：ぬあー！」

勝利に有無を言わずナオはどこにそんなに力があるのかと思わせるような怪力を見せ、勢いそのまま勝利を連れ去ってしまった。

「乾君は…おね——高科さんと付き合っているのでしょうか？」

残された少女——芳槻桜空よしづきさくらから発せられた声は風に運ばれ大空へと消えていった。

*

ここ親切高校にはちよつとした森が校内に広がっている。それは本来男子寮と女子寮を隔てる目的で作られたものであったが、校風が変化し、校則の変化も伴ってその森はかつての要塞の様な使われ方はしなくなっていた。

森林の中を少年2人が歩いている。

——神谷宗太と本庄翔である。

久しぶりの休日、2人はそれを先日の決勝戦ですり減った精神を回復する為に使用していると言ったところだ。

暫く歩いた所で2人の歩みが止まった——別れ道だ。

「翔は、海を見に行くんだっけ？」

「うん。海は僕を独りにしてくれるからさ」

「何か深いこと言ってるっほいけど、あんまりわからないな」

宗太は小さく笑い、翔に手を振って森の奥へと進んで行く。

その姿が見えなくなつてから翔はひっそりと呟く。

「――嘘も方便つてね」

・
・
・

翔と別れた後、宗太は深い森の中を歩いていく。キャンパスを覆う大きな森とそれらを囲う壁の存在。それが大きくこの学校の特色を示していた。この学校の実態が世間に流れていかなかったのはこう言つた徹底ぶりからであつた。

――そんな森の中に1つ奇妙な空間が存在する。

本当に森の奥地、しかし女子寮から適当な距離を保っているその場所は地面がしっかりと踏み固められて草は生えておらず、木の葉や枝が引き千切られてその空間には日が差し込めていた。

この場所は元来この様な状態では無かつた。元々木々が少なかつたという所はあるかもしれないが、それにしてもこの様に開けていることは無かつたのだ。

「…はあ、はあ…ふっ！」

この場所を作り上げたのは現在この場で何やら動作を繰り返している1人の少女だ。

彼女の動きは独特で、それは所謂古武術と呼ばれるものであつた。

動作の主――大江和那はこの古武術の正体である――イバラキ流短槍術の継承者である。

彼女はここでの修行を日課としており、槍の代わりに物干し竿を用いた鍛練は木々を相手にして力を付けていた。

彼女の姿を確認し、宗太は息を潜めて近くにへと歩み寄る。

そして息を深く吸い、不意に声を発する。

「こら…ここで何をしている！…この場所は生徒は立ち入り禁止となつているはずだ！」

「ひっ！か、堪忍や〜」

「ははっ！やっぱり、思った通りの行動を取つてくれたな」

上手くいったと、意地の悪い笑みを浮かべて目の前でうずくまつている少女を見る。

「な、何や宗太君かいな！心臓が飛びでるかと思つたやん！3年は寿

命が縮んだ!どないしてくれるねん!」

「馬鹿だなあ、心臓は飛び出ないし、寿命は縮まないぞ」

「言葉の綾ってやつや!」

はー、全くと言いい、頭を擦りながら和那は言葉を続ける。

「それより、宗太君こんな所に居てええの?」

「何でそんなこと聞くんだ?」

「いやだってその、甲子園出場を決めて野球部は今校内のそこら中で引つ張りだこやん?」

「何だその事か。それならもう充分喜んだし、言葉も受けた。いつまでも浮かれている訳にはいかないからな。ミーハーの担当は湊叶や信弥に任せるさ」

「ミーハーって、そこまで言わなくてもいいんとちやう?」

「んー、少し言い過ぎたか?俺は思ったことをそのまま口にしただけなんだがな」

神谷宗太は現実主義者である。

それは物事を鼻目無しで捉え事が出来るという事だ。

宗太の性格はとても真つ直ぐ——自分に正直と言つてもいい。

思った事を隠さずに相手に臆することなく言葉を述べる様は真に自分を持つている者と言つても過言では無いだろう。宗太が最近自治会に顔を出すようになったのもその性格の為である。

「悪いな嘘が下手で」

「下手に誤魔化すより、余っ程その方がええよ」

和那は優しく語りかける。

宗太の言動は優しさから成り立っているのに和那は気づき始めているからである。

「ふーっ、実の所な、教室は騒がしいから逃げてきたんだ」

「何や、やつぱりそんな所やと思つてたわ」

「おろ、バレてたか。そういやこの間購買で——」

先ほど彼女に述べた「いつまでも浮かれている訳にはいかない」という言葉に嘘はない。

気負い過ぎるのもダメだが、しっかりと気を整えようという心構え

だ。

それをするには自身が心を許している人と話す等してリラックスするのがいいと宗太は考えている。それに、和那は武道家としての一面もある。心の保ち方等で得られることは多いだろう。

・・・

「相変わらずここは落ち着くね」

「翔か。——改めてだが甲子園出場おめでとう。本戦も是非頑張ってくれ」

「うん、もし出番が回ってくるなら全力を尽くすよ」

「そうか。…座らないのか？」

「あ、うん、座るよ」

ザザーンと波の音が聞こえる。

そう、ここは文字通り断崖絶壁に位置している。

親切高校の立地は特殊になっており、女子寮の更に奥に進むとその先には海が広がっている。

この切り立った崖に近づこうとする人間はかなり少ないと思う。だが、翔の左隣に座る女性——天月五十鈴は少し変わっていた。

『ここは何も無いところだが、不思議と落ち着くんだ。柵は無いし、確かに危険はある…しかし、それが良いのかもしれない…こうして崖の端に立っていると、自分という存在の小ささが垣間見える気がしないか？』

初めてこの場を訪れた際、五十鈴に述べられた言葉だ。

翔は決して学力が低いわけではない、寧ろ最近は何となく伸びてきており優秀と言ってもいいだろう。

それでも突然のこの言葉には困惑を示す他無かった。

「前に、天月…こほん、五十鈴が言ってくれたことがあるだろ。——自分という存在の小ささが垣間見えるって言葉。あれについて少し考えたんだ」

翔はついこの間、五十鈴を名前で呼ぶ許可を得たが、元々それほど女性と話すことが無い為まだ呼び捨てに慣れていない。

「…ほっ。」

「何となく言いたいことがわかった気がする。海は、自分を独りきりにしてくれるんだなって。自分自身について見直す場なのかなってさ——どう思う?」

「驚いたな。私もその考えとさして違わないよ。ここに居るとな——」

数十分くらい経過しただろうか、五十鈴は話を終えると満足そうな笑みを浮かべた。

「甲子園、私も応援に向かわせてもらおう」

「それは、尚更頑張る理由が出来たな」

「実はな、私の幼少期の頃の話になるんだが親友と呼べる友達がいたんだ。——その友達が進んだ高校が甲子園に出場する」

「え、何て高校?」

「球八高校——彼女とは瑠璃ちゃん、鈴ちゃんと呼び合う仲だった。突然引越してしまった為疎遠になっていたんだが…あの時は悲しんだものだ」

「そんなことがあったんだ…」

「気にしないでくれ。瑠璃ちゃんはその先で元気に過ごしているらしい。ついこの間手紙が届いてな。彼女の進学先が球八高校という事がわかったんだ」

「球八高校か…その子は応援に来るの?」

「野球部のマネージャーをしているらしい。運が良ければスタンドで会えるかもしれないからな。その面でも甲子園には期待している」

「…会えるといいね」

「…うん、先のことなのにもう楽しみにしている自分がいる」

「大丈夫、会えるさ」

——全力を尽くすだけだ。

太陽の光を反射して、銀白色に輝く水面を見て翔は強く心にそう刻み込んだ。

*

着々と日は過ぎて行き、遂に僕たち親切高校野球部は移動日を迎えた。

出発の前にと理事長、校長、紫杏と3人から激励の言葉を一言ずつ貰ってからバスに乗り込む。

応援団は自治会が抜粋し、試合前日に到着する予定となっている。甲子園大会は例年通り8月6日に開催されることが決定している。新たに選出された18人の状態は悪くなく、全国の強豪をどの様にして倒すかと心を研ぎ澄ませている。

...

帝王実業高校

「へえ、弟が出てくるんだ。久しぶりだな、なあ蛇島！」

「そうですね、シニアの準決勝以来…楽しみです」

蛇島と呼ばれた男に声をかけるのは、昨年度の夏の甲子園大会覇者である帝王実業の2年生エース——藤内直哉だ。

「親切と言えばあの友沢も進んでいたな。エースの寺河って人も良い投手らしいし、骨のある試合になりそうだ」

「そうなるといいですね（ククク、誰が来ようと優勝するのは我らが帝王実業と決まっている。なあに、邪魔をするやつは壊してしまえばいいのさ）」

善が存在すれば悪もまた居ると言うのは至極当然の話なのかもしれない。

「（精々頑張るがいい：友沢亮）」

友沢に対して優秀選手賞を奪われたという認識を持っている蛇島。その眼は紅く、そして鋭い物へとなっていた。

2年生左腕ながら最速144km/hを計測するエース藤内を要し、今年も帝王は優勝旗を獲りに行く。

...

聖タチバナ学園

「聖ちゃん新聞見た!？」

「ああ、見たぞ。三重からは親切が出てくるな」

「あの強力打線が全国の強豪にどれだけ通用するか見物だな」

「何余裕ぶってるのよ岬君！貴方は立ち上がりが課題なんだからそれを克服してから大口を叩きなさい！」

「…そんなつもりで言ったんじゃないんだけどな、いや参ったなあ」
「まあまあみずきちゃん、岬もそれは分かっているはずだよ。」

「ダーリン、貴方も素振りの手が止まってるわよ?」

「うっ…厳しいなあみずきちゃん」

天城岬はスロースターターである。

この前の親切高校との練習試合ではそこを付かれ、失点を許してしまったが秘めている能力は非常に高い。

1年生の頃から試合に出場している——試合慣れをした選手たちがどこまで伸び伸びと試合を出来るかが鍵、と監督である大仙はコメントをしている。

——注目は主将を務める神木 翼。

・・・

パワフル高校

古豪パワフル高校は復活をかけた大きな試合に勝利し、甲子園出場を決定した。

昨年度は予選決勝戦にてライバル校である「あかつき大学附属高校」に惜しくも敗れたが、今年は体制を立て直して見事に勝利を収めた。

中でも大きな原動力となっているのが4番としての仕事を果たす主砲——大力颯呂だろう。

今大会既に5本の本塁打を放つなどして注目を浴びている。3番に座る観月春や、5番に入った新1年生の東條小次郎も加え、打線に厚みが増している。

この打線を抑えるのは一苦勞となりそうと思われる。

投手も鈴木を中心に安定したものと仕上がっている。

・・・

球八高校

決して整っているとは言えない設備の中で戦ってきた高校が存在する。

その高校は人数が大会参加が認められる10人しか存在せず、圧倒的不利と呼ばれる中前評判を覆し、愛知県予選優勝候補であった海洋

学院高校を破って出場する。

その高校の名は——球八高校。

「はい、ドリנק。あんまり練習しすぎたらダメですよ?」

「サンキュ瑠璃花^{るりか}。わかってるって。——プロになるまで止まれないからな」

「あの約束を守ってくれるのは本当に嬉しいですけど、無茶だけは辞めてくださいね」

「大丈夫だよ。それに瑠璃花が俺の力になってくれるんだろ?——なら絶対に大丈夫だよ」

「…そうですね。貴方がそう言うんですもの、私はそれを信じます」

「ありがとう瑠璃花」

「おーい、いつまで惚気けてるんだ?キャプテンがノックしないと始まらないぞ」

「悪い悪い、今すぐ行くよ」

「…もうすぐ会えるね、鈴ちゃん」

伝説の少年野球チーム“ガンバーズ”を率いて、見事最後の大会で優勝を収めた時の立役者——柊和弥は今度は球八高校を率いて再び全国の舞台へと戻ってくる。

しかも今回は南雲瑠璃花も同伴だ。

以前よりも数段力が付いているのは目に見えるだろう。

今大会が初出場となる球八高校、どのように甲子園に旋風を巻き起こすのか。

「週刊パワースポーツ」——スカウトとは何か

*

季節は夏真っ只中——8月。この時期になると兵庫県西宮市のある場所に大勢の人々が集まることがある。

それは全国に数多く存在する高校野球部の中で——今年の夏の頂点を決める勝負が繰り広げられるからである。

この記事を読んでくれてる読者の方々は9割方存じている事だと思いが、万が一知らない方が目を通してあげてくれることもあると考え先述を述べさせてもらった。

今回、本来球団スカウトの立場にある私——影山がこの記事を書くことになったのは1つの理由がある。

記者とは違う視点——スカウトとしての立場からみた選手たち、甲子園の様子を書いてほしいとのことだ。

早速だが、私の視点から見た甲子園について記述していこうと思う。

*

我々にとって甲子園とは——選手の質がはっきりと表れる場だと認知している。スカウティングをするに当たって、選手の能力は非常に大事だ。

まず私たちスカウトという者は各プロ野球球団に所属している球界関係者の事を指す。

スカウトとは名の通り、自分が所属している球団に「有望な選手」を引き込むための係のことだ。

各球団のスカウトは、それぞれ10人前後存在し、北海道・東北、関東、関西、四国、九州といった各地区を担当している。それらのスカウトの目に止まれば、より選手の情報を引き出そうと、スカウトが試合や練習を見に球場等に足を運ぶことになる。

その年々で注目される選手は勿論変動する。

そこで重要視されてくるのは——如何に早く有望株の選手を見つけ、話を持ちかけるかにある。

ドラフト会議にて、指名された選手が入団拒否を表明することはまあある事だ。それを避けるために、なるべく早く目を付け、私たちは貴方の事をしっかりと評価しているということを示す必要があるのだ。

では我々スカウトがどの様な点で選手を評価していくか——まず投手から述べたいと思う。

投手として、スカウトの目に止まるポイントは投げるボールのキレ、速度そして、野球センスやスケール感の大きさ。

高校野球界にも、150km/hや140km/h台後半のボールを投げる投手が存在する。

140km/h台後半と言えば、プロ野球の投手の中でも速い方にあたるが、速い球を投げるからといって、我々スカウトの評価がそれほど高くないことも珍しい話ではない。

先程記述した様に野球センス——つまりこれからの伸び代等も重要な要素の一つを担ってくる。

良く「完成された」等と言った言葉が使われるが、我々からしてみるとそれはどうだろうと言う意見を持つ。

高い完成度を持つ投手は確かに存在する——これについては野手も同じく——ここ最近の投手で言えば2年前に甲子園を制した「あかつき大学附属高校」の当時のエースにして、現在猪狩カイザーにてプレーしている猪狩守が上がるだろうか。

しかし彼の様な存在は——非常に稀有である。

毎年ある程度騒がれる選手と言うのは登場するが、それでもある程度は底が知れているという者が多い。

——周囲の期待に応えようとし、自滅する選手は珍しくないからだ。それはつまり、余りに過度な評価の仕方は——選手を潰してしまふこともあるという事。

酷な事を言っているように見えるだろうが、そうではない。純粹にその選手の事を評価して判断をしている。勿論我々だってスカウトとしての誇りプライドをかけて、1位指名する選手を選出するが、そこには球団側の事情等も関係してくるということを示したがここに落と

しておくことにする。

その点で、猪狩守は頭抜けたモノを持っていた。

彼の様な存在で漸く「完成度が高い」と言えるのかもしれない。

一度高い者を見れば、それに類似するもので無ければならないという心理描写が働いているとも取れるが、目指す場所は彼だ。

それが誰が言ったか知らないが、彼の同年代を「猪狩世代」等と評するところに表れているのだと思う。

選手としての質——それを見極める為にも実際に足を運んで観察することが大事になってくる。

激戦を勝ち抜いてきた精鋭の集まりの勝負を見れる場所——甲子園はまさにその行為にうってつけなのである。

投手について続けようと思う。

プロ野球界には、140km/h前後のスピードでも、1軍で活躍している投手が多く存在する。投げるボールのキレが良かったり、抜群のコントロールを持つからだ。

先述の通りスカウトは、投手を見る時、球速よりもストレートや変化球のキレに注目をする。

例えばどんなに球速が速くても、ボールのキレやコントロールが悪ければ、プロ野球で活躍は出来ないからだ。

精密さは、プロ入り後にも磨くことは出来るが、ドラフト候補となる目安としては、右投手で140km/h、左投手で135km/h以上の球速があり、ボールにキレがあることが大きなポイントになってくる。

続いては打者にポイントを当ててみようと思う。これは守備位置^{ポジション}も多い為、様々な競争が行われる。

打力がある。足が速い。肩が強い。

この3点は非常に重要になってくる。

打球が速いということは、バットを振るスピードが速く、かつ、バットの芯に当てるのが上手いという証拠になる。

プロ野球の投手は、投げるボールにキレが存在する為——スイングスピードが速く、かつ、芯に当てるのがうまくなければ、入団しても

1軍で活躍することは難しいとされる。

変化球を打てることも大切だ。日本の投手は、変化球を投げるこ
とが多いので、アマチュアレベルの変化球を打てなければ、プロでは
必ず通用しないと云っても過言では無いだろう。

本塁打の多さは、相手投手の問題もあるので、あまり問題にはしな
いが、それでも無いより多い方が良い。勿論、全国大会で本塁打を
打てば注目されるが、それより重要視するのは飛距離。

日本には——遠くへ飛ばせる選手が少ない。

同じホームランでも飛距離の出る選手はスカウトの目に止まりや
すいのだ。

他にも色々な点は存在するが、大事なのは投手同様に野球センスと
呼ばれるものだ。私は思っている。

投手、打者を問わず、野球センスやスケールの大きさを感じさせる
選手は我々スカウトに期待を持たせる。

野球センスの良い選手とは、一般的に何をしても上手い選手的事
だ。あれこれ考えなくても、体が勝手に反応するような選手で、一般
的には「持つて生まれた才能」と言われる。

一言で言えば「天才」というものだろう。

スケールの大きさを感じさせる選手というのは、一般的に「やわら
かいバツティングをする」、「動きがしなやか」、「ひじの使い方が柔ら
かい」などといわれる技を持つ選手を指す。

身体の使い方が柔らかく、野球のプレーにも柔軟性が存在する。そ
のうえで、実際の身長より大きく見える選手は、スカウトの目にも止
まりやすい。等身大より大きく見えるというのはそれだけで武器
になる。

例・相手投手が近くに見える ↓ 威圧感が凄い 等。

結論として両者に求められるのは個々を強く示す——圧倒的な武
器が必要という事。

——どんなものでもいい。

我々スカウトを「これは中々」と唸らせることが出来る武器を持つ
ていること。

これが今後活躍していく目処の立つ選手の特徴だ。
色々述べたが、これらは選手を思っただけ述べていることだと言うことをどうか理解して欲しい。

私の記事に「何様のつもりだ」、「好き勝手抜かして」等と反感を持つ者も居ると思う。

そういう人たちは是非ともその熱意を野球にぶつける等して貰いたいと思っている。

我々スカウトとて数多く存在する野球ファンの一人なのだ。活躍する選手が増えればそれは大きな楽しみとなる。

強い気持ちを持って、野球に臨んでいる選手を見れる場所が甲子園。

純粹に勝ち負けを楽しむもよし。

自分の推している高校を応援するもよし。

しかし——もし敗北した場合等に過度なバッシングを与えるなどと言うのは控えてもらいたい。

自分が好んでいるからと言って、その高校の選手たちを責めることは出来ないのである。

彼らは彼らで我々には知り得ない努力を積んで、「その場」に立っている。

場に立っていない我々にその選手を侮辱する権利は決して無いのである。

願わくば——「尊敬」の気持ちというものを持つことを忘れないで欲しいと思う。

これはスカウトとしての言葉ではなく、野球ファンとしての純粹な心からの気持ちである。

重複するが勝負云々より、選手の質が試される場所。

我々スカウトはその様に甲子園を捉えている。

そこで練り広げられる激闘の数々、生まれるドラマと野球ファンを魅了するものが多いのも甲子園の魅力だろう。

長々と綴ってしまったが、我々スカウトも根っこは野球が大好きと言うことを知って貰いたい。

私の言葉に矛盾が生じていても、仕事と私情は違うと寛大な言葉で許して貰えると嬉しく思う。

最後にだが、今大会にて私が注目している選手を記述して行きたいと思う。

「彼ら」は中学時代の時から評価していた選手になる。

評価はCからSの区分で行っている。

藤内 直哉

・ 178 cm 75 kg

・ 左投げ左打ち

・ 投手 最速144 km/h スリークオーター

・ 帝王実業高校

・ U-15の日本代表。守護神として活躍。

・ 現在は先発完投型

・ 打たせて取るの省エネがモットー。しかし、大事な打面では三振を獲りに行く心の強さを持つ。

・ 横変化を好んで使う。

・ 球種はツーシーム、H^{高速}シュート、カットボールが現在知られている。

・ 直球に拘りを持つ。

・ 1年秋まではシュートのみだったが、オフにフォームを見直すことによりカットボールを習得。

・ 1年時、甲子園春夏連覇。

・ 評価 S

観月 春

・ 180 cm 75 kg

・ 右投げ左打ち

・ 投手 最速145 km/h オーバースロー

・ パワフル高校

・ U-15のエースを務めた。

・ 大きな縦変化「Vスライダー」が決め球。

・ 先発完投型

・ 打者としても非常に能力が高い。
・ 投手は鈴木もいる為、野手として出場することが多い。
・ 球種は直球とVスラのみ。不器用だが変化量はかなり多く、直球より精度が高い。

・ 評価 B+ (仮——現在は肩を怪我しているため。)

大力 颯呂

・ 185cm 80kg

・ 右投げ右打ち

・ 内野手 三塁手 (内野はどこでも守れる。)

・ 猪狩世代「波羽 風落」と同じく「パウプロ」のあだ名を持つ。

・ 天性の飛ばし屋。

・ チャンスに非常に強い。

・ 強靱な手首 (リスト) を持っており、それを活かして逆方向にも強い当たりを放つことが出来る。

・ 中学時代3連続本塁打を記録したことがある。

・ 評価 A+

寺河 梓真

・ 182cm 70kg

・ 右投げ右打ち

・ 投手 最速147km/h

・ 親切高校

・ 中学時代から光るモノを感じさせていたがここに来て漸くその才能が開花。

・ 珍しい球種「フォッシュ」を操る。

・ 指につけた滑り止めをふっと、吹き飛ばす癖がある。(これにより、スイツチが入る。)

・ 捕手坂内と息ピッタリの投球を見せる。

・ 奥行きのある存在を使い始めた。

・ 評価 A

坂内 大也

・ 175cm 70kg

- ・ 右投げ右打ち
- ・ 親切高校

・ 強肩硬守の扇の要。

・ 大きな試合に出場するのは今回が初めてだが、この世代のNO.1捕手と言っても過言では無い。

- ・ 監督、仲間からの信頼は厚い。
- ・ 右打ちが上手く、安定感がある。
- ・ リードに定評有り。
- ・ セカンドへの送球は2秒を切る。
- ・ 女性ファンが多い。
- ・ 評価 A+

友沢 亮

- ・ 182cm 78kg
- ・ 右投げ両打ち
- ・ U-15 日本代表
- ・ 投手 最速135km/h (1年時)
- ・ 親切高校

・ 中学時代投手として活躍していたが、高校^現2年夏^在は野手に転向している。

・ 走攻守揃った天性の安打製造機

・ 高校生にして独自のスタイルを確立している程才能を感じさせる。

・ 来年のドラフトでの上位指名が確実にされている。

・ 評価 A+

天道湊叶

- ・ 172cm 60kg
- ・ 右投げ両打ち
- ・ 内野手 (遊撃手・二塁手)
- ・ 親切高校
- ・ シニア時代全国ベスト4を経験。
- ・ 俊足、堅守を誇る。 グラブ捌きに定評がある。

- ・ 昨年度準優勝校星英に双子の兄がいる。
- ・ スナップスローが得意。
- ・ 非常に「眼」が良いが、パンチ力にかける。
- ・ 評価 B

神木 翼

- ・ 173 cm 65 kg
- ・ 右投げ左打ち
- ・ 内野手（三塁手）
- ・ 4番打者としては小柄な体格だが、打席に入るととても大きく見えると彼と対戦した投手は語る。
- ・ 投手との駆け引きの上手い珍しいタイプ。
- ・ 長打より巧打が光る。
- ・ チャンスにとっても強く、得点圏打率は地方大会では8割に達した。
- ・ カーブを打つのが非常に上手い。
- ・ 評価 B+

柊 和弥

- ・ 177 cm 68 kg
- ・ 右投げ右打ち
- ・ 投手 最速140 km/h スリークオーター
- ・ 球八高校
- ・ 「神童」のあだ名を持つ。（ALBプレイヤーの神童とは関係無。）
- ・ 元プロ野球選手水木を養父に持つ。
- ・ 少年野球チーム「ガンバーズ」の主将を務め、全国大会優勝を成し遂げた経歴を持つ。
- ・ U-15にも選ばれた過去があるが、辞退している。
- ・ 七色の変化球を操る。
- ・ 無名の球八高校を甲子園へと導いた原動力。
- ・ 評価 A++

第18話 紡いだモノ

*
蟬の鳴き声が活発になってくる、気付けばそんな時期になっていた。

月は8月に入り、甲子園へと移動を始めてから数時間後——遂に視界にその姿を捉えた。

「あれが…甲子園球場」

「大きいな…本当に」

バスの中から少ししか見ることが出来なかったがその存在は強く、尊厳を感じさせる出で立ちをしているように思う。

ただの球場では無い

そんな雰囲気はどこか感じた気がする。

球場から少し進んだ所でバスが停止する。これから宿泊する旅館「葦屋」に到着したからだ。

ここから少し進んだ先に僕たちが練習場として使わせてもらおうグラウンドもあるので、立地としてはかなり良いように思う。

バスから下りると従業員さん達が出迎えてくれ、視界の端に「親切高校野球部」と書かれたボードが写った。ここに来て、ようやくと実感が湧いてきた気がする。

自分たちは観光に来たのではない——戦いに来たのだと。

部屋割りは2階にある大広間をメンバーで使わせて貰うことになっており、夜は雑魚寝をする感じらしい。宗太は「ベッドじゃないと眠れない」とか言い出して、カバンからハンモックを取り出し、壁に吊るし始めた。

「それハンモックでしょ？ベッドじゃないじゃん」

「ああ。でも布団で寝るよりこっちの方がマシだ」

僕のツツコミに対して笑顔で答える宗太。どうやら相当雑魚寝をするのが嫌なようだ。自由な人だ——何て思ったりしたけど実は雑魚寝に対して嫌な思いがあるらしい。それなら下手に口出し

しない方が賢明である。

早朝に出発した為、現在時刻はお昼を少し過ぎたと言ったところ。お腹が空いたなど、空腹を感じていると丁度そこに従業員さんが呼びに来てくれた。 どうやら昼ご飯の用意が出来たみたいだ。

広間に移動し、監督からの言葉を聞き終えたらすることは1つだけ——目の前の料理に舌鼓を打つだけだ。

「これは…上手い！」

「字が違うでやんす！美味いって表記でやんすよ！」

隣で勝利と荷田君がお決まりの漫才を披露している。この流れだと越後と岩田も参戦しそうだ。

これを食べ終えて少し経ったらいよいよ練習が始まる。

「珍しいな、お前がそんなにうずうずしている様子は」

明日は甲子園球場を少しの間だが使わせて貰えるし、テンションが上がってくるを抑えろという話は到底無理に思える。言葉を投げつけてきた亮の顔にも笑顔が見えるのはそういう事なんだろう。

「折角連れてきてもらったんだ…なら全力を出し切らないとね」

「ああ…足を引っ張らないようにしないとね」

亮は予選前の怪我の影響で暫く実戦に参加していない。それがどう影響するか本人も分からないのだろう、だからいつもの亮からは聞けないような自信の無い言葉に聞こえる。

「おーい湊叶」

「何ですか寺河さん？」

食べ終えた食器をまとめていると寺河さんに声をかけられた。

後ろには坂内さんの姿も見える。 ああ、なるほど。——抽選会か。

「俺らはちよつと練習抜けるわ。一足先に甲子園見させてもらおうとするか」

「あほ。抽選会場に着いて抽選をしたら直ぐにこっちに戻るってさっきも言っただろう」

目を輝かせていた寺河さんに、坂内さんが冷たい目で釘を刺す。

ほんとこの2人はここに来て変わらないな…

「話の通りだ。俺たちは抽選に行つてくる。監督も同伴するから練習はくれぐれも気をつけてするんだぞ。そうだな、望ましいのは基礎練習と言つたところか」

「道具の扱いには充分気をつけますよ。——また事故にあつたら困りますから」

「そうだな、友沢の言う通りだ。——流石にここでは何も起こさないとと思うが、くれぐれも慎重にな」

「わかつてますよ」

この話——恐らく北乃さんに気をつけろと言うことだろう。甲子園出場に向けて再出された選手の中に北乃さんの名前は無かった。

だからまた荒れるのかと、僕は自治会に話を通して監視カメラを確認してただけど、今回は何も起こっていない。改心したと思いたいんだけど、そもいかないんだらうなあつて思つてしまう自分がいる。何も起こらないのが1番だからね。

抽選会に向かうのは坂内さん、寺河さん、監督という3人になった。基宗さんも行く予定だったのだが、練習を締めるという意味で残してくれた。実際のところは監視であるが。

「湊叶」

「ん？どうかしたの」

「考えているのは北乃の事だろうが、あれはもう解決しているから深く考える必要は無いぞ」

「どういう意味？」

「ちゃんと話し合つたからな」

話し合つた——それが指す意味は一つしかない。

「そうだったんだ」

「ああ。予選の時にこの事を話すと雑念が生まれると思つてな。本当は夏が終わつてから告げるつもりだったんだが、こんなケースになつたから早めに告げただ」

「なるほど…それなら良かったよ。これで思い切りやれるね」

「…ああ、やつてやろう」

ふつ、と亮は寧猛な笑みを浮かべる。こういうのを見ると根つか

らの野球中毒ジャンキーだなあって思う。だからこそあれだけストイックになれるんだろうけど。僕も見習わないと。

予選決勝から一夜開けた次の日、甲子園に向けて改めてメンバーの選出が行われた。俺は前回同様背番号10を貰うことが出来た。2回も選んで貰えたんだ。怪我明けとは言え、選ばれたからには全力を尽くす。それだけだ。

自主練を行う湊叶たちの姿を確認しながら独りグラウンドの端でリハビリを兼ねた肘の運動を行っているのと視界に北乃の姿が写った。何やらブツブツと言いなながら物陰へとその姿を隠した。また何をしでかすかわからないからな、少し跡をつけることにした。

『…何で俺が選ばれないんだ！上手く友沢のやつを怪我に持ち込んだというのに！あく、イライラするぜ！いや、待てよ。俺と同じポジションのやつ…そいつを消せば俺が入れるんじゃない』

『やっぱり、あれはアンタの仕業だったのか』
『っ！と、友沢…』

『バカなことをしたな。お前がダンボール箱を大量に設置しているのに気が付かない自治会だと思っただのか？とつくに情報は回っている』
『…だから俺がベンチに入れないというのか』

『いや、それは単にお前の実力不足だが——俺が言いたいのは2度と同じ様な事をするなってことだ。幾らお前が大企業の御曹子だとしても、やっていいことと悪いことはある。次に悪事を働けば間違いない退学だ』

『…自治会にそんな権限は』

『ある。この自治会長さんは誰だと思っているんだ？お前のような者に2度もチャンスを与えるような人物では無い。俺にしたことは目を瞑ってやる。だが、他のやつに手を掛けようと言うのなら——容赦無くその腕を押し折る』

『…くそが』

北乃はそう残すとその場から去っていった。

殆ど言った言葉は嘘だったんだが、あいつが小心者ということも

あつて効果は靦面だったと見える。これに懲りてもうアイツは動けないな。何しろ見えない敵と戦うことになったからだ。

回り道はしたが、少しだけだ。

その後俺はグラウンドに戻り、何も無かったかのように振舞った。

*

「よし。それぞれ切り上げよう。各自しっかりと柔軟をして今日は終わりだ」

「た、助かったあ…」

基宗さんの声と同時に僕を含める殆どの部員がグラウンドに倒れ込む。確かに今日の練習メニューは基礎練だったけど…ずっと走りっぱなしだった。しかも主力選手は身体に重りをつけてだ。

しんどい、何よりしんどい。ハアハアと動悸が激しくなる。この練習の目的は、この様に走って身体を追い込むことにより心臓に負荷を与え体力を付けようという作戦らしい。削られた体力は最近購入した酸素カプセルを使用し一気に回復することで体力向上を狙うというものだ。確かに夏の甲子園は暑いし大変という話を正月に翔馬からチラツと聞いていた。でも、これは幾ら何でもしんどいよ…

「全くだらしないな。それでも元投手か？」

「うるさいな…ダメだあ、悔しいけど身体が重いや」

「俺はもう少しばかり走ってくるからそれが終わるまでベンチで横になっているといい。行くぞ乾」

「ああ。その前にそれ俺のタイヤだから返せ！」

「タイヤなんてどれも同じだろう」

「それには俺の名前が書いてあるんだよ！俺の相棒だ！」

「…黒いタイヤに黒で名前を書く奴がどこにいるんだ」

「ここにいるだろ！」

「君ら五月蠅いから早く走ってきて」

全く…あの2人のスタミナは凄いな。勝利は毎日最後まで残って走っているし、越後も手の皮がズル剥けるくらいバットを振り込んでいる。みんな頑張っているんだと、負けられない気持ちが湧き

上がってくる。怠けなければ自然と自分を高めてくれる環境、ここに来て良かったと思えるように頑張ろうとそう強く思った。

*

宿舎に戻ると、既に監督らは戻っており坂内さんはウエイト、寺河さんはシャドーピッチングを行っている所だった。

「全員揃ったか。まずは…その汗臭い匂いを落としてもらうことにする。さあ！各自風呂へ行け！」

流石にこの状態でミーティングとか勘弁してもらいたい所だったからお風呂に行けるのはほんとに助かる。因みに湯船に身体を沈めながら手首の柔軟をしていると気付けば僕ひとり取り残され、妙に御機嫌な様子の監督と2人で過ごすことになった。

待っていたのは愚痴の嵐でした。

「…ふざけるのはここまでしておくか。天道、お前甲子園についてどう思う？」

「甲子園についてですか？そうですね…皆が目指すっただけあってとても神聖な場所かと」

「なるほど。模範解答も良いところだな。夏の大会が始まる前に、高校の時の恩師と偶然再会したんだ」

「その方って…」

「花丸高校を全国優勝に導いた佐和田監督だ。今も野球に携わっているだけあって元気だったよ」

「佐和田監督ですか。伝説の名将ですよね」

佐和田監督と言えば確か、今はビクトリーズの監督をしていると朴木さんが以前言っていた気がする。妙なところで繋がりがああるんだなと思う。

「名将だよあの人はな。俺はその時に聞こうと思ったんだ——甲子園はどんな所だったかをな。でも、答えは貰えなかった」

「自分で見て来いってことですか？」

「察しが良いな。そう言う事だ。——それが漸く拝める。いいか、絶対に勝つぞ」

「はい！」

監督も芯から燃えている。人をここまで熱く何かを持つのが甲子園。早く抽選の結果が知りたくて焦れつたく思う。

部屋に戻り、水分補給を済ませた所で丁度監督から集合が掛かる。いよいよ発表だ。

「お前たちが気にしているであろう抽選の結果は——大会1日目第1試合というものになった」

初日の第1試合。

それが表すのは開幕試合ということ。そうなってくるともうひとつ懸念されることが浮かび上がってくる。

「我々のクジの番号は1。つまり——選手宣誓をウチが行う」

甲子園での選手宣誓の決め方は夏と春で決め方が異なり、今回の夏の場合は各高校の主将の中から抽選を行い1番若い番号を引いた人が担当するという形式だ。

「この結果がどういう風に試合に影響するかやなあ。えらい注目されるで、何せ選手宣誓高校からやでな」

信弥が顎に手を添えながら言葉を落とす。

言っている事は正しい。タダでさえ開幕試合ということで緊張感もあるのに、そこに選手宣誓も加わってきた。坂内さんのメンタルがどういふ状況か分からないけど、僕なら重圧で潰れそうだ…。

「明日は朝から球場入りだ。初めて使わせてもらおうグラウンドだ。各自しっかり状態を掴んでおけよ」

坂内さんの様子は普段と変わりがない。寧ろ、とても落ち着いているように思える。

「主将さんは、緊張とかしてないように見えますな？」

「自分たちの力をぶつける事が出来る良い機会に、緊張していたら勿体無いだろう。適度に緊張感を持っておけばいいんだよ」

「流石主将やわ。発想が大きい」

何のためらいもなく坂内さんは言い切った。その言葉には3年生として最後の集大成をどこまで見せつけられるか、という気持ちの強さが溢れている。

「開幕試合と選手宣誓に話が持っていかれてますけど、対戦相手の方

は何処なんですか？」

そうだ、肝心の対戦相手のことをすっかり頭から飛ばしていた。翔、落ち着いているな。

「相手は——古豪パワフル高校。今年は遂にあかつき大附属に勝利し甲子園に出場してきた」

パワフル高校——確か、鈴木君が進んだ高校だ。

「初戦から厳しい戦いとなるだろうが、力としては決して劣ってはいない。全力で戦おう」

坂内さんのこの言葉で僕たちは士気を高める。まだ未経験の地で戦うって言うのはどんな雰囲気かも分からないし、不安要素もある。でも、それは相手も同じだ。この仲間たちなら、「甲子園には魔物がいる」と呼ばれるそんな壁も乗り越えて戦える気がする。

第19話 緒戦——パワフル高校

8月6日——今日の天気は上天気になった。
雲ひとつない快晴、正しく野球日和だ。

開会式の為に球場入りを行うと既に何校が集まっており、空気は緊張が漂ったものとなっている。

その中に何人か見覚えのある選手がいる。

「藤内に蛇島…帝王実業か」

「シニアの時と比べて、身体が大きくなってる。相当鍛えてるみたいだね」

「そうで無かったら1年からベンチ入り、甲子園で登板なんて事出来ないだろうからな。あの程度なら妥当なところだ」

優勝旗を返還しに来た昨年の覇者帝王の姿がある。その姿は伊達に甲子園を制していない。主力選手と思われる人物らからは威圧感の様なオーラが出ている。

「あれ、見覚えのある顔だと思ったら——御菌シニアの2人じゃん。何でここにいるんだ？」

その集団の中で1人、目が合った人物がこちらへと向かって来た。

——藤内 直哉。

2年生ながらエースナンバーを背負っている投手だ。U-15の抑えを務めたこともある経験豊富な人材で、スカウト評価は僕たちの世代で1番高いとされている。

「…何でって、予選を勝ち抜いたからに決まっているだろう。笑えない冗談は好かないな」

「わかってるよ、そんな怒るなって友沢。お前——投手辞めたんだってな？」

藤内君の言葉に亮が顔色を変える。情報が回るのが思っていたよりも早い。

「…どこでそれを？」

「予選に出てなかったら誰だって不思議に思うだろ。今回10番を付

けてるところから野手として復帰したってどこか」

「その通りだ——お前たちと当たることになっても俺たちは負けな
い」

「ふん、言ってる。まずは目の前の相手を見るんだな、パワフル高校
だったか？あそこは中々強いぞ」

何たって、アイツらがいるからなと藤内君は笑みを作る。

「友沢、お前は一緒にプレイしたことあるから分かるだろう？」

「…観月のことか」

「それもある。まあでもアイツは肩やつちまって、今は野手だからな。
投げれるつちや投げれるだろうが球速はそれ程出ていないらしい」

観月君と言うのはパワフル高校の3番を務める選手の事だ。彼も
代表を経験しており、その時は投手だった様だが、現在は野手をして
いるみたいだ。

「それよか、ぶっちゃけ怖いのは打線だな。俺が言うのもあれだが—
—大力・東條のコンビは脅威だな」

大力と言うのは「パワプロ」のあだ名があるという大力颯呂君のこ
とで、東條と言うのは今年入った5番打者の東條小次郎君の事だ。

「帝王は『さわやか波乗り高校』だったよね？」

僕の言葉に対して藤内君は頷き、言葉を返す。

「無難に行くなら優勝するのは帝王^{ウチ}なんだが——今年はアイツもいる
からな」

藤内君は視線の先に立つ人物——柊 和弥 君の姿を捉えていた。

丁度昨夜にスポーツニュースで取り上げられており、球八高校を甲子
園に導いたとして今大会注目の選手として紹介されていた。まだ
2年生と言うことは同じ世代で、これから当たるかもしれないという
選手。伝説の少年野球チーム「ガンバーズ」の主将を務めていたこ
ともあり、「神童」と呼ばれているらしい。他にも多彩な変化球を使
うことから催眠術師^{ヒプノシスト}や魔法^{マジック}の直球使い等の呼び名もある。

「まあ、頑張ってくれ」

そう残して藤内君はその場を去っていった。

「デカイな…アイツが背負っているモノは」

「うん…強豪の宿命と言えばそれまでだけどね…」

さつきまで等身大だった彼の姿が大きく見える——彼の強さが垣間見れた気がした。

*

「そろそろ時間だ。みんな準備しろ」

坂内さんの言葉に僕たちは領き控え室を出る。これから行うのは入場行進だ。会場には既に「大会行進曲——栄冠は君に輝く」が流れ、歓声が聞こえてくる。始めに昨年度優勝高校である「帝王実業高校」が優勝旗を持って入場を行い、各校入場をしていく。

出場する49校が出揃うと国旗が掲揚される。続いて大会主催者によるお言葉の後、優勝旗返還が行われ、レプリカ優勝旗が帝王実業に贈呈される。その後お偉いさん方のお言葉があり、いよいよ選手宣誓が行われる。

今年の代表は親切、つまり僕らだ。坂内さんはいつもと変わらぬい雰囲気のままマイクの前に立ち、言葉を綴った。

「我々選手一同は日ごろの練習の成果を存分に発揮するとともに、今日ここで戦えるということに感謝し——ここまで支えてくださった方々に誇れるよう正々堂々と全力で挑むことを誓います」

坂内さんが途中で嘸むこと無く完璧に文を言い切った。会場から惜しみ無い拍手が飛び交い、吹奏楽による演奏が始まる。演奏が行われていく中、僕たちは1塁側ベンチと3塁側ベンチの双方から順に退場していく。

これで最初の波は乗り切った。

ここからは目の前の試合に集中するだけだ！

*

両チーム共に守備練習が終了し、いよいよ試合開始の時刻となる。僕たちは後攻めとなるのでグローブを手に、主審の掛け声を合図にしてベンチ前から飛び出した。

「礼！」

お願いします！と双方強く答え、僕たち親切ナインは守りに付くため、甲子園のグラウンドを駆ける。

守備位置に付くと心臓が激しく鼓動を立てているのがわかる。期待と興奮と緊張が入り混じったもの。前日練習では味わえなかった大勢の人々に見られているというこの感覚。その歓声が地鳴りとなつて響き、お腹を抉りに来る。

凄いな、これが甲子園か。

始球式が執り行われ、無事に終了。会場からは拍手が溢れ出る。今回僕の守備位置は遊撃手ショートとなっている。予選でのパワフル高校の打撃結果を元を考慮して今回の布陣が完成した。外野への頭を超える打球は届かないが、低いものなら何とかなる。

遊撃手ショートへの打球の多さから、今回は僕が務めることになった。肩の強さじゃまだ勝てないけど、反応なら負けるつもりは無い。その部分を買ってくれた今回の選出。逃すわけにはいかないだろう。

ここで遊撃手のレギュラーになるのは——僕だ。

『1回表 パワフル高校の攻撃は 1番 二塁手セカンド 円谷君 背番号4

』

甲子園独特のけたたましいサイレンが鳴り響き、試合開始の声を告げる。

パワフル高校の先頭打者は3年生——円谷さん。

彼はリードオフマンとしてチームを引っ張っている存在だ。坂内さん曰く——フライが少なく、叩きつけるバッティングを主としているらしい。叩きつけると言うことは即ちゴロが来るということだ。初対戦と言うことで寺河さんのデータを集めに来るだろう来ることが考えられる。

この辺かなあと漠然と守備位置ポジションを決め、しっかりと腰を落とす。丁寧にグラウンドが整えられている為、スパイクが地面を捉える感覚がなんとも心地よく思える。

この分なら心配することは余り無さそうだ。

大きく振りかぶり、寺河さんから第1球を投げられた。

球種はストレート。白い糸を引くようなそれは寸分の狂いなく

坂内さんの構えるミットに収まる。

電光掲示板に表示された球速は148km/hを指した。

これが与える衝撃は大きいだろうと言うことが安易に予想できる。初球からストライクを取れたことよって、先手は取れた。このまま流れに乗れば大きいものとなる。

——ギイン！

4球目、内角低めへのストレートを打ち返した打球は僕の元へと飛んでくる。

大丈夫、いつも通りに。

打球にそれ程勢いが無いため、送球に備えて回り込む様な形で捕球し一塁へ送球する。

判定は、アウト。

無事に1アウトを取ること成功し、2番打者である不知火君を迎える。彼は50mを5秒台で走り切る俊足の持ち主で、足を生かしたプレーを行う。ポジションは中堅手。宗太とプレースタイルが似ている選手だ。

「——ストライク！バッターアウトッ！」

外角低めへと滑り落ちるフォツシュにより見逃しの三振に切り取る。ここまでは順調な滑り出し。ここからパワフル高校が誇るクリーンナップが始まる。

『3番 右翼手 観月君 背番号9』

左打席に立つのは日本代表にも選出された経験を持つ観月春君。肩に怪我を負ったとは言え左打席に入るということは少なくとも影響が少ないくらい回復はしていると取れる。

ややオープンスタンス気味に構え、両の目で寺河さんを捉えているように見える。次に控えているのは4番打者である主砲——大力颯呂 君だ。初回から彼にはなるべく回したくは無い。ここで終えるのがベストだ。

初球は左打者内角・ボールゾーンから内へと変化するフォツシュボール。

「ストライクッ！」

主審の右腕が上がり、坂内さんからの返球を受けて寺河さんは軽く肩を回す。

2球目はストレート。

これを観月君は思っ切り引っぱたいた——しかし、打球は僅かに右に逸れていく。

先ほどまでの打者に見せたストレートより、球速が出ていないからだ。抜いた分、観月君のタイミングは早くなり打球はファールになった。

簡単に追い込むと1球高めに外してから最後はボールゾーンでの勝負——ボールは坂内さんのミットに収まった。

2球目にハーフスピードのストレートを投げたのはこの球で打ち取る為である。

——何だあの球は：スライダー、いや違う。

その正体は——スラープ。

スライダーとカーブの中間のような変化をする球種だ。寺河さんは秋から今に掛けて、縦の変化に加えて、横の変化も強化を行った。それが先程の成果だろう。

初回を3人で切り取るなど素晴らしい立ち上がりを見せる。次は僕たちの攻撃だ、しっかり球を見ていこうと思う。

*

——鈴木 大輔

彼と対戦するのはこれで2度目になるけど、以前より身体付きがしっかりとしている、っとこれは誰にでも言えることか。あれから日は経っているんだし、何を当たり前のことをもって感じた。

そんな感じでネクストバッターサークル内で思考に潜っていた僕を現実へと呼び戻したのは思わず目を見開く様な乾いた音だった。

——148 km/h

先程計測した寺河さんの最速と並ぶ球速。予選でのデータは140前半がいい所だったと言うのに……。どうやら僕たちは寺河さんレベルの投手を相手にしなければならぬようだ。決して、手を舐めていたりする訳じゃない。あくまでも気持ちの問題だ。

そんな隠し球に、更に上が存在した。

——ボールが、来ないっ！

「そんな、あれは…」

鈴木君が投じた球に対して、僕は自分の目を疑った。それ程衝撃的なものだったんだ、さつき彼が投げたのは。

「——ナツクルを使う様になったのか」

シニアの時から制球力には目を引くものがあつた。実際予選でも四死球の少なさがそれを顕著に表していたように思える。あれから日は経っているんだから武器が1つや2つ増えていても何らおかしいことでは無いけど、それにしてもまさか、ナツクルボールを習得してくるとは夢にも思わない。

『2番 遊撃手^{ショート} 天道君 背番号4 』

甲子園初打席——ここは何としてでもヒットを打ちたい。

そんな気持ち一心で打席に立った僕だったけど、鈴木君は完全に僕を見下ろして投げていた。

「ストライークツ！バッターアウト！」

外、内、外のコンビネーションにタイミングを崩しに来るナツクルボールに見事に翻弄されてしまった。低めのボールゾーンに外れるナツクルに手を出しそうになったけど、それはギリギリ防いだ。

でも一度ズレてしまった視線を戻そうとなると1打席内では簡単には行えない。結果僕は147km/hのストレート——ナツクルと約30km/h以上の差の前に簡単に打ち取られてしまう。

——くっ、スライダーか

続く坂内さんはナツクルが来る前にと初球から果敢に打ちに行くも変化量の小さいスライダーの前に倒れてしまう。

投手戦を思わせる、そんな両者の立ち上がりとなった。

以前僕たちが倒した相手は更に大きくなって目の前に帰ってきた。初戦から大きな壁が立ち塞がっているけど、「壁は高ければ高いほど超えた時が気持ちいい」と言う言葉を聞いたことがある。

鈴木君、君の強さは僕たち親切が先に進む為の糧にさせて貰おうと思うんだ。

まだ勝負は始まったばかりだ！

『2回表 パワフル高校の攻撃は 4番 三塁手^{サード} 大力君 背番号5』

右打席に入り、しっかりと足場を慣らすのは2年生ながらにしてパワフル高校の主砲に座った大力颯呂君。名は体を表すと言うけど、正にその通り。打球の速さが半端ないらしい。それに備えて、いつもより少し深めに守ることにする。

——ズバアアアン！

坂内さんのミットから出る音が変わった。少しの硬直の後、ぱつと後ろを振り返るとその表示に目を丸くした。

——150 km/h

速い。文字通り速い。

球速も、その成長の速度も。

選ばれた者しか入れない場所^{ゾーン}に寺河さんが遂に足を踏み入れた。

パワプロ君：もとい大力君、続く東條君、鈴木君を全く寄せ付けず三者連続三振に切つてとる。

これが極限^{ソリ}の集中力^ンの力。

——これは、投手戦になる。

さつき感じたそれは実現することになる。

*

——ギン！

『——詰まった当たりは遊撃手^{ショート}天道の元へ……6—4—3！ダブルプレー！落ち着いて捌きました！スリーアウトチェンジ！さあ、大変なことになって参りました！6回終了して親切高校・寺河梓真、ノーヒットノーラン継続中です！』

「ナイス湊叶！」

「寺河さんもナイスピッチです！」

ベンチへの帰り際にパンッと互いのグローブでハイタッチを交わす。

ここまで寺河さんは最高のピッチングで流れを造ろうとしてくれる。

でも、そうは問屋が卸さない。

『——際どいぞ！どうだ！……アウトツ！神谷の絶妙なセーフティーバントは鈴木が見事なフィールディングで制しました！スリーアウトチェンジ！鈴木も負けじと三者凡退！三塁を踏ませません！打たれたヒットは一本と見事な投手戦！』

「皆、聞いてくれ」

パワフル高校・主将境井はベンチで険しい表情を作っているチームメイトへと声を掛ける。

「鈴木は、頑張ってくれている」

塩分と水分を同時に補給できる飲料水を飲み終え、顔にタオルを当て壁にもたれかかる鈴木を見る。

「……この回だ、この回繋ごう」

打順はトップバッターから。これまでリードオフマンとしてチームを牽引してきた円谷から始まる。三年生としての矜持にも期待が持てる。

「1点だ。それを取れば流れはコチラだ。勝とう」

「やりましょう！このまま終わるのは悔しすぎます」

ここまで2三振と打棒が奮わない大力は4番に座る者として渡したくない気持ちがある。

「行けますよ！ここで、踏ん張りましょう！」

バッティングに定評のある観月もこの試合は寺河に完璧に抑え込まれている。チーム全体が無安打ノーヒットに抑えられているこの状況、だからこそ1点取れば大きく試合は動くと思える。境井は考える。

「まずは先頭から、円谷！バットは浅く構えて、スイングをコンパクトに！」

境井からの激に円谷は大きく頷く。打席に入る前に大きく息を吐き、集中した顔付きになり右打席へと足を入れた。

足場を慣らし終えた寺河がゆったりと振りかぶり、初球を投じる。

——ズバアアアン

球速表示は145 km/hと未だに球威は衰えを見せない。

——この炎天下の中独りでここまで投げ抜いているんだ。バテていないはずが無い。

2球目もストレート。今日はストレートの配球率が高い。残念ながら「フォツシュ」と呼ばれる変化球の前に殆どの場合で打ち取られている。落ちるスライダーも見極めが難しく、打ち取られる要因の1つだ。低めの際どい所は徹底的に捨て、ストレートに的を絞るという作戦を境井は取る。

その後2球のボール球を見極めることに成功した円谷。長年1番打者として試合に出場している事はあるなど、親切高校捕手坂内は思う。

——今日のお前はストレートが良い。それで押し切るぞ。

外角低め。^{アウトロー}投手としての生命線とも呼べる場所に寺河は腕を振り切りストレートを投じる。

——ストレート！

狙っていた球種が来たことにより、円谷は鋭くバットを振り抜く。

——ズバアアアン

勝ったのは捕球音。外に球1個分外れた所に制球された精密さが円谷の執念を上回る。

「すまん……」

重い足取りでベンチにへと戻る円谷を見、次打者不知火は決起を起す。

——勝負は一度きり。失敗は出来ない。

グツと、身体に力が入るのが分かる。ここが山場と自分達を率いてくれている主将がそう判断したのだ。あの人は波を読む力を持っている。その事について誰も異論は無かった。

——落ち着け。大丈夫、やれる。

まずは気持ちから、という言葉通り前向きな思いを胸に不知火は左打席に入った。

——足は確かに疾いが、力はそれほど無い。内野は少し前進

気味で行くか。

ハンドシグナルによる守備位置^{ポジション}の変更。

二遊間が共に少し前に出て構える。

——んー…これは予想していなかったな。でも、手のうち用はある。

自身に対するシフトを敷かれたことに、驚きを持つが手が出ない訳では無い。

——ギン！

「ファール！」

バットをコンパクトに振り抜くことにより打球の強さを高めている。これは相手の投手の球に力があればあるほど有効であり、反発力により、速度の分だけより飛ぶというものだ。

——強く振ってきている。ここは二塁手基宗は下げるべきか。

再びハンドシグナルによりサインを伝達する。これにより二塁手セカンドを守る基宗が元の守備位置へと戻る。

——来た。ここが勝負。

3球目、ベルト付近への速球を不知火はバントの構えで迎え撃つ。

——バントか！

投手の寺河がそれに反応し、マウンドから圧力を掛けに走る。それを不知火は見逃さない。

——バントはバントでも、一味違うぞ！

プッシュバント。

バントに備えて飛び出してきた親切内野陣を嘲笑うかのようなそれは、的確に効果を示した。

投手寺河、一塁手友沢、二塁手基宗。

その三選手を線で結んだ地点——各選手から一番離れたポイントに見事に決めてみせる。

『プッシュバントが決まったア！寺河のダッシュ力を逆手に取った策は見事にハマりました！寺河のノーヒットノーランがここで潰えます』

1塁ベース上で不知火はベンチに向かって、小さくガッツポーズを取る。

今のバントは自分の足を活かす為に、と円谷がここ最近夜遅くまで

特訓に付き合ってくれたものだ。その成果が出せたことに喜びは隠さないが、まだ点を取った訳では無い。慎重に行くという意味も込めて、小さいものを採用した。

「…颯呂、繋ぐからな」

3番観月も強い気持ちを持って打席に立つ。

——自分に出来る最低限の事は走者の進塁だ。大きいのは

狙わず繋ぐ気持ちで。

外の球を逆らわずに流し打つ。

『さあ、パワフル高校この試合初となる得点圏に走者を進めました！3番観月が上手く流し打ち、あわや右翼手前と言うところでしたが、ここは基宗が抑えます。この間に走者は2塁へと到達し、ここで迎える打者はパワフル高校の主砲——大力颯呂！ここまで二三振と当たりがありませんが、非常に期待が持てる選手です！』

「颯呂…焦らずな、お前なら大丈夫だ」

「はい。やってきます」

右打席に入り、寺河を睨みつけるかのような形で構えをとる。

——おー怖。真剣そのものって感じ、でも、俺たちにも譲れないってモノはあるんだよ！

『初球外に外れてボール。この試合初めての走者、何としてもパワフル高校は本塁へ返したいところ！——ファール！火の出るような当たりとはこの事でしょうか！インコースのストレートを叩いた打球は三塁線を襲うも左に切れてファール！これでカウント2—2の並行カウント！』

この場面でのハーフスピードのストレートに大力のバットは振れ過ぎてしまい、それが災いとなる形でファールになった。

——くそ！抜いてきた分ポイントが前になった！追い込まれたらフォッシュが来るといふのに。

5球目、牽制を挟んでから寺河は外角に投じる。

途中まではストレートの様なノビがあり、ガツと急ブレーキが掛かったかのようなシンカー気味にストンと落ちる——フォッシュだ。

——これは、奥行！っ、止まれ!!!

際どいコースを見逃して三振に倒れるなど絶対に嫌だ。 大力は
かつてない集中力を纏い、強敵寺河と対峙する。

「…っボールッ！」

『わ、僅かに外れてボールッ！良く見定めました、打席上の大力！今のは“奥行”という部分を狙った高度な投球でしたが、惜しくもここはボールとなります。坂内からの返球を受け取り第6球、投げました！——ファール！粘りを見せます！』

——不思議だ。ボールがいつもより見える気がする。

あれだけ手玉に取られていた寺河の球に臆することなく踏み込んで行く。

大力もまた極限の集中力の領域に達しようとしていた。

大力に対しての10球目、大力の視界から色が消えた。

——カキイイーン！

遂に甲子園球場に快音が響いた。

「帰って来い！不知火!!!」

セカンドランナー
2塁走者・不知火は全力でダイヤモンドを駆け抜ける。

打球は鋭さを保ちながら伸びていき、親切外野陣・右中間を破って行く。

『捉えたア！4番大力颯呂の待ち望んだ待望の一撃！打球は右中間を割っていく！ 2塁走者・不知火が帰ってくる！ホームイン！打った大力は2塁へ進む！ 1-0！遂に試合が動きました！パワフル高校先制！ 初得点はやっぱりこの人からでした、主砲大力の会心の当たり！低めのフォッシュュを上手く捉えました！』

「っしやあああああ！」

2塁上で自軍ベンチに向かって大きなガッツポーズを作る。ここまで二三振と役割を果たすことが出来ていなかった。今それを果たすことが出来た——と大力は素直に嬉しく思う。

「すまん…狙い球を要求してしまった」

「まだ1点だ、大丈夫だろう」

険しい表情を作る坂内に対し、同じく3年である基宗は諭す様に言葉を落とす。

「取られたなら取り返せばいい。とにかく、ここ乗り切るぞ」

試合に出ている親切高校の3年生は寺河、坂内、基宗の3人だ。その中でも基宗は守備について独り奮闘している。寡黙な印象を抱く者が多いが、その背中は頼もしく見える。

長い翠髪を風を受けて揺らしながら、パワフル高校5番・東條小次郎が左打席にへと立つ。1年生ながらいきなりクリーンナップに抜擢された逸材だ。

——キイイイン

小気味よい快音が鳴り、打球は鋭く地面を這う。

二塁手^{セカンド}基宗が飛びつくがグローブ1個分及ばない。速度を保った打球はそのまま右翼手前へと抜けていく！

——これで、2点差に！

打った瞬間好スタートを見せた大力は勢いそのまま3塁ベースを勢い良く蹴ろうとした時、3塁コーチャーがストップをかける。

「っ、止まれ！もう返球が返ってきた！」

「げっ…」

急遽走塁を止めるためにブレーキを掛けたところで、打球の先から白い光線が本塁へと届く。

右翼手^{ライト}——本庄翔のレーザービームが炸裂する。本職は捕手だが、その強肩を見込まれ本戦から外野手として出場を果たしている。

——せめて守備でチームに貢献したい。

打てないなら、守りきる。

その強い気持ちに胸に、チームは指揮をあげる。

2 死ながら走者は1塁、3塁。

この好機^{チャンス}に登場するのはこの試合の鍵を握る鈴木大輔だ。

——ここまでして貰ったんだ。絶対打つ。

打者としても非凡な才能を持つ鈴木。その気合いは充分だ。右打者から闘気を放つ姿に寺河は思わず笑みが浮かぶ。

——顔付きが変わったな。でも悪いな。ここで流れを変えさせてもらおうぞ！

1 塁走者に目で牽制を行ってから投球モーションを開始する。

それに応じて東條は盗塁のスタートを切る。あわよくば挟まれて大力を本塁へ返そうと言うものだ。

——初球から勝負だ！大丈夫、見える！

——ギイン！ パシツ

打球音の後に聞こえたのは捕球音。

インコース内角のストリートを捉えたように見えた打球は寺河のグローブに収まり、この窮地ピンチを脱する。

——甘いと思ったから振りに行つたけど、あれはッフォツシユ
“か。 それに…”

『——アウトツ！6番鈴木を投手ゴロに切つてとりました。しかしこの回、遂にパワフル高校が先取点を上げました！試合の流れをこのまま掴めるか！一方反撃を狙いたい親切打線は上位から始まります。2番天道がどの様に動けるか、が肝となりそうです』

この場面でいきなり僕かあ…嬉しいような悲しいような、とりあえず緊張するつてことには変わりはない。

でもそんな甘い事を言っている暇はない、ここに立つた以上は責任を果すべきだと思うんだ。

さあ——勝負だよ鈴木君。

*

スパンツとミットが乾いた音を立てる。

さほど先程までとは球威が変わりないように周囲には映るが、2人の男の目は違う捉え方をしていた。

——球に力が無い、回転が甘くなつたというべきか？

ここまで鈴木キャッチャーの球を受けてきたパワフル高校捕手石原は苦い表情を浮かべる。

——球速自体はある。コースを丁寧について行けば非力な天道は抑えられるはず。

左打席に入った天道湊叶は先程投じられた球に違う意味で苦い表情を浮かべる。

——あんな甘い球を見逃すなんて、もう来ないだろうなあ。

続く2球目、持ち前の制球力で低めにコントロールされたストリートは変わらず乾いた音を立てる。

——あれま…簡単に追い込まれたよ。参ったなあ本当に。でも、こっからだよね勝負は！

3球目のストリートが外に外れ、カウントは1—2となる。追い込んだパワフル高校バッテリーはここで打ち取っておきたい。

4球目、首を横に振ることなく鈴木が投じる。

選ばれたのはスライダー。ここまで幾つもの凡打の山を築き上げてきた。

しかし、その球種が今度は快音を響かせることになる。

——キイイーン！

『——打ったア！打球は中堅手前に落ちる！クリーンヒット！親切高校、同点の走者が出塁しました！ここは大事に行きたいところ！』

——良し！やっぱり球威が落ちてきてる！

「鈴木」

「すみません、甘く入りましたね。次は気をつけます」

駆け付けた先輩捕手にそう落とすと鈴木はマウンドの堀を丁寧に慣らす。しっかりと自分の間を確保する為だ。

——無死一塁。ここは慎重に行くべきだな。

右打席外から親切ベンチを見つめる3番坂内に対して車坂は待てのサインを出す。パワフル高校バッテリーの動きを見るためだ。

「監督、ちよつといいですか？」

「何だ友沢」

「ここは、迷わず盗塁をさせるべきです」

「ほう？俺に意見するということはそれなりの根拠があるということだな？」

「はい——それは今から湊叶が見せてくれます。鈴木がシニア時代、湊叶のことを苦手にしていたのはアレがあるから何です」

「ふん。それでは今回はお前の言うアレとやらに期待しようじゃないか。お前の作戦が成功すれば確かに好機は広がるからな」

「ありがとうございます」

——取り消しだ。ここは天道に走らせる。

新たにサインを送り直し、坂内がそれに頷く。湊叶は大きくリードを取る。

素早く反転し、鈴本が牽制を試みるも湊叶もそれに応じて頭から塁に滑り込む。

「セーフツ！」

『執拗な牽制です、何と今のが5球目でした！相当天道君の足を警戒しているパワフル高校バッテリーです』

——ちよこまかと鬱陶しい、だから僕は君を警戒していたんだ、湊叶！

「っ、セーフツ！」

鈴本に返球が戻ったのを見て、湊叶は立ち上がりユニフォームに付いた砂を払う。

——吸って、吐いた。吸って、吐いた。吸って…止まった。

行ける！

「スチールツ！」

鈴本の左足が僅かに地面から浮かび上がった瞬間、湊叶はスタートを切る。

鈴本の執拗な牽制に何かを感じた石原はウエスト球を要求していたが、それでも投げられない。

『盗塁成功！完璧に盗んでみせました！得点圏に走者が進みました！さあ好機到来！』

「ふん、あの野郎やるじゃないか」

「湊叶は、呼吸を読むことができるんです。と言つても、これはあくまであくまでアイツの感覚何でしょうけど。牽制が上手いもの同士、通ずるところがあったんでしよう」

——打っていけ。お前に任せる。

キーン！と音が響き打球は右翼手前に跳ねる。

——さあ、お膳立ては済んだ。暴れて来い、佳月！

1塁上で脛当てを外しながら右打席に佇む主砲に激を送る。

——ここまで上手く遇われている理由は分かつとる。決め球

を打つことに拘つとるからや。球速自体にはもう慣れた。それでも大振りしてまうのは約110km/hという遅球が平然と投げ込まれとるからや。

「ストライーク！」

初球から決め球であるナツクルが投じられる。不規則に変化するその球は強振されたバットをすり抜ける様にミットに収まる。

「振り回し過ぎだ！コンパクトに行け！」

ネクストサークルから友沢の激が飛ぶ。

「タイムお願いします！」

——そうやな、ここは個人の満足よりチームを優先するべき。それが出来やんくつて、何が4番や。

大きく息を吐いて気持ちにリセットをかける。

——雰囲気が変わった。ここは慎重に行くぞ、鈴木！

——ギイン！

先程まで全くと言っていいほどタイミングが合っていなかったナツクルに当てた。3塁に走者を置いた状態でも自信を持って投げ込める決め球を捉え始めたことに対し、動揺が生まれ始める。

「——勝っているのは俺たちだ！」自信を持ってこい！」

石原の言葉に鈴木が力強く頷く。

——ナツクルボールに佳月は慣れ始めている。しかし、それは本来なら有り得ないことだ。ナツクルとは不規則に変化を促すもの。

従つて、慣れるということとは有り得るはずが無いのだ。

それを目の前に立つ男は成し遂げ様としている。

「ッ、ボール！」

際どいコースに投げ込み空振りを誘うが佳月はそれを見極める。荒削りだったセンスが今磨かれようとしている。

——ストレートに目が慣れてる今だからこそ、ナツクルは効果的だ！思いつ切り来い、鈴木！

——はい、石原さん！

来た球を返す。

佳月の思考に有るのはそれだけだった。

クイックモーションから投げられたそのボールを——
カキイイーン！ という快音が辺りを切り裂く様に木霊する。

『——打ったア！何という打球でしょう！外角低めに投じられた伝家の宝刀を完璧に捉えました！適時二塁打!!天道君が帰って同点！尚も走者2塁、3塁と好機は継続中です！迎える打者は5番友沢！第1打席でヒットを放っているこの打者をどう抑えるか、パワフル高校にとつては鬼門となります！』

——手の痺れが取れない中、他の球種なら確実にやられるだろうなと思つたからナツクルを選んだのに、参つたな。

ふう、と一息吐き出す。先程の打席において、バットの根つこと呼ばれる部分でボールを捉えた反動は大きかった。金属バットは重く、衝撃は手に残っていた。

——ノーステップ打法。

構えの段階から両足を広げて重心を下げ、下半身の動きを最小限に抑える。それによつて「低めのボール球を振ることが少なくなり、甘く来たのをしっかりとらえられる」。頭はバットの軌道に集中でき、素直に逆方向に打ち返す事も可能とされている。ナツクルの様なタイミング自体も狂わせにくる球種に対して有効とされている打法だ。

佳月の働きは非常に大きいものだった。

ここまで力投を続けてきた鈴木を止めた、この表現は過言でないと言えるだろう。

実際、続く5番友沢は右翼手超えの適時三塁打を放つ。

本塁のバックアップにも向かわずマウンドで佇む鈴木を見て思うことは一つ。

糸が切れたという事だ。

「鈴木…お前」

先輩捕手石原の悲痛な言葉は晴れ渡る空の中へと昇っていき、歓声の渦がそれを掻き消していく。

*

「まだだ！まだ終わってない！」

最終回——既に2アウトを取り、マウンドから威圧感を飛ばす寺河に対し、パワフル高校観月春は闘志を燃やす。

試合は佳境に差し掛かり、9回表が始まるとういう時、パワフル高校ベンチの空気は重かった。

その中で観月はまだ諦めの心を見せなかった。

——試合は終わっていない。

その思いで必死に目の前に立ち塞がる壁に立ち向かう。

5球目、真ん中から低めへと角度を付け変化する球種に上手くバットを合わせる。

——キーン！

——肩を怪我したとは言え、縦スラは俺も投げる。その球種については他の奴らとは気持ちが違うんだよ！

『掬ったア！低めに落ちる縦スラを弾き返します！まだパワフル高校の夏は終わらない！迎えるは前回の打席、この試合初得点を放つている大力！1本出れば試合は振り出しに戻ります!!』

——まだ、終わらせない。終わらせたくない！

「ファール！」

必死に迫り来る速球へと付いていく大力。最終回に来て尚、球威の落ちない寺河から1発を得るのは最早至難の業だ。

——繋げばまだ希望はある！

その思いでバットを振るうが進化を見せた親切高校エース・寺河の前に立ち塞がる。

「ストライクッ！バッターアウト！ ゲームセットッ！」

試合終了を告げる声が無常にもパワフル高校野球部に突き刺さる。

「3——1！親切高校の勝利！礼!!」

『試合終了！緊迫した投手戦の軍配は寺河に上がりました！親切高校2回戦進出決定です！実に見応えある、見事な試合でした！敗れたとは言え、パワフル高校も先制点を上げるなど力を見せつけました。途中崩れはしたものの、強打を誇る親切打線を3点に抑えた鈴木はまだ2年生。観月や大力等という主力選手も同じくです。先が非常に楽

しみな高校と言えるでしょう。さあ、親切高校校歌斉唱です』

双方礼を言った後、親切高校野球部は校歌を斉唱する為に1列に並び直す。

少し経って音楽が流れ始める。

そして、それと同時に涙を流す者もいる。

この試合で引退が決定した3年生の面々や、最後の打者となつてしまった大力、逆転を許した鈴木。多数が涙を見せる中、2人の男は違つた。

「坂内」

校歌斉唱が終了し、応援団への挨拶が済んだ後、各ベンチへと戻る前にパワフル高校主将境井は敗れた相手の主将に言葉をかける。

「…ありがとう。最後に良い試合が出来たように思う。相手が親切で良かったよ。リベンジは、俺らの次の代が成し遂げてくれることを信じているぞ」

「ああ…頑張るよ」

主将同士で熱い握手を交わす。

「梓真、負けないな」

「…当たり前だ。ここでの勝利の意味は重いな」

——俺たちの分まで頑張ってくれよ、親切高校。

勝者が進み、敗者は去ることしか許されない。

「観月、お前、砂持ち帰らないのか?」

「…また、来ますから。もう二度と、こんな思いはしたくないですから」

観月は振り返らない。その瞳が捉える先、未来の自分たちの姿。
「次は、絶対負けないからな」

——3——1。親切高校・2回戦進出決定。

第20話 全国の強豪

*

「――放送席、放送席！こちらは緒戦を見事勝利で収めた親切高校・車坂監督です。監督、初戦突破おめでとうございます」

「有難う御座います」

「緊迫した投手戦の中、粘り強く戦い抜きました――」

緒戦を勝利する事が出来た僕達はベンチを後にし、今までテレビの画面で見ていた場所でインタビューを受けている。

受けていると言っても、数人で話を聞かれているのは監督、寺河さん、坂内さん、信弥の4人だ。亮の事を探している方も居ただけど、話を受けるのが嫌いだとか言つて中学の頃からいつも試合の後はトイレにこもっていたっけ。多分今もそれをしているんだと思う。

「監督、柄にも無く緊張してるみたいだな」

先にインタビューを終えた寺河さんが戻り、報道陣に囲まれてあたふたしかける監督を見て笑う。

確かに普段物怖じしない監督が明らかに緊張しているのは面白いと思う。

うん、誰が見ても笑うと思う。現に勝利と寺河さんが爆笑してるし。

「何がおかしいんだ？寺河、乾、天道：是非詳しく俺に教えてくれないか？」

「か、監督：!?!」

「お前ら、旅館に戻ったらとりあえずランニングな」

：鬼だ。一体いつ戻ったんだ。全然気が付かなかった。

満面の笑みでさらっと罰走を言いつけてくる辺り、いつもの監督だけれど――監督を弄るような発言は今後禁止ということが言うまでもなく決定した。

文句のつけようがない投球をし、記者に引っぱりだこにされていた寺河さんの満面の笑みは消え、勝利は元々走る予定だった為、左程気

にはしていない様子だ。

「…何の騒ぎだ？」

遅れて登場した亮は魂が抜けかかっている寺河さんを見てやや呆れ気味といった様子である。

「君が逃げたからだ」

「何を言っているんだ？」

いや、こっちの話です。何はともあれ1通りインタビューが終わったところで球場を後にすることになった。

でもその前に

「監督」

「何だ天道？」

「この後の試合を見学したいんですけど」

全国の強豪が集まっているこの甲子園大会。自分達の試合が終わったからと言ってそのまま宿舎に帰るのは勿体無い気がする。

それに対戦するかもしれない他校を視察しておくのは大きいと思う。

「自分も同じです監督」

これには坂内さんも同意見らしく、どうやら元よりそのつもりだった様だ。細かなデータを収集している坂内さんならと思っていたけど、思った通りだ。

監督に許可を貰い、再びゲートを潜って今度はスタンドへと足を運ぶ。

「お、何だ試合見てくのか？」

着くと直ぐに意外な人物に声を掛けられる。

「うん、気になってね。観月君たちはどうして？」

「どうしてって、折角ここまで来たのにすぐ帰るって味気ないだろ？誰かさんのせいでこの土を踏むのは当分後になりそうだ」

やれやれと、観月君はやや大袈裟にゼスチャーを作る。

「バカ、悔しいのは俺もだけど口に出すなあってば」

そんな観月君を不知火君が肘で軽く小突く。

「そんな怒んなって。ちゃんと、解ってるさ」

「観月君…肩の調子は？」

そつと言の葉を落とした観月君は自身の右肩を優しく摩る。

「まだ完全にとは言い難いな。球速も下がったし、変化量も落ちた。でもな…このまま終わるつもりはないぜ」

その言葉にゾワツと背筋に何かが走る思いをした。彼のあの目、まだまだ諦めてはいない。一時期だけど、ボールが投げられなくなったということは相当重症だったはず。左打者だから打撃バッティングの際には右肩の働きが大きい。それでもあれだけバットを鋭く振り抜けるということは回復の傾向が見れるということだ。僕も身近で亮が肘を怪我して投手を諦めたという経緯がある。それを思い浮かべると、他人事にはどうも思えない。

「その肩の状態にもよるけど、名医を知っているんだ。良かったら話を通しておくけど」

「本当か!?実は最近リハビリに手応えを感じていなくて困ってたんだよなあ」

「おい、春ー」

不知火君はぎゅつと口をきつく閉ざす。それを見て僕はあつと、あることに気付く。それはそうだ。負けた相手に情けを掛けられているようにしか思えない。迂闊すぎた。

自然と自分の右手に力が入る。

僕は何て馬鹿なことをしたんだ。

「——今、余計なことを言った何て思っただな天道。そんなに複雑つむじまそうな顔をするのではないぜ。屈辱つむじまだろうが何だろうが、今のまじや俺はまだ前に進めない。自分を昇華出来るつてなら、俺は喜んで何だつてする。その為には恥なんて言ってる場合じゃないんだよ」

「観月君…」

「という事だ。後で絶対教えてくれよな」

そう言うつと観月君と不知火君はバックネットの方へと歩を進めていった。

「若いな、湊叶」

「…面目無いです」

坂内さんはそれ以上何も言うことは無かったけど、恐らく全て聞いていたんだと思う。

観月君の貪欲さに今回は救われたけど、未熟さを痛いくらい思い知った。深いなあ、甲子園。

2 試合目、何度も試合が動く乱打戦が繰り広げられた。満通万大附属高校対ブロードバンド高校の試合は8―7で満通万が逃げ切りを見せた。本当に何度も試合がひっくり返って見どころのあるものだった。

「湊叶、次の試合よく見ておけよ」

「次の試合って四神黄龍高校ですか？」

「ああ、ドラフト候補生がいるからな」

3 試合目に行われた試合はドラフト候補生・朱雀南赤さんが率いる四神黄龍高校が圧勝。

11―1と初出場の灰凶高校を寄せ付けなかった。最速147 km/hを誇る朱雀さんの投球は流石の一言に尽きるが、灰凶高校にも着目点はある。それが最後にマウンドに立った井筒豪一君。〃ゴウ〃と呼ばれていた1年生だ。まだ1年生ながら140 km/hを越える速球を投げ込んでいた。まだ1年生ということもあり、伸び代はかなりあると思う。良いなあ、速球。

「朱雀さんか…強いですね、出来れば当たりたくない」

「そうだな、厄介なチームだ。打線も繋がればすぐビッグイニングにへと成りかねない。危険だな」

坂内さんは淡々と四神黄龍高校のデータを纏めていく。こういう作業がああの好リードを作っているんだなと実感した。

「反対側のスタンドにいる部員がカメラで撮ってくれているだろうし、俺たちも帰るとするか」

4 試合目の試合はアメリカの〃レギュラーリーグ〃で活躍している「神童裕二郎」さんの母校である駈杜^{かけのもり}高校と初出場となるくろがね商業高校で繰り広げられた。

試合は接戦で同点のまま延長へと進み、11回裏に駈杜高校がサヨナラ勝ちを飾った。4 試合目ということもあり、やや気温が落ちて

きたとはいえマウンドの上は灼熱だ。敗れはしたものの、投げきつた銭形さんの体力には脱帽するものがある。

「有村佐治、あいつに低めは禁物だな」

球場からの帰り道、坂内さんはサヨナラの一打を放った駒杜高校の捕手有村君の打撃の上手さを評価していた。追い込まれていながらも強気な読みで、自身の足元にへと沈んでくるシンカーを外野へと運んだ。

「顔に似合わずリード面でも強気。面白い捕手だ」

「嬉しそうですね、坂内さん」

「嬉しいというか、そうだな。全国は広い」

置いて行くぞ、と坂内さんは歩き出す。

どうやら、強敵との試合を考えたら熱くなってきたみたいだ。いつも冷静を装っているけど、実は心に熱さを秘めているのが彼——坂内大也だ。

待ってくださいよ、と言いつぐにその背中を追いかける。

この後、ランニングもといポール間ダッシュ50本が待っていると露知らず、その後車坂監督の手によって地獄を見るのであった。

*

「あー…疲れた」

「お、やっと終わったのか。それにしても随分かかったな」

宿舎に戻ると庭先でバットを振り込む亮の姿があった。服装は軽装なウェアに着替えられている為既に入浴は済ませている見たいだ。とか言っても、振込みすぎて汗だくになるのが目に見えるけど。て思った矢先、バットをしまい始めた。流石にその辺は考えてるか。

「インターバルが短すぎて身体がついていかなかった。タイム走だったし」

「そうか…それは、気の毒だな」

亮の顔が一瞬強張り、返答が返ってくる。どうやら僕の辛さを想像したらしい。

「足がもう棒だよ…立ってるのもキツイや」

「早く湯船に浸かればいい。しっかりと筋組織を解せば回復は早くなるだろうからな」

「そうするよ」

「幸い明日は自主練だ。軽い内容にしておけば直ぐに抜けるだろう」

「だよね、お風呂行ってくるよ」

「ああ、もうお前が最後だ」

「え、もうみんな入ったの？」

「今が何時だと思ってるんだ」

亮の言葉にぱつと壁にかかっている時計を見ると、時刻は午後9時過ぎと言ったところだった。

「あちやあ…やばいね」

「それにしても他のメンバーより遅かったが、何かあったのか？」

「え、いや、これとってなかったけど。勝利と寺河さんは普段から走り慣れてるって言うのもあって僕より早く終わったってだけだよ」

「そうか。引き止めて悪かったな」

「いやいや、大丈夫だよ」

思いもよらぬ練習のせいで満身創痍になり身体はもうヘトヘトだ。ブクブクと湯船の中であぶくを作ってゆったりと身体をお湯に沈める。大会中等に関わらず、こういう時間は大切にしている。いや、し始めたと言った方が正しいかな。亮の一件からしっかりと自分と向き合う事が必要だと思ったからだ。とは言え問題は当然の様子に沢山ある、それはもう山積みと言った様子。だから自分で制約を立てておいてそれに潰されそうになる。でもそれを避けるために心身共にリラックス出来る場である入浴の時間に力を入れるようにした。

「今日の試合…緊張したな」

今日1日に起こった事は自分の中で非常に大きなモノだ。最後の試合に掛ける3年生の気持ちの強さを垣間見た気がするし、自分の目指すべき形もぼんやりとだけど見えた様に思う。

既にそれに向かって動き始めてはいるけど、こんなに身体に負担がかかるとは思ってもみなかった。やっぱり一朝一夕にはいか

ないみたいだ。まあ簡単に行ってたらあんなに時間はかからなくてもっと早く帰ってこれただけどき。難しいなあ、野球って。色々考えて思考は今日の試合へと戻る。今日の試合はそれだけ印象が強い。

「あのスライダーは上手く打てた。うん、上手かった気がする。でも、初打席は駄目だ。会場にも鈴木君にも呑まれていた」

初めて経験する大歓声に囲まれた球場での試合。萎縮しなかったかと言えば嘘になる。

ギョツと拳に力を入れる。まだまだ地力も足りないし、場数も足りない。しっかりと地に足をつけて上を目指す。

まだ僕達は本当の甲子園を知らない。魔物が生まれる甲子園を。

*

大会2日目。この日甲子園球場からは大きな歓声が沸き起こっていた。

『し、信じられません！しかし今、目の前で起こっていることは現実です！事実です！“帝王実業高校”・藤内直哉！現在8回終わって完全試合継続中です！そして今、最終回のマウンドに登ります！』

『甲子園が始まって以来、春のセンバツ大会では2人完全試合を達成した方が居ます。しかし、この夏の甲子園大会で成し遂げた者は居ません。この灼熱のマウンドで唯でさえ難しいことを達成するのは至難の技です。それがもう直ぐ達成されるのではとなれば、会場が湧くのも当然ですし、私個人の胸も踊りますね』

『中立の立場である解説者の五十嵐さんも熱くなりますか。やはりそれ程の記録ですものね。さあ、投球練習を終えた藤内君がその左手にロージンバックを入念につけます。対する“さわやか波乗り高校”も闘志は枯れていません！ベンチからは身を乗り出して声援を送ります。点差は12点、一矢報いる事が出来るのか！』

全国の野球ファンがこの試合に釘付けになっている。それ程この試合は光を強く放っている。

「直哉、狙う気はあるか？」

帝王の捕手・明智はこの大記録を踏まえマウンドに佇む藤内に問う。

「あつたりまえっしょ！ここまで来たら狙いますよ」

俺がこの位で緊張するだけでも？と藤内は強気な態度を示す。

「そうか、ならいい。左手を見つめたまま動かないんでな、ビビっているのかと思つたよ」

「違いますよ！俺があ程度の相手にビビるわけないっす」

「そうか、ならいい」

2死となつた後のことだつた。

「ボール！フォア！」

『は、外れたあ！外れました！！^{フォアボール}四球です！後死^{アウト}1つで試合終了というところで、さわやか波乗り高校、意地を見せます！粘つて完全試合は防ぎました！』

『ここで少しボールが荒れましたね。次の1番打者の丘君が気になつたのかも知れませんが、徐々に捕えられ始めていることですし。何としても、夏の甲子園大会始まつて以来の快挙とはなりません。しかしまだ無安打無得点試合ということをお忘れはいけません。この四球の流れに乗って丘君には反撃の一打を期待したいところです』

「…おい、最後の気の抜けた球は何だ？」

怒る明智の言葉に、藤内は目を見据えて言葉を返す。

「——1人、まだ借りを返してない」

鋭い眼光の先に映る姿は1人。日に焼け、黒々とした肌には大きな汗が浮かぶ。それでもまだ、目は死んでいない。

「アイツ——丘にはやられてるんだ。やり返す」

そう言うと言を強く握りしめる藤内。確かにこの試合、丘にヒットこそは打たれていないものの2打席目、3打席目と捉え始められている。守備の方でもヒット性の当たりを好捕されている。というかこれが大きいだらうと明智は推測する。

「…バカだなお前は」

「今更ですよ明智さん」

藤内はバカだが、自分もバカだと明智は思う。この行動がもしか

したら試合をひっくり返すことに繋がるかもしれない。投手はエゴイストと言うが、藤内がやったことはチームの私物化だ。

「これで打たれたら交代だ、いいか？」

「うわあ、厳しいっすね明智さん」

「アホか、お前はそれ位のことをしたんだ。まあその時はお前だけじゃ無くて俺も下がる。しっかりと手綱を握れなかった俺にも非はあるからな」

「がんばれよ——と最後に左胸をミットで小突いてからホームへと明智は引き返す。

「明智さん——俺は決めますよ」

『さあ、打ち合わせが終わって試合が再開されます！この会場の雰囲気！自らが作り上げた熱気を力に変えられるか!?マウンド上の藤内です！』

『対する丘君もここまで抑えられていますが、先程の打席ではいい当たりを放っています。一矢報いる事が出来るでしょうか!?!』

・・・

「ストライーク！バッターアウト！ゲームセット！」

『空振り三振！最後は3球で締めました！“帝王実業高校”・藤内直哉！無安打無得点試合達成です！敗れたものの“さわやか波乗り高校”のナインは最後まで諦めない姿勢を見せてくれました。——』

「大したやつだな、お前は」

「いやあ、皆が守ってくれたお陰ですよ」

「良く言うぜ、全くよ」

校歌斉唱を終え、ベンチへと引き上げ的过程中で会話が交わされる。

無安打無得点試合をやったのけた藤内だが、その表情はあつけらかなとしたものである。投手としての度量が大きくなっている反面、利己主義者（エゴイスト）としての面も生まれてきている。能力が伸びたことを喜ぶべきなのか、自己中な部分を咎めるべきか、明智は判断を決めかねていた。

「——完全試合ですか？そうですね、狙ってたんですけど、丘君を意識したらストライクが入らなくなって——」

試合後、報道陣によるインタビューを終えた藤内は守木独斎監督に呼び出しを受ける。

「おい藤内」

「何ですか監督」

「最後の四球…お前ワザと出したな」

藤内の顔からみるみるうちに血の気が引いていく。

「…な、何のことかなあ」

「…お前、いつからチームを私物化出来るほど偉くなったんだ？」

今の季節は真夏。しかしそれを掻き消す程の緊迫感が冷気となつて藤内を襲う。

「うっ…！」

「そんな自己中心な投球をする者に“エースナンバー”は相応しくない。その番号の意味をもう一度考えるんだな」

「…はい」

「大方理由は分かっている。お前の性格を考えればそう思うのは考えられるからな——しかしだな、理由がどうであれチームの私物化は許されることでは無い。繰り返すが、自分の背番号の重みをよく考えるんだな」

「…はい」

「忘れるな。お前達18人はスタンドから声援を送ってくれる奴らの代表ということをな。——次の試合の登板は無しだ」

「…なっ」

その言葉に固まる藤内を横目に明智は呟く。

「自業自得だな」

*

「とんでもないヤツやな、藤内つてのは」

「見た感じ球種は2つ。ストレートとシュートの様に感じたが。カットボールは投げていなかったな」

「仮にその2種類とすると、それでよくあれだけの投球が出来るもんだ」

「完全に波乗りを見下ろして投げてたからな」

広間にあるテレビを眺めながら親切ナインの各々が言葉を綴る。佳月と友沢は打者としての目線をしっかりと持ち、投手である寺河は違う視点から着目する。

「140km/hを超える速球が袂りに来るんだ。これを打つのは至難の技だな」

「でも打たなきゃ勝てないんだよね。だったら打つしかないよ」

「左投手に強い左打者」という稀有な存在である翔は帝王と当たった場合はスタメン出場がほぼ決まっていると云っていい。そんな彼がこんな言葉を零すのだから相当藤内君の球がキレているのが分かる。

彼の他にも四神黄龍高校の朱雀さん、^{グレイテスト}超最強学園の剣君と140km/h後半を計測する好投手がいるこの大会。ここで両打ちというポイントを何としてもアピールせねば。

*

大会3日目も滞り無く経過していく。

第2試合において、練習試合をしたことがある聖タチバナ学園対するめ大学附属高校の試合が行われ4―1で聖タチバナ学園が勝利を手に行っている。

続く第3試合では神高くん率いるアンドロメダ学園高校が6―0で古豪海東学院高校を下し2回戦にコマを進めた。

大きく横滑りするスライダーを用いた神高君の投球は圧巻の一言に尽きるものだった。

そして第4試合――球八高校対激闘第一高校の試合で、再び甲子園球場が地鳴りを発した。

柊 和弥――彼のその投球に。^{ピッチング}

外伝 ―球八高校編―
夢の始まり① 創めの一步

*

『父さん！ホームランボールとれるかなあ？』

『さあな、水木アイツが打てれば可能性はあるな！』

カキーン!!!

快音が辺りに響いた。

『やった！ホームランだ！よし、とるぞー！』

45度の角度から生まれた美しい放物線は、あっという間にスタンドへと吸い込まれていく。

——そして、事は起こった。

『うわあ！と、父さん！』

大神モグラーズの主砲水木の放った打球が、こともあろうかに少年の父親の頭部に当たってしまったのである。

『と、父さん…うねえ！だいじょうぶ？死んじゃイヤだよー!!』

プロの野球選手の投手が投げる直球ストレートの平均速度は凡そ140km/h前半とされている。その速度を持つ硬球を、プロの野球選手それもチームの主砲を務めている様な選手が打ち返した打球の速度は計り知れないものとなる。

それが頭部に当たったのだ。当然辺りはざわめき、少年は激しく狼狽する。

しかし、そんな少年は狼狽えるのを止めてしまう奇妙な出来事が発生した。

『おひよ?!ここはどこじゃ?』

『エエー!ボールがしゃべったア!』

・・・

そんな事があって以来、父さんは硬球の中に閉じ込められたままだ。身体の方は意識不明の重体となっており、3年が経った現在も病院に入院している。医者せんせいの見解では肉体的には健康そのもの

なのでいつ意識が戻っても不思議ではないらしい。 兎に角、現代の医療では現状維持で手一杯のことらしい。

今はまだ意識が戻ることは無い。

その事だけが小学4年生の俺でもわかることだった。

というのも事件が起きた夜、夢の中に胡散臭い神様とやらが現れてその事を教えてくれたのだ。 起きた時は夢だと馬鹿にしていたけど実際に、俺には父さんがボールに入っている様に見えて話せるけど、近所に住んでいる瑠璃花は普通のボールにしか見えないと言っていた。

こんな話はサンタさんが居るといふ話くらい信憑性が無いものだと思っていたけど、どうやら本当のことらしい。

「和弥、虎造…お父さんはどうだ？」

受話器から聞こえる声はいつも聞く声だ。 声の主は以前、大神モグラーズの主砲として活躍していた水木卓さん。 モグラーズの全盛期の中心人物であり、俺の叔父さんに当たる人物であり、俺の父さんに打球を当ててしまった張本人だ。

「こんばんは水木さん。 今日もう変わりは無かったよ」

「…そうか。 本当に済まないことをした」

非は無いというのに、水木さんは暇があれば毎晩電話をかけてきてくれる上に、俺の日常をサポートしてくれている。 毎日夕飯は南雲家で食べさせてもらっているが、夜は一人で過ごしているからだ。 周りは俺が一人で生活していると思っっているんだと思う。

「和弥君は、水木さんのことが嫌いじゃないの？」

小学校からの下校時に不意に瑠璃花からそんな言葉をかけられた。

「んー、別に嫌いじゃあ無いかな。 何でそんな事を聞くんだ？」

「だって、和弥君のお父さんが入院することになった原因は水木さんで人でしょう？」

「まあ、確かに。 水木さんのホームランが当たって父さんがボール：じゃなかった、入院することになったけど憎むのは何か違う気がするんだよな。 わざとやったわけじゃないだろ？ だから、責める事はないと思ってる」

この会話を聞いた父さんはいい年しながら号泣したらしい。：
俺のポケットの中で。

おかげで瑠璃花にお漏らしした様に言われちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ全く。

その夜、父さんは寝る前に1つ話を教えてくれた。

水木さんと父さんは俺には知らない確執があつたらしい。それは、水木さんの妹である静香さんもとい、俺の母さんが亡くなったことから来ているのだとか。父さん曰く、水木さんはかなり母さんのことを大切に思っていたから尚更やるせない気持ちになつてゐるらしい。

「ま、流石に甥っ子であるお前に対してはそれをぶつけてないみたいだがな。ハツハツハ」

と父さんは豪快に笑つていたけど、親友である水木さんとの仲に溝があつて悲しくない筈が無いから出来るなら2人を和解させたいと思つている。何か良い手は無いかなど、知恵熱が出るまで悩んだのであつた。

・・・

小学4年生になつた俺は地元の少年野球チームの「サイバーキッズ」に入団しようと思つていたけど、父さん曰く「伝説の少年野球チーム・「ガンバーズ」に入るべきだ」との事なのでそこを目指して歩みを進めている。

バス停から歩くこと数十分、どうやら目的地が見えてきた様だ。

目の前には貫禄のある立派な柵がある、大きなクラブハウスが建つてゐる。伝説という名に相応しい建物と言つていいかもしれない。

「ここが「ガンバーズ」のクラブハウスか。随分大きいな」

「そうじゃ！ここに入れば全国大会も夢じゃないぞ！」

「全国大会か。行つてみたいいなそんな所」

柵の前で父さんと話をしてしていると不意に後ろから声をかけられる。

「「ガンバーズ」に入団でやんすか？」

「うわ！びっくりした：うん、そうだけど」

「それでやんすか！受付はあちらでやんすよ」

俺を出迎え？てくれたのは瓶底メガネをかけた無田君という子だった。聞けば年も同じ、4年生らしい。仲良くなれるといいな。

「早速でやんすがこれがユニフォームでやんすよ」

「うわあ！これがユニフォームか！カッコイイ！サイズもピッタリだ！」

「ユニフォームだけでこんなに喜ぶなんて可愛いものでやんすねえ」

初めて貰ったユニフォームに俺は感動を覚えた。直ぐにでも練習に取り掛かりたい。しかし、俺のそんな思いは非常にも裏切られることになる。

「早くクラブハウスに戻って練習といこう！」

「クラブハウスってさっきの建物でやんすか？」

「うんうん。正に伝説って感じの建物だったよ！」

「あれはライバルチームの『サイバークイツ』のクラブハウスでやんすよ？『ガンバーズ』はこの空き地がホームでやんす」

「ええー！なんだってえ！」

父さん…話が違うじゃないか…。

「お、見かけない顔だな。無田、入部希望者か？」

「あ、キャプテン！それでやんす！これで9人揃ったでやんすね！試合が出来るでやんす！」

「そうだな。俺は一堂。終って言うのか、よろしくな」

…

『ガンバーズ』のメンバーと出会ってから1ヶ月が経とうとしている。しかし、俺はまだ練習には一度も参加したことがない。『サイバークイツ』の見学に行ったり等と、要するに迷っているのだ。

『ガンバーズ』に入るかどうかを。

よし、それじゃあ気持ちを整理するために状況を把握しよう。

まず『ガンバーズ』はと言うと

・人数ギリギリ

・監督不在（パチンコに通っているため）

・用具不備

・グラウンドも手入れが悪い。
・雰囲気はまだマシ
んー、ここだけでどう考えても入るチームを間違えた気がする。
次は〃サイバーキッズ〃

・監督手腕よし

・設備面良好

・人員良好

・レベルが高い

・雰囲気ガキガキしている？

父さんは〃サイバーキッズ〃が好かないみたいだけど、どう考えても設備は〃サイバーキッズ〃の方が良い。 どうするべきかと気晴らしに散歩をしているが一向に打開策は出てこない。 仕方ない、帰って素振りでもしようと思わぬ人物と再会した。

「あれ、和弥じゃん。 どう？ 気持ちは決まったか？」

声を掛けてきたのは才葉零人^{さいばれいと}。 同じ保育園に通っていた為、彼は少なからず面識がある。 父さんも零人のお父さんを知っているみたいだ。

「それが…」

俺は今どの様なことを感じて考えているかを零人に伝えた。

「…そうか、お父さん、今入院しているのか」

「ああ、うん」

ここで父さんがボールに入っていることを話しても零人は信じれないだろう。 最も声が聞こえないのに誰が信じてくれるのかという話だが。

「言っちゃあ悪いけどウチと〃ガンバーズ〃じゃ比べ物にならないんじゃない？ 何を迷っているんだ？」

零人の言うことは最もものかもしれない。 〃サイバーキッズ〃

は強豪とのことで入る際に入団試験がある。 水木さんと父さんの2人から手ほどきを受けている俺はそれに通る自信もあるし、零人自体が親に話を通してくれるらしい。

ここまでではつきり分かっても俺が〃サイバーキッズ〃を選び

きれないのは2つの事が頭にあるからなんだろう。

「零人、ごめん。俺、やっぱり『ガンバーズ』で野球をするよ」

「理由を聞かせてもらってもいいかな?」

「まず1つ:ガンバーズで野球をして欲しいってのは父さんの意志なんだ。だからそれを尊重したい。2つ:俺は、お前と戦ってみたい」
「なるほど。ライバルってことか」

俺の言葉に零人は好戦的な笑みを浮かべる。

「本格的に野球を始めるのは今年からだけど、まだ4年生だ。先がある。後2年で零人と対等なラインに立てるように俺は努力する。だから、俺は『ガンバーズ』に入るよ」

「和弥が決めたことだから文句は無いし、それに、面白そうだ。名前もガンバーズだし、頑張れよ」

俺たちは硬い握手を交わした後、言葉を交わすことなくその場を去った。

覚悟は決めた。俺は『ガンバーズ』で頑張ろう。

「和弥、良い事言っただけ、スケールが小さいわ!対等?甘い!追い抜かんか!」

「あーあーあー、ごめんごめん。頑張るから!」

...

「今日からお世話になります、柘和弥です。よろしくお願いします!」

次の日曜日、俺は早速ユニフォームに身を包み、『ガンバーズ』の練習場へと向かった。

...が、そこでまた新たな問題が発生した。

「あれ?キャプテン、人数が6人しか居ないですけど後の3人は?」

「んー、おかしいな。そう言えば顔を最近見せていない」

「え、それってもしかして:」

嫌な予感があったのですぐ様監督に問いかける。

「監督!他の3人は?!」

「昨日の夜電話があって辞めたいだとき。試合をしたいなら後3人集め直さないとだな」

「ソンナバカナー!」

父さん：俺は貴方を一生恨むことになるかもしれませんが。

零人：早くもお前のライバルは挫けそうだ…。

家に帰るなり、俺は直ぐ様父さんに報告した。

「父さん：ガンバーズ、人数が足りなくて試合ができないって…」

「お前らしくないな。人数が足りないからってなんだ！足りないならスカウトすればいいだろう！」

「無理だよ。『ガンバーズ』のあのダメっぷりじゃあ」

「やって見ないことにはわからん！まずは学校、次に街、商店街と可能性の有る所を探すしかない！一度は決めた事だろう？男なら初志貫徹有るのみ！」

「そうだな。よし、明日から学校で探してみるよ」

現状はまだまだ目も当てられない様な様子だけど、監督も人数が揃いさえすれば本格的に練習を始めると言ってくれている事だし、野球人として一步は踏み出せた。

明日は月曜日、早速勧誘に取り掛かろう！

夢の始まり② 出逢い

月曜日、チームの状況が思っていたよりも深刻だった為早速行動に出ることにした。

「な！急で悪いんだけさ、野球に興味ないかな？」

昼休み、こんな風に同学年の教室を回ることを繰り返していくが成果は芳しくない。

みんな揃って、「野球はちよつと…」等と難色を示すのだ。 野球楽しいのになあ…

結局月曜日は空振りに終わり、下校時間を迎えた。

「和弥君、見つかりましたか？」

「ううん、さっぱりだ。どうも引き気味なんだよな」

「どうにかして解決したいものですね。あ、そうだ！今日クラスに新しい人が転校してきたんです。その方に聞いてみては？」

「転校生か。まだ分からないけど、可能性はあるかもな。ありがとな、瑠璃花」

「ど、どういたしました。今日も夕食食べに来ますよね？」

「うん、いただくよ」

転校生ねえ、まだどんな人かわからないけど話してみる価値は充分にありそうだ。

...

次の日の昼休み。チャイムが鳴り始めると同時に俺は行動を起こした。 瑠璃花の教室に向かうと、昨日教えて貰った様に窓際に初めて見る子が居た。クラスの知り合いに挨拶をしてから俺はその転校生の元に歩みを進めた。 何となく、不思議な印象が感じられた。

俺が近くに行く就先に向こうからこちらに声をかけてきた。

「君が和弥君かい？」

「そうだけど、何で名前を知ってるんだ？初対面だよな？」

「うん、まあ色々あってね。と、それより…ガンバーズの部員を探しているんじゃないっけ？」

「な、何でも知っているんだな」

「うん、もう要件は分かっているから答えるよ。まどろっこしいのは嫌いなんだ——OKだよ、一緒に野球しよう」

「そうだよな、やっぱり断るよな。ん？今なんて!？」

「ははは、君は面白いな。一緒に野球をやろうって言ったんだよ」

「エエー！本当か！」

まさかの返答に思わず大きい声を上げてしまい、周りから視線を集めてしまった。恥ずかしい…。

「詳しいことは放課後に話すよ」

「うん、ありがとうな！えっと、名前は？」

「ああ、うっかりしていたよ。僕の名前は蓮。つわぶきれん石路蓮だ。宜しくね」

「宜しくな！石路！」

「名字で呼ばれるのはあんまり好きじゃないんだ。だから下の名前で呼んでほしいな、僕もそうするし」

「分かった！改めて宜しくな！蓮！」

握手を交わした後、俺は瑠璃花の元に行きお礼を言ってから教室を出た。

いやあ、話してみるもんだな。これで1人増えたから後2人。

何としても7月までに見つけたいところだ！

・・・

放課後になり、掃除を終えた俺は急いで蓮の待つ正門に向かった。瑠璃花とはいつも一緒に帰っていたけど、今日は蓮とガンバーズについて話し合うので先に帰ってもらった。最もそれによつて帰りに駄菓子屋による事が確定してしまったのだが。

「やあ、和弥。遅かったね」

「ごめん、掃除があつてさ。んで、話つて？」

「そうだね、歩きながら話そうか」

歩くこと十数分、拓けた空き地にと到着した。土管が置いてある

ここは小さい頃からの遊び場となっていた。話をするにはもつて

こいの場所だ。

「それにしても良かったよ」

「何がだ？」

土管に座るなり、蓮はそう呟いた。

初めて見た時、俺は蓮に対して他の人とは違うような不思議な感覚を感じた。話していて分かったけど、その正体は妙に落ち着いた大人びたこの雰囲気だった。何でも昨日と今日を過ごして、話しかけられたのは女子だけで、男子からは数える程しか無かったらしい。「僕って変わってるのかな？」

「んー、いや、そんな事ないと思うぞ」

「そつか。まあ君がそう言ってくれるならそうなんだろうね」

「気にしなくてもそのうち皆と話せるようになるさ。それで、昼休みに言ってた話って？」

「んー、まずどこから話そうか。——僕はね、サイバーキッズって野球をしていたんだ」

蓮がサイバーキッズ出身？ 今の時期に転校してきた事とそれは関係あるのかな？

「サイバーキッズと言えば名門じゃないか。何で辞めたんだ？」

言葉を返した瞬間、蓮の顔が曇った。

「あ、ごめん。変なこと聞いたな」

「大丈夫。気にすることは無いよ」

それからゆつくりと蓮は事情を話してくれた。

この地域の少年野球は任んでいる地域で所属出来るチームが決まっている。俺の場合は特殊でガンバーズとサイバーキッズ、両方とも通える地域だった為、選ぶことが出来た。一方蓮はと言うと、地域的に所属出来るのはサイバーキッズだった。それが蓮にとっての不幸だった。生じ実力があるだけにサイバーキッズの入団試験に通ってしまったのだ。でもサイバーキッズと言えば強豪だ。入れるのは認められたものだけ。

なのに何で？

その答えは俺も感じていたものだった。

「…楽しくないんだよね。あそこは。」

——選手間に違和感を感じた。

それが蓮の答えだった。

「やっぱり、野球をするなら楽しい方がいいからね。才葉には止められたけど、僕は楽しく野球がしたかった」

「そうか、蓮は才葉と同じ小学校だったのか。」

「それに、僕がガンバースを選んだのは君も居たからだ」

「え、俺？」

「君は、才葉のライバル何だろ？それを聞いて僕も思ったんだよね。才葉を、いやサイバーキッズを倒したいってさ」

落ちて着いた雰囲気を持つ蓮からは信じられないような闘志を感じた様な気がした。まだ会ったばかりだけど、これだけで何か俺達には通ずるモノが有るように感じられた。

「今はまだ無理かもしれない。でもまだ日はあるんだ、絶対勝ってやろうぜ！」

「うん！頑張ろう！」

そう言って拳同士を合わせて打倒サイバーキッズを誓い合い、同時に笑った。

いい雰囲気だ。 そう思った瞬間

「その話、俺も乗らせてもらおうぜ！」

土管の中からにゅっと顔が飛び出した。

「うわぁー！ー！」

思わず悲鳴を上げてしまったけど、俺は悪いとは思わないんだ。

...

「なはは、悪い悪い」

悪びれる様子無く笑顔で土管の中から現れたやつは笑っている。心臓が止まるかと思っただぞ。冗談じゃなくて、割とガチで。

「まあ良いけどさ。それより野球、興味あるのか？」

「ああ！運動は好きなんだ！俺でよかったら是非…何だっけ？あ、ガンバースか！それに加えてくれ！」

「大歓迎だ！えっと、確か…星だっけ？」

「そう、星 逸平いっぺいだ！そう言えば今までクラスが同じになったことないな」

「これがクラス分けの闇ってやつだな」

「ははは、と笑いながらハイタッチを交わす。

「俺のことは逸平で良いぜ、俺も名前で呼ぶからよ。石落だったか？
これから宜しくな」

「OK、分かったよ逸平」

「うん、こちらこそ宜しく逸平」

言った側から蓮に友達が出来たな。 いやあ、良かった良かった。

確か、記憶が正しければ逸平は陸上をやっていて足が速かった筈だ。 運動会の80m走で去年ぶつちぎっていたのを覚えている。

「陸上の方はいいのか？」

「陸上は平日だから大丈夫だ。今週から早速顔を出すよ」

「それは良かった、やったぜ！」

いやあ、今日はツイてるな。 話を聞いた感じだと蓮は遊撃手、逸平は足が速いから外野を守る。 この2人だけでセンターラインが出来た。 これはほんとにチームに大きい。

「じゃあな！また明日！」

また明日の放課後に話し合おうと決まったところで今日は別れることにした。

家に着くなり、今日の事を父さんに報告すると珍しく褒めてくれた。

「良い感じだな。この調子でサイバーキッズを倒すんや！」

「まだそこまで言うには気が早いよ」

そうは言いつつも俺も浮かび上がる笑みを抑えられなかった。

「あ、そう言えば…」

「どうした？」

「瑠璃花と約束したお菓子を買うの忘れてた…」

「それはやってしまったな…」

この後夕飯を食べに南雲家にお邪魔するのだが、瑠璃花の雷が俺に落ちるのだった。

...

「うー…左頬が痛む」

隣を歩く瑠璃花をジト目で見ながら登校を行う。ぶつちやけ叩かれたのは俺が悪かったわけだし、もう痛みも無い。でも瑠璃花の困った顔が見たくてつい言ってみたくなったんだよね。

「うう…昨日は確かに私がやりすぎました。でも、元はと言えば和弥君が約束を守らなかつたのが悪いんですからね!…まだ痛みますか?」

「ううん、もう治ってるよ。何か、瑠璃花の顔みてたらからかいたくなってるよ」

「…和弥君のバカ!もう知りません」

…バチーンと叩かれてしまった。俺の右頬には真っ赤な椀が出来上がっている事だろう。

「やりすぎたかなあ…」

後悔半分、普段見れない表情が見れたから満足半分と何ともわからない感情を抱きながら学校に向かったのだった。

...

「おーい、和弥。お客さんだぜ」

昼休み、クラスメイトが呼ぶので付いていくとまた見覚えのある人が立っていた。

「えつと確か…如月君だっけ?」

「ああ、如月司きげむらぎつかとだ。こうして話すのは初めてだな」

俺たちの学年は150人、30人区切りの5クラス編成となっており、クラス分けはコンピュータによりランダムで行われるため逸平や、目の前にいる如月の様にまだ同じクラスになった事もない人も不規則故に存在する。

「顔を知っていても話すとなると緊張するな」

「まあな。と、時間も限られてる事だし話を進めよう。俺もガンバ―ズに興味がある。野球は初心者何だか、駄目か?」

「いやいや!誰でも最初は初心者なんだ、駄目な筈ないよ!ありがとうな!」

あんなに悩ましい問題だったのに僅か3日で解決してしまった。勿論、また誰かが辞めてしまうかもしれない可能性はある。でも

それでも今は兎に角揃ったことを喜びたいな。

「因みに野球は初心者って言ってたけど何かやってたのか？」

「ソフトボールをやってたんだ」

「それは…心配することないだろ」

「まあボールの大きさが変わるから」

「ははは、笑えんぞ…。」

・・・

この3人との出逢いが、後の俺に大きな影響を与えるのをこの時の俺は知る由もなかった。

夢の始まり③ 始動

ガンバーズに入ってから2ヶ月が経ち、7月へと入った。この2ヶ月でチームとしての練習方式が決まり、身体作りと基礎作りが主になって進めていくことになった。

父さんもこの事に賛成で、水木さんは自分がアップの時にしているメニューを教えてくれる等とバックアップをしてきている。と言うのも、この間市長から手紙が届きその内容はと言うと「今月末に行われる大会で1勝を上げないと解散」というものだった。

俺としてはもうすぐ試合があるのに基礎練ばかりで良いのかと思いい父さんに聞いたところ、「基礎が無いのに試合で出来るわけがない」と一喝されてしまった。水木さん曰く、幸い守備は及第点との事なので後はどれだけ俺が落ち着いて投げれるかと、打線が機能するかがポイントらしい。

キャプテンの一堂さんを中心に、蓮、司の2人が居れば試合にはなるだろうとのこと。始めたばかりの逸平だが、外野で早くもセンスが光るようなプレイを度々する様になっており外野で出場することが濃厚となっている。

日はあつという間に流れ、遂に試合の日を迎えた。

・・・

目が覚め、カーテンを開けると外は晴れ渡っていた。んー、良い天気だ。

顔を洗ってから1階に向かうと、瑠璃花が窓から顔を出していた。

「おはよう瑠璃花」

「おはよう和弥君。朝ご飯まだでしょう？お母さんが作ってくれたから良かったら食べない？」

「嬉しいなあ、瑠璃花のお母さんの料理は本当に美味しいんだよね」
試合に前に美味しいご飯も食べてやる気元氣は満たんた。

「後でお母さんと応援に行きますね」

「うん、ありがとうな瑠璃花」

家に戻ってから道具の最終確認も終え、残すところは試合会場に向

かうだけとなった。

「さあ、父さん。行こうか」

「忘れ物はないか？」

「大丈夫、戸締りもしたよ」

今日の試合会場はいつものグラウンドとは違い、市が経営する河川敷で行われる。参加チームは僅か13と少ないが一応県大会予選らしい。その証拠にサイバークイズの姿も見えた。零人は俺の姿に気が付くと軽く会釈をし、チームの輪へと戻って行った。

開会式が終わり、いよいよ試合へと移っていく。

「この試合が初めてになるが、落ち着いていけば試合にはなる。今日までみっちり基礎はやってきたんだ、自信を持っていけ！」

監督の言葉に俺たちは大きく返事を返し気合いを入れる。

対戦相手は「パンジーズ」といい、パンジーの花を飾ったチームフラッグがネットに掲げられている。ブルペンで投げている投手を見ると、栗色の長髪の女性が投げていた。先発は彼女なのか。

キャプテン同士のジャンケンの結果、俺たちは先行ということになり、パンジーズがシートノックを始めた。

今日のガンバーズのオーダーはと言うと、

- ・ 1番 中堅手 星
- ・ 2番 二塁手 一堂
- ・ 3番 遊撃手 石蔭
- ・ 4番 右翼手 如月
- ・ 5番 投手 柊
- ・ 6番 三塁手 小野
- ・ 7番 一塁手 徳川
- ・ 8番 捕手 無田
- ・ 9番 左翼手 二ノ宮

俺たち4年生が中枢部分に入るという驚きの結果になった。特に初心者ながら先頭を任された逸平は飛び上がった。こちらのシートノックも終わり、いよいよ試合が開始される。

かと思いきや、礼の後相手選手である女性選手がこちらに話しかけ

てきた。

「ふっふっふっふっ！」

「何だその笑い方!？」

その笑い方、特徴的にも程があるだろ。　思わず突っ込んでしまった。

「私の名前は比奈鳥青空^{ひなとりそら}。お前達!今すぐこの場を立ち去りなさい!」

「何か変な事言ってるでやんすよ」

「私は貴方達に絶望を与えてしまう。悪いことは言わない。生きる希望を失う前に立ち去るのです」

「何言ってるんだこの女」

みんながその言葉にきよとんと首を傾げる。　無田君と司に至っては顔を顰めている。

「試合はやって見ないことにはわからないさ。早くやろう」

お、蓮の闘志が燃え始めたな。　良い感じに試合で爆発してくれることを願うぜ!

「あの姉ちゃんええケツしとるな〜」

「父さん…それってどういう意味だ?」

「いや!あくまで野球的に見てだな!引き締まっているな〜と」

「はあ…何言ってるんだか」

…

プレイボール!と主審がコールし、俺たちの命運をかける試合が始まった。

投球練習を見ていたが、どうやら比奈鳥さんは軟投派らしく山なりのボールが投げ込まれている。　この手の投手はボールを線ではなく点で捉えなければならぬ為攻略が難しいとされている。　うゝむ、まさか初戦からこんな投手と見えることになるとは。

経験者でも対策しにくい山なりスローボールの前に初心者である逸平はなす術なく、三振を避けようと懸命にバットに当てるもキャッチャーフライに倒れてしまった。

続く一堂さんもバットに当てはするものの、打球は力無く転がり2

死となった。

ここで静かに燃える男・蓮の登場だ。

静かに打席に入り、投じられた初球を鋭いスイングで弾き返した。ボン！と複合素材バット特有の音が鳴り、打球は左翼手前にと落ちる。複合素材バットはリーグによって規制されており、使えないことが多々あるが今大会はOKとのこと。俺たちは4年生と下級生だから6年生に比べると力はまだ足りない。そこで水木さんがミゾットスポーツからこのバットを取り寄せてくれたのだ。太っ腹だなあ。

蓮が初球から盗塁を決めた直後、少なからず動揺したのか、比奈鳥さんの投じたスローボールは高めに浮いた。

ソフトボール経験者という事もあり、ノーステップ打法の司は上手くタイミングを取り、外野フェンスを越える打球を放った。

司が塁を回り始めると、みんなは堰を切ったように声を上げ始める。勿論俺も先制点を取ってもらったからハイテンションで司を向かい入れる。まさか、初打席でこんな大仕事を成すとは：嬉しい誤算だ。さらっと盗塁を決めていたけど、蓮の判断も良かった。

うーん、流石だなあ2人とも。

比奈鳥さんはマウンドをガシガシ削っている。付け込むなら今だな！

——緩いボールを打つコツは、充分に手元まで引き付けて鋭く振り抜くこと。

水木さんが以前教えてくれたことだ。

外角の球を捉えた打球は右翼手前に落ちる。

よし、良い感じに打てたな！

ここからまたチャンスを広げたいところだったが、次の小野はフライを打ち上げてしまい、1回の攻撃は終わってしまう。

「落ち着いてな。低めにさえ投げれば大火傷は無い！」

「わかってるさ父さん」

——いよいよ、初めてのマウンドだ。

・・・

逸る気持ちを抑えて小走りでマウンドへと向かう。マウンドに着くと自然と頬が緩んでしまうが仕方の無いことだろう。ずっと楽しみにしていた投手を遂にやる事が出来るんだ。気分は最高そのものだ。

無田君が座ったのでそれに合わせて投球練習を始める。

初めての試合のマウンドという事もあり、慎重に感覚を確かめるように投げ込む。投げ込んだ球はスパーン！と音を立てて無田君のミットに収まった。うん、良い感じだ。

ボール回しが終わり、審判のコールにより試合が再開される。

無田君から出されるサインに頷き、公式戦デビューとなる一投目を相手の胸元を目掛けて投じた。

「ストライーク！」

しっかりと狙ったところに行っている。腕も振れている気がする。

2球目も同じく直球を選択。でも1球目よりも少し力を抜いて投げた。

父さん曰く、打撃はタイミングが命らしい。それをずらしてしまえばこつちのものとのこと。本格的に野球を初めてまだ3ヶ月、俺は変化球を覚えることはまだせず、ひたすらに緩急を身につけるような心がけることにした。

先程より球速が遅くなった球に相手打者はタイミングがずれ、平凡なゴロとなる。これを蓮がきっちり正面で捌き1死。

2番打者も2―2の並行カウントまで行ったものの、低めの球を打ち損じピッチャーフライに倒れた。

そして3番打者である比奈鳥さんを迎える。

「ふっふっふっふっ！ヒットの恨みは忘れない！倍返しだ！」

「…そんなヒット一本で大袈裟な」

比奈鳥さんの言葉に、蓮が呆れたように呟く声が後ろから聞こえてくる。まだ序盤だと言うのに、この人も熱血だな。まあでも、そういうのは――嫌いじゃない。

初球は今投げられるであろう全力の直球を真ん中目掛けて投げ込

んだ。比奈鳥さんはこれを見送ったが、無田君はマスクを外して何か言いたそうな顔をしている。ごめん、サイン無視しちゃったな。でも、次はちゃんと投げるから。

2球目は外に外した抜いた直球。比奈鳥さんが見送ってこれで1—1。3球目は少し力を入れてさつきよりも速い直球を胸元に投げ込んだ。すると比奈鳥さんは待つてました、と言わんばかりに足を開き強振をした。

カキーン！とカーボン製バットから小気味の良い音が鳴り、打球は一堂さんの頭を越えて右中間を転々と転がって行く。

逸平が追い付き、直ぐ様中継へとボールを返すが時既に遅し。比奈鳥さんは2塁に立っていた。

「ふっふっふっ！倍返し成功だな！」

ものの見事にやられてしまった。あの打ち方からして、恐らく内角に山を張っていたのだろう。お陰で良い所に転がされてしまった。

2塁に走者を背負い、この試合初めてのセットポジションを取ることに。あんまりセットは好きじゃないんだよなあ…。

4番打者に対して2球続けてボールが先行してしまっただが、3球目に相手は手を出しサードゴロでこのピンチを脱することが出来た。

初回から経験できる事が多い、正に野球をやってるって感じた。

「アウト！」

一塁審の声によって、思考から現実に戻される。ウチの攻撃は三者凡退に倒れていた。やはりスローボール、それもあそこまで遅いものだと相当な武器になっているようだ。

「いいね、俺も負けてられないな！」

2回からは互いに譲らない投手戦が続いた。比奈鳥さんは低め低めを心がけた堅実な投球で、蓮等を塁に出すも要所で締める投球をし、7回2失点でこの試合の投球を終える。最もパンジーズは後攻の為、この回に俺が2点取られたら次の回も投げることになるのだが。

しかし、そうはさせない。

タイミングを崩す事は勿論だが、終盤に入り相手が俺の球に慣れてきたような印象を抱いていた。そこで父さんに相談したところ「ムービングシステムの球なら即興でも間に合うかもしれない」との事で、早速ツーシームと呼ばれる直球系のボールを試すことにしてみた。このボールは、カーブやスライダー、またはフォークの様に直接的に握りが変わる訳でもなく、指のかける位置が変わるだけなので直球と同じ様に投げることに違和感を抱かなかった。

そしてこのツーシームがハマリ、相手は手前で動く新しい球種に戸惑い見せ、俺はこの試合を完封勝利として飾ることが出来た。打たれたヒットは3本と言う個人的にはかなり納得の行く投球が出来たと思う。

「やった！勝ったでござすよ！」

「これで潰れなくて済むでやんす！」

話し方が特徴的な徳川君と無田君が抱き合って喜んでいる。

「ナイスピッチ！」

「良い投球だったね、和弥」

「これでガンバースは安泰だな」

外野で終盤に、抜けていれば失点という場面で好捕を見せた逸平。

初回到流れを作り、堅実な守備でゲームメイクに貢献した蓮。

蓮の作った流れを切ることなく、先制の一打を放った司。

「ありがとう。正直言って、お前らが居なかったらって思うとゾツとするな」

4人で笑い合い、パン！とハイタッチを交わすのであった。

「如月司。ふふ、やるわね。でも、勝負はこれからよ。またいつか会いましょう！ふっふっふっふっ！」

「最後までうるさい女だ」

比奈鳥さんの言葉に対し、呆れた様子を示す司の姿を見て俺たちは顔を見合わせて笑うのだった。

...

「和弥君、試合お疲れ様」

「うん、ありがとう溜璃花。いやあ、正直疲れたよ」

団扇で火照った顔を扇ぎながら瑠璃花と言葉を交わす。 昼から行われた試合では、俺以外に投手が居ないということや、試合経験の浅さが露骨に現れ、「ナヤンダーズ」というチームに8―1で負けてしまった。 ナヤンダーズに負けてしまったのは悔しいけど、それよりは今はガンバーズの解散危機が去ったことや試合に勝てたことで皆胸がいつぱいという様子だった。 勿論俺も、その中の一人だ。

チーム解散の危機は乗り越えたものの、現在ガンバーズは投手を出るのが俺しか居ないという死活問題が残っている。 秋に行われた大会に出場するも、投手陣不足というのは手痛いものであり、初戦で敗退を喫してしまった。 そしてこれによって――

「今日をもって、俺はガンバーズを引退だ。 短い間だったけど、みんな、ありがとう」

キャプテンである一堂さんがチームを去ってしまうのだ。

「また、これで…振り出しでやんすね」

「心配するな！お前達4年生には沢山助けて貰ったからな、今度は俺が返す番だ。 欠員は必ず防ぐさ」

そして一堂さんが去ってから1ヶ月後。

「ふっふっふっふっ！元気にしているかガンバーズ？人手が足りなくて、練習試合も出来なくて困っているらしいな。 だがもう大丈夫、私が出来た！」

何とパンジーズのエースである比奈鳥さんがガンバーズに入団するとの事だ。 もしこれが本当ならば渡りに船だ！投手も2人になるし、人数も9人になる！

「私が入ることに文句はないだろう？なあ！如月司！」

「…何で俺に聞くんだよ」

比奈鳥さんのやつ、司にホームランを打たれたことを相当根に持っている様子だ。

「でも、ガン^ウバーズ^チには比奈鳥、お前が必要だ。 文句何か無いよ、寧ろお礼が言いたいな」

「ふっふっふっふっ！解ればいいのだ！」

2人が握手を交わしたことによって比奈鳥さんの正式な加入が決まった。

これによって当面試合に関して心配する必要は無くなった為、俺たちは黙々と練習に取り込めるようになった。

来年こそはサイバーキッズと対戦できるように。

共通の思いを胸に、練習に明け暮れた。

秋が終わり、冬が終わり、春が終わって夏が来た。

ガンバーズに入ってから過ごす2回目の夏だ。 去年よりも活躍することを誓い、俺たちは明日に控えた試合に備えるのだった。

夢の始まり④ 物語は突然に

「いよいよ試合だ。皆も知っている通り、今年も市長からありがたい手紙が届いている。…今年は2勝しろと来た。だがな、俺はお前たちなら勝てると思っている！市長を見返してやれ！」

『はい！』

「柀！後には私が控えているからな。思う存分投げてこい！」

「うん、ありがとう比奈鳥さん」

5年生になってから初めての大会を迎えた。1回戦の相手は「シンレーズ」というちょっと薄気味悪いチームだ。5年生になると同時に我らがガンバーズには新入団員が増えた。

6年生の芽森わん子さん、4年生の才葉さくら、晴川夏海と羽柴秀虫だ。4人が入ってくれたお陰でチームに余裕が出来、練習の効率も上がった。芽森さんはグラブ捌きが上手く、一堂先輩が抜けた穴を見事に埋めるなどと既に大きな存在になっていく。さくらも零人の妹と言うだけあり、基礎能力は高い物を秘めている。

試合のオーダーはこうだ。

- ・ 1番 中堅手 星
- ・ 2番 右翼手 比奈鳥
- ・ 3番 遊撃手 石路
- ・ 4番 左翼手 如月
- ・ 5番 投手 柀
- ・ 6番 三塁手 小野
- ・ 7番 一塁手 徳川
- ・ 8番 捕手 無田
- ・ 9番 二塁手 芽森

となっている。うん、実は比奈鳥さんと芽森さんが入った以外、去年からオーダーは変わっていない。監督曰くこれが一番安定するんだとか。

主審が集合の合図をする。さあ試合開始だ。シンレーズの皆には悪いけど、こっちはこっちで負けられない理由がある。去年よ

りも力をつけたってことを見せつけないとな！

．．．
シンレーズとの試合は9―0と大きく差をつけ、勝利する事が出来た。俺は5回を投げて被安打1と満足の行く投球をする事が出来た。

隣接している球場で、宿敵であるナヤンダーズが勝利したことによって2回戦の相手はナヤンダーズに決定した。

「去年負けた相手にここでリベンジ出来たら気持ちいいだろなあ」

反対側ベンチに座るナヤンダーズの面々を見て、逸平がのんびり呟く。

去年は大差を付けられて負けている。必ず2勝しなければいけないこの大会で、その2勝目を賭けて戦う試合をリベンジマッチにしてくれるとは、神様も中々粋な計らいをしてくれるものだ。但し、父さんをボールに閉じ込めたのは納得が行かないから許さん。

「フッフ、去年同様勝たせてもらうよ。楽な試合になりそうだ」

「ふん、そう簡単には行くかな？あんまり俺たちを舐めてもらったら困るな」

売り言葉に買い言葉と、試合前から火花を散らす。ここまで舐めているからにはきっちり勝って、見返す必要があるな！

さあ、気張っていこうぜ！

．．．

カキーン！と快音が響き、走者が一掃する。現在点差は10点差とナヤンダーズに大きく差をつけてリードしている。試合前のあの舐めた態度がこちらにとって発奮剤になった結果だ。口は災いの元と言うが、その意味が分かった気がする。特に怒っていた無田君は3打数3安打2打点と大きな活躍を示している。

「ストライクッ！バッターアウト！」

守備の方でもリードが冴え渡り、俺が三振を取ることに貢献してくれている。この間、無田君の大事にしているミットを修繕した時から野球に対する向き合い方が変わった気がする。良い感じだ。

「ショートー！」

蓮がしっかりと打球を捌いて試合終了。

最終的に12―0と快勝する事が出来た。

比奈鳥さんから俺へと継投で繋ぎ、この試合も無失点で終わることが出来た。

「うう…こんな筈じゃ。データに誤差があつたか」

「いつまでも去年のままだと思ってるから痛い目に合うんだ」

司の辛辣な物言いに内心でごもつとも、と呟く。同情はしない、俺も馬鹿にされてムカついていたから。

何はともあれこれでガンバーズの存続は保たれた。今はその事を純粹に喜びたいと思う。

・・・

準決勝の相手は女性だけで構成された「キャットガールズ」というチーム。毎年ベスト4に入っているだけあり、実力は充分。ここに勝てば相手はほぼ間違いないくサイバークィーズが出てくるだろう。何としても勝ちたいところだ。

——と、意気込んだのは良いもののどうもいまいち調子が上がらない。制球が定まらないのだ。

「ボールフォア！」

相手はベスト4常連のキャットガールズ。甘くストライクを取りに置きに行くのと痛打される為、際どいところに投げなくては行けない。しかしそれだと外れてしまいカウントを悪くしてしまう。何で急に、こうも調子が悪くなったんだ？

・・・

「ボールフォア！」

和弥のやつ、これで今日4つ目の四球か。どうも今日のあいつは制球が定まっていない。一体どうしたもんか…

ジーツと和弥のフォームを眺めていると、ふと1つの違和感を感じた。

「ん？肘がいつもより下がっているのか？…そうだな、そうに違いはない！それを考えれば肩に力が入って球が走らなくなるのも筋が通る！」

興奮の余り遂思わず、声に出してしまった。ワシの声を聞こえるものは和弥しかいまい、と決め込んで居たからだろう。仮に聞こえる者が居たとしたら大パニックになることは想像に容易くないというのに。

「なるほど。和弥殿が大切にしていられたそのボールの正体は、和弥殿の親父殿であつたか」

「お前…ワシの声が聞こえるのか？」

「はつきりと聞こえるでござるよ」

なんてこつたい。まさかこんな身近にワシの声を聞こえるやつがいたとはな。聞けば実家は寺とな——僧の息子か。

「すまん、いきなりだが頼みがある。聞いてくれるか？」

これが良い事なのか、悪い事なのかはワシには区別がつかんし考えようとも思わん。それでも今、ピンチの息子を助けられるのなら動こうと思う。

「何でござろうか？」

「和弥のやつにちよいと伝えたいことがあつてな」

ワシがあいつの肘が下がっていることを小野に伝えたと、小野はタイムをかけ勢いよくマウンドへとかけて行つた。

「小野とか言つたか。届けてくれてありがとうよ。それより…お前ワシが怖くないのか？」

「友人の親父殿を怖がる必要がどこにあるでござるか？」

「…ふん、お前良い坊さんになれるぜ」

「それは、ありがたいお言葉でござるな」

和弥の顔に気迫が戻つた。よし、上手く行つたみたいだな、小野に感謝だ。制球も定まり始めて良い球が行き始めた。少しばかり遅れちまつたが、これで大方落ち着くだろう。まだ試合は序盤だ、頑張つていけよ、みんな！

・
・

「ストライクッ！バッターアウト！」

「よっしゃ！」

フォームが治つたお陰で球に勢いが戻つた。父さんと小野に感

謝だな。しかし、それよりも驚いたのは小野が父さんの声を聞けるということだ。以前に霊能力を持っていると言っていたが、あながち嘘では無かったのかも知れない。と、ひとまずこの話は後だ。

点差は3―0。まだ2回だが、好投手である桜木さんから何点も取るのは難しい。つまり、これは大きな痛手なのだ。俺がしつかりしていれば。ギョツと、拳を握る力が強くなる。

「まだ下を向く時じゃ無いよ、和弥」
「蓮…」

「誰だって、調子は崩すものさ。だからこそみんな必死に好調を保とうとする。プロの野球選手だってスランプに陥るんだ。そんなに深く考えなくていいし、何よりまだ序盤だ。諦めるにはまだ早いよ」

「そうだな…その通りだ！お陰で目が覚めた」
「うん、投手は堂々としてなくちゃね」

そう言うと蓮はネクストバッターサークルへと向かっていった。

蓮の言う通りだ。気持ちで負けたら何も始まらないもんな。

ワー！つと辺りが盛り上がる。蓮が低めの変化球を上手く拾ってホームランを放ったのだ。んー、流石は千両役者。甘い球は見逃さない。

これで点差は2点。　追い上げと行こうか。

「ゲームセット！」

『ありがとうございました！』

終盤に司のタイムリー等があり同点に一時追いついたものの、延長戦特有の特殊ルールにより、ガンバーズは負けてしまった。

特別ルールと言うのは無死満塁から始まるサドンデスとなっており、選手層の差がここで出てしまった。終盤ということもあり、俺たちは疲れを隠すことが出来ないくらいへばっていたのに対して、キャットガールズは余裕があった。

その結果、あと僅かという所で負けてしまった。相手は主軸から始まることに対してウチは下位打線スタート。運の無さもそれを

助力していた。

「後、ちよつとだったのにな…」

俺が初回からフォームの乱れなく投げ込めていたらまた違う結果になっていたのかもしれない。みんなは良く投げたと言ってくれるけど、あれが無かったら本当に良い試合をしていた筈なのだ。

「次は勝つからな…畜生」

——もう泣いている仲間は見たくない。

...

「…ひよつとしたらと思っただけそう甘くなかったか。でもこの結果なら来年は来るかもな。僕たちはライバルだ、だから早く上がってこいよ」

比奈鳥青空が入ったお陰で和弥の負担は去年よりかは確実に減ったが、まだまだスタミナ不足は否めない。こういう時にウチの施設ならば重点的に鍛えられるのに、とそこまで考えて

——その環境が嫌でガンバーズに行っただけ。

と、クールダウンしている和弥を見つめながら心で呟く。自身の予想よりも遥かに早く、和弥は階段を登ってきている。その事が無性に嬉しく思え、同時に少し妬ましくも思えた。

...

「なるほど…ホームランボールが当たって気が付いたらボールに意識が移っていたでござるか」

「全くもって奇妙な話だろ？」

試合からしばらく経った練習の後、小野が父さんについて教えて欲しいというので今この様な形で話をしている。

小野が霊能力を齧っていることもあり、今回の父さんの件は確実に神様とやらが囁んでいることが確定した。

「夢に出てきたんだよなあ、もう4年も前になるけど」

「ふむ、その時に神様とやらは何か言っただけじゃなかったか？」

「んー、特に何って無かったけどな」

「そうでござるか。ならば、直接話すのが早いでござるか」

「え、話なんて出来るのか？」

小野曰く、古くから伝わっている陰陽道の呪文を唱えれば神様とやらは召喚できるとのこと。しかし、当然呼び出したところで逃げるのは目に見えているのでそれをどうするか考えている。

「それも呪文とかで何とかならないのか？」

「そうだ！確か、魔法陣があつたでござるよ。まだそれを扱いきるのは無理でござるが、必ず習得するでござるよ」

そう言う和小野は笑顔で帰っていった。以前から霊能力者としてメディアに出たいと言っていたけど、本格的にそれを目指しているのかもしれない。とは言え、このままでは父さんが元に戻る方法が得られないため今は小野を信じるしかない。

「和弥、そんなに心配するな。アイツはそんな悪いやつじゃないぞ」

父さんはそう言うけど、やっぱり神様とやらを召喚するとか正気の沙汰じゃあないと思うんだよな。

...

「和弥殿！神様もとい、野球仙人の呼び出し方がハッキリとわかったでござる！魔法陣も完成したでござるし、どうでござるか？」

「だつてさ、父さん。どうする？」

「このままでは話が進まないというのは事実だ。入院している俺の肉体もそろそろ限界が来るだろうからな。よし、小野。やってくれ」

「..わかったでござるよ。では、拙僧の家に向かうでござるか」

歩き始めてから15分くらいが経つただろうか。目的地の寺院が見えてきた。

「いちらでござる」

本堂の裏に周り、用意されている魔法陣の上に父さんを置く。

「..まいる！セーフアーボールルールブックロスプレーボール!!」

おいおい..ほんとにこんなので召喚出来るのかよ。そう思った

瞬間、辺りは幻想的な世界にへと変わった。

「誰じゃ！ワシを呼んだのは!?!」

「ええ..ほんとに出たよ」

ドカーン！という音と共に現れたのは如何にも神様と言った雲に乗った老人だった。

「ほほ、久しぶりじゃな、柊和弥。どうじゃ？大会は優勝出来そうか？」

「アンタに言われなくてもそのうちするさ。俺たちは日に日に強くなってゐるんだ。相手もそれは例外じゃないだろうが、それでも俺たちは勝つ！」

「ほほほ、なるべく早く優勝するのじゃぞ」

「それはいったいどういう事だ？」

頭の中に？マークが浮かびまくる。小野も父さんも同じ様子だ。

「あれ：ワシ言っておらんのか？」

「何をだよ」

「お主の父親——虎造の余命は後半年つてとこじゃ」

「なっ……！」

いきなりの展開に思わず、変な声を上げてしまう。父さんの命が

後半年？ いったい何がどうなっているんだ？

「…虎造はな、本来ならば水木の打球が頭に当たった時に死んでおつたのよ。しかしそれではお主があまりにも可哀想じゃ。そこでワシはお主がな、5年以内に全国大会で優勝出来れば生き返れるという術を施したのじゃよ」

言つてなかったつけ？と目の前の神様、もとい野球仙人は首を傾げながら落とす。

「普通そんな大事なこと言い忘れるかよ!？」

俺の絶叫が辺りに木霊した。

夢の始まり⑤ 因縁

「——まあ…そういう訳なんだ」

パンジーズとの練習試合の際に、監督が父さんの存在に気付いた。他のメンバーも会話することが出来るので恐らくあの野球仙人の仕業だろう。誰だっけいきなりボールが話し始めたらそれはもう驚くことだろう。現に監督は今までに見た事がないような驚きを見せてくれた。

「成程ね。和弥はお父さんの命を懸けて頑張っていたのか。通りで伸びるのが早い訳だ」

「まあ和弥が上手いのはだな、水木と共にプロ入りを競い合ったワシが直々に教えた賜物よ。褒めるならワシだワシ」

「父さん…そりや自分で言うもんじゃないぞ」

「あの水木選手と…競い合った？」

ポカーンという擬音語が非常似合う場面が目の前に出来上がってしまった。監督を初め、みんなが口を開いたまま固まっている。仕方の無いことか。俺が水木さんと繋がっているなんて話してもいなかったし、想像もつかないだろうからな。

暫くの間目を点にして固まっていた監督だが、顔をハツとさせて言葉を切り出した。

「ボール親父さんよ、アンタもしかして…終虎造さんか？」

「全く気付くのが遅いぞ、福沢。まあワシも、昨日まではお前のことなんか忘れていたがな」

「え、父さんと監督は知り合いなのか？」

これは意外だ。まさかこの2人が知り合いとは。世間は狭いものだな。というかもっと早く気づけよ父さん。

「…虎造さんは大学の先輩だ」

「そうそう、解ってるじゃないか福沢」

「この人、昔酔っ払って俺の家の中で焚き火をしたんだよ。隣の任月さんの家まで燃えてしまつて良く人が亡くなら無かつたもんだと今でも思うよ」

父さん：昔から酒癖悪かったのか。そんなことしたっけなあ、とばつが悪そうに表情を浮かべるが父さんならやりかねない。否定したいが悲しいことに、無理なものは無理なのだ。

「はあ：アンタなあ：。まあそれはともかく、この人は『流しの虎』という二つ名があつてな。センスは水木選手以上だったよ」

監督のその言葉にざわめきが起きる。

「あの水木選手よりも凄かった何て、和弥君のお父さんは凄い人でやんすね！」

「ははは、まあ昔の話だがな」

とか言いつつ、鼻の下が伸びていることには気づいていないんだろうな。まあでも息子として、親が褒められると言うのは気分が悪いもんじゃないけどさ。

「ふん、随分と惨めな姿になったものが何を言ってるんだ」

当然、グラウンドに聞き覚えの無い大人の声が響いた。急いで声の主のいる方を向くと、その正体に啞然とした。

「にやひーお、お父さんがどうしてここに？」

目の前に居たのは強豪サイバーキッズを率いる才葉秀人監督——つまり、零人、そしてさくらの父親だった。

・・・

「どこかで見た顔だと思えば、ウチを逃げ出した者も居るじゃないか。どうだ？ぬるま湯は楽しいか？」

蓮、そして芽森さんを横目に才葉監督はガンバーズを貶す。蓮と

わん子さん、さくらさんの拳に力が入るのが分かった。

「大切な仲間を、そんな風に貶す言い方をするのは辞めてほしいな——父さんを知っているのか？」

才葉監督は父さんを一瞥してから話を始めた。

「水木、虎造、そして私。私達は小学校から大学に至るまでいつも一緒だった：。そして、3人で野球を競い合った。やがて、水木はモグラーズに行き、虎造は静香さんと結婚した。不思議だったよ。データでは私の方が上なのに、どうしてお前達ばかりが幸せになるのか？：まさか、お前達が取引をしていたとはな！」

「いったい、何の話だ？」

父さんは話がしつくり来ないのか、どういふことかと首を傾げる。すると才葉監督は物凄い剣幕で怒声を浴びせた。

「恍けるな!!お前がモグラーズに入団することを断ったのは水木を入れるためだろう!?!それでその見返りにお前は静香さんと結婚した」

「確かに、ワシはプロ入りを断った。しかし、それはプロテストの時に水木が足を怪我していてだな…」

「知っているさ。そうさ知っているとも!あの時水木のスパイクに画鋏を入れたのはこの私だからな!!」

「な、なんじゃと…!」

「うにゅー…お父さんどうして…」

「理由など造作もない。私より下手だった水木がプロ何ておかしいだろ?私はテストを受ける資格すら貰えなかったというのに。それなのに、お前は水木を助けた。静香さんと結婚することを条件にな!」

「お前…静香のことを…」

「3人の中で一番優れていた者、それは私だ。それをお前達は妬み、口の夢も、静香さんも全てを私から奪っていった。そして今はさくらまで奪おうとしている。だから、私は“ガンバーズ”を潰す!水木や、お前の大事なものは全て潰してやる!お前達が私にしたようにな」

ハアハア、と才葉監督は息を荒らげる。しかし、これはまるで逆恨みだ。上手いかなかったのを全て父さんと水木さんの所為にして逃げているだけだ。

「…野球で勝てないから、裏工作か。やり方が汚いところは今も変わってねえようだな」

「野球で勝てない?虎造、何を寝ぼけたことを。私はな、お前達に試合を申し込む為に来たんだ」

「…何だと?」

「但し、ただの試合じゃあ面白くも無い。負けた方には解散して貰うぞ。1つの街に、チームは幾つも要らないからな」

「市長の手紙はアンタの差し金か」

監督の言葉にみんなが驚く。誰かが裏で糸を引いているとは思っていたが、まさか零人のお父さんが犯人とは。

「ふん、受けてやろうじゃねえか。勝負は——」

「…待った」

「ふん、何だお前は？虎造の息子」

流星に今すぐ試合とはいかないからな。今のウチじゃ勝ち目は正直薄い。なら、ここは延ばすしかない。

「2ヶ月後に秋の大会がある。そこで勝負と言うのはどうだ？」

「どうやら目上の者に対しての口の利き方というものを知らないようだな。しかし、良いだろう。その提案に乗ってやる。ただ、初戦で消してしまっても価値が無い。精々足掻いて決勝まで来るんだな」

そう言い残すと才葉監督は去って言った。あの口振りからして、恐らくウチとサイバークイツが当たるのが決勝になるよう仕組むのであろう。勿論、俺達が他のチームに勝てたらという前提が付くが。

「——負けの方がチームを解散か。これは負けられないな」

司が帽子を被り直しながら零す。期限は伸ばしたものの、正直言って選手層の厚さが違う。そこを勝負に持ってこられたらウチに勝ち目はない。

何か良い策は無いだろうか。思考に潜り始めたその時、監督が言葉を発した。

「そうだ！虎造さん、俺じゃあこのチームを引っ張ることは出来ない。アンタの命がかかっているんだ、どうかチームの監督を引き受けて貰えないか？」

予想外の提案。みんなから響^{とよ}めきが起こる。

「あのなあ、何寝ぼけたこと言ってるんだよ。監督がそんなことでどうする？それに、監督がボールじゃ格好がつかないだろ？——いいか、このチームをここまで引っ張ってきたのはお前だ。今のガンバースはお前のチーム何だよ」

「しかし…」

「しかしもへチマもねえんだよ」

父さんの反論に監督は顔を伏せてしまう。父さんは頑固だから、話が通りにくい。

「…わかりました。なら、これはどうですか？虎造さん、コーチをやつて欲しい。貴方程の腕を眠らせて置くのは勿体無い。現に和弥という例が居るんだ。他のメンバーも伸ばしてもらいたい」

「ふっふっふっふっ。私からもお願いしたい。是非とも私に稽古をつけて欲しい」

「私も教えて欲しいワン！少しでも見返したいんだワン！」

「僕からもお願いします。こんな素晴らしい人を和弥だけ一人占めつてのはちよつとずるいんじゃない？」

「まだまだ足りないところだらけなんだ、俺も教えて欲しい」

「…才葉の野郎に勝つにはまだ力が足りない。俺も鍛えて欲しい。だから、お願いします」

俺も！私も！とみんなが父さんの前に詰め寄り頭を下げる。これで父さんに逃げ道は無くなったって訳だ。

「俺からも頼む。今までは俺しか声が聞こえないし、家族ということもあつて教えて貰つてたけど、正直もうそんなことは関係ない。折角みんなと話が出来るようになったんだ——ならこれを活かすしかないだろ？」

父さんは一通り、みんなの顔を見つめ終わるとふーっと、息を吐いた。

「そこまで言われたら仕方ねえな。——受けてやるよコーチ。但し、甘くするつもりは無いからな？」

『はい!!』

「良い返事だ。宜しくな」

今日ここに新しいコーチが誕生した。正直自分の親——父さんがガンバーズのコーチに成るなんて今でも少し信じられない部分がある。でも確実に父さんがコーチをした方がチームにとって大きなプラスだ。これから宜しく頼むよ父さん。

「父さん、そう言えばさ」

「ん？何だ」

「俺のサイバーキッズ入りを拒んだのって、零人のお父さんが原因なのか？」

「その通りじゃ。あんなヘタクソなやつところで世話になるくらいなら死んだ方がマシじゃ！ワシのプライドが許さん」

「死ぬとか縁起でもないから言うなよ…」

父さんのこの物言いに俺は悟ってしまった。

——零人のお父さんもおかしくなるわけだ。

「水木のやつには静香のことで睨まれるし、ほんとに運が無いったりやありやせん」

ほんと、良く母さんが結婚してくれたもんだ。

・・・

「よし、お前ら集まったか」

本来なら今日の練習は休みの筈。その中呼び出されたってことは何か理由があるのだろう。

「この間虎造さんと話しあって決めたんだがな、合宿を行おうと思う」
なるほど、夏休みの最後の2週間を利用して集中的に鍛えようという作戦か。

「場所はどこでやんすか？」

「それはもう決めてある——八丈島だ」

『は…八丈島!?!』

みんなの声が綺麗にシンクロした。

「ちいとばかし厳しいかもしれないと才葉には勝てねえからな。なあ、福沢？」

「…はい。みんな、そういう訳で行き先は八丈島。出発は明日だ」

『明日!?!』

話がぶつ飛びすぎていて思わず固まってしまふ。何を持って八丈島を選んだんだか…。

と、それより——

「お金の方はどうするんでやんすか？」

無田君が質問したように費用の方をどうするのが気になる。

ここから八丈島まで行こうと思えばかなりのお金がかかることだろう。何か宛があるのか？

「その事だが、この間和弥が変なツボを拾っただろ？」

変なツボ…思い出した。確かランニングの途中で道端に落ちていたやつだ。

「拾いましたけど、それがどうかしたんですか？」

「ついこの間警察から電話があつてな。どうやら礼金をかなり払ってくれるんだ。だから費用はそれを宛てがおうと思うんだ」

「俺に相談も無しで!？」

「固いこと言うな和弥。お前が見つけたってことはワシが見つけたも同然。ワシの意味も使えるじやろ？」

何てとんでも理論を展開してくるんだ、このくそ親父は。

「まさか貰えるとは思ってなかったから用途があるならいいんだけどさ…」

それでも相談の1つは欲しかった。切実にそう思う。

...

「うう…飛行機って、オイラちよっぴり苦手でやんす…」

「その酔い様からしてちよっぴりじゃあないな無田君…ここが、八丈島か」

南国さながらの陽射しに暑い暑いと、口々に漏らす。

「期間は1週間だ。みんな、ビシバシ扱いてやるから着いてこいよー」

『はい!』

大きな車2台に分かれて乗り込み、目的地である島の最北端を目指す。ここなら観光客もあまり集まらず、しっかりと練習が出来ることだ。水木さんもここを自主トレの地として利用しているらしい。

車に揺られること2時間、漸く目的地についた。

ホテルに荷物を運び終え、再び目の前のビーチへと足を運ぶ。

「みんな長旅ご苦労だったな、では早速」

『ええー!』

「…人の話しは最後まで聞け。まだ日は高いからな、思う存分遊んでこい。」

「監督最高でやんす！」

この言葉に先程まで飛行機と車による酔いに苦しめられていた無田君のテンションが一気にハイになる。他の面々も顔に疲れはあるものの、ウキウキ感がどことなく滲み出ている。

「良し！じゃあ、暫く自由時間だ。怪我に気をつけて遊ぶんだぞ。絶対、沖の方には出ていくなよ！覚えても助けられんからな」

「一番乗りだー！」

好スタートを見せた逸平を始め、段々と海へ向かっていく。

「和弥君は泳がないのですか？」

日陰になる様パラソルを設置し、折りたたみの椅子に腰をかけると瑠璃花に声をかけられる。

「ああ、俺はパス」

「どうしてですか？」

その言葉に参ったなあと、頭の裏をかく。

「…んだ」

「え？聞こえませんかよ？」

「…カナツチ何だよ、俺は」

「それは、何だか意外ですね」

クスツと、瑠璃花は笑みを零す。

そう、俺は何を隠そうカナツチだ。銭湯は好きだし、別に水が嫌いとかそういうわけじゃない。水に顔をつけるのだって平気だし、目を開けることだって少しなら出来る。でもどうしても、泳げるようにはならなかった。

「幾らプールに行っても泳げないんだよな。だからプールに行つてやることと言えば、流水プールで浮き輪に乗つて流されるくらいだ」

「ふふふ、普段の和弥君からは想像出来ませんね」

「気にしてるんだから笑うなよ…」

「ふふふ、ごめんなさい、つい、あ、駄目です、我慢できません、ふふふふふ」

「もう勝手にしてくれ…」

ひとしきり笑い終わったのか、目尻の涙を拭った後瑠璃花は隣の椅子に腰掛けてきた。

「そう言えば、父さんが無理言って連れてきたみたいだけど、大丈夫だったか?」

「誘って貰って嬉しかったですし。何も迷惑だなんて思っていないですよ」

本当にこれで良かったです、と瑠璃花は笑って言ってくれた。

「明日からは練習ですし、今何もしないのは勿体無いと思いませんか?」

「まあ確かに、それは言えてるかもな」

「はい、そういうことでこれをしましょう」

そう言って瑠璃花が取り出したのはビーチ遊びに用いるビーチボールだった。緑と黒の柄は西瓜をモチーフにしているのだろう。

「ビーチバレーでもするのか?」

「はい!折角来たのですし、楽しませよう?」

「やれやれ、仕方ないな」

「ふふ、では空気入れもお願いしますね」

「鬼か!」

「ふっふっふっふっ。何やら面白そうなことをしているな。よし、私も参加しよう!司!お前も一緒だぞ」

「…拒否権無しかよ」

こうして4人でビーチバレーをして楽しんだ。比奈鳥さんは俺達の予想よりも上手く、身長は余り変わらないのに遙か高くからスパイクを打ち込んできた。成程、足腰がしっかりしているからあれだけ遅い球でもしっかりコントロール出来るというわけだ。

その足腰を鍛えるのに砂浜を走るのは効果的だ。父さん達の狙いはこれって訳か。

明日から厳しくなる、そう思うとどこか鬱なものも感じる。それでもその気持ちよりも、乗り越えた先には必ず一回り成長した自分が居ると思うと楽しみな面もある。

それじゃあ、サクッと乗り越えさせて貰おうか。

夢の始まり⑥ 成長

「1週間：短い間だったが長かったな。これで合宿は終了だ。みんな、お疲れさん。誰一人ギブアップしなかったのは少し予想外だったぞ?」

「はあはあ：やつと、やつと終わったでやんす」

無田の言葉を皮切りに、バタバタと砂浜に背を預ける。

身体中が悲鳴を上げている。言葉で言い表せないくらい扱かれたのだ。

それでも誰一人として、途中で投げ出さずやり遂げれたのは、勝利の二文字を追いかけたいからなんだろう。

「和弥、疲れたか?」

「：当たり前だろ」

「何じゃ、体力の無いやつじゃのお」

「鬼かよ父さん：」

「わはは、でもな、今回の経験は必ずこれからに役立つぞ。断言してもいい」

ふーっと、虎造が鼻息を鳴らす。

その様子がどこか可笑しく、和弥は掴んだ砂を落としながら笑うのだった。

短期間で土台を作ること为目标に掲げ、和弥たちが取り組んだ練習は過酷なものであった。

アップの柔軟が終わると、裸足で砂浜50mダッシュを30本。初っ端からこの飛ばし様である。

夏場の陽射しも相まって、着々とスタミナを奪っていく。普段砂浜を走るという経験が無いことに加えて、暑さと陽射しは勿論、足場の悪さが牙を剥いていた。本来ならこの様な練習は冬期に行うのが定石だが、今回は急ピッチだ。泣き言は言っていられない。

しかしそれで倒れてしまっただけは本末転倒。脱水症状には気をつ

けて水分の補給は怠らないように配慮もされている。

砂浜は地面を後ろに蹴つても中々前には進めない。その過程で、普段使わない筋肉を使えるようにすると、力を推進力に変えるフォームを取得することが主な目的だ。

投手である和弥と比奈鳥は、重りを加えて走らされていたので体力の消耗具合が半端ではなかった。重りをしている為ただでさえスピードが出にくくて困るが、狙いはそこにある。

鋭い切り返し動作によって股関節を強化——つまり、腸腰筋に負荷をかけて走り込んだ。

普段使わない筋肉を使うのだから、当然身体は悲鳴を上げる。

虎造はその辺りも考えていた。食事のメニューは体を作り上げるものに変更し、練習後はプロテインを摂り、アイシングによって筋肉を締め上げる。湯船に浸かる際も、しっかりと身体をほぐし、ホテル専属の整体師によるマッサージを受けることによって疲労を少しでも回復できるように務めさせた。

他の練習は鬼ごっこや素振り。当然これも、裸足で行う。

とにかく足全体で砂浜を掴む感覚を徹底して詰め込まれた。これによって体幹がかなり鍛えられた。

鬼ごっこは夕方に行われたが、朝からの砂浜ダッシュによって体力を根こそぎ持っていかれている和弥と比奈鳥は、鬼をする機会が必然的に他のメンバーよりも多かった。

投球の方も、ブレない軸を身につけるために片足スクワットを行ったりシャドーピッチングを行ったりして補強をした。

和弥はこれに関して3日目くらいにコツを掴み、練習後も夕食前まで独り砂浜で繰り返した。一度没頭し過ぎた為夕食に間に合わず、瑠璃花に怒られるということがあったが、それは余談だろう。

・
・

「虎造さん、ありがとうございました」

合宿最後の夜。ホテルの一室で、虎造の隣の椅子に腰掛けている福沢がそんな言葉を落とす。

「礼を言われる筋合いは無いな。ワシだって楽しめたし」

「いや、何だかんだ言って先輩は凄いですよ」

福沢はゴクゴクと喉を鳴らしながらビールを流し込む。その飲みっぷりに、虎造は自分の身体が恨めしく思えてしまう。

「俺には、今回の合宿をこんな風にするにはまず無理だった」

「そんな事は無いぞ？ここに來たのもお前が和弥の拾ったツボを適切に処置したからの賜物じゃないか」

「そういう事じゃ、無いんですよ…」

そう言うときまたビールを流し込む。これはかなり飲むかもしれない、そんな風に虎造は思った。

「虎造さん、アンタは『眼』がいい。良く人を見ている」

「んー、まあそれはこの身体になってからじゃな。周りを意識するようになったのは」

「それが凄いですよ。普通の人は、自分がボールになったらまずそんな風に気丈に振る舞えない。——少なくとも、俺なら気が狂う思いをしますね」

福沢が3本目を空けた。かなりハイペースだ。

「…ワシは、そんなに強くないぞ？」

「……………」

福沢は何も答えなかった。浜辺を打ち付ける夜の波を、ただ静かに眺めていた。

「ワシが今、こうしてここに居れるのは——周りの人達のお陰だ。和弥が居て、水木が居て、ガンバーズのみんなが居て、そしてお前も居る。ワシがこんな風に笑っていられるのも全部お前達のお陰なんだ。だから、そう自分を卑下に見ることはしなくていい。福沢には、福沢の良い所があるんだからな」

カコン、と音を立ててビール缶がゴミ箱へと投げ込まれる。

「…解ってましたか」

「当たり前じゃ。福沢、お前はワシの後輩じゃぞ？お前の事など、手に取るように解るわ」

「…虎造さん、アンタには敵わないな」

「ワシが今回したのはちよつとした味付けだ。それが出来るように、ここまでチームを引っ張ってきたのは福沢、他ならぬお前だ。他の皆もそれは解っておる」

人間は誰だって愚痴の一つや二つを吐きたくなる時がある。それは大人とて変わらないものである。

——福沢は悩んでいた。

虎造の命が後半年も無いと言うこと。次の大会で敗退すれば、そこでガンバーズが解散してしまうということに。

サイバーキッズの様に設備が整っているチームならば、自分が率いても何とかなるかもしれない。だがガンバーズは——お世辞にも整っているとは言えなかった。人数が足りず、試合が出来ない時が続いた。みすぼらしいと罵られた事もあった。

しかし、今はどうだろうか。今のガンバーズは以前までのガンバーズとは違う。和弥たちが入ってきてから、新しい風が吹いているのだ。あの4人は良いモノを持っている。

それを自分が潰してしまってもいいのか。怖くて怖くて、仕方が無かった。

だから虎造に監督を代わってもらおう様に頼んだ。この重圧から逃げる為に。しかし虎造は、それを承知で続けろと言う。

——お前ならやれると。

水木と同じく尊敬する先輩にそんな風に言われてしまったら、それはもうやり遂げるしかない。ここで逃げたら男が廃るものだ。

強かにアルコールに酔いつつも、福沢は瞳を熱く、そして静かに燃やした。

「こんな姿を見せてお恥ずかしい。俺、頑張ります。——虎造さん、必ずアンタを元の姿に戻す。それが俺なりのケジメです」

「ああ。頼むぞ後輩」

...

福沢がシャワーを浴びに行った為、部屋に残るは虎造だけとなつ

た。

「はてはて…どうしたもんか」

今回の合宿の結果は、虎造にとっては喜ばしいものだった。

誰一人として、途中でギブアップをすることが無かったからである。合宿前の予想だと、4年生は全員最終日まで残っていられないと思っていた。しかしどうだろう、結果は全員やり遂げだ。これは素直に喜ぶしかないだろう。くつくつと自然に笑いが生まれた。「それにしても、良く耐えたもんだ」

頭に浮かぶのは和弥の顔。虎造は幼い頃から、身体に合わせてメニューを熟させて来た。だから和弥が、その他の有象無象よりも抜きん出ていることに対して特に何も思わなかった。当然だと思っていた。でも、和弥はそうは思っていない。ひたすらに、父である虎造を助ける為に、全国優勝を目指して野球に取り組んでいるのだ。親として、指導者として、誇らしいことだと虎造は思う。

「早く才葉の驚く顔がみたいもんだ」

見上げた先の夜空では、星が一つ、力強く光輝いていた。

…

合宿も終わり、夏休みも後少しと言ったところ。和弥の姿は南雲家にあった。

「はーっ、終わんねえ…」

「愚痴を吐いても終わりません。大体こんな風に溜め込む和弥君が悪いんですよ。自業自得です」

「…こんなにあるなんて、思ってたんだよ」

今年も宿題の教材が去年よりも増えていた。その為必然的に量は増加する。和弥はその事を全く考慮せず、野球の練習に明け暮れていた。

「あ、そこ間違ってますよ」

「…へーい」

「ふふふ、まだ時間はあるのだし無理しないようにね。麦茶、ここに置

いとおきますね」

「ありがとうございます、 靈華お母さん」

「母さんありがとうございます。 後、1問解いたらキリもいいですし、一休みしましょう」

風が吹き、チリーンと風鈴が音を鳴らした。

...

「まさか君とこんな早く勝負出来るとはな。 : 聞いたよ、和弥のお父さんのこと」

「そうか…。 ごめんな、話してなくて」

「いいさ。 誰だつて言い難い事や、隠したいことはあるんだからな。」

—— パパたちの因縁とかは関係無い。 僕たちは僕たちでベストを尽くそうぜ」

「臨むところだ！」

秋の大会が始まると、 “ガンバーズ” は快進撃を見せた。

全体的に力が付き、自信も身に付けた。 合宿を乗り越えたことにより、一回り成長出来たということだろう。

難無く初戦を突破し、勢いそのまま決勝戦であるサイバークィーズ戦を迎えた。

「今日はあの “サイバークィーズ” との試合だ。 散々今まで嫌がらせをされてきたんだ、今日は目に物見せてやれ！—— 絶対解散はさせんぞ！」

『はいー！』

福沢の熱い激を受けて、チームの熱気は高まって行く。

ガンバーズ先発オーダーはと言うと

- ・ 1番 中堅手 星
- ・ 2番 左翼手 才葉
- ・ 3番 遊撃手 石路
- ・ 4番 右翼手 如月
- ・ 5番 投手 柊

- ・ 6番 三塁手 小野
- ・ 7番 一塁手 徳川
- ・ 8番 捕手 無田
- ・ 9番 二塁手 芽森

となっている。安定のオーダーだ。

変化した部分は、2番を打っていた比奈鳥がブルペンにてリリースバーとして待機している点くらいだろうか。

今日は総力戦、出し惜しみはしないとのこと。

才葉と和弥の目が合った。もはや語らずとも気持ちは通じるものがある。

先攻・ガンバーズ ― 後攻・サイバークィッズで試合が始まった。

・・・

「ストライク！バッターアウト！」

サイバークィッズの9番打者が三振に倒れ、3回が終了する。

現在3回終わって両チーム得点、ヒット共に無し。この内容に流石は才葉だと和弥は思う。

―― 今までの投手とはレベルが違う。

とは言えガンバーズナインにも厳しかった合宿を乗り越えた自信はある。現に和弥も上手くサイバークィッズ打線を抑えている。

その成果を遺憾なく発揮する為に闘志を燃やすのであった。

4回表、ガンバーズ先頭打者である星は三塁線にセーフティバントを仕掛ける。勢いを殺した上手いバントだ。

「セーフ！」

「……そお」

才葉が三塁手より早く拾い上げるも、星の足が送球よりも速く駆け抜けた。

これで無死1塁。続く打者は今日スタメン起用された才葉の妹である才葉さくら。

「ははは、さくら。お兄ちゃんが打たせてやろうか？」

ランナー
走者を出したというのにまるで余裕と言った様子でシスコンブリを披露してくる。

「うにゅー！バカにしないで！絶対打ってやるんだから！」

「おお、怖…」

「お前ら何やってるんだよ…」

まさか今日の様な大一番の試合で、この様なコントが繰り広げられることになるとは思っても見なかった和弥たちはつい毒気を抜かれてしまう。

才葉が一度牽制をした後——星が動きを見せた。

「走ったぞー！」

すぐさま一塁手ファーストがそれに反応し声を上げる。 が、関係無い。

さくらは外のボールに対して逆らわず、そのまま流し打ちを行う。

打球は高く跳ねた。

「クッ！セカンド！」

打点を少し遅らせることによって打球を高く跳ねさせた。

カバーに入りかけていた二塁手セカンドに上手く捌かれ、さくらはアウトになったものの、これによつてスコアリングポジションに星を置くことが出来た。

良くやったと、さくらを迎え入れる。 元サイバークィズ出身であり、才葉の妹ということも相まってか高い能力を見せてつけている。

続く3番、右打席に入ったのは石路蓮。

“神主打法”と呼ばれる構えを取る石路と相對する才葉は、2塁走者である星を一瞥した後投球フォームへと移る。

「ストライク！」

クイックモーションから投じられた初球——ドロップカーブは弧を描きながら寸分狂わず捕手の構えるミットに収まった。 2球目はストリート。 初球のドロップカーブとの緩急差を利用し、石路を詰まらせ内野ゴロに打ち取った。

「アウト！」

しかし石路もただでは終わらない。 打ち取られつつも打球は逆方向に返し、最低限の仕事である進塁打を放った。

続く打者はガンバーズの主砲である如月司。 右打席に入り、バットを上段に構える。

上位打線で作ったこの好機チャンス、活かしていきたいところだ。

才葉の初球は胸元を挟むストレート。 強気な投球である。

しかし、如月はそのボールに対して仰け反ることなくオープンスタンスへと踏み込みを変え、バットを振り抜いた。

「ファール！」

コンパクトに叩かれた強い打球は、三塁線を襲うも僅かに切れてしまふ。

(ふーん、これが如月か。 良い振りしてるじゃん)

才葉は、如月が相手ながら自身のストレートをまともに弾き返したことに對して賞賛を送る。

(だったら…これはどうだ！)

2球目に投じられたのは先程石路に対しても使用されたドロップカーブ。 従来のカーブよりもトップスピンの多く、水平方向より垂直方向へ変化する球種だ。

アウトコース低めにこれが決まり、如月は追い込まれる。

しかし、その表情に焦りは無い。 3球目4球目と、外れた球を落ち着いて見送った。

(…そろそろ来る頃か)

やや間があつてからの5球目、投じられた球は先程まで投げられていたストレートよりも球速が出ていない。

如月の狙いは才葉の決め球であるドロップカーブである。 カウントを取りに来るのにも、追い込んでからも使用されているという事は相当自信があると見て良いだろう。 だからその球を今叩いておければ後々相手に大きく響くはず。 それが如月の狙いだった。

(大振りはしなくていい。 あくまでコンパクトに)

そう心掛けて振ったバットに——ボールが当たることは無かった。「ストライーク！バッターアウト！」

如月は完璧に捉えたと思った。 ソフトボールをしていた時も、自分に変化球に強かったという自負が少なからずはある。 落ち着い

てボールも見れていたし、空振りは無いと思っていた。しかし、結果は三振だ。審判の声が無情にもそれを示していた。

「何で当たらなかったって、顔をしてるな？」

攻防の交代のため、マウンドからベンチに向かう途中の才葉が声をかける。

「簡単なとき。君は大方カーブを狙っていたんだろ？——カーブと見せかけて違う球種を投げたのさ」

——高速スライダー。

先程の球種は一般的にそう呼ばれるものだ。如月の雰囲気からカーブ狙いを感じとった才葉は、捕手のサインに領きながらも違う変化球である高速スライダーを投じた。

仮に首を振っていた場合、もしかしたら如月は狙いを変えていたかもしれない。そう思ってたの独断であった。全国の舞台を経験して培われてきたその辺りは流石と言ったものだ。

・・・

4回裏、試合が動きを見せた。

「手堅いな、サイバーキッズは」

「才葉監督はデータ重視の野球をするでやんすからね。……この場面、1点は仕方ないし、歩かせても構わないでやんす。絶対に、長打はダメでやんすよ！」

「ああ、簡単には打たせないよ」

マウンドでの打ち合わせが終わり、無田が駆け足でホームへと戻る。

現在の状況は1死走者3塁と言ったガンバーズにとって、非常にピンチが訪れている。

加えて迎える打者は打撃も良い4番の才葉。状況は芳しくない。(スクイズは無いだろうけど、一応警戒か)

才葉ほど打撃の良い選手ならスクイズが行われる線は非常に薄い。

しかし相手はデータ野球の監督だ。用心することに越したことはない。

無田のサインに頷き、初球アウトコースへとストレートが投げ込まれる。

「ボール！」

(…3塁走者と零人に動きは無しと)

2人の様子を確認すると、和弥は再びセツトポジションを取る。

2球目のサインが一発で決まり、左足を上げてフォームへと移る。

内角に、やや足元に沈みながらツーシームが決まった。主審が右

腕を上げてコールする。良い感じに腕が振れたと、先程のボールは

好感触だ。続いて3球目、アウトコースにストレートが決まり主審

がストライクをコールする。これで追い込んだ。

(今日の和弥君は球が走ってるでやんすね。これなら、尚更決まり

やすいでやんす！)

無田のサインに頷き、セツトポジションへと移る。上げた左足が

地面に付きリリースに入ろうとした瞬間、3塁走者がスタートをきつ

た。

(…っ…まじかよー)

一瞬、走者に気を取られてしまった。たかだか一瞬の事。しか

し、とても大きな一瞬の出来事となった。

カーン！と鋭い音が鳴り、和弥が投じたチェンジアップは無田の

ミットに収まらなかった。

「…やられたな」

ベンチでは虎造が先程の光景に苦い表情を見せる。サイバー

キッズの監督、才葉秀人は堅実なデータ野球をし、試合に置いて信用

しているものはデータのみである。その強さを、見せつけられる

形になってしまった。

「先程のスタート…やはり監督の指示でしょうか？」

「ああ、多分な。才葉の野郎ならあれくらいやりかねん」

福沢の言葉に虎造は淡々と答える。先程行われた動きは、和弥が

リリースする瞬間を狙って揺さぶりをかけるといふものだった。

小学生に、足をつけてから球種を変えろや、コースを変えろというのは無理な注文である。

「アイツ…恐らくだがチェンジアップを読んでの動きだろう。厄介なことをしてくれる」

タイミングを外しに来るチェンジアップを狙われてしまったのは最早ただの棒球に過ぎなくなってしまふ。突然のスタートに動揺したチェンジアップは、いつものようには行かず甘く浮いてしまった。それを仕留めた才葉も流石だが、褒めるべきなのは監督の狙いだろう。実に気に食わないがと、虎造は鼻息を荒くする。

「和弥！切り替えるよ！」

和弥はその言葉にしつかりと頷き、牽制を行って自身のタイミングを整えた。

「ショート！」

ショートを守る石路が軽快なフットワークでゴロを処理し、すぐ様2塁へと送球し、流れに乗ってそのまま1塁へと送球されゲッツーが完成となった。

「アウト！」

グラブをパンと叩きながら和弥はベンチへと戻る。先制はされたものの、その後はしつかりと抑えた。

(まだ一点だ。絶対追いつける)

和弥の心に不安の文字は無く、その目は前を見据えていた。

5回表、ガンバーズの攻撃は和弥から始まる。先程のお返しをと、気合は十分。しかし、結果は三振に倒れてしまふ。

「ストライク！バッターアウト！」

「あー、惜しい…」

ベンチから落胆の声が上がる。何球か粘りを見せていただけに、和弥の凡退は大きい。

「スリーアウト！チェンジ！」

続く6番小野、7番徳川も三振と簡単に三者凡退に抑えられてしまふが

、負けずと和弥も5回裏を3人で抑えてみせる。才葉に三振に抑

えられたことを、上手く発奮材に変えられている様だ。

・・・

全国大会常連チームであるサイバーキッズに対して一失点と好投を続ける和弥。そんな彼の投球に最終回にして、遂に打線が報いを見せる。

この回先頭の才葉さくらに代わって比奈鳥が代打で入る。チーム最年長である6年生としての意地を期待しての代打だった。

その期待に比奈鳥は応える。初球、僅かに甘く入ったストレートをコンパクトなスイングで打ち返し、二塁手セカンドの右を抜くヒットを放った。

「ナイスバツティング比奈鳥さん！」

「良くやった青空！」

「流星でやんす！」

最終回の攻撃と言うこともあり、ベンチは盛り上がりを見せる。

流星に最終回、同点の走者を背負ったという事で才葉の様子が変わった。

「さて、ここは続かないとね」

揺らつと、バットを掲げて石路は打席に入る。自分の仕事は比奈

鳥を1つでも先の塁へ進めることだ。

ベンチから身を乗り出して和弥は思考する。

(…最終回、相手がここで嫌がるのは比奈鳥さんが先の塁へ進むことだ。ここで相手が取る手段は——)

打席で構える石路も思考を巡らせる。才葉監督の野球はデータの重視のデータ野球だ。かつて少しの間とは言え、滞在していたチームの特色はしつかりと覚えている。

データを重視する上で、怖いポイントはデータが存在しない時だ。

(今大会で、ガンバーズガンバーズがこの状況になったことは無いから相手は対策がしにくい筈。だとするとここは——)

「蓮！頼むぞー！」

思考の中から1つの答えを出すと、同時にベンチから和弥の激が飛ぶ。その眼は自分が先程出した答えを物語っている様だった。

「…分かってるよ、和弥」

——初球はストレート。

比奈鳥の足が速いという情報は、今までの試合でデータがあるだろう。だからこそこの場面、盗塁を必ず警戒してくる。そういう2人の読みだった。

大きく比奈鳥がリードを取り、マウンド上の才葉へと重^{プレッシャー}圧をかける。

——舞台は整った。

投じられた球種はストレート。故に読んでヤマを張っていた石路に、これを捌くのはどうということはない。

鋭く振り抜かれた打球は低弾道ながらも二塁手^{セカンド}の頭を越えて、右中間へと転がっていく。

好スタートを見せた比奈鳥は2塁を蹴って、一気に3塁を陥れる。打った石路も2塁へ滑り込み最高の仕事を成し遂げた。

会場がこの当たりにざわめきを覚える。観客達は全国優勝経験チームの試合が観れると思いい、この場に足を運んでいたが、今日に広げられている景色は捉えられそうな王者の姿であった。

「司！頼むぜー！」

「ああ、任せろ」

和弥の言葉に一言答え、如月は右打席へと向かう。無死2塁3塁というこの場面、4番という気持ちではなく、後ろに繋ぐ気持ちで打席へと入った。

ツカアーン！と音が鳴り、打球は三遊間を抜けていく。

「流石4番！頼りになるでやんす！」

「これで同点！このまま行けー！」

左翼手^{レフト}が捕球し、素早く返球するも比奈鳥はそれより速くホームベースを踏んだ。

これで同点。試合は振り出しに戻った。尚も無死1塁3塁と

ガンバーズの攻撃は続く。

「ふっふっふっ、期待しているぞ和弥！」

「ああ！ナイスバツティングだったぜ比奈鳥さん」

パンと同点のホームを踏んだ比奈鳥とタツチを交わす。これでバトンは受け取った。これで

「さあ零人、最後の勝負と行こうか」

「調子に乗っていられるのは今のうちだけさ」

...

「クソ！どうして上手くいかない！」

才葉秀人は苛立っていた。

彼が築き上げた全国大会常連のチームは今、ここ最近で試合が行える様になった明らかに自分たちと比べて質が低い様な、そんなチームに押されているということに。

自分が毛嫌いしてやまない相手がいるチームに、背を捕えられたという事実が彼の苛立ちを募らせていく。

「バカな……配球は完璧だったはずだ！私が、私が小学生に読み負けただでもいいのか！」

険しい目付きで、1塁上で自軍の声援に応える如月の姿を見る。

彼は先程の打席、零人の高速スライダーの前に手も足も出ずに倒れていた。あの場面、忘れようにもこの試合初見で三振に切って取られた高速スライダーは色濃く脳裏に焼き付いていた筈。その思考を更に乱すために、打ち気を逸らすためにとドロップカーブを初球から投げさせたというのに、まさかそれを狙っていたとは。

「あの4番は……併殺が怖くなかったのか!?!」

高速スライダーにしろ、ドロップカーブにしろ、両者共に引つ掛けさせて打ち取れる可能性は充分にある。それを考慮しての初球の入りだったが、才葉は納得が出来ない。

「零人！早くこの回を終わらせろ！」

捕手に向けて、素早く球種のサインを飛ばす。捕手は頷き、才葉

にサインを送るが——首は縦に振られず、横に振られることになった。

（自分の力で勝負したいんだよ、父さん）

今才葉零人の中にある感情は、純粹に柊和弥との勝負を楽しみたいというものである。その為に1塁走者の如月が2塁へ盗塁を行うのが知ったことではない。今自分の双眼が捉えているのは柊和弥なのだから。

・・・

——走者が居ようが居まいが関係無い。

要は石^ラ路^ンや如^ナ月^リに、ホームを踏ませなければ良いだけの話なのだ。

スーッと、洗練された動きでグラブを頭の上へと運ぶ。才葉のそのフォームを観るやいなや、1塁走者の如月は2塁に向かって走り出す。

（走りたかったら、走ればいい。塁の1つや2つ、くれてやるさ）

糸を引くように、綺麗なストレートが捕手の構えるミットに寸分狂わず吸い込まれた。ワインドアップ投法から投げ込まれたその速球は、今日の最速を記録していた。

「ストライーク！ワン！」

才葉の気迫が籠った一球。その一球に、会場はどよめきを覚える。

「110…いや115は出ているか」

この会場にはスピードガンが無いそのため目測による測定になるが、大体の感覚でそれくらいだと虎造は判断を下す。

「これに、緩急を付けられては厳しいですね」

「ああ…明らかにギアが上がっているからな。これが才葉零人の本気か」

返球を受け取ってからの2球目は、直ぐに投げ込まれた。初球程の球速は無いものの、またも寸分狂わず、先程と同じコースに制球され和弥のバットは空を切った。

「不味いな、これは」

「ええ…少し分が悪い」

3球目、投げられたボールは、空中でググツとブレーキを掛けて垂直気味に下降した。

「ボール！」

「ふう…」

ドロップカーブが外に外れ、カウントが1―2となる。

今のカーブの見送り方は、「手が出なかった」と言うような見送り方だ。それも仕方ない事なのかもしれない。先程の才葉の投じたカーブは最早小学生レベルのモノでは無いのだから。中学生に舞台が移ってからでも充分に通用するであろう。

しかし、その様な球を見ても和弥は怖気づくこと無く、寧ろ楽しそうに口角を上げていた。

それを見た才葉の表情にも笑顔が灯る。

「ファール！」

続く4球目、ストレートが内角に投げ込まれるが和弥がこれに反応。遂にバットで捉え始めた。

5球目、6球目もストレート。和弥もそれに付いて行き、前に飛ぶことは無いもののファールを放ってみせる。

(…最高だ、最高だよ和弥)

正直に言って、最近の野球は何か詰まらない気がしていた。好敵手とも呼べる人物が居なかったことがそれに起因しているのだろう。和弥に対しても、ライバルだと言ったものの、自分が居るステージに上がってこれるとは半分半分と言ったところだと思っていた。

しかし、目の前にいる柊和弥は見事に自分の期待に応えようとしている。彼は今、紛うことなき自身のライバルと呼べる存在になっているのだ。これ喜ばずにはいつ喜ぶのだと、才葉は湧き上がる感情をそのまま表情として表していた。

「あの野郎、笑ってやがる」

「この場面で笑えるなんて、心臓の強い2人だ」

和弥もまた、その表情に笑顔を浮かべていた。この試合の意味も

忘れて、ただひたすらに才葉の投げる球をどう打ち返すかを考えていた。

7球目、再びストレートが投げ込ま僅かに外れていることに気付きバットを止める。

これでカウントは2―2の並行カウントとなり、才葉と和弥、両者共に有利とも言えるのが現状だ。ポンポンと、ロジンバグが才葉の手の上で跳ねた。

「タイムお願いします」

強ばった肩と手首を解すために、一度打席の外に立ち軽く素振りを行う。頭の中をかつて聞いた言葉が過ぎていた。

『大体の投手はな、ここぞの場面で決め球を投げる時、ロジンバグを手につける』んだ。覚えておいて、損は無いだらうよ』

以前、試合前に掛かってきた電話で水木が言っていたことだった。その時は何気なく聞き流していたが、ここでそれが過ぎるということとは——そういうことなんだろう。

バツテを付け直した後、もう一度素振りをを行い右打席へと入る。

勝つのは自分だと、そう示すようにバットを才葉に向けてから上段に構えをとる。

マウンドの才葉が大きく振りかぶり、8球目が投げ込まれた。

いつもと変わらないリリースから放たれたボールは、そのままスピードを保ちつつ、突如アウトコースへと横滑りを見せた。

投じられたのは高速スライダー。如月を三振に取った球種である。

外角低めギリギリという、投手にとって生命線であるコースに制球されたこのボールに、和弥のバットは怯まなかった。

オープンスタンスだったものを、クローズドスタンスに変え、腰を入れて、しっかりとバットを振り抜いた。

——音は無かった。

そうして捉えられた打球は右方向へ逆らうことなく飛んでいき、外野フェンスを越えて、川に落ちるのを防ぐ金網に当たりポトリと真下に落ちる。

この結果に1人の男が吠え、1人の男が天を仰いだ。

「虎造さん。…どうやら『流しの虎』は健在らしい」

「ああ。全く、憎たらしいくらい自慢の息子を持ったもんだ」

...

「ストラックアウト！バッターアウト！ゲームセット！」

主審が高らかに宣言し、ガンバーズの面々は喜びを爆発させる。

「うおおおお！勝ったでやんす！オイラたちが優勝でやんすよ！」

「ふっふっふっふっ、今日は焼肉だな！」

「ナイスピッチング和弥！」

「ああ！ありがとな！これも全部、みんなのお陰さ！」

マウンド上はお祭り状態。会場に来ていた観客からは惜しみない拍手が送られる。

「…参ったな。まさか、アレを打たれるとはね。打つ方で仕返そうにも抑えられるし、はあ、強いな君たちは」

「今回はちよつとだけ俺にツキがあっただけさ」

「簡単に言ってくれるじゃないか。…また、和弥とは試合をやりたいけど、そう言えば『約束』があるんだよな」

「そう言えばそうだったな」

交わした約束。それはこの試合に負けたチームが解散すると言うものであった。

目を真っ赤に血走らせている才葉監督と、相対するのは虎造と福沢。

態々犬猿の仲の相手の顔を見に、相手ベンチへと移動してきたのはそれ相応の理由があった。

「さあ、才葉。——約束を守ってもらおうじゃねえか」

「約束？一体何の話だ？」

人を食った様な表情で、さも知らないようにシラを切り通す。その様子に、かつての友人の姿は無かった。

「おいおい、とぼけるなよ。こっちは命懸けなんだ。あまり無理は言

わんが、せめてハワイキャンペーンでもやめて貰えねえかな？」

虎造が言うハワイキャンペーンとは、サイバーキッズがガンバーズを潰すために行っていた嫌がらせの1つである。財力がかなりあるために成せる力技であった。

「な、何で、私がお前の言うことを聞かなきゃいけないんだ？」

「貴様！裏切るつもりか…！そもそも吹っかけて来たのはお前じゃろ！」

「ふん、そんなこと知ったことじゃないな。幾ら騒いでもその人数じゃどうする事も出来んだろ！」

ここまで来てまさかの発言である。才葉の言葉は全て逆ギレだ。

「…酷すぎるよパパ」

これには才葉監督の実子である才葉零人も悪態をつく以外にすべき行動が浮かばなかった。

どう考えても今回のものは理不尽であり、ガンバーズに対して失礼なものである。

「和弥、パパが失礼なことを言つてごめん」

だから謝った。父が犯した罪は息子である自分が償わなければならぬ。

「顔を上げな、才葉の息子…零人と言ったか？これはお前が気にすることじゃない。確かにお前さんの親父は偏屈でひねくれ者だが、お前は真っ直ぐなやつだ。今日の試合を見ていたらそれが分かる」

ボール姿のやつに言われても説得力は無いか、と虎造は自虐的な言葉を挟んだ後軽く笑った。

「…ありがとうございます」

「おうよ。また和弥の相手をしてやってくれ零人」

虎造の言葉は、暗に解散しなくて良いという意味が含まれている。

そしてそれは、とても暖かく心に響いた気がした。